十一月一日發行

明治三十三年十二月廿五日
第三種郵便物認可
明治四十四年十月二十三日印刷納本
毎月一回二十三日印刷納本

女學世界

第十一巻
第十四號



博文館


菊によろしき美人の姿
御顔御膚
艶やかに
化粧曠立つ
美しさは
之ぞ美顔水愛用のたまもの!!
高等化粧用
美顔水
桃谷順天館製

來る

十一月一日より

半襟新柄陳列會

懸賞募集半襟圖案の陳列

新形ショール陳列會

十二月一日より

膳椀茶碗食器新製品陳列會

歳暮年始贈答品賣出し

羽子板の賣出しは十日より

右の通特別盛大に開會仕候間御慰みかた〳〵御來觀下され度奉願上候。

東京駿河町

三越呉服店

女學世界 第拾壹巻第拾四號 十一月號目次

若夫婦の大切な務め（三）…………寺內伯爵夫人
若き女の品性修養（三）…………山脇房子女史
◎菜の漬 ◎觀楓會
人の働きと家庭の規律（一三）…………下村宏
生活難（二三）…………內藤千代子
◎論語百首 ◎日記帳（紅梅）
家庭の談話會 三四）…………加納子爵夫人
日曜日（三八）…………松平鋭子
◎一年間の失敗（むらさめ）
西洋の日常生活（四六）…………中村春雨
冬衣の用意を上手にする妻（五四）…………髙橋岩次郎
◎焚火のもと（紅梅） ◎盗賊を防ぐ用意
良人を去らんとせし妻の手紙（六五）…………村雨
◎音樂修業旅行 ◎菜の味 ◎脅迫愛情 ◎娘のよき職業 ◎長壽者の生活
女事務員の蟹み（八二）…………黑柳慶子
工場通ひの辛き經驗（九〇）…………ふみ子

つゆの宿より(九五)……野菊女
歐米印象雜記(一〇〇)……内ヶ崎作三郎
入水せし我が姉(一一四)……松の雫
◎若き人々(白菊)　◎秋の家庭料理(とし子)
日光の山に別るゝ日(一二二)……末央柳
過ぎ去つた人生の春(一二六)……さみどり
◎筆のしづく(田鶴子)　◎松茸と栗の手輕料理(ふみ子)
紅葉の旅(一四二)……神月道子
寫眞繪葉書(一五二)……眞璧一郎
巷の噂(奥様評判記)(一六〇)……
職業紹介所へ行つて見た記(一六七)……宮城野
妙齢の女を誘惑する蜘蛛の手(一七〇)……あき子
祇王傳(一七三)……嵯峨野の露
帝都の秋(一八二)……萩香
◎湯本のやど(さわらび)　◎詠詩百首
病中の感想(一九二)……ひで子
◎和歌　◎俳句　◎誌友倶樂部
口繪目次△落葉(三色版)△山路の旅　岡落葉)△手折る花(石版)△たり穗(平福百穗)△籬の菊(本多穆堂)△名流婦人(山内侯爵夫人)△同(高橋新作氏夫人)△令孃かゞみ(本多男爵令孃、小澤男爵令孃、渡出氏令孃)△同宮本氏令孃、渡邊氏令孃、宮成氏令孃)△同(種田少將令孃、神津氏令孃)△表情△松濤庵茶會(以上寫眞版)


御料洗粉で洗つて
御料クリームをつけて
御料白粉を塗つた美くしさは、秋を飾る、黄菊、白菊紅葉よりも榮えがあります！
御料白粉に、御料洗粉、
御料化粧水に、御料クリーム、
御料石鹼に、御料香水を御料一式化粧品とは申すなり
本舗 日本大阪 仁壽堂分店製

諸見玉枝女史書　吉住春子著

實用造花自在

總クロース製
金文字入美本
正價壹圓廿錢
郵稅八錢

吉住春子著

實用造花圖譜

四六二倍判
全頁色彩刷
正價壹圓
郵稅六錢

發行所
吉住商店
大賣捌所
東京神田區神保町　東京堂
東京日本橋本石町　至誠堂

本書内容御入用の方は實費として郵劵五錢造花原料營業目錄御入用の方は郵劵貳錢封入東京九段坂吉住商店宛申込まるべし

造花原料

東京九段坂　吉住商店

特長電話番町二〇五六番
振替東京六六七九番

（いの二）

▲顧問

●東京女子高等師範學校教授兼附屬小學校主事 藤井利譽先生
●學習院教授 馬上孝太郎先生
●東京府立第四中學校長 深井鑑一郎先生
●東京府立第四高等女學校長 尾松三郎先生
●神田一ツ橋高等小學校長 湯澤直藏先生
●芝御田小學校長 小田島省三先生
●講中學校教諭 師範高等女學校教諭 小學校長 其他諸先生

●中學校高等女學校 入學準備講義錄

見本附規則書 申込次第進呈

●十一月一日 第四號發行

▼作文習字の添削は無料質問亦隨意▲
▼各府縣諸學校入學試驗問題最近の分迄講義中に在り▲
▼講義親切平易自習上些の遺憾なし▲

▲（入會者激增第一號以下目下増刷中、刷了次第發送開始）此際大至急入會を要す▼

東京市芝區二本榎二丁目十三番地
入學準備學會
振替口座（東京三〇八二番）

女（いの二）

來客　お手際でお美味くて誠に結構でした、それにお道具がよく揃つて居りますな、

主婦　いえもうお粗相樣でした：：ハイ宅では食器は一切取揃て居りますれば直にも好きな樣に料理れますしそれに料理店に注文するよりか第一經濟で清潔で衛生上にも至極安心が出來ますから私共では一切自宅で料理る事に致して居りますこれがまあ二十世紀式なんでせうよホ……：

來客　ハヽア では何處で御購求ですか

主婦　ハイ販賣店ですか、銀座で有名な松喜屋ですが品質が確實で廉價で親切な評判の老舗です。



西洋食器具食卓販賣

銀製陶器鐵器硝子器

松喜屋商店

東京市京橋區銀座一丁目

電話京橋二〇九番

振替貯金口座東京一九一二〇番

カタログ御入用の御方には御一報次第贈呈可致候



白髪染
若松
WAKAMATSU
バール煉香油
スミレ黒香油 本舗
定價（大 三十五錢 小 六十錢 送料 八錢
東京市日本橋區横山町三丁目
平尾銑也商店
電話浪花百十番
振替東京百十番
染色界一大革新也
新發賣の白髪染若松は
品質原料共に無類の逸品にして
毫末も毛髪皮膚を痛めず
最も簡易に染毛が出來る

秋の光



野中製版所三色版

Digitized by UNIVERSITY OF MICHIGAN

最モ進歩セル子宮藥

可要球

婦人病諸症は初期に於て格別の苦みなく且つ局所の病に醫師の診察を受へる事の厭はしきより隱蔽放任して療治を怠るより病勢昂進して身心共に衰弱し遂に不姙娠早產流產の不幸を生じるに至る如斯は未だ家庭に於て有効簡易に使用する適當の婦人藥なきに因る一大缺陷なり而して在來の婦人藥は頗る幼稚舊式にして直接に病原に關係なき草根木皮的なれば其効力眞に謂ふに足らず近世醫藥學の進歩は直接に藥劑を局所に挿入し或は外科的手術を行ひて療治の目的を達するなり

獨逸の婦人科大醫フロインド博士の處方に則り調劑せる『可要球』は此等總ての缺點を補ふ子宮病一切の外用藥にして子宮內膜炎にて下腹痛み產前產後又は平素に白帶下赤帶下に苦み腰より下腹へ筋張り子宮糜爛し或は出血し局所に臭氣ありて搔痒を感じ月經時の疼痛月經の過多なる等に外用する時は直に輕快全癒する驚くべき卓効ある新劑なれば子宮病諸症にて苦める婦人は是非一度使用して病氣を根治し給ふべし

尙ほ梅毒消渇の疑ある人は唯一丸を併用せば其効最も大なり

◎全國至る所の有名なる藥店にて販賣す

定價 八球入五拾錢〇拾八球入壹圓〇四拾球入貳圓〇特製百拾個入五圓〇內地遞送無料

發行所 東京市本郷區湯島天神表門中坂上
中西葆光堂藥局
電話下谷(五四七番)振替貯金口座東京(千五百番)

女(ろの一)

結婚媒妁

書面御照會は返信料御封入の事

東京本郷區森川町一番地表北裏九〇

槇栖舍

御來談は午前に限る

本法は

女髪結師安部歌子女史

ちゞれ毛くせ毛 毛はへうけあい 二大奇方劑

多年の實驗を經たる證明秘法劑にして是迄の使用者を悉く滿足せしめたる奇劑なり往復端書紹介詳報す

東京市麹町區三番町六十七

濟世園

やせる藥

多血症●脂肪過多●中氣●便秘●酒ぶとり●凡てふとりすぎて御困りの人に害なく●やせて●中肉美容となる新藥なり試みたき方は郵券二錢送れ詳細報知す

東京市牛込區赤城元町三三

池田製藥所

あざ

●なまず●そばかす●にきび●ほくろ

いぼ全治保險の新藥發賣す三錢送れ説明書進呈す

東京市牛込區赤城元町

池田兵三郎

見よ

月經なき女子 婦人

●本劑は專門博士が學理と實驗より發見せられたる物

▲効能……藥力最精實……効能確保……有効無害……

其主藥は最新唯一の通經藥にて帝國大學病院及各病院にて專用する最良藥なり二三月の月經閉止月經滯り



博士賞賛良藥

改良 月すらく

女月丸

經不順は一二劑にて必す流下し四五ヶ月又は血塊にても特製或は別製分服用せば安心に忽ち流經す女子十七八歳になり月經なき人は二劑又毎月月經困難は二三日分にて通經す

藥價一劑六十錢二劑一圓十錢特製二圓廿錢別製分三圓卅錢送料各四錢宛

肥滿病新藥

（米國新輸入）

子供の折美愛と賞せられし人も年頃になりてより肉太りたる爲め上圖の如く醜婦となる人少なしとせず本劑は獨乙ベンツオルト氏の發見藥にて脂肪多き人●ぶと〳〵ふとり●血太り●肉太り●酒太り●水太り●顔赤●にきび●ふき出物多き輕症一二劑如何程の惡性も四劑分連服せば色は美顔窈窕たる艶々となり響て美人となる事を保證す乞肥滿性の人は試みよ

諸孃姉の福音

美人となる



やせる藥

價 一劑一圓五十錢 二劑二圓九十錢 三劑四圓卅錢 四劑五圓[illegible] 送料十錢

發賣元 東京々橋中橋和泉町 振替第壹〇六七七番

小宮愛生堂

婦人画報

十二月一日　十一月の巻　一冊廿五錢　税二錢　六冊一圓五十錢　十二冊二圓八十八錢

畫報

◎三皇孫殿下御舟遊

◎七頭の瀧と閨秀畫家跡見玉枝女史　二侯爵夫人のおそろいのいでたち……

◎永久王殿下　御眞影

◎皇后陛下御覽の少女の窯業　文展に於る三閨秀畫家の傑作……

◎竹田宮北白川宮兩內新王殿下

◎流行の髮の結び振りいろく　揮毫中の鏑谷、岡田、石川三畫伯……

讀物

◎其日く……三宅花圃

◎不親切なる琴の師匠……某夫人

◎下町婦人の意氣込……時雨

◎育兒十二ヶ月　加藤博士

◎私の使つた女中……八千代

◎婦人の拔け毛の使ひ途……

◎婦人の汽車旅行……木下學士

◎夜の化粧法　英峰

◎新橋女髮結評判記……ふみ子

◎家庭料理……吉村照子

優美高尚且家庭的なるは本誌特色

家庭に本誌を缺くは船に羅針盤なきが如し

附錄　美人　三色版　岡田三郎助筆

讀物

◎戀愛の善用……有賀博士

◎地方婦人の危機……横井博士

◎兩親內王殿下の御爭

◎人好きのする婦人……巖谷小波

◎姿を美にする法……田邊學士

◎現代婦人の弱點……上杉博士

◎夫の選擇……下田歌子

◎逆境に泣く若き婦人の爲に……下田次郎

畫報

◎阿部伯爵邸の園遊會……

◎寒翠園の茶道大會……

◎鳩山博士の棺前祭……

◎結婚式の前……

◎中小路廉氏の家庭……

◎もみぢの庭と花の如き人……

◎四名流夫人の盛裝……

◎各女學校遠足

◎新案石州流點畫法……

◎湖畔の諸令孃と海邊の女學生……

◎美術俱樂部の生花大會……

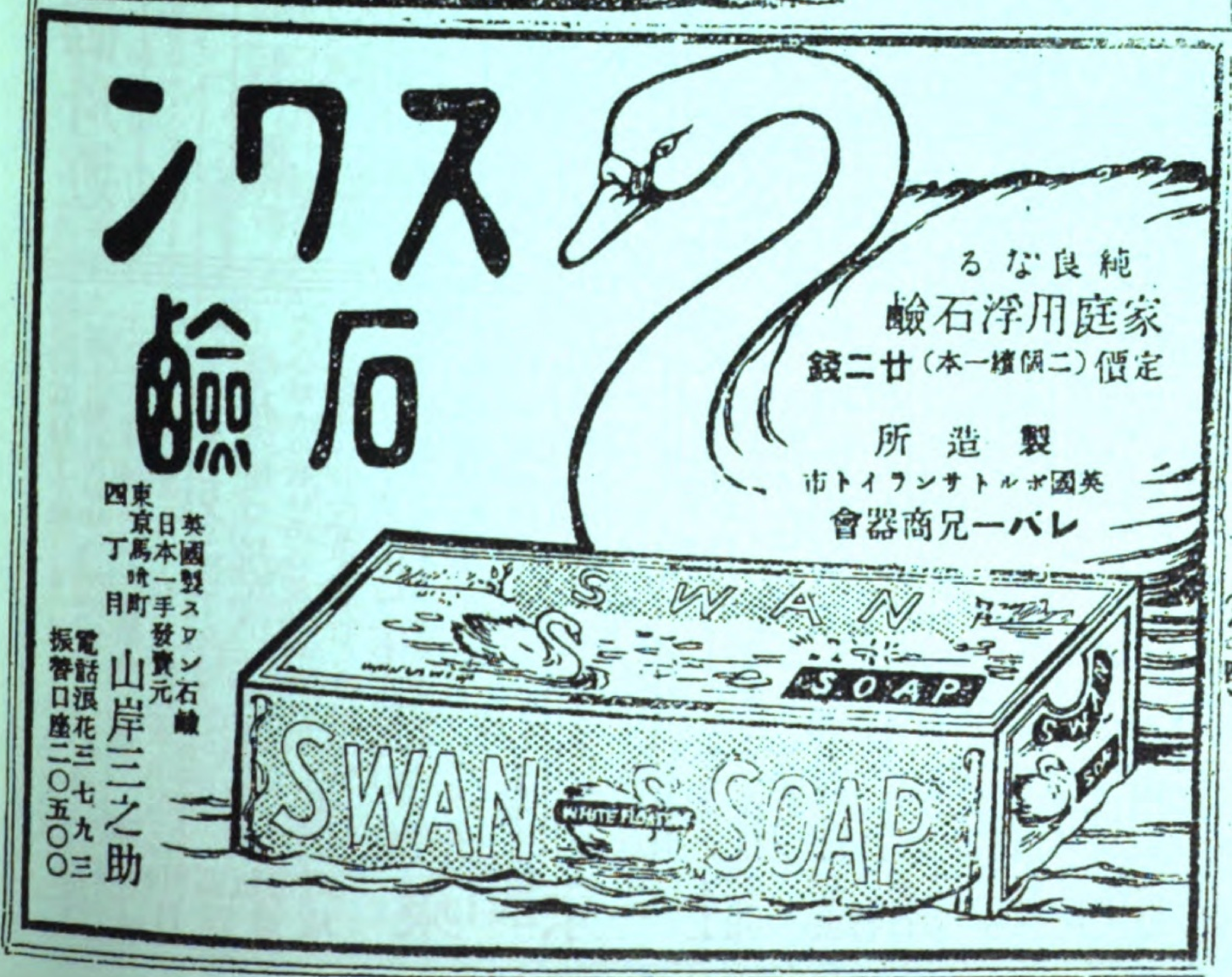
◎八名家の令孃……其他滿載

東京四丁目町區飯田町四番地　東京社　振替貯金口座番町二一一八三三一八九番　電話番町

女(その三)



千代田香油
交際場裡に文明の美花を開かる紳士も奥さんもお孃さんも香り好き千代田香油に限るとの高評盛なり
定價 七十錢 三十五錢 二十五錢 十七錢
英國製スワン石鹸日本一手發賣元
東京日本橋區馬喰町四丁目
本舖 山岸三之助
振替口座東京二〇五〇〇番
電話浪花三七九三番
TOILET CHIYODA 千代田
YAMAGISHI TOKYO



スワン石鹸
純良なる
家庭用浮石鹸
定價（二個纏一本）廿二錢
製造所
英國ポートサンライト市
レバー兄商會
英國製スワン石鹸日本一手發賣元
東京日本橋馬喰町四丁目
山岸三之助
電話浪花三七九三
振替口座二〇五〇〇
SWAN SOAP
WHITE FLOATING

(ろ四)

山路の旅



岡落葉筆


最上醤油
元祖
上
開業貳百六拾七年
宮内省御用達
日英博覧會に於て
太平洋博覧會に於て
最高名譽大賞受領
醸造元
千葉縣銚子港
濱口合名會社
電話銚子二一番　振替口座五〇二一番

調經新劑

白やく下し

藥名リルピニ

此藥は子宮を癒す如何程長き月經止りしも必ず下る二三月位のは壹劑も用ゆればすぐ下る二三ヶ月以上のとまり又は血塊には特製を用ひ**流經**す本劑は效能極て**峻烈**なるも毒なく速にたやすく下る月經不順より起る子宮病血の道を全治し古血を一掃す價半劑六拾五錢壹劑壹圓貳拾錢特別精製貳圓參拾錢

色の白くなる

ハンドコロン溶液

本劑は歐米貴紳淑女特士間に大高評を博したる新材料に依り組織したる新成液にして有腕たる白色藥と大に性狀を異にし**本劑の力**に依り皮膚の新陳代謝を盛にし且つ**漂白性**あるを以て其新陳代謝と共に次第々々に**白色艶美**となる 價A印並製壹圓 B印特製壹圓五拾錢

全治確證

無痛全治する特効藥

ぢを治す

本劑は近世醫學界の貴重なる新發見藥を以て座藥に調製したるものにして是れを肛門内に挿入するも少しも**疼痛を覺えず**體溫の爲に徐々適切に溶解して直接病患部に作用し穴痔蓮痔疣痔裂痔脫肛又痔瘻の初期等痔病一切に對して**神効**を奏す 價半劑八拾錢壹劑一圓五拾錢特別製二圓八拾錢

毛のはへる

原名ベグネス 毛髮生養液

本劑は最も進歩せる發毛劑にして藥液を塗擦すれば皮下に吸收せられ毛根を刺戟し毛芽の發育を速にし完全なる毛髮叢生す又本劑は拔毛を止むる效能著しく又常に香油に混用すれば生際惡しきを直す●眉毛●口ひげ●其他すべて毛の乏しき人は速に試みられよ學理に適合せざる怪しき無名の賣藥に迷ふ勿れ 價並製壹圓卅錢特別製貳圓

注意一 各藥共に小包料拾貳錢とラビヨン●ハンドコロン●ベクネス●ぢの藥を御注文の方は外に小包實費三錢と都合十五錢藥價の外に拂込下され度 爲替は神田猿樂町局振宛

全治確證

わきが

新治療藥 ラピヨン

本劑を塗擦すれば主成分は皮膚及び肉の組織に吸收せられ其組織內にある**毒素**を**潔淸驅逐**し**惡臭を止**むる作用を有する最近發見の有力劑にして如何程劇烈の難症も特別製を用ひよ忽ち臭氣を止め病根を全滅せしむ速に用て苦惱を脫せよ 丙價七拾錢乙價壹圓卅錢特別製貳圓五拾錢

獨逸擬方効驗一夜に顯る

りん病

新治療藥 キローロン

本劑は最新の治痳藥にして急性慢性の痳病せうかちも速に輕快を覺え膿血次第々々に止り痛を止め輕きは一劑重きは二劑分藥性慢性には特製を用よ速に奏効す本劑を內服すれば强度の殺菌防腐液となりて小便と共に排泄せられ自然の洗滌法となり痳菌を驅逐し人知れず病根を斷絕す輕症用六十五錢重症用一圓廿錢特製頑固症用貳圓卅錢

根治確證 新治療藥

梅毒

ギネール

本劑は多年學理と實驗に依り最新發見の完全なる新劑にして忽ち全身の毒も大小瘡にとり**如何なる劇烈の**梅毒●そう毒●かさ●ふきでもの●よこね●かんそ●骨うづき其他如何なる惡性の梅毒も必大効あり輕症は半劑惡性重症は二劑用ゐて奏効す 藥價半劑八拾五錢一劑一圓六拾錢二劑參圓

新治療藥

らい病

ダービーの發見 DERVIN ン

本劑は最近歐洲の大家が最良藥と認めたる有力藥品の成劑にして何人にも容易に服藥し得る樣弊館幾多の調劑の實驗に鑑み丸藥となしたる者なる本劑に優る者なしとして其有効**確實**なる試に一劑分丈け用ゐ見よ**必ず大効**あり 一劑廿日分三圓二劑四十日分五圓特別製九十日拾圓●郵券三錢送れ說明書進呈す

理想的新劑

肺血精藥

本劑は故桂村醫學博士の處方に基き調製したる合劑にして根本的に病因を全治せしむる適中新劑なり末期の患者即ち既に肺臟の缺損せる者に向ては病の進行を止め患部を閉癒せしめ初期の人は七八日目より効顯れ一二ヶ月にて全く快癒せしむ 肺結核●肺炎●肋膜炎●喀血其他呼吸器病全治 半劑壹圓五拾錢壹劑貳圓八拾錢貳劑五圓特製七圓

專賣 東京神田區小川町四十

オリエンタル藥館

(はの三)

天賞堂製作品價格一斑

(1)



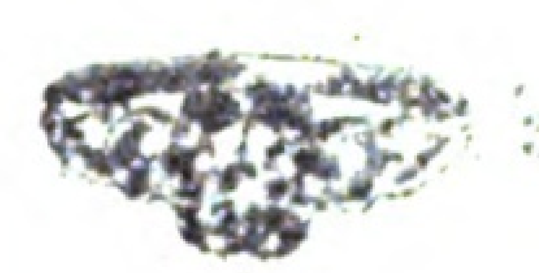
ダイヤモンド入
十八金製價五百圓

(2)



ダイヤモンド入
十八金製價三百卅圓

(3)



ダイヤモンド入
十八金製價百二十圓

(4)



ダイヤモンド、眞珠入
價百七十五圓

(5)



紅肉眞珠入十八金製
價十五圓

(6)



眞珠入十八金製
價十八圓

(7)



眞珠入十八金製
價十二圓

(8)



眞珠入十八金製
價二十圓

(9)



ダイヤモンド入
十八金製價九百圓

(10)



ダイヤモンド入
十八金製價百二十圓

(11)



ダイヤモンド入
十八金製價三十圓

(12)



白サファイヤ、ルビー入
十八金製價十圓

(13)



眞珠入十八金製
價十圓半

(14)



眞珠入十八金製
價八十圓

(15)



ダイヤモンド、ルビー
入十八金製價廿八圓

(16)



色サファイヤ入十八金製
價十四圓

(17)



眞珠入十八金製
價十五圓

(18)



ダイヤモンド入
十八金製價四十圓

(19)



ルビー入十八金製
價八圓五十錢

(20)



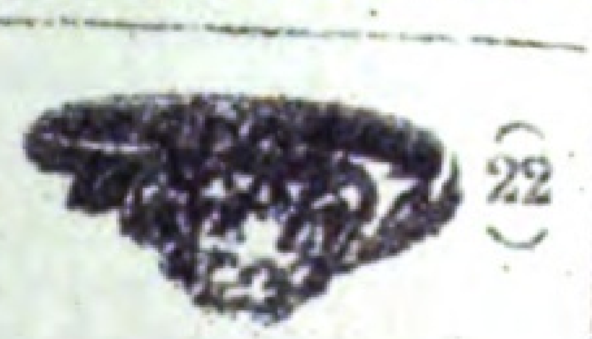
眞珠入十八金製
價三十圓

(21)



ダイヤモンド、ルビー
入十八金製價百圓

(22)



ルビー入十八金製
價十八圓

本圖は本堂諸工場にて製作せる多數の指環中特に寶石嵌入の一斑を掲げ大小形状に據り價の標準を知るの一助となさるものなり此他美術彫刻指環印面付指環等を始め貴婦人用として根掛、簪、釵、笄、腕輪、帶留、帶鎖、羽織紐、時計鎖、同提物等に至る迄悉く現時流行の粋を援き專ら品質の優秀と價格の低廉とを主眼とし以て斯界先覺の實を擧げんを期す冀くは愛顧諸君多少を問はず高需の榮を給はらんことを

天賞堂本店

東京市京橋區尾張町二丁目
電話新橋特長二[illegible]三[illegible]長三三四。長三一五三
振替貯金口座番號東京五五

大阪支店・東京神田出張所・横濱出張所

花　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　束



婦女寶鑑

家庭に於ける最良の讀物

○家庭日用 **婦女寶鑑**　國分操子著　和裝函入全三冊　正價五圓五十錢　郵稅十六錢

○愛兒の紀念帖 **私子の生立**　寺崎廣業畫　伯爵三島博士の注意　和裝函入全一冊　特價四圓五十錢　上價二圓八十錢　各郵稅十二錢

○生理學上より見たる **婦人の本分**　醫學博士大澤謙二著　洋裝美製全一冊　正價五十五錢　郵稅六錢

○**裁縫おさいく物**　伊藤文子小川錠子高田久子共著　和裝美製全一冊　正價九十錢　郵稅八錢

○**袋物細工之技折**　山田きよ子種村なか子共著　和裝美製全一冊　正價一圓十錢　郵稅八錢

○家庭 **造花術全書**　金子支江子三好幸子石川壽美子共著　和裝美製全二冊　正價一圓六十五錢　郵稅十二錢

○家庭 **編物全書**　森本義子著　和裝美製全一冊　正價八十錢　郵稅八錢

○**裁縫新教授書**　神田順子著　和裝美製上卷　正價六十錢　郵稅八錢

圖書總目錄　萬年筆目錄　書籍棚机目錄　無代進呈

○家庭 **十二ヶ月料理法**　赤堀峯翁赤堀峯吉赤堀菊子共著　和裝美製全二冊　正價一圓　郵稅十二錢

○家庭 **西洋料理**　宇野彌太郎渡邊鎌吉共著　洋裝美製全一冊　正價九十五錢　郵稅八錢

○家庭 **日用料理**　赤堀峯吉赤堀菊子赤堀道子共著　和裝美製上卷　正價五十五錢　郵稅八錢

○即席 **惣菜料理**　赤堀峰翁赤堀峯吉赤堀菊子共著　洋裝美製全一冊　正價三十五錢　郵稅四錢

○**西洋料理** 附作法と心得　大森阿仁子川島芳子共著　洋裝美製全一冊　正價一圓二十錢　郵稅八錢

○實用家庭 **小兒洋服裁縫全書**　小澤峯子著　洋裝美製全一冊　正價一圓三十錢　郵稅八錢

○女子手藝 **九重編造花法**　寺西綠子著　和裝美製全二冊　正價一圓五十錢　郵稅十二錢

○**編物圖案集**　木村淡香著　洋綴（天の卷）　正價五十五錢　郵稅六錢

●**卵料理**　宇野彌太郎著　近刊

東京日本橋角　**大倉書店**　振替貯金東京二三八　電本局四一四、二四〇四

女（にの一）

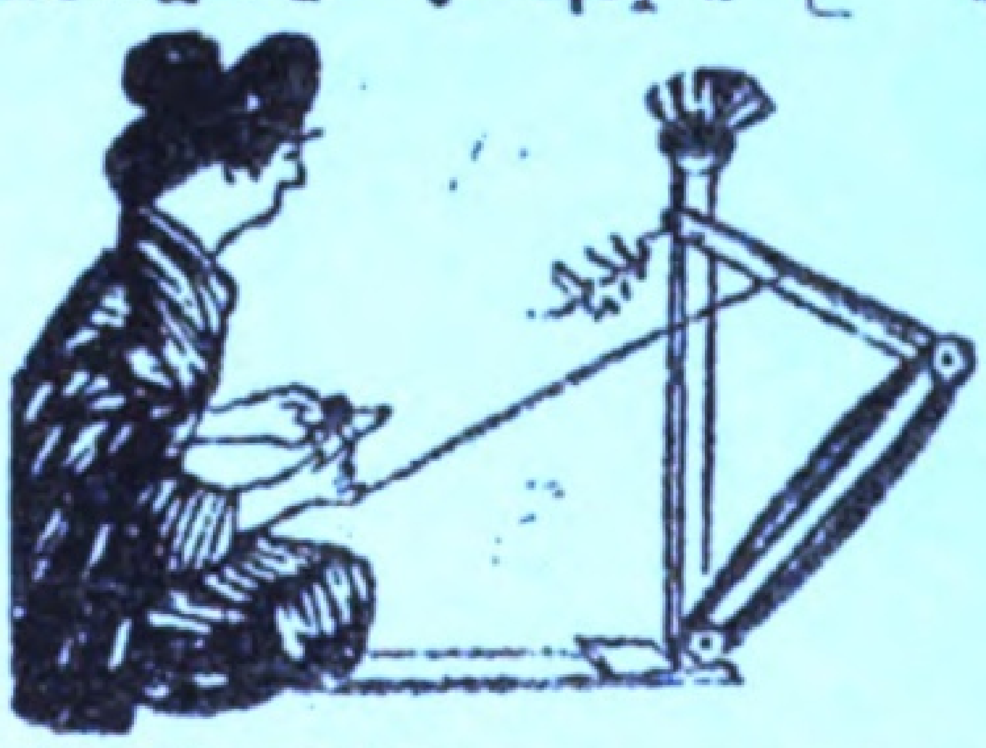
特許竹中式絲掛付絎臺

●御婦人方の新福音！

弊店發賣のくけ臺は御婦人方の毎日針仕事に絲を絲巻にまき取るに一々人様の雙腕を煩はし其上に糸が亂れたり「ヨゴレ」たりするが如き不便更になく御使用後は「ヲリタヽミ」も輕便で且つ針差しや尺度を自由に「シマイ」得る様に出來て居りますから一般の家庭用並に女學生諸君の學校用としては輕便此の上もありません。

使用法

此絲掛付絎臺は下圖の如く下部にある二個の絲掛車を絲の輪の長短に依りて「ネジ」鋲を以て自由に「シメ」絲口を中央にある輪に通して絲巻にまく時は二個の絲掛車は自由に回轉して他人のお手を煩はさず絲の亂れるが如き心配なく單獨にて容易に絲巻にまくことを得て輕便此の上もありません是非御試用を願ひます。



定價

御誂黑塗製	金六拾錢 美麗なる函入なれば進物用に好適也
特製	金參拾錢 市内は一本にても御一報次第無料御遞す
上製	金廿五錢
並製	金貳拾錢 地方は送料金拾錢を要す

製造發賣元 東京赤坂區青山南町二丁目十六 竹中商店 電話芝二八八四番 振替東京三二二三

◉特約販賣 御望の方は御照會あれ



舶來ハーモニカは神の如き美音を發し人を感佩せしむ學生間に於て非常に流行しつゝあり

特三圓 一號二圓 二號一圓五十錢 送料八錢

三號一圓廿錢 四號七十錢 五號五十錢 獨習書付

◉手風琴◉



堅牢優美音律正確なる改良手風琴にて何人でも獨奏し得る獨習書進呈す

特號	六圓
甲號	四圓
一號	二圓五十錢
二號	一圓八十錢
三號	一圓五十錢
[illegible]號	一圓[illegible]錢

小包料貳拾錢

●ね小便袋

子のある親 病人ある家には必要



洗濯の世話なく[illegible]を汚せず

大人用二圓 小兒用一圓半 乳兒用一圓 小包料八錢 男女の別あり 御申越を乞ふ

◉羽子板

◉本品の板は桐にして圖の如く羽二重及縮緬を以て上等の押繪を附し圖は美人又は英雄等種々あり御好の圖御申越を乞ふ景品として使用羽根無代進呈す



尺二寸 二十五錢 三十五錢 四十五錢

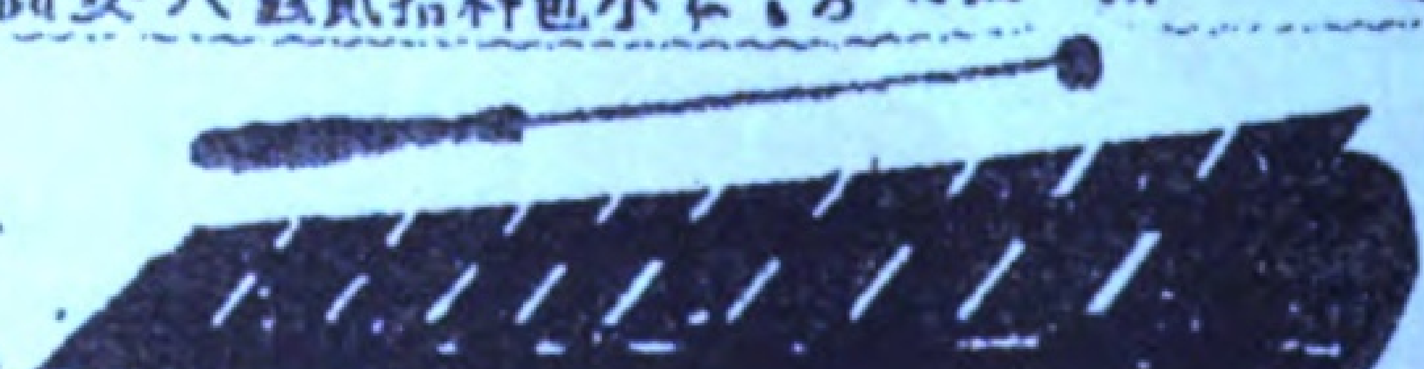
尺五寸 五十錢 六十錢 七十錢 揃張

尺 八十錢 八 九十錢 寸 一圓 繩 一圓廿錢 張 一圓五十錢

送料十六錢

目錄入用の方は二錢封入申込め

◉鐵心琴



十音	三十五錢
十三音	五十錢
ビワ形十音	六十錢
ビワ形十三音	七十錢
送料	十五錢

鐵心琴は高尚なる音色を發し唱歌軍歌俗曲等如何なるものにても自由に奏する事を得る淑女紳士及少女紳士にても使用容易なり獨習書付

●目錄入用の方は二錢封入込め

大阪南區内安堂寺町壹丁目 振替口座大阪九七五〇番

春光堂商店

女（にの三）


マーナンテ佳イデショー
アー悲愴ノ極チー
「高麗ヤー」
浪花節チ一等チ
日本ノラ
音樂ニ趣味ヲ有テルモノハ
御一報アレ目錄ヲ呈スベシ
株式會社 日本蓄音器商會

たり穂



平福百穂筆

にはとり



本多穆堂筆



油断は禁物

空に一文字を描く雁の群れにも、其羽振のよきは、後から出ても先へ飛越し、油断すれば先に出ても後になる由來何事にまれ、油断は大敵なれど、殊に駸々進み行く造花の技術には、油断が最も禁物なり。

今や秋稍く興深し、造花の資料は野にも山にも、到處錦を列ねて斯道者の研究に供へり、此際全く造花の好時季！

東京市日本橋區横山町壹丁目拾六番地

造花材料商 合資會社 天野卯兵衛商店

特長電話浪花（一六四三番）

振替口座（東京）四九七〇番

女（にの一）

眞に美容を希ひ美髪を望む者は

衛生化粧 **最新美髪法** を讀め

本書の内容は

◎しらが、赤毛染の話◎毛のなき所に毛の生え話
◎ちゞれ毛くせ直しの話◎毛髪の洗ひやうの話
◎拔毛どめふけとりの話 其他毛髪化粧に關する秘法
にて郵券貳錢封入御申込なれば直ちに無代贈呈

次ぎに

理想的 最新製劑 **ちゞれ毛くせ直しベンド** を用ひよ

本劑は一度之れを使用すれば如何なるちゞれ毛くせ毛も立所に直伸し永く使用すれば殆んど根本的に全治す

定價十二個入九十錢六個入四十七錢 送料東京市內四錢 地方八錢 また

內務省免許

生毛強壯 **エフトニック**

本劑は最も進歩したる毛髪劑にして根本的に毛髪を美化するにあり、されば本劑を服用せば、身體を強健にし、血行を良行ならしむ、皮脂線の分泌を盛んにし、毛根の營養を能くし、毛髪の發育を補くるを以て、薄毛、細毛、赤毛、白髪等に連用せば奇効あり。

十日分金壹圓 小包料金八錢
卅日分金貳圓五拾錢 小包料金拾六錢

發賣元 東京本所區外手町八七 振替東京二〇八二五 **深澤國華堂**

●診察時間毎日午前八時より午後九時迄院長診察

梅毒りん病 生殖器諸病 神經衰弱症 婦人病 わきが ぢ

東京淺草瓦町廿八淺草橋通瓦町停留場横

中央醫院

ぢ 諸病

梅毒 下疳 横根 全身梅毒等 りん病 消渇

子宮病 血の道 月やく とまりたる病 子なき婦人

生殖器諸病 神經衰弱症

記憶力減衰 思考力減衰症等 生殖器病 夢精 遺精 早漏 萎縮 發育不充分症等

わきが 色の黑き人 にきび ふきでもの

そばかす あれ性 皮膚諸疾患 いんきんたむし等症

▲病狀記し郵券四錢送れば其病を速治する專門醫中央醫院々長處方の特効新藥說明書を送る

東京市淺草區瓦町廿八番地 淺草橋通瓦町電車停留場横

中央藥院

婦人世界

十一月一日發行 第六卷第十三號　一冊拾五錢　郵税一錢五厘　賣捌全國書店

▽婦人の迷ひと決斷……村井弦齋

◎無鐵砲に上京する婦人の墮落……力行會長 島貫兵太夫

■新形束髪の結び方…（瀧口ぶん 伊賀とら）　■流行冬のお支度…島 雪子

▽女學生と讀書……下田歌子

■婦人の聲と性質…柴田環子　■婦人の失敗談

◎教師より母親への注文……高師附屬小學校主事 佐々木吉三郎

◎隠れたる名士の未亡人　二十餘名の名士の未亡人の生活狀態、精細に調査す。

◎主人に畏敬された乳母……陸軍步兵少佐 兒玉市藏

■我が家の買物の仕方…横河下枝　■我が家の實驗

▽私の娘の躾け方……大藏大臣夫人 山本多穗子

■電話交換手の裏面…うづまき　■自慢の國料理…阿部龍子 堀越しな子

◎私ども夫婦の實行せる呼吸靜座法……日清生命專務夫人 池田輝子

▽返事をする人とせぬ人……（岸邊福雄 嘉悦孝子）

東京京橋南紺屋町　實業之日本社

女（ほの三）

秋の曲

星の林は雲晴れて、秋風たかし天の河、草の籬は夜を深み、浮世の秋の身にしみて、涙のもろき夕間ぐれ、大學白粉なかつせば、如何でか人の容色保ち得ん。



女（ほの四）

名流婦人



侯爵山内豐景氏夫人　禎子御方（伏見宮貞愛親王殿下第一女王）

名流婦人



貴族院議員　高橋新吉氏令息新作氏（法學士）夫人延子（伊東元帥令嬢）


天の成せる水晶は月の
雫が凝つて不断の光り
を放ち大和屋製の・・・
水晶おしろいは秋
の夜の露を湛へて下草
の茂る巌間に湧く清水
の如く而も用ゆる人の
面に春の霞か冬の白雪
の美くしさを優す。

女（の一）

羽仁もと子主筆

婦人之友

◉妻の威嚴 理想の生活 花子の巻(5)……羽仁もと子

◉我が見たる英米の娘氣質……三谷民子

◉私共の試みて居ります育兒法……荻村夫人

◉子供を育てる積りで菊を作る……土居かめ子

◉赤坊を泣かせずに育てる秘訣……羽仁もと子

◉家を上手に持つ工夫……羽仁もと子

◉男女の犧牲……三宅雪嶺

◉夫婦相互の長所短所……羽仁もと子

◉古牛襟で最新流行の牛襟を作る……

◉手輕で美しいマントの拵へ方……春代

◉髪の結ひ方の素人研究……延子

◉松茸料理のいろ〳〵……みどり

◉人形の家と婦人問題……浮田和民

東京小石川雜司ヶ谷町
電話番町三六九八番
婦人之友社
振替口座東京壹壹六〇〇番

筆蹟の美は容貌の美に優る

女子の美には容貌の美と精神の美との二方面があります。而してどちらが貴いかと云へば、勿論容貌の美より精神の美の方が勝つてゐる。容貌の美は、かの遊女賣笑婦と雖も有つて居りますが、精神の美は實に淑徳なる婦人の專有物であります。婦人の精神の美しさは種々の場合に顯れますが最よくあらはれるのは實に

優美なる水莖の跡であります

然るに字を書くは難かしいやうに思つて居る婦人が多いが、それは考へ違ひの舊時代のことで、其方法さへよければ、何の苦もなく上手になられるのでありますゆゑに專賣特許の速成習字法に依つて練習なされば短日間に立派な書者になられます。されば筆蹟の美を望む方は速に入會されて、天晴なる能書家とならるべし。詳細さ說明や規則書は「はがき」で東京本郷區大學正門前「帝國習字速成學會」に御申込になれば無代で進呈致します

（八〇四）

令嬢かゝみ



右、男爵本多副元氏令嬢ひさ子
中、蓑田喜太郎氏令嬢ゆき子
左、男爵小澤武雄氏令嬢綾子

令嬢かゞみ



右、宮本慶子（麴町）
中、渡邊直子（麻布）
左、宮成芳子（牛込）

女ハとの一)

女(その二)

たむし　おまつ　残がさ　にきび　そばかす　わきが

には何程頑惡劇烈の難症も必病患を絶滅し決して再發内攻他病に變ずるの恐なき皮膚病新劑を發賣す本液は何が半生の心血を灑ぎ有ゆる歐文原書を渉獵し苦辛の末創めて發見せる者にして其効顯の的確なる世既に定評あり謝辭を送る者擧るに遑あらず以て信用の厚きを知るべし抑皮膚病は自然の美を害ふ事甚數立身出世の妨となる者なれば一刻の猶を逸せず試よ年來の憂苦も拭が如く除く事を得べし▲特製貳圓印瓶壹圓ノ瓶五拾錢▼内地送八錢

●●●●●●●御注文の際御閲覧雑誌名を記添下さい●●●●●●●

色黒く醜き婦人令孃と雖

悲觀するに足らず香粧化學に造詣深く斯道に自信を有する當師發賣の塗料或は洗料を當用せば肉體を美白艶麗ならしめにきびそばかすを去りきめを細かくし日やけ白粉やけ等質の爲色黒き人と雖も窈窕たる美人と化する事疑なし塗料洗料各大瓶壹圓小瓶五十錢内地送八錢

專賣　堺大寺南門　電話四六三番　振替口座大阪一三五〇番　藥劑師　一色直太郎

美顔法

の中でも色の白くなるのが第一です私は種々苦心の結果色白くキメを細かにしハタケ、アセボを治し日にやけたなどはスグ白くなる藥を發見しました、郵券三錢封入申込あれば其説明書に私の寫眞を添へて差上げます

東京神田錦町三ノ二　高柳とう子

隆鼻術

はな たかくする ほう

東京市九段下　神田今川小路二丁目十一番地

和田耳鼻咽喉醫院　午後夜間

電話本局一七三〇番

毛のはへる藥

多年實驗の生毛劑にして特効驚くべき奇藥

●一瓶●一圓　半●●厚二圓　圓●●三圓半　●送料十錢

美容散　やせる藥

●血ぶとり、あぶらぶとり、酒ぶとり、顔赤く、のぼせ症等總て肥胖質の人用ゐて害なく身體美容となる保證藥なり

●定價(一週)七十錢(三週)二圓(五週)三圓二十錢●送費十錢



◀にせ物あり乞御注意▶

リウマチス根治劑

驚く可き天下唯一の保證　藥禮狀山の如し

名方　パウル氏丸は獨逸醫學大博士パウル先生發明の靈藥にして其効驗の確實なる實に神の如し如何なる難病のリウマチも此藥二劑にて奏効す證明禮狀萬希望の方申込あれ送呈

七日分三十五錢　半劑七十錢　一劑一圓三十錢　二劑二圓四十錢　送料八錢

(全快禮狀店内に保存す)　新宮藥館　(東京本郷三丁目　振替一二五八四)

電話下谷五一四六番

●●十一月の卷發行●●

新婦人

第一年第八號　定價一册二十八錢郵税二錢五厘　六册前金郵税廿一圓七十錢

於本月十二日太田金山**秋季清遊會**開催す

申込〆切は**七日**限り往復汽車賃土産福引辨當摸擬店各種食券に附て會費金壹圓貳拾錢

申込所（神田東京堂●小石川表町田村書店●日本橋本石町至誠堂●日本橋住吉町至誠堂●淺草仲見世淸水書店●銀座新橋堂◉銀座春祥堂●本郷盛春堂●日本橋通四丁目靑野魁春堂●兩國開成社●及本誌發行所）

詳細は委しく本誌上にあり福引寄贈品山の如く個々明細に記載す

紅葉の賀 油繪極彩色（例によつて天下一品の美）……川村清雄筆

初しぐれ 石版極彩色（佳人紘を抱いて春色膝に普し綢繆自ら聲あり）……大野靜方筆

無聲の詩 芳草地に靡せる所佳人筆を甜め描き出すは果して何物……コロタイプ實寫眞

故山階宮**妃殿下**●伏見宮三**女王**殿下●津輕伯夫人●山尾子爵令嗣夫人●福原有信氏令孃●横濱西川安藏氏夫人●遠藤千枝子孃●閨秀書家**阿部春香**女子●山本小園女史●東久世伯令孃●伊勢[illegible]田田鶴子孃●横濱岩崎濱雄孃●藤田英次郎氏令孃●岡野知十氏令孃●横濱石原重雄氏夫人●閨秀作家**眞如女史**●箏曲家高田喜代孃●**小林幸子**●●**星野あぐり**●遠藤稻子孃●中村富三郎氏令孃●山本良子女史●横濱阿部廣子孃●理容館主齋藤淸子女史●池田蕉園女史他百餘圖

讀物は**例の通奇拔短刀直入肺肝**を劈くの**氣魄**あり

附錄 **家庭日誌十一月分** 溫度表晴雨表献立表來客簿九星舊曆附

本誌見本郵劵卅錢五厘　賣捌所全國書林

發行所　東京市本郷區龍岡町　振替東京三〇五八番　**聚精堂**　電話下谷一六一七二番　電話下谷四〇七九番

令嬢かゞみ



（上）陸軍少將種田錠三郎氏令孃朋子（下）長野縣多額納稅者神津邦太郎氏令孃みち子

表情



谷本博士 桑木博士 上田博士序 大道和一先生新著

情死の研究

情死の研究、名太だ奇なり、然も是れ真摯なる社會問題の一研究にして廣く古今の事實傳說に就て資料を蒐集し、更に社會學、統計學の原理に基きて概括歸納を試みたる近來の快著

最新版

相思の男女＝同性の愛

新聞紙の社會記事は日として愛に溺れたる若き男女の悲惨の最後を報せざるなし此の戰慄すべき社會の現象の新研究は著者に依りて遺憾なく遂げられたり

布裝釘全一冊 定價金一圓八十錢 郵稅金十二錢



英雄ハアキユリーズに托せられて蒼穹と情死すべき巨神アトラスの像

著者は夙に京都日の出新聞を主宰し操觚者流の俊豪を以て許さる今此問題の資料を蒐集するに當り便利なる其地位を利用して全國新聞紙に就き精細なる統計を施し更に過去の資料として戲曲小說を分拆するに當りては其取材の主として京阪地方に限らるゝが故に著者出身の地を緣として其地方の人情風俗に關し最も凱切なる解決を下したり之を學術の書と觀るべく之を經世の書と看るべく兎に角近時稀に見る所の快著たり速かに一讀せよ

東京神田表神保町 同文館 電話本局特四三七、振替東京一三五

▲賣捌所……全國各地有名なる書店

女（ちの一）

美容の鏡とは何か

此の書は從來**白色美顔法**として知られたるもの凡そ十五種を掲げ、之に一々詳細なる學理上の論評を試み、兼れて皮膚病學の大家たるカポシー氏及びリール氏**二大博士**の色素漂白術に就て、松田、倉恒、野谷の**三學士**が多年苦心研究の結果發見せられたる理想的の美容術を說述したるものであります。故に性來**色黑く**、にきびそばかす ふきでもの等ある男女は勿論苟くも**白色**美容を欲する人士は何人も必らず一讀愛護す可き**最新治療**書であります。本誌の愛讀者に限り此際郵券六錢封入東京市京橋區本湊町六**濟生堂**宛申込あれば**無代**進呈します。

洋画講義録
繪画講習録

當代一流大家數十名執筆、會費各卅六錢、一ケ年卒業、規則無料進呈

水彩畫を始め油畫木炭畫肖像畫ペン畫等を網る詳細に講述す每號美麗なる插畫數多あり

日本畫の技術と學科とを平易懇切に教授し初學者と雖忽ち上達せしむ每號着色插畫多し

東京市麻布飯倉四丁目 **大日本繪畫講習會**

洋画材料品總目錄

無代進呈

百餘箇の精密なる圖を插入したる詳細目錄は御一報次第郵税を要せず無料進呈す可し好畫家必携の好冊子也

英語普及會編

註釋つき ポケットナショナル

◎卷三製本出來 定價卅錢郵税貳錢 每頁脚註正確簡明 ◎卷一二合本 中數日出來 定價同上 ◎卷四續刊

◎ユニオン第四及びイソップ其他續刊體裁四六半截原本縮寫

發行所 東京小石川大和町九 **婦女新聞社** 電話番町一三〇六番 振替東京二八〇七番

發賣元 東京神田表神保町 **東京堂** 電話本局一二三番 振替東京二七〇番

女子文壇

第七年十四號 一日發行　**十一月號**　定價一冊金拾五錢 送料壹錢五厘

◎女性の獨身難……大阪醫學教授 田中祐吉

◎平安朝時代の宮廷婦人……眞山靑果

▲裾野日記……佐野天聲

▲大和路の秋……澤村文學士

戀愛論

◎沒我の愛情なき者は玉の盃底なきが如し……建部文學博士

◎人生に於ける戀愛の價値如何……早稻田大學講師 金子筑水

◎戀愛と云ふ言語の扱ひ方……遠藤文學博士

◎戀愛と結婚と……生田文學士

◎天下晴れて說くべき問題ではない……下田文學士

◎文藝の影響を受けたる戀愛は崇高なり……田村俊子

◎私の貞操觀（二）……與謝野晶子

○草を敷きて……山田邦子

○山より山へ……平塚白百合

○晩秋の牧場……百合香

○今樣羽衣……蘇生法師

○別れた人へ……野茨

○新しい作家……白光

○夜寒語……坂東太郎

○落葉焚く日……女護島守

▲公設繪畫展覽會を觀る……岡本一平

◉名流婦人の愛讀書（其一）……三宅花圃女史

文（ちの五）

東京市京橋 大鋸町十二　**女子文壇社出版**　（振替貯金口座東京第壹七貳九番）

●賣捌全國各地書店販賣す●若し品切の節は出版元へ申込な乞ふ●



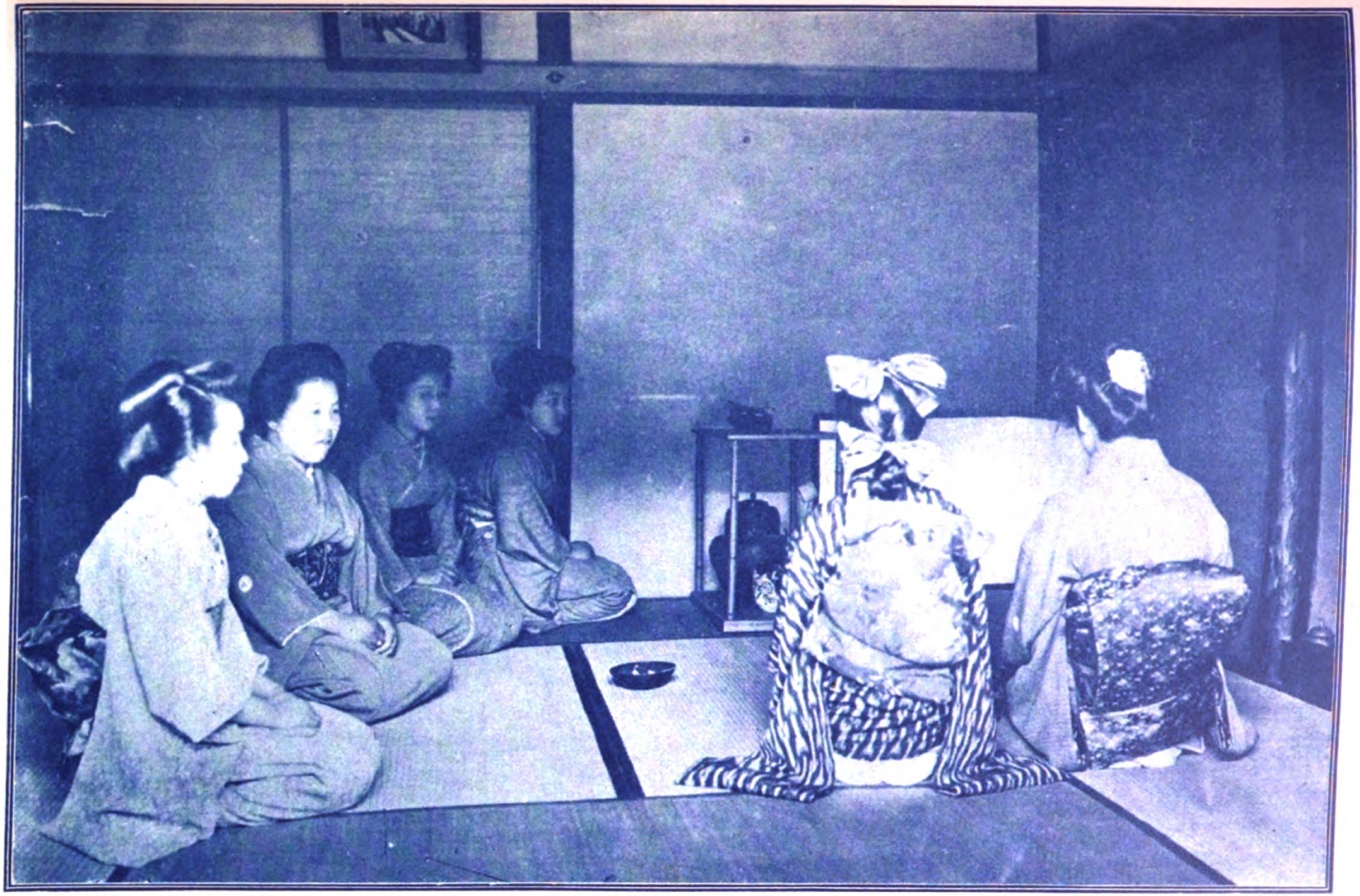
女（ちの四）

肺病患者に警告す

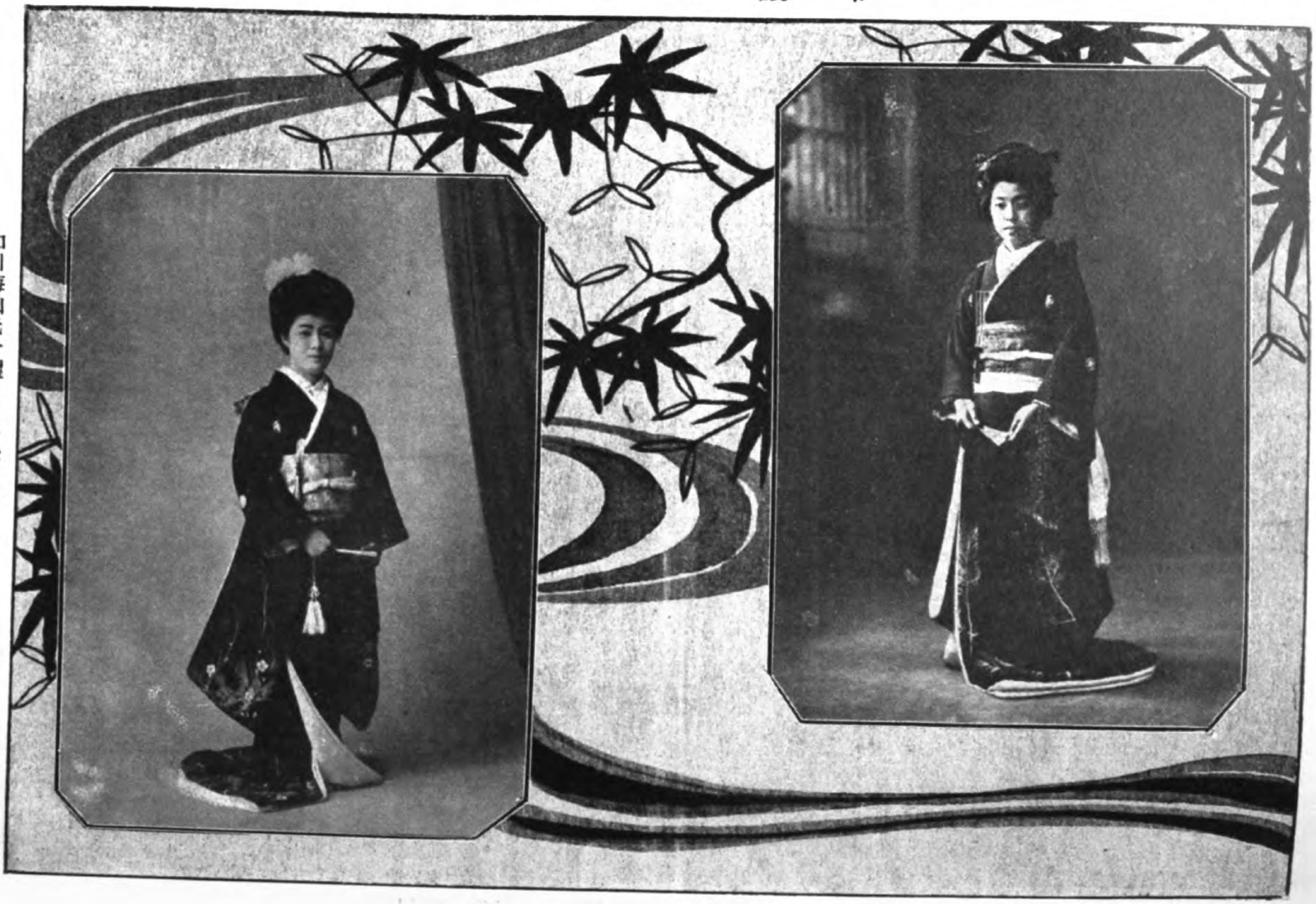
醫科大學藥學專攻
藥學得業士 金澤巖

肺病は難治の疾病にして病理診斷等の幼稚なる時代に於ては殆ど不治の病と稱せられたり此習慣久しくして今日尚必死と信ずる人多く敎育ある醫師と雖も患者が肺病の診斷を以て死の宣告となし失望悲嘆するを恐れ最末期に及び治療の目的なきに至り始めて實を告ぐる事多し故に輕症時代に患者は其覺悟にて充分攝生服藥せず又家族は平素消毒豫防せず爲めに一家傳染滅亡する事多し是實に大なる迷信にして此考への爲めに生ずる人生の不幸は極めて多大なりとす不肖往年肺病に罹り一時は不治と決心したるも多數の成書を涉獵し大に悟る所あり現今醫學上の方式を原則として自ら實驗に實驗を重ね攝生療養に力を盡し又藥化學上の原理を應用し一新藥を發明し終に自個の病軀を全治し舊倍の健康を得るに至れりその藥物をキニトールと號し發行せるに既に幾千通の全治輕快の報告實證を受領せり爾來十箇年間に於る學界の進歩と實地の經驗を鑑み數次の改良を經て『第三キニトール』を發行せり此新藥は少くとも現代に於ける理想的肺病治療藥にして消化器を害せず食氣を進め全身の營養を增加し精神を爽快にし熱を去り痰を切り咳を鎭め肺病の各症狀を寬快し病原菌を驅退し漸次體量を增加し全治に至らしむるもの也同病患者にして一度使用せらるゝ時は自覺するを得べし尚委細は東京市下谷區上根岸町金澤巖宛御申込ある時は報告と同時に詳細の養生書一冊を進呈すべし（文句の盜用嚴禁）

茶の湯（松濤庵茶會）



令嬢かゝみ



賀川作次郎氏令嬢とみ子（本所）

加川梅仙氏令嬢さち子（京橋）

○子宮病自宅療法と姙娠法

子宮病の一般の容態は、手足が冷え惡寒がする、逆上や頭痛がする、肩凝り眩暈もする、そして内股や腰の邊りに索張る樣な疼痛を覺え、勿論子宮も多少の痛を感じ、下腹が重苦しく條張り、小便に度々行き、或は便通が惡くなり、局部の周圍が痛痒く不潔で惡臭がある、斯くて間もなく（或は初めより俄に）稀薄な水樣の物、又は濃い粘りある膿の樣な下物（白帶下）がする、斯うなると月經は多量になつて、經行前には疼痛を覺え、且月經時で無い時も出血し、白帶下は續いて有つたり無かつたり、而して腰部が何時も痛い、これが永く續くと一生涯不姙となり、辛い淋しい月日を送るばかりか、段々身體が衰弱して、取返へしの附かぬ重症を惹起し、遂には命迄失ふ樣になるのです。

▲子寶を得る最も良法　斯樣に子宮病は恐るべき疾病ですから、一旦本病に罹ると、どんなに輕症のものでも、全く根治しない間は何うしても、子供が出來させん、世間には子寶がないと、自分等夫婦には子種がないのだと、斷念めて居る方も尠くない樣ですが、決してそんな道理はない、中には其罪が良人にある事も御座いますが、十中の九迄は婦人方が、本病に犯されて居るのが多いのです、又子宮病の治療は多く手術をいたしますが、手術をすると治りが早い代りに再發し易く、殊に全快した後でも姙娠する事が極て稀で御座います、それに手術を受くるには、身體の餘程强壯な方でないと到底堪へられません、然らば

▲何うするのが一番よろしいかと云に、それは婦人科專門の大家醫學士北畠佐藤兩先生の御書になりました『婦人病者心得』を讀んで其通りに養生なさるのが、最も安全で最も確實な療法で御座います、此方法によると大概の子宮病血の道は、自宅で容易に根治せられ、御希望通り姙娠が出來ます、皆樣、理窟では病氣は治りません、物は試しと云へば、現に身體に異狀ある方は勿論、何んともなくて、是迄一度も姙娠した事のない方、又は流產難產の癖ある方は、兎も角婦人病者心得を御覽になつて、成程と得心が出來たら、速かに本療法を試みなさい、後悔は先に立たずです。

記者曰く婦人病者心得はハガキにて東京京橋新榮町蛭岡省三氏宛申込めば無代送附せらる

（りの一）

美術

造花材料

東京市淺草區駒形町十四番地

三國屋

關口商店

電話下谷四〇五一番
振替口座東京一一六四二一番

定價表御入用ノ節ハ郵券貳錢御送ノ乞

女(りの二)

◎産婦人科
◎小兒科

宅診 午前
往診 午後

病室並ニ産室ノ設備アリ隨時入院ノ需メニ應ズ

院長 女醫 吉岡彌生（鷲山改姓）

東京市麹町區飯田町四丁目卅一番地

東京至誠病院

電話番町（二三五七）

●婦人科 産科

殊に月經障害、ヒステリー（診察午前）

明治療院

淺草區七軒町二

入院隨時

院長 平田東一（章之丞改）

外科●生殖器科（診察午前）

竹柏會は文學博士佐佐木信綱氏主幹にして東京の會員には講義及び歌文を教授し地方の會員には初學者の爲に通信にて懇篤に添削指導す又雜誌「心の花」を發行す規則書は郵券二錢、心の花見本は十二錢を送られなば發送すべし

東京神田小川町一 電話本局一一一四

竹柏會

禿、脱毛、薄毛、生際惡き人試みよ……

東京皮膚病院發明山崎製

毛生液（モウセイエキ）



本劑は第一毛をはやし、ぬけ毛を止め、髪の毛はへぎは眉毛髪等の薄きをこく生じ皮膚病でき物ヤケド跡はげ其他あるべき所に毛なきに用て毛はへる事請合

○藥價三十錢、五十錢●特製一圓、二圓●送料六錢

本舖 東京市日本橋區馬喰町二丁目 山崎愛國堂

●ね小便袋 子を持つ親病人ある家には必要

本品は最新式にして洗濯の世話なく蒲團衣裳を汚さず立すわり自由



特別ゴム製

大人用壹圓九十錢
小兒用壹圓貳十錢
乳兒用九十錢
男女の別有り
—御注意—

●大勉強送附料弊店負擔す●合羽製あり御注意あれ

大阪賣元 大阪市東區京橋貳丁目 振替口座東京八一九八 常盤號(ゴム)部

蹄鐵印(シャター・リョン) 白赤 葡萄酒

は藥用飲料並に食卓用として御進物に最も妙なり
●至る處に取次店あり
本品は従來赤葡萄酒のみ發賣の處今回更に品質を精撰し最も純粋にして善良なる白葡萄酒をも輸入發賣仕り候に付御愛飲の上御稱賛あらんことを乞ふ



東京市本町三丁目 電本局長一四三五

鈴木洋酒店

男女 ちぢれ くせ毛 赤毛

は何程の難毛も直に根本的矯正黒化良き艶の出る最新發見奇液を郵劵封入申込の方に教授し誓て美髪に治して差上升

東京麻布區材木町 岩阪澄子

陸軍教授西村豊序 日本藥學協會主幹鴨田脩治著

どもり矯正法

●洋綴金字入美本 ●價四十錢郵税免す

本書は獨國醫學博士コオン氏の多年の實驗研究の結果世に公にせしもの也此書に就て矯正せば如何に「ヒドキ」「ドモリ」の人にても數十日ならずにて矯正し得て正音雄辯の人となる

婦人畫報記者坂本易徳先生序 與謝野晶子女史題詠 牧野文子女史書翰 日本藥学協會主幹 鴨田脩治著

新刊 實用新法 美顏と美髪

美顏美髪の現代的美人の寫眞銅版數個入

●正價金四拾錢(直接申込に限り送料免す)
美顏と美髪を望む人は是非本書を見よ本書に因て療養せば色の黒きも忽ち白くなりきめを細かにし皺を伸しちゞれ毛を直し赤毛を黒くし白毛を防ぎにきび、そばかすふきで物も忽ちに直り醜婦も美人となり美人は益々其美を發揮す特に化粧撰定法の如きは本書の獨得なり必ず一讀あれ
●東京本郷湯山町四 日本藥學協會

長身肥滿 人體の肥料 發見再生丸

せの低き人 やせたる人

本劑を用ゆる時は高くなる病後、産後其他生れ付きの人にても忽ち肉付き強健となる不思議の靈藥あり郵劵四錢送附あれば本劑の記効書及び長身肥滿法と題する約五十頁の冊子を進呈す

東京市芝區高輪南町六十五番地 成蹊堂

女(りの三)

女（りの四）

十二月一日より

冬物新柄大賣出し

●藤原模樣半襟數百種陳列

●新形ショール數百種陳列

●よせ切れ見切反物取揃

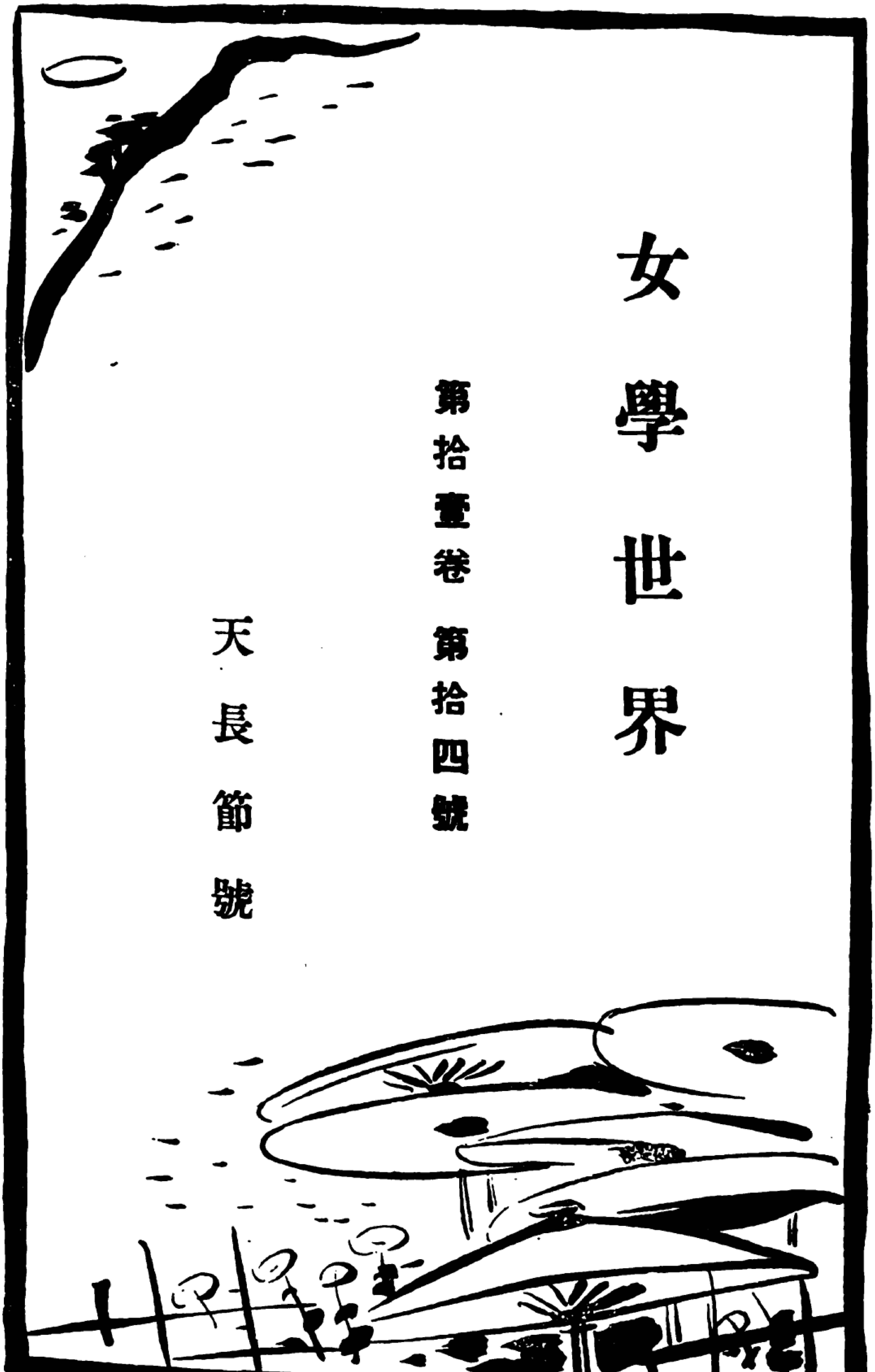
●冬物洋服地悉皆取揃

●餘興塲日々開演（少女音樂隊其他）

●寫眞部 晴雨天共撮影（出來期間一週間）

東京日本橋

白木屋呉服店



女學世界

第拾壹卷 第拾四號

天長節號

若夫婦の大切な務め

伯爵夫人　寺内多喜子



△若夫婦の心も締まる

一家の中で大切な事は澤山ございませうけれども、私は、老人を敬ひ勞ることが、若夫婦の最も大切な務めであらうと思ひます。老人は家にはなくてはならぬもので、老人が居れば自ら家に重みがつき規律が正しくなり、秩序も立つて參ります。また若夫婦の心も締り子供にしても召使にしても　各々其の分を守るやうになります。

そして老人は若い者から申しますと親なり、舅姑なりでありますから、常に之を敬ひ、之を愛し、之を勞り、之に事へて行かねばならぬことは、當然のことでございます。

△主婦と老人

また主婦の上から申しましても、良人は多く外勤がちで、家の内の事を考へて居る隙は極く乏しいものです。そして自分は年は若く、經驗も尠いものですから自分より目上であり、經驗もある老人の指揮を受け、後見を願うて、物事を捌くと云ふことは、當然のことであらうと存じます。

世には一家は、若い者の一家であるやうに思ふ人もあるやうですが、それはとんでもない間違ひで、家に最も關係の深い老人を十分大切にせねばなりません。もし老人に病氣其の他の變事のある場合には、殊に心力を盡して介抱し、日々之を敬ひ勞ることこそ、忘れてはなりません。是れは我が國の古來の美風で、大に世

界に誇るべき所でございますが、西洋の國々でも、此の風が全くないのではありません。やはり世間で紳士ともいはれて居る人の家庭へはいつて見れば、老人と若いものとの間は極く圓滿にいつてゐるさうであります。

△感心な西洋人

此頃我が國に於いては、何事も西洋に習つて、老人と別居するがよいといふ説を唱へる人があつたり、又結婚の條件として、舅姑を非常に厭がる人がありますが、是れは無理な事でございます。又決してお爲にならぬことであります。こゝはかへつて西洋人の方が感心で、中には我が國の人に劣らず、老人を大切になさる人があつて、現に我が國に居られる西洋の婦人で、老親に仕へんが爲に殊更に獨身で居らるゝ人があるし、又病める老親を脊負うて、屢々物見遊山をする人もございます。若い人と、年寄とは、自ら意見の合はぬところもあつて、窮屈な點もございませうが、そこは能く辛抱なさつて、老人を大切になされたいものでございます。これでこそ一家の快樂と幸福が得られやうと思ひます。



若き女の品性修養

山脇房子

△婦人に適切な言葉

日本全國には幾百の女學校、幾萬の女學生があつて女子教育はまことに盛んですが、肝腎の品性や行爲はまだ左程善くもならず、或る一部に於ては、かへつてます〳〵墮落してゆくやうに見えるのは、實に嘆はしいことであります。それもまるきり無教育の人とか、

觀楓會



極く思想、古い人とかで、これからだん〳〵世に遠かる人の間のことならば、まだ堪忍もできますが、相當の學問もあり智識もある人が此の始末なのですから、實際困つたものであります。尤も人間の品性や德操と云ふものは、學問をして智識が廣くなつたからとて、必ずしも高尙になるものとは限りませんから、たまたま女學校出の者に品行の如何はしいものがあつたからとてさう不思議なことではありません。けれども考へて見れば、人として品性ほど大切なものはありません如何に學問が深く、色々の技藝が上手で、顏が美しくても、若し品性が惡るかつたら、その爲に他の好いところは蔽はれて、何の役にも立ちません。ことに婦人は子供を育て、其の子の敎師として之を導く責任があるから、常識もなくてはならず、意志も強くなければならぬが、品性なり德操なりは更に大切であります。或る人は『敎師たる者は、人格が大切である。人の模範たるべき人格のないものは、敎師たるの資格のないものである』と申しましたが、これは敎師ばかりでなく一般の婦人にも適切な言葉であらうと思ひます。

△何時の世にも大切な事

それで善い品性を養ふには、自分でいろ〳〵工夫する事が肝腎ですが、ことに平生謙遜で優しくするやう心がけること、實際の經驗と學問に依つて確實な知識を蓄へること、また自分の安心できるほどの藝能を修めることなどが最も大切であります。何時の世に於ても婦人はやさしくなければなりません。また學問して得た智識は、經驗を積んで見て初めて確かになるのですから、學問するばかりでなく、廣く見たり聽いたりすることがいります。而して婦人は、良人その他目上の人に對して柔順であるべきことは申すまでもないことですが、あまり人に賴りすぎては品性をそこなひますから、學問でも、書畫でも、或は茶の湯、琴、裁縫料理等何か一藝一能に達して置く事が必要であります

△人の噂をやめよ

それから自分の惡るいところをなほし、足らぬところを補ふやうに心がけることが大切であります。兎角自分の惡るい所を見ずして、他人のわるい所ばかりに目を着け、寄ると觸ると人の惡口をいふ人がありますが、まことに善くないことです。甚しいのは自分は性質がかういふのだから今更改められぬといつて、澄して居る人がありますが、これは自暴自棄といふもので實に氣の毒な人であります。

△よい思付き

フランクリンは、良い習慣を作る爲に、毎日自分の言語や行爲を省み、功過表をこしらへて、昨日より今日、今日より明日と、日々進歩するやうに修養したと云ふことであります。また瀧鶴臺の妻は、袂の中に白毬と赤毬とを入れ置いて、惡るい考への起つた時は赤き絲を結び殖し、善い考への出た時は白き絲を結び加へて身を修むる方法としたと云ひますが、何れも良い心がけと思ひます。人には學問が好きでも行ひの修らぬもの、氣短で忍耐力の乏しいもの、其の他薄情、饒舌、偏屈等いろ／＼缺點がありますが、かういふ所はよく注意して、氣づき次第、速かになほさねばなりません。



冬枯の千くさの中にあらはれてさむさ白菊花咲にけり（永好）

△言葉づかひと容儀

それから言語を美しくすること、容儀を正しくする

ことも思はねばなりません。婦人の言語は、優しくてあまり多言でない方がよろしいのです。言ふべき事は言はねばなりませんが、あまり多すぎては失敗り勝ですから話す時には、言べきことゝ、言ふてわるいことを考へなければなりません。殊に人の事を惡口したり、人の内密を發いたりするのは、最も警しむべきことであります。また初めて人に對面した時、其の容儀によりて、人に尊敬の念を生ぜしめたり輕侮の念を起させたりすることがありがちですから、精神さへ正しければと云ふ人もあるけれども、これも忽せにはできません。世には先方が窮屈だらうと思つて、殊更に



露とだにならん隙なくふる雨に
濡るばかりの秋萩のはな（景樹）

言葉づかひを粗末にし、容儀をくづして應對する人もありますが、これは自分の品位人格を下げても、品位人格の低い人と、交らうとするので、賤しむべきことであります。かゝる場合にはどうか、先方の低い人格を、己れの高い人格でなほすやうにしたいものであります殊更に窮屈にして打ちとけないのも惡るいけれども、その爲に野鄙に流れてはなりません即ちどこまでも言語はやさしく、容儀は正しく、氣品があつて溫容をそなへる人となるやうに努めたいと思ひます。

△人格の感化

學問は無論いりますが、無意味に學科ばかりつめ込んでも仕方がありません。やはり精神の修養が大切であります。それには、古今の人物に私淑して、善い所を見習ふことがよろしいでせう。學校などでも、學科の方を少くしても、德望ある人物を聘して、其の感化を受けさすることが大切であらうと思ひます。感化と云ふことは敎育には、殊に必要であります。宗敎が人格を通して始めて力あるやうに、敎育に於ても、人格の感化は何より大切であります。所が、今日の學校では、只だ智識や藝を注ぎこむばかりで、品性や德行を善い方面に導かうとすることは、殆どありません。家庭の父兄も子女もまた此の傾きがあります。これでは品性を高潔にすることはむづかしいでありませう。どうか導く人も導かるゝ人も是等の點に十分に注意して向上を計らるゝやうに祈ります。

△女學生數名よりあひて、今度の記念日の餘興には、この中で一番お琴のお上手な方に、何かお一曲お願ひいたしませうよ といふ折しも、その中の一人、マア聞分れ。

名所の紅葉



もみぢばの色をしそへてなかるれば
淺くも見えず山河の水（讀人不知）

親の義務と娘の自覺

自覺せる娘

人間が唯生きてるだけの世の中なら何も言句はない野の百合でも空の鳥でも紡がず播かずに生活してゐる。私だつて娘を育てゝ嫁にやる位なことは譯なしに出來るけれど世の中の親爺が「あの娘も嫁にやつてもう安心だなんて、呑氣なこと云つてゐるのが、氣が知れない。それ丈のことなら犬猫にでも出來さうである、が少くとも意味ある生活を送らすやうに娘を育てるのが親の義務だと思ふ、親の責任は、少くとも娘の結婚後、家庭か平和か不和かと云ふ點にまで大に責任がある。と云ふのは之れは家庭の躾が大に關係するからである。以前ならば嫁にやつたらもう安心してもよかつたかも知れないが、併し現今は大いに異ふ。男子が女子に期待する所はなか〳〵尋常でない。少くとも眞面目な男子は充分婦人の價値を認めて、その補助を籍りやうとして來た。これは喜ぶべき現象である。上流社會はいざ知らず、中流社會に生れて、自ら開拓し向上せねばならぬ運命にある男女に取つて此の位立派な新時代の賜物はない。處が世間には此の眞面目な男子の要求に相應じない妻君がザラにあるから困る。それが爲に男子の努力は大に減ぜられて、家庭の不和を來たし、甚しきは家庭の紊亂を來たす樣になつた例はいくらもある。これは一面親の躾に關係するのである。

さらば女子の教育を何の樣にすればいゝかといふに、之れが甚た解つて居ない。然し遂に開放せられた現今の日本の女子に取つて、第一に心配してやらればならぬことは、誘惑に陷らないやうに教育してやらればならぬ事で、これが現今の急務である。實際分別も充分出來てゐる女が屢誘惑に陷つてゐる例が甚だ多いのである。私は誘惑を單に男女間のことのみと限らない。精神上の誘惑――例へば虛榮心とか、不從順とか、輕薄とか、凡て過渡時代に產出する精神上の不德をも意味するのである。こゝで一つ大事なことを言つて置きたい。

それは近來よく云ふ「自覺」といふことである。私は自覺な「自分を正當に評價する」といふ意味に解して居るが、現今の女子に自分を正當に評價してゐる女子が果して幾人あらうか。女學校を出た女子よりも却つて田舍の何も知らない女子の方が、より正當に自分を知つてゐるやうである。近い例が我家の妹である。今年二十七歲にもなつて、まだ嫁入が出來ない。……いや仕ないのである。位置に相應した緣談はいくらも有つたが、望が高くて望がないのである。妹が先に學士の處へ嫁入したから、自分も學士より下の處へは行かないといふが、矢張り自分を正當に評價することが出來ないのだ。その中に段々年は取る容色は下るので、此頃では餘程後悔してゐる。これも文明に毒せられた女の一人であらう。女が二十七にもなると結婚を申込む男も一寸思案するので、私自身もよわつてゐる。それから一寸心づいた事だが現代の思想や、感情や、趣味や、智識の普及の機關となつてゐる新聞雜誌などの讀物であるが、これには、益になる事は包まず曝け出して反省を促すやうに書いてある。(一五ページ)へつゞく



論語百首

論語の意を和歌に詠ぜるもの百首あまりは赤壁汝栖大人の草し置れたる所にして教訓　意を採たる節おもしろければ玆に記せり

○「學而時習レ之不二亦說一乎」

巣ごもりに羽ならはせる雛鶴も
　終には霞む空かけるなり

○「有レ朋自二遠方一來」

身の花の咲かほるなら音づれぬ
　遠方人も見にや來つらむ

○「人不レ知而不レ慍」

おのが身に光る眞玉を石と見て
　人そしるとも何かいとはん

○「其爲レ人也孝而悌好レ犯レ上者鮮ニ」

たらちねの親につかふる花心
　實のならまくと思はぬはなし

○「巧言令色鮮矣仁」

色深く匂ひまされる山吹の
　花は中々實の無かりけり

○「吾日三省二我身一」

色も香も實も保つかと朝夕に
　かへり見る身は花にこそあれ

○「行有二餘力一則以學レ文」

おのが身の爲すべき業を爲てのち
　吉野の花の道もふみ見よ

○「君子不レ重則不レ威」

高く身を澄せど淺き山の井の
　水は中々汲む人もなし

○「主二忠信一」

時めける色こそ見えぬ松が枝の
　ふかきみどりは千代にあせめや

○「過則勿レ憚レ改」

身のうゑにおひれはしける難波潟
　芦と知りなばはやかりてまし

○「父在觀二其志一父沒觀二其行一」

朝な夕な見なれし宿の櫻花
　散にし後も慕はるゝかな

○「貧而樂」

風寒きあしやにすめど咲く梅の
　花心こそ樂しかりけれ

○、富而好レ禮」

玉しきの庭に咲たる深見草
　日影をそへて増す匂ひかな

○「詩三百一言以蔽レ之曰思無レ邪」

八千種に色はわくとも野の花は
　一つ心に咲き匂ふなり

○「父母唯其疾之憂」

吹通ふ垣のすきまの風にだに
　あてじとぞ思ふ撫子の花

○「吾與レ回言終日不レ違如レ愚退而省二其私一亦足二以發一回也不レ愚」

色に出でぬ木影の花の深き香は
　見し人ならで如何で知るべき

○「人焉廋哉」

花に葉に姿に香り添ひぬれば
　木々の心も隠れざりけり

○「温レ故而知レ新可二以爲一レ師」

船浮けて水さかのぼり深き瀬を
　極めてこそは人も渡さめ

○「君子周而不レ比」

池の面に咲ける蓮の清き香は
　見る人ごとに香りけるかな

玉よりも光る恵みを隔てなく
　草木に露と置けるものかな

○「小人比而不レ周」

繁りあひてさく八千種の花ながら
　野邊より外は香もなかりけり

菊の薰



人の働らきと家庭の規律

貯金局長　下村宏

▲働らく正味が違ふ

西洋人と日本人とをくらべて見ると、日本人は外國の語を學ぶといふやうな餘計な負擔があつて働らき出すのが後れてゐる上に、早隱居の風がまだぬけないで働らきを止めるのが早いばかりでなく、その働らき方も違つて居ります。日本人は第一時間の節約方が下手なやうです。それゆゑ二十歳から六十歳まで働らくとして、その働らきの正味が違ひます。たとへば彼方では、私が宴會や表向の集會、或は役所の出勤の時間などはまことに正しいが、我國でははなはだ亂れて居ります　時々時間の勵行會などを立てゝ見る者もありますが、とても行はれません。わたくしが地方をまはつて講話をする時などでも、自分は定刻より早く出る位にするが、集まる人がおそいから、どうしても一時間や一時間半は後れます。スルトしんぶん記者などは一時間半も待たせたといつて私を攻撃しますが、實は聽衆を攻撃してもらはねばならぬやうな事があります。宴會などもやはりさうで、定刻にちやんと膳を出すことは殆んどありません。顔がそろはぬから膳を待てといつて、かへつて幹事が料理屋に時間をくるはせることを命ずるやうなわけです。甚しいのになると主人側がおくれて、お客が二間間も待つことがありますが、かうなつては主人がお客だか、お客が主人だか分らなくなります。

▲惡るい座居の習慣

ことに家のつくり方が、日本のは甚だ不都合ですから、この爲めにも餘ほど違ひます。西洋人はふだん腰かけてゐるから、立つて物をとるのが、ちつともおつくうでないが、日本人はすわつて居て、立つのがめん

どうですから、何か用事があると、やたらに手をたゝいて人を呼びます。ことに寒むい時には、旦那や奥樣は座ぶとんの上に火鉢をかゝへて居て立つのをおつくうがり、手をたゝいていろ〳〵な事を命じますが、これらはまことに惡い習慣です。また腰かけてゐると、疲れたからとて横になることはできぬから、散歩するにもたいへん手がるですが、日本人は着物をきかへたり下駄をはいたりするのが面倒だから、そのまゝゴロリと横になつてしまひます。

▲朝から晩までの日課

それから日本では家庭に朝から晩までの日課がきちんと定まつて居ないから、一枚のはがきを女中に出させにやつて、歸つてくると、又郵便切手を買ひにやるといふ風で同じ處へ何べんでもやりますが、まことに不規則な話です。これは世間一般の習はしで、仕方がないかも知れぬが、できるだけ改めたいものです。また西洋では魚市場や靑物市場が何處にでもあるから、晝の料理は何にしよう、晩の料理は何にしようと譯もなくちやんときまるが、日本では肴屋八百屋がくるのを待つてゐるのだらう、肴屋が來て思はしい物がなかつた時には、牛肉にしやうか、八百屋が來たが薩摩芋がないからジヤガいもにしようかと、まづ臺所會議が開かれます。そして肴屋と奥樣、奥樣と女中の論判が始まります。けれど西洋では豫じめ献立を定めて置いて、それから市場へ買ひ出しに行くのですが、滅多にきめておいた献立を取りかへる樣なことはありません時化といふものはどこにもあるが、西洋ではお肴でも野菜でもやりくりが利いて、或る處が時化だからとて思ふ品が買へぬといふやうな心配はありません。何時市場へ行つても新らしくて安い物がいくらでも買へます。

▲お互に虚言の言ひあひ

また一例を申せば、奥樣がどんなに規律をつけやうとしても、我國のやうに飯時に客が遠慮なく人の家を

訪ねるやうな風のあるのも困ります。そして御飯がまだならおあがりなさいといふと、いや宜しいと言つて立ちかけるが本當にいゝのかと思へば、實は空遠慮で、すゝめられるとやはり食べます。いつそ正直に食べるといへば宜いのに、かういふお客には奥様は非常にこまります。その爲めに方々かけまはつて食事の注文をして歸つてくると、客はもう居ないといふやうなへマ事がよくあります。私が中學生の時分に、明日の學科をさらへて居ると、よくお客が來て御馳走が始まるので、酒屋や肴屋へ幾度も走らせられて困りました。四斗樽でもそなへつけてあればいゝが、そんな物はないから、オイもう一度いつて來い、夜十時が過ぎてから又一度といふやうな事がよくありました。其の外日曜日などに妻子をつれて出かけやうとする時に客が來ると留めたくはなくても、マアゆつくり話していらつしやいと言ふ人が多いやうです。こんないつはりを繰り返して居るやうではとても一等國民といふことは出來ないでせう。



武藏野を死にし庭の淋しさになけら聲して秋風の吹　（永好）

▲無意味な土産物

英國などの家庭を見ると、實に紀律の正しいもので、決していつはりを言ふ必要がありません。私の家た居などは、一年中に不時の客が來て御馳走になるといふやうなこと

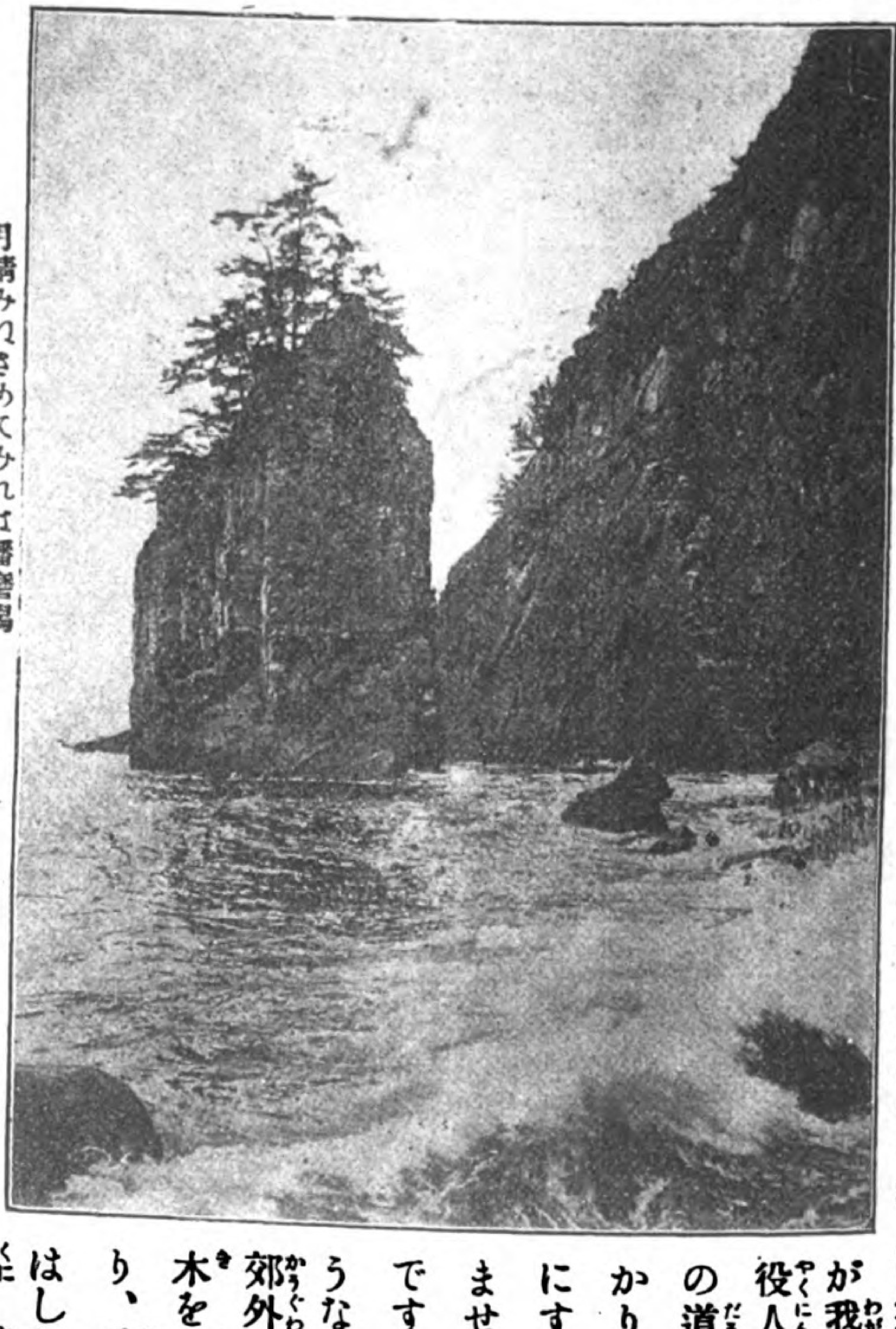
は一度もなかつた。その代り日曜日には親戚や知人が四五軒廻り持ちで客をしますが、往く方では土産物なども持たずに手ぶらで出かける先方でも大した御馳走はしません。まづ平常の分に一皿二皿を増して麦酒に葡萄酒を出すくらゐなものです。そして一時頃からあつまり、一時半に食べはじめ、五時半頃まで話しあつて遊びます我邦では洋食は速く食はねば恥のやうに思ひ、ボーイもセカ〳〵しますが、こんなのは日本ばかりで、彼方では三倍も四倍も長くかゝつて食べます。ことにカフエーが出てからがなか〳〵長くて、大抵の用談を此間にします。それから春と秋には一家打ちつれて、田舎へ遊びにゆくので、私も珍客として誘はれた事がありますが。これは東京でいへば大森とか王子とかへ行くやうなもので、ちよつとカフエー店へ立ちよるくらゐでごく安くあがります。然るに我邦では婦人が何處かを訪ねる時には必ず土産物を持つて行きます。それが少いやうでも、一年に積ると高いものになります。婚禮やお産や不幸のあつた時贈答などはよろしいでせうが、ちよつと親類の敷居をまたぐにまでも、菓子など持つて行くのは如何なものでせう。



大伴の三つの浦なみ吹よせて
松原こゆる秋の夕風　（眞淵）

▲男も女も元氣がある

又話は別ですが我國の人は兎角學問や體育を學校限りのものと考へて居るらしいのですベースボールやボートレースのチャンであつた者でも、學校を出しまへば、もう手にも觸れません。高等文官試驗でも受けて及第すれば、最う功成り名遂げたものゝやうに思つて謠曲や碁や骨董道樂などを始めますから、年は若くても頭は惡くなり、身體もだんだんぼけて行きます。大學の敎授などは、必要があるから書物を見ます。講義する身分でなかつたら、恐らく書物は見ないでせう。西洋では、辯護士や役人に著述する者が多いが我邦では辯護士や役人になれば、種々の道樂をはじめるばかりで、著述を公けにする者などはありません。それが西洋ですと、政治家のやうなせわしい者でも郊外に馬を馳せたり木を伐りに出かけたり、飛行機を乗りまはしたりします。我國の高等學校の學生が相手にする外國の運動家も、帽子を脱げば頭の禿げた連中があります。婦人にしても元氣のあることは同じです。故に健かなれ



月清みねさめてみれは播磨潟
むろのとまりに舟つきに鳧　（知紀）

ば健かなるほど、ます〳〵現はれます。

▲約婚後の共稼ぎ

で私は何處でも、時間を大切にする事、讀書する事、運動する事を勧めるのですが、我國では働く力があつても、力一ぱい出して居らぬ人が多いやうです又他人が力一ぱい出して働いて居るところへ縋り付いて、邪魔して居る人が多いやうです。心付いた人は、力一ぱい働いて、厄介物を一人でも減らすやうにせねばなりませぬ。白耳義の公使をつとめた加藤恒忠氏の夫人が、フランス語を學ぶために彼地で女教師を雇ふたところ、其の婦人は農商務次官の姪であつたさうです。何のために良い身分の婦人でありながら他國の婦人に語學を教ゆるかといふに、此の婦人はお婿さんの極つた人ですけれども、まだ地位が低くて收入が少ないので、共に稼ぎをして居たのです。まあ北アメリカなどへ行つて見ると、何百萬といふ金持の息子さんでも、新聞賣りもすれば、靴みがきもして、相當の年になれば、獨り立ちする決心で居りますそしてかういふ考へは子供の時から仕込まれるので

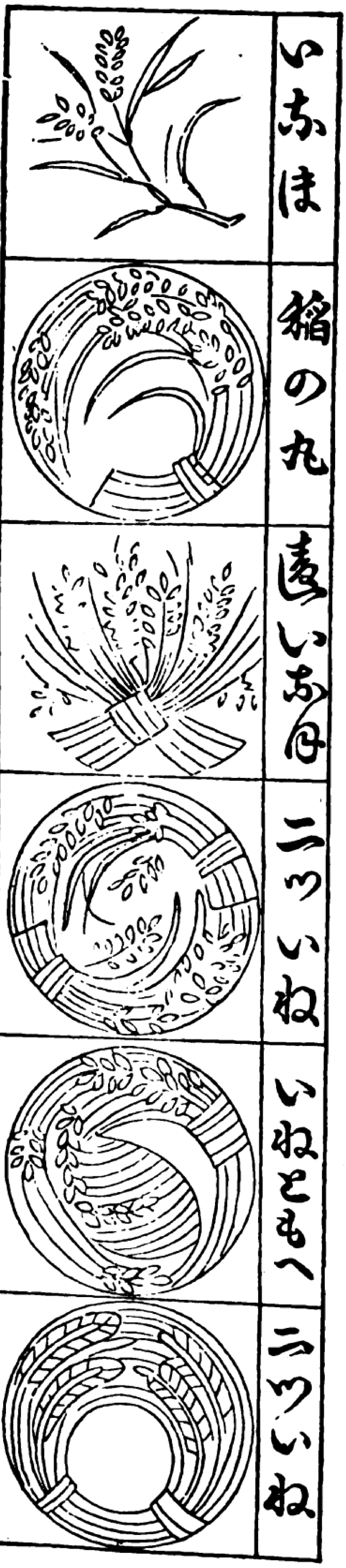


身にてしむ鴉鳴まで住すてし
誰故郷の野邊のあき風
（最樹）

す。我國ではそれが反對で子が嫁をもらつて別に家をかまへると、親を脊にするとて怒るやうなわけで、何時までも親の脛をかじる子を好きます。

▲母親の心がけと子供の強弱

どこの國でも子の憎い者はありません併し日本では可愛がつてかへつて子を害してをります。婦人は兒の病氣を心配するけれども、兒を強くすること、病にかからせまいとするにははなはだ疎いやうです。大勢の集會へ嬰兒をつれて行つてわるい空氣を吸はせたり、泣き出した時には腹がすいてゐなくてもすぐに乳を呑ませて腸胃をわるくしたりします。子供が駄々をこねれば菓子をあたへると云ふやうな習慣は、たゞ腸胃を害するばかりでなく、しらず〱の間に子供の不紀律な思想を養成します。居留地などで、西洋の子守が、主人の子供を日本人の子供と遊ばせないやうに注意して居るといふのは、此の惡るい間食を覺えるからです日本人は何時もよく今度だけ〱といふて、子供の無理をとほさせますが、この今度だけといふ根性は一生涯つきまとひます。子供が駄々をこねたときは、泣いても狂ふても、チツト辛抱して、決して無理を通させないやうにするのが肝腎です。





日記帳（一）

紅梅

△算用數字の覺え書

遠縁の伯母にて、年老いてのひとり住みに、活花茶の湯などを敎へて、こゝろ安う日をおくるがありけり。むかしは御殿奉公せし身の常にかな文字いとうるはしうかき給ひけるが、此のごろの算用數字こそ覺えまほしけれとて、暇に飽かして1より9までをかきならひける。さても速かに會得なし給ひけるよと人のむほれば、さもなき面ざしにて、これを見給へとてさし出しけるを見れば、端紙に覺えとして曰く、1棒、2のん、3ろ、4女、5ら、6子孑、7ワ、8へうたん、9柄杓。

△洒落の通じない奥様

ある女學校出身の奥さまあり。雪もよひの夕、夫の親しき朋友きたりて、共に晩餐の卓にむかひしに、手料理とゝなへて、先づ、ピールに庖丁目うつしくしき魚洗を添へて出しける。朋友はわざと襟かきあはせつゝわが着たるは、小袖の重ねぎぞと云はぬばかりの面持にて、奥さん、今晩は大分蒸しますなと云へば、奥さまはさりとも知らず、は、恰度只今勝手で風呂を焚きつけましたものですから…………。

△鼠と猫と螢

猫はキヤツトと敎へる折から、末の兒の來て、姉ちやん鼠はチユツトだれえ。紙につゝみてあたへし螢を見て、母ちやん袋がこげて了ふよ。といひしも此の兒なりき。

△鱈の子

酢豆腐といふもの喰べし人のありとは落語家のいへど、これによく似たるは、生もの知りにて、越後より送りこせし鱈の子の鹽づけを、洗ひて煮て喰ひし男なり。

△似合はぬもの

むらさきの袴はきたる女學生の、何事の願ひやらむ某稲荷神社の前にぬかづき、鈴うちならしておろがみ居たるを見しことあり。似合はしからず覺えぬ。





△禿頭と金盥

知るべの家に五つになりし男の子あり。冬のよのまどひに、三四人火桶かこみてうちかたらへる折しも、母なる人は傍にて按摩とりてありけるに、異やうなる按摩のさまをつくづくとながめ居たりし子の、ふと母ちやん、この按摩ちやんのお頭は、坊の金だらひとお揃ひにちゆべ〳〵して居るね…………。

△肌ぬぎの罰金

夏のまひる時など、橋のたもとに、肌いぎたなく露しつゝ、八目うなぎと云ふもの賣る男ありき。折ふし通りかゝりし巡査の大喝一聲、此の奴め！といひしに、うなぎ屋ぬからぬ貞にて一聲たかく、十五錢と！さけびぬ。巡査ます〳〵怒りて、太い奴だと襟がみつかむや、男はふたゝび聲はり上げて曰く、廿錢！

△井ルミネーション

井ルミネーションといふなま生ぎゝの老母、この前日本橋が出來た時の井ネムリーションは……………といひかけしに、かたへの幼き子、お祖母ちやん、違つてるよ、ヨルミネーサンだよ。

△口上を忘れた人

さる家の忘年會に、出入りのものうちよりて、素人芝居といふものをなしけるに、その中の一人、注進奴の役をうけがひ、身振り科白まで數日苦心して稽古せるのち、當日の舞臺にのぼりしに、いかゞなしけむ、御注進！と平伏せしまゝ、おのれがいふべき科白を跡なくうち忘れてけり。太守にゝあはたゞしい何事なるぞ！と問はれても、とみには好き考へも出でず、總身を冷汗にして智惠を絞りたる後、辛くも、きゝとれ得ぬほどのふくみ聲にて、たゞ、あんらふら〳〵、あんらふら〳〵とのみ云ひけりとぞ。

△日光の土産話し

生物知りの若者、日光にあそび、歸り來つて、身ぶり手ぶりおかしく滔々と建築物の結構を説いて曰、玉垣にはなれて置かれましたのは、唐土から渡りました、南蠻鐵の石の金燈籠で…………。

女優と其衣裳





生活難

内藤千代子

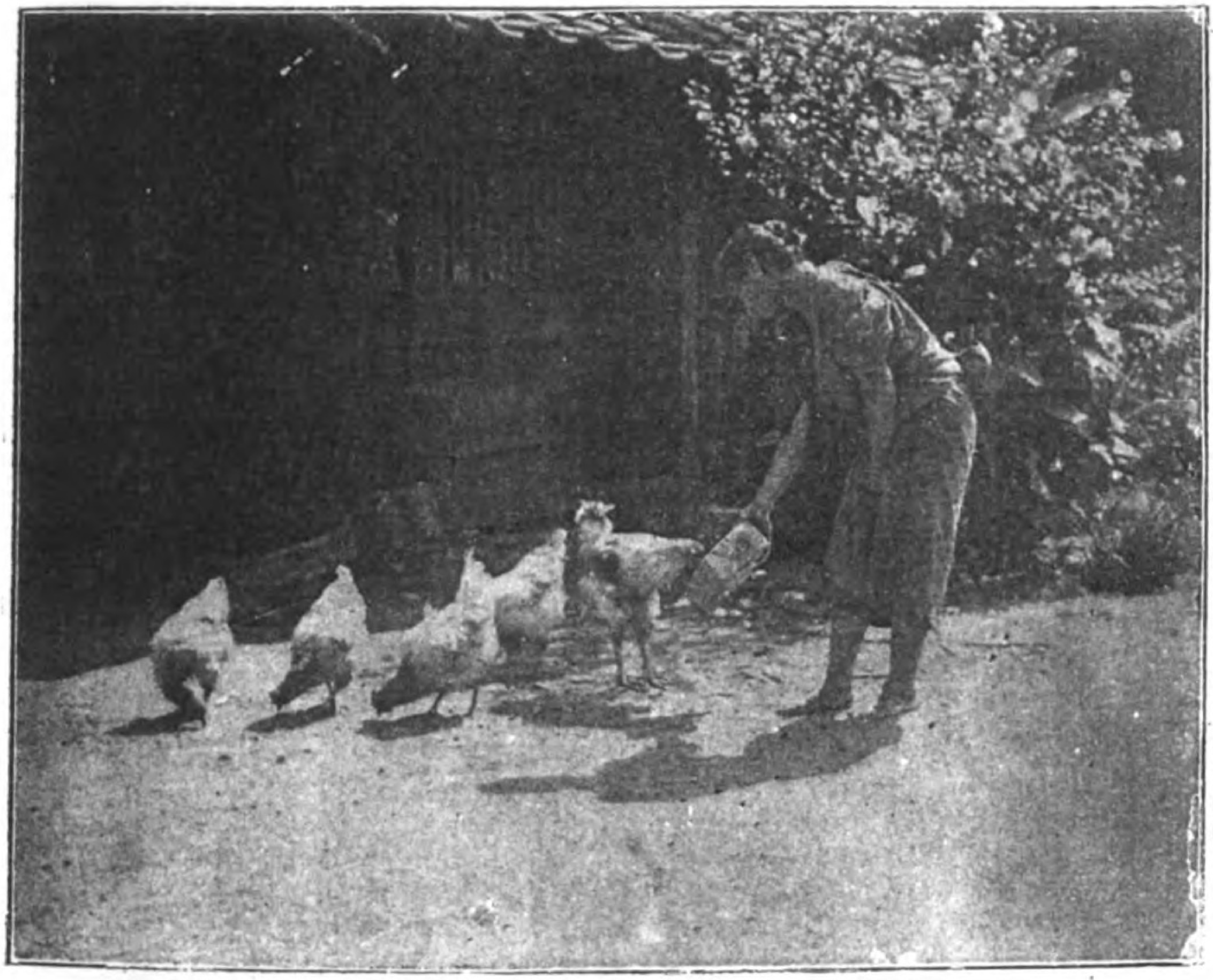
見るも夢、覺むるも夢、悲觀も一時、樂觀も一時、私はふたゝび東都の人となりました。九月中旬の大空は碧瑠璃と澄んだ朝まだき、白地モスリンの長い袂を初秋の風にまかせて、車にのりうつらうとして、思はずホロリとしましたの、何の涙でしたらう、見返れば柴の扉に凭る妹の紅のリボンや、行途の蛛のゐに露がキラ／＼光つてゐる。

まぶしい朝日を水色のパラソルに深く避けて、半里がほどの小松原をゆられ／＼……高く結んだオレンヂ色の帶が美しう輝いてゐました。

活氣にみち／＼た九月の本郷通り、眞新しい角帽やツーラインの人達が袖するばかり濶歩して、美しくかざり立てられた飾窓などをながめながら、いかにもうれしげに若いほゝ笑みをかはして居ります。私はひとり目を伏せてその中を行きました。

脊の高い人の袴姿は……なんて笑はれたから、もうよさうと思つたけれど、大きな帶揚で緋襦子の八寸巾をしよひ歩くのもつらいのです。けふからまた黴くさい葡萄色のを引ずり出してはいた。會では先生はじめ皆樣が、血色がよくなつたよくなつたつて云つて下すつた。色の黒くなつたのもかう云へば體裁がいゝとほほ笑まれた。

久しぶりなので流石にうれしくて、一々皆樣に御挨拶がいそがしかつた。何誰だか後から肩をおさへてリボンの曲りを直して下すつた。窓から身をのり出して、柘榴の紅や桃色の百日紅や、美味しさうな無果花をも



もみぢはの降かへしてし我宿に
道も惑はす冬にきにけり
（土御門院

のめづらしう見下しました。

休暇前に毎朝〳〵行き合ふた女學生とまた逢ひはじめた。A様に似た大學生はもう卒業でもしたとみえて一度もみかけない。

朝な〳〵八時頃の本郷通りにきたら、まるで學生の中にもまれて歩くやうなものです。向陵健兒はツンツルテンの袴に足駄ばき、腰に手ぬぐひぶら下げたところが一番よく似合つてるのですね。たまに制服つけてる人があつても、見すぼらしくつて妙なのね。道路の工事中とて自働車の油とケレウーソートを一しよにしたやうな匂ひが痛いほど鼻にしみてたまらない。

ある日午後から臨時のおやすみ。これ幸ひとインキ壺ふり〳〵、日比谷の圖書館へ出かけました。

カード箱の前に立つて、操る時のかすかな誇りと心のときめきよ。シーンと靜まりかへつた天井の高い明るい室に入ると、私ははじめて身も心もくつろいで、うれしく椅子に身を投げかけた。

けれどいつものやうに無邪氣な智識欲の目をさらし

て他念なく讀みふけることは、どうしても出來ませんでした。いつか額に手をくんで、孤獨のさびしさ‥‥我乍ら矛盾の多い自分の性格をおもつた、さま〲にさまよふた心も、もとのすみかにかへらうとして居ます。とめて下さいますな、母からうけた身體は母のために捧げつくさうと決心しました。かつては放浪生活の空想美に憧れたこともあつたものを‥‥、やつぱり弱い子でしたわね。母樣から離れつくすことは出來ないのですよ。まつらんかげの面影にみゆ。母樣、母樣、私一生お傍にゐるわ。ネ、ネ、あゝ親子は一世だ。姉妹は他人のはじまり・果敢ないんですもの。母樣を大切にしませう。妹にもやさしくしてやりませう。やがて夢見ん乙女とならば、黒い美し瑠璃色眸に、どんな人の影がうつることか。あゝいつまでも〲みんな一緒で暮したいわ。母樣におべんとうこしらへて頂いて、それを振つて出かけたいわ。朝な夕な窓に立つても柱に凭つても、日毎につのるこのおもひ。いつそいつそかへつて了ひませうか。夜毎の枕に浪音高く、白



み山田のおくての稻を刈つみて
守る庵に幾よへぬらん　（讀人不知）



から衣長き夜すから打聲に
我さへねても明しつるかな　（資綱）

露、愁風、わびしき松かげの家よ。私は錦風の都門に入つて、多くの人の中にとりかこまれてゐながら、これほどさびしいのに……留守守る夢やいかならむ。

讀みかけの書物はそつちのけに、まん中の卓上にある婦人雜誌を片ぱしから取つてみた。家庭の平和と幸福、なんて云ふ字が妙に胸をついて、母なき興樂はたのしからず……なほ悲しくなつた。母樣！　禮ちやんとさけびたい！　目にはいつか熱い泪が一ぱいたまつてゐた。立ち上つて人氣のない婦人室を歩きました。道に面した窓に凭つて、袂の先をかみしめました。

肌寒い夕風が黑くなつた窓掛のふさを吹いてふらふらと私の肩にまつはりかけるのが、何ものかに手をのばされたやうな氣がしてぎよつとした。

四時を打ち出した。ふと眼を上げてみたら、もう電氣がついてゐる。

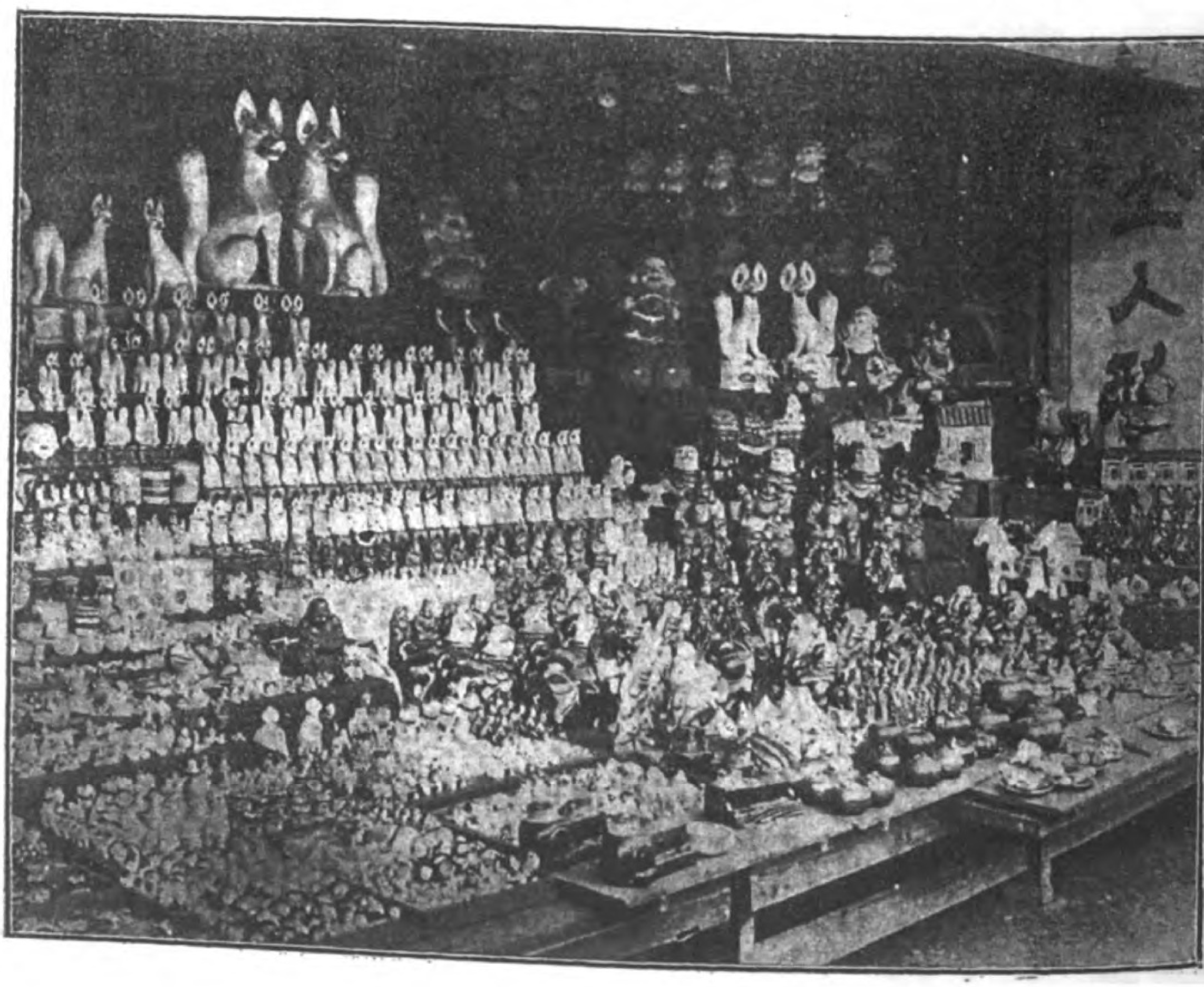
かへらなければならないだらうか、これが母樣の家へ歸るのだつたらどんなにうれしいだらう、優しくむかへて下さる母樣がゐらつしやれば。

東京へ出たのは何のため、みんな自分から望んでかうなつたんぢやないか。意氣地のない、今更こんなこと誰にも云へはしないわ。云つたつてほんとにしやしまい。いつも『もの云はぬ姉樣がさびしい』つて案じてくれる香津樣にも、こんな事は云へやしないわ。すすり上げると、鼻がつまつて息がくるしい。

香津樣、私はうれしいと思つてゐます、感謝してゐます。けれどそれをさうとあらはし得ないのですよ。さぞ冷淡な女とおもつてゐらつしやるでせうね。

「頬に寒き泪傳ふに言葉のみ、花やく人を忘れたまふな」私は私は香津樣の胸に顏おしつけて泣いてみたい。香津樣、可愛き人よ、いつまでも〳〵いまのまゝに、美なれ、純なれ。

厚い本を抱へたきれいな束髮の人が二人はいつてゐらした。私ははればつたい目がきまりが惡かつた。でもどうしても〳〵泣けて〳〵しやうがないんですもの。わざと鉛筆けづるふりしたり、卓の上にうつぶしてハンケチを顏におしあてた。てん〳〵とにじんで、香



白かねもこがねも玉も何せんに
増れる寳子にしかめやも　（憶良）

水の匂ひが眼にしみ舌に苦かつた。

ノート手にもつたまゝいそがはしくドアを出て行く女の紫がゝつた着物や、長い袂の燃えるやうな紅の襦袢の袖が目に立つた。こちらへは後を見せた撫肩の一人のふつくりした丸髷とかつかうよく結んだ帯の生きて飛び出しさうな蝶の刺繡とを熱い涙の中からぢつとみつめた。

いつそ夜になつてからかへらうか。さうだ〳〵夕方のごた〳〵を見るのがイヤだ。急にお腹が空いて來たわ。食べて來ませう。赤いジヤミをぬつたパンと、あたゝかい牛乳の味とをおもひ乍ら、腰をあげると、大粒な雨がパラパラと窓にあたつた。降られては困る。仕方がない、手あらく毛襦子の包みを引よせると、がらんとひどい音立てゝ筆入れが床におちた。

木の葉ちる空は時雨て都たにものゝ淋しき冬はきにけり（契）



風さへ砂塵をまいて、ポツン〳〵と冷たいのが頰にみだれる。私は洋傘をひくゝかついで電車に飛びのつた。腰辨街道の行き來はしげかつた。身うごきも出來ないやうな車中にもまれながら、やつぱり〳〵泣きたかつた。

△

土曜の夕べ、香津様をお訪ねして、九時過ぎにかへりました。電車の窓からみた帝國劇場の花やかさや、日比谷の夜は紫に輝いてゐました。お濠の水にチラチラと灯のうつるのは、丁度湖水の流燈のやうだとおもつた。

大きな黒地の矢飛白をきて、お袴とつた香津様の帯附姿は、ひとしほ可愛らしう御座いました。ぱつと花

瓦斯がつく。卓によつて、サイダを飲みながら、栗をむいては食べた。二人ともお話にみが入つて、ナイフをすべらして指をきずつけた。

香津様も花やかで淋しい人だとおもつた。妬ましいほど美しく可愛き人である。

庭にはまだ花の咲かないコスモスがゆらめいてゐた。

△

雨上りの朗かな朝である。生垣の雫にはきら〳〵と朝日が映じてゐる。けふもエスして日比谷へ行つた。お裁縫の包み抱へて、袂にインキ壺しのばせて・・・。



花瓣ほころびかゝろ袂にはまた秋風もうれしかりけり　（千濱）

ふと私の前を二年生ぐらゐの、前髪つめたお下げにして、元祿袖に裾高な紫袴、可愛いお茶の水が二人行く。縞甲斐絹の洋傘高くかざして、キユツ〳〵とふむ足なみの正しさ。學校へもつて行つて休み時間に私へとレース糸の手さげ袋をあんでゐてくれると云ふ妹のことが、思ひ出されてたまらなくなつた。妹の好きなビスケットでも送つてやらうかしら。

帝都も秋は寂しいのねえ。秋だ！　秋だ！　走る電車のガラス窓をもる、日光もよはいけれど、晴れた空に綿雲のたゞずまひ、青々した芝生、高い石垣、光る水、松のみどり、故郷の草の匂ひがするやうで、私はなつかしさに立ち上つてなが

めました。

充實した心を抱いて圖書館の石段を上る。トンとドアをおし放すと、先來の一人が神經質的の眼をあげた。二十四五の細そりした品のいゝ女である。

今日は本を讀みに來たんぢやなくつて、原稿を書きに來たんだから、インキをひたした筆をねぶり〳〵：：十二時までに一枚半しか書けなかつた、おべんとうのお菜は牛の煮たので御飯は三分の一ほどその汁にそまつてゐた。

夏目さんの「野分」を讀んだ。やはらかい秋の日に半身を照らされて、ぽつとのぼせた頰を上げると、目にはかすかな泪が浮でゐた。高柳樣は一人坊ち！　私もひとりぼつち、まつたくこの通りよ。やつぱりねやつぱり一人ぢや不愉快だけれど、自分から人の中に出て行くことは出來ないの。高柳樣にもお故鄉にお母樣がゐらつしやるのね。うちの藁屋根もくづれかゝつてゐる。垣根には菊もあるし、鷄もゐる。さうして私もさびしさにたまらなくなると、きつと母樣へ手紙を書き始めますの。卷紙を引さいてはかみ捨て了ふところも似てゐる。いつか身は秋晴の上野公園にゐて、そこには黑木綿の紋附羽織に小倉の袴、ひら〳〵と梢をはなれる病葉を浴びて、ごほんと咳をして高柳學士の姿がみえるやうにおもはれた。

「高柳さん」

「はい」

「世の中は苦しいものですよ」

「苦しいです」

「知つてますか」と道也先生は淋しげに笑つた。

「知つてるつもりですけれど、いつまでもかう苦しくつちや‥‥」

「やり切れませんか、あなたには兩親がお有か」

「母だけ田舍にゐます」

「おつかさんだけ？」

「お母樣でもあれば結構だ」

「中々結構でないのですから。早くどうかしてやらなければもう年を取つてますから。私が卒業したら、ど

うか出來るだらうと思つたのですが――」
大學の卒業生でさへさうなんだもの、私なんぞがいくらあせつたつて、焦れたつて‥‥何にも出來ないのも仕方がない。あゝ苦しいさびしい世の中だ。二十に滿たぬ乙女にまで、こんなおもひをさせるのですよ。大自然の壓迫につかれはてゝ悄然とした姿ながら、私にはしんの食み出した前髪で黑くなつた日和下駄をカラカラさせ、なりにもふりにもかまはないなんてことは出來ないんですもの。素顏素足で道を行くことが出來ないんですもの。

　かつては不如歸や想夫憐にそゝいだ淚を、いまは生活難の一靑年のために‥‥。つくることなき觀樂世界を讃美した頃の生命は、どこでうばはれて了つたのでせう、やはらかな美しい感情のこはゞつて行くにつれ、文も荒まう、冷かにもなりませう。冷めたる私は人にそむいてひとり泣きますわ。この頃では滅多に手紙を書く友もありません。

　さびしいなんて云ひますと、本能に促されて悲哀を感ずるつて‥‥あゝ女と生れた身がつく〴〵淺ましう御座います。

　自分の責任と云ふものも眞目面に考へてみ、母樣も妹もたしかに私が引受けました。係累をのがれやうなどゝ夢にも思ふてはすみませぬ。

　來年は亡父樣の御法事だ。私がして上げたらよろこんで下さいませう。おんいつくしみもおんにくしみも深かつた子で御座いましたわね。

　御存命中とはまるでちがつた女となつて、墓前に立つ時、私の感慨は無量で御座います。御安心下さいまし。母樣のおん身はわすれません。

　また高柳さんをくり返した。

「たよる所がなければ親のところへにげ歸れと云ふ話もある。その親があれば始めからこんなにはならなかつたらう。七つの時おやぢは何處かへ行つたなり歸つて來ない。友達はそれから自分と遊ばなくなつた。母にきくと、おとつさんは今にかへる〳〵と云つた。母はかへらぬ父をかへると云つてだましたのである。そ

好評なる婦人必讀書

五千部限り特價提供

◎文學博士 芳賀矢一 ◎松浦政泰 共著
◎文學博士 關根正直 ◎弘田由己子
◎文學士 鹽井正男 ◎長谷川濱子

婦人美譚

上卷出來 特價金壹圓貳拾錢
下卷近刊 定價金壹圓五拾錢 郵税共各金拾貳錢

上下三千載、東西一萬里、本邦は神代より現代及朝鮮に及び、支那は勿論西洋各國の古今を通じて婦人と云ふ婦人の逸話美譚を一切網羅し而も極めて平易に又極めて趣味ある現代風の言文一致體に書砕きたるもの。佳人才媛の美、貞女烈婦の壯、良妻賢母の賓、俠女勇婦の奇、紙面は燦爛として花薫じ月輝く、各家庭又は各學校に備へて子女の教育に資せずや。

實踐女學校長 下田歌子先生著

■三體 女子消息文 全

定價上製金壹圓 特製金壹圓貳拾錢 郵税各金拾貳錢

日本女子大學教授 手塚かね子先生著

家庭の友 西洋料理法

中判全一冊 定價金壹圓 郵税金拾貳錢

本書は實地の經驗と一年餘歐米の料理界を視察して新たに稿を起されし唯一の料理書にして料理の種類多きと日本の家庭に容易に行はるゝ様材料を選びたるは著者の尤も意を用ゐたる處なり。

日本女子大學教授 篠木幸子先生著

年中行事 家庭儀式料理

菊判全一冊 定價金壹圓 郵税金八錢

本書は著者の深き學識と實地教授の經驗とを基礎として季節により現代行はるゝ儀式料理の獻立及材料の撰擇に至るまで一々論說し直ちに應用し得らるゝ様詳述しあれば是非家庭に備ふべき良書なり

鳩山春子夫人著

■婦人の修養 全

定價金壹圓貳拾錢 郵税金拾二錢

●東京 博文館 本町●
振替口座東京二四〇番

⦿見よ!!!若き男女の必讀書出づ!!!

第三版

最新美人法

第一 白色法 色白くなるつけ薬飲み薬等實驗有効の方法十餘種を分りやすく詳説す外に薬品等を用ゐぬ簡短の良法數種あり

第二 美髪法 髪の毛を美しく柔かにツヤをよく長くする十餘種の方法と縮れ毛癖毛薄毛赤毛白毛等を治す良法其他種々詳述す

第三 美顔法 顔を洗ふ最良の方法眼口唇等の注意油顔赤顔青顔等を治する方法シワのよらぬ法歯を白くする方法等を詳記せり

第四 治療法 やせる法こえる法鼻高くする法聲をよくする法イボあざワキガひぜん田蟲ナマズ其他秘密病の必治法を記述せり

第五 養生法 根本的美人となる平生の養生法食物と美人との關係婦人病と顔色との關係其他睡眠運動の注意等を面白く記せり

第六 化粧法 化粧品の撰び方最新の化粧法鼻高く見せる法目を大きく又は小さく見せる法唇を薄く又は厚く見せる法其他色々

第七 服装法 衣服の色合や縞柄の見分け法衣服裁縫の注意より着物の着方帯のしめ方に至るまで皆一冊の中に分りよく記述す

●學理實驗上必ず有効なるを紹介す

●定價送料共金廿七錢振替廿八錢切手三十錢

最近刊

結婚前後 女王手箱

●目次●夫又は妻を選ぶ注意●貞操と學問●血統の善惡●近親結婚●自由結婚●無理結婚●早婚の弊害●晩婚の弊害●夫婦年齢の差●美人ならぬ妻如何●妻の學問の利害●夫婦の相性●夫婦将来の不和を期する方法●如何なる結婚は最幸福なりや●結婚の習慣●法律と結婚●媒妁●見合の方法●結婚の贈答●結婚と衣裳●結婚式の順序●結婚後の心得●結婚届●夫婦身體上の差異●結婚後の衛生上の注意十二件●結婚後●妻の衛生上の注意十五件●月經の時の注意其他●結婚面白し●妻子を持つ月のくり方●姙娠せし事を如何にして知るか●姙娠中の心得●姙娠中の惡食物●姙娠中各力の變化●出産してたる時の子の大きさ●出産の日を知する法●子を生む時の注意●如何せば安産するか●生れたる子の取扱法●授乳の注意●出産届●子宮病の話●夫婦の圓満を害する種々の病氣の原因及療法●ある若き女のザンゲ談●出産失敗談●ある女の日記等皆面白し

右外目次數十項皆青年男女必讀の好文字委細本書に就て見よ

●本書は有益にして且甚面白し

●定價送料共金卅四錢振替卅五錢切手卅八錢

發行所 東京神田錦町二ノ三 振替東京一六一八番 學友社書店

[illegible]

は歐米各國にて進化の妙工を奪ふの奇効ありとの賞賛好評を博したる秘密薬を當館主が醫科大學醫院在職中深奥なる學理と老練なる技術とを以て専門的に多年苦心研究の後其有効成分を檢明し生毛に關する諸說を參考し有力薬を配合したる世界無比の學理的最良薬なれば其効能の非凡確實なる本世間に有觸れたる技術と學理に暗き輩が山師的に無責任の廣告を爲して販賣する贋物品の比に非らず是れば普通に醫師の處方する亮落丁幾、シゾルチン、サリシール酸昇汞等の在來の生毛劑や粗惡の賣薬にて効なきとて落膽せず是非本劑を試みよ頭髪、はへぎは、まゆげ、ひげ其他の薄きを濃くしあるべき所に毛なきを生じ禿頭病ヤケド、デキモノ跡の禿に生毛せしむる事請合藥價送料共一劑八十錢二劑一圓三十錢郵券代用二割増の事

●●●●●取次所ハ前月ノ廣告ニアリ●●●●

らい病

●醫師は癩病者を診察せば届出る規則なれど藥劑師には其規則無ければ決して他へ知れることなし安心服用あれ

ナノサール 一ヶ月分 貳圓

複方ナノサール 一ヶ月分 參圓

此らい療藥は有名なる癩病治療藥を化學的の方法にて分析し當館主が醫科大學在職中研究したる成績に基へ配劑したる有力薬なれば一度其効驗の確實なることを實驗せらるべし古來癩病は不治の病と稱し今日と雖も之を根治せしむるは難事なれども其病勢の甚しからざる中に本劑を四ヶ月間服用するか或は病勢甚しく進みたる人にても繼續服用すれば病原菌を脱力死滅せしめ漸次輕快に赴き一生癩貌を免れ得る事は確實なり本劑は安價に不幸なる病者を救護せんとする主趣に基き發賣する者にして無効なる藥品に非常なる高價を貪り大言を吐て其効能の著大なるらしく見せかけ不幸なる病者を眩惑せんとする營利主義の賣藥に非ず

三河國碧海郡刈谷町

本舗 醫科大學卒業藥劑士 從七位勲六等 中島鑑之丞鑑製

電話 刈谷參拾貳番

振替口座東京貳參壹壹

女(わの三)

新版

小說 浪子の家

[illegible]虎男君新著・齋藤松洲先生裝畫・製本出來

本書著者は不知歸の事實探査に數年間苦心の末、近頃この種の消息通に會し得て筆を起したのが、この「浪子の家」である。本書は浪さんが死後の家庭を書いたと同時に、その談話中に浪さんが在世中の事實を語らせてある。

三五版懷中持全壹冊美本正價金五拾錢送料不要

通俗衛生叢書

▲文章は悉く通俗にして讀み易く分り易し・何れの家庭にも常備せられて最も有益なる衛生書▼

通俗 食餌療法

糸左近先生 北川正惇先生 共著價六拾錢 外に送料六錢

家庭衛生 健康百問

糸左近先生著 十月新刷發賣 正價金卅五錢 外に送料四錢

何うすれば長命できるか

糸左近先生著 和裝仕立美本 增訂六版新刷 正價金五拾錢 外に送料六錢

訂正 無藥療法

糸左近先生著 訂正五版新刷 正價金六拾錢 外に送料六錢

衛生註釋 百人一首

附錄產婦育兒心得 糸先生著 正價金廿五錢 外に送料四錢

▲前記の衛生書全部（五冊）取纏め御注文の方は特別割引金二圓（小包送料申受けず）にて送本す▼

新版

現行法令 時効便覧

貴族院議員法學士子爵松平親信氏閲 萬書堂編纂

我國現行の諸法令諸規則中にて極めて大切なる時効、時期或は年齢の制限、等を何人にも分り易、普通の便覧として編纂せり。故に法治國民として自己の身體、生命、財産、名譽を安全に保たんとする人々の必携なり。

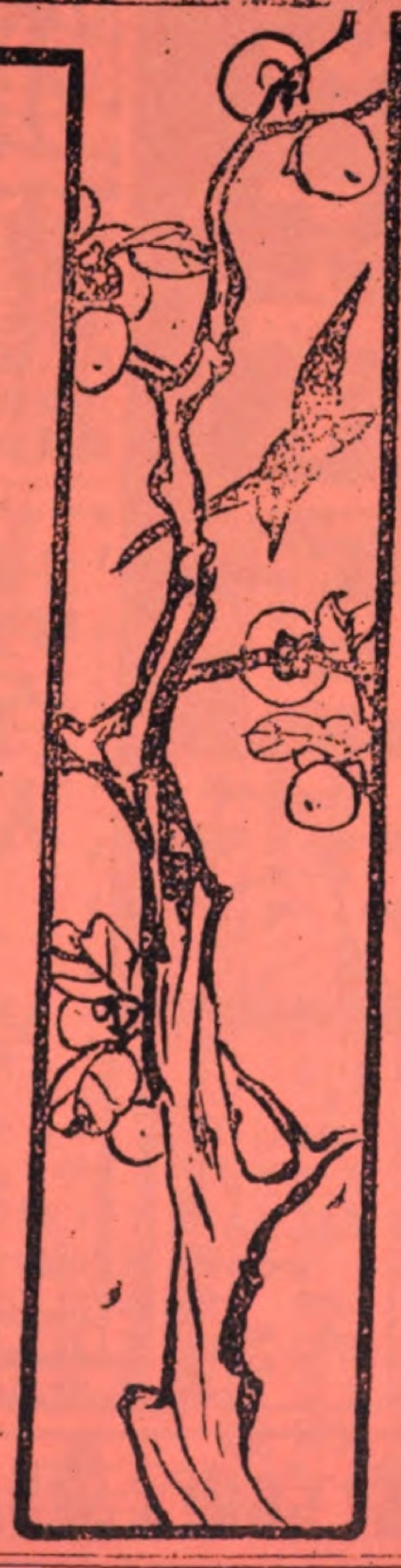
三五版懷中持美本五千部限特價拾五錢送料四錢

女（めの五）

發賣元 東京向島新小梅町 振替八九一番 萬書堂 東京神田表神保町 振替二七〇番 東京堂

第拾七卷……第拾五號

文藝倶樂部



燈火可親は飾り、古めかしき口上となりしも、一年中にて最も心地好き頃は、十一月號を出だす時なるべし。本誌は殊に其の編輯に留意し、益々讀者をして快からしめんと勗む。先づ、卷頭に近く賞演さるべき新作悲劇「**野火**」を收む。是れ**江見水陰**氏の心血を灑ぎし傑作。美人あり、勇士あり、讀者は其の面白さに、恍然自失さるべし。次に**山岸荷葉**氏作長篇小說「**夜汽車**」を掲ぐ。艷麗流暢なる氏の筆致は、必ずや讀者を魅せずんば已まず。第三に**高階柳陰**氏譯の「**浮燈臺**」てふ小說を公けにす。是れ**巖谷小波**氏の嚴密たる校閲を經たるもの、其の面白きは卷を措くに遑あらざらん。第四に花柳小說の一旗幟を飜へす**田村西男**氏の「**坊主**」を載す。花明柳闇の光景、目に睹る如けむ、また小說界の珍たらむ。**新講談**は**桃川如燕**師が勞して、師得意の「**松平外記**」を口演せしめて、愈々讀者の好評を博さん。偶人、**活社會**欄、其の他の各は、津々たる趣味と酌めども盡きぬ實益とにて字内に冠絶せん。愛讀を祈る。

十一月一日發行

菊判紙數三百二十頁口繪石版寫眞版 山澤版 定價廿五錢 郵稅二錢五厘

東京本町 **博文館**

(四〇七)

ぬりもの
美術蒔絵物
御陳列縦覧御随意に
東京日本橋通室町
木屋漆器店
電話本局 長 九百九十七番 千七百拾番

女（ぬの八）

天下の
婦人必ず讀め
月やくの滞り又は不順は何うすればよいか

月やくの滞るのには種々の原因がありますが、兎に角婦人に取つては、甚だ心配な事であります何うしよう何うしよう、と迷ふて居る中に愈々重くなつて、愈々困難になり、危險が加はり遂に之れが基となつて生命に關する樣な重態に陷る例が尠くありません、故に月經の滞り又は不順の人は此際一刻の猶豫もなくひみつ丸を服用なさい、斯道大醫直接の方劑を仰ぐと同じ効能があつて確實に流下しますが衛生上には何の害もなく却て機關を强壯にする秘藥であります、郵券參錢添へ申込あれば詳細知らす

藥價 ●一劑八十錢●二劑一圓五十錢 ●三劑二圓●別製參圓

▲送料八錢●密封送附す

發賣元 東京市京橋電話局横 笹山積愛堂藥房

△木の葉の紅葉する譯▽

植物の葉は、其の細胞中に、葉緑粒といふものがあつて緑色を呈するのである。然るに秋冷漸く加はる頃となれば、植物の葉は或は黄色となり、或は褐色となり或は紅色となる。そして紅色となるものは先づ黄色となり、次に紅色となる。其の理由は秋は温度が下り、光線は減く、爲めに植物の澱粉が糖分に變化し、それが葉緑色を分解し、並に新たに化學上アントチアンと呼ぶ紅色素を生ずるに至る。又一方では葉の中に存する單寧が此のアントチアンを助けるから、此の紅色素は益々多量に生ずる。斯くて今まで滴る如き深緑を呈せし葉は、忽ちにして、燃ゆるが如き、深紅の葉と化し去るのである。

けれど木の葉が紅葉に變ずるのは、左の如き條件を具備せば何れの時如何なる所にても完全に行はれる。△細胞液内に單寧の存すると多量に糖分が存在すること△低溫度に曝さるゝと△日光を充分に受くると

試みに單寧を含有する植物の葉を、冷たい函内にて、日光を充分に當て、糖液中に葉柄を挿して置く時は、夏日にても尙ほ能く數日中に紅葉せしめる事が出來る

△木の葉の落つる譯▽

植物には常緑の植物と落葉の植物の二種ある。常緑とは老葉のみ落葉して新葉は越年するもの、落葉とは毎年悉く落葉するものである。此の二種とも落葉する時季は多くは中秋より晩秋へかけてゞある。

桐葉秋を告ぐと云つて初秋落葉するものあれども、多くは中秋以後に落葉する其の落葉するわけは、植物の生活の充分な間は、葉と莖の組織が一致してゐるけれども、氣候が變じて溫度が下る時は、莖と葉とは營養の上に、相違を來たし、相共に連絡して生存することが出來なくなり、遂に落葉するのである。

趣味ある 家庭談話會

加納子爵夫人



▲毎土曜日に開會

わたくしどもではずつと以前から毎土曜のばんに家族の談話會を催してをりますが、いつも午後七時から始めまして、せがれが先づ開會の辭をのべ、それから一同代る〲一寸一くさりづゝのお談話をいたすのでございます。この折には書生は勿論、御飯焚までかならず口を開いて、一週間内の出來事とか感想とか、何かゝそれ相應におもひ付たことを述べ、終りに讃美歌を合唱して閉會するのでございます。殊更に演壇なぞ設けますと話す者もオックーになりますから、皆食堂のテーブルを圍みまして自分の番になると一寸椅子から立つて述べると云ふ風にいたしてをります。



▲下婢も決して迷惑がらぬ

立はたらき專門の下婢たちに假令五分間でも主人の前に立つて話せと申すのはずゐぶん無理の注文のやうですが、此方の引出しやうでそれを迷惑がりもせず相應にまとまつたことを申すものでございます。それに宅へ參るのは大抵普通けういくのある者ですから、こゝろの修養や智しきの交換に趣味をもつてこの會を

大層怡んで居ります。嫁いりする下婢が暇をとる折の送辭とか、新参の下婢を主人側へ紹介する挨拶なぞもこの土曜日の會に持出すのでございます。

▲興味ある下婢の感話

下婢達もなか〳〵趣味のある話しをいたします。あの鉢前や井戸の內側なぞに生る虎耳草は、絞り汁が氣つけになり、又葉の綺麗なのは一面へ温飩粉をつけて揚物に爲ますと、一寸風味があつて色どりにもなりますが、格別見榮えもせぬこんな草も人のちようはうになるのだから況して人間はたにんのために良く働かなければならぬと云ふ感話も出ますし、雛まつりやお月見のことについてある雜誌にこんな事が出て居たが、わたくしも同感であるとか、先づこんな問題でも五分間のお話が出來ますが、一體にかあいゝ眞情がよく現はれてわたくしどもゝ嬉しく感ずるのでございます。



おみきは奉行の子でありますー

▲讀書と談話の連絡

伜は十六七の頃から妹達に讀ませる雜誌や書物は自分が一應目を通しました。唯今は妹達もみな緣付ましたが、矢張書生や下婢達の讀物をよく注意して居ります。健全の內に少し不健全の分子が交つて居る雜誌なぞは、その不健全な記事もかう解釋すればこゝろの修養のたすけになると申すことをよく說き聞かせて居ります。家族の本好が下婢にまで染みこみまして時に依ると「先達若樣から頂いたこの御本を讀みまして實に感心いたしましたから奥樣も御覽遊ばせ」なぞと申して私より先に目を通して居ることもある位ですが、本を見る爲にお尻が重くなるやうなことは決してございません、却つて忠實に働く精神を養はれて參ります。

そして讀書に依て感じたことを談話會に持出し、その感話について伜が道話をいたすと云ふ風で始終連絡を取つて居ります。

▲外國人に家庭を見せる

外國人が日本の家庭を悉しく見る機會は却々難しいものと見えまして時々知己の外國人がその友人に私共の家庭を見せてくれと賴んで參ります。が、眞面目に研究する目的でお出の方なら私共は少しも拒ます、日本の華族と申すのは名のみで至つて質素の生活ではありますが御參考になるなら御遠慮なく御覽下さいと申して臺所の隅から戸棚の中まで悉皆開放して見せますので先方は非常によろこびます。そして序に赤の御飯に七菜ぐらゐのざつとした献立をいたして（尤も別に洋食の二三種は用意して置き）日本では誕生日その他の祝ひ日にはこんな赤の御飯を焚くことなぞを話し乍ら、一處に食事いたしますと、家族的の風俗を見ることを珍らしがつて大層まんぞくするのでございます

▲ブライアン來朝の時

いつぞやブライアンさんが來朝されます時に、私方へ一面識なきある御人が突然主人にブライアンさんの出迎に參つてくれと賴みに來られました。そのわけは、この御人が書生時代に外國雜誌でブライアンさん夫人の記事を讀み、深くその人格を慕ひ、是非同家の書生になりたいと、しばしば夫人の許へ手紙を送りましたが返事は薩張來ません、けれども少しも屈しないで毎月



一回づゝ送信して居ましたところ、二年目にやつと夫人から一通の返事が參り、その後何度も贈答をいたしてブライアンさんから左程の熱心なら當方へ來られよと云ふ手紙を貰ひましたので雀躍して出發しましたが僅かの旅費を途中で遣ひ盡し進退窮まつたのを同情ある宿屋の主人より金子と新しい衣服を貰ひ、漸く氏の許に着て忠勤を勵んで居ります內、氏の手許より大學に通はせられて唯今では一廉の地位を得られたと云ふことでございますが、恩人來朝については自分と共に日本で名ある人に出迎へて貰ひたく、かねぐ噂に聞く貴所の御主義を見込んで願ひに出ましたと云はれました。それで主人がブライアン氏にも君にも一面識はないが君と



兄さんこれごらんなさいおもしろい本ですよ!!!

も素より同胞の間柄でその同胞が世話になつたブライアン氏に對しては是非謝意を表さなければならぬと申して直に承知いたしました。

▲親戚との交際は簡單

私共の親類つきあひは至つて簡單なものでございます。せがれが嫁の兩親に對して年始暑寒の訪問を鄭重にいたすのは當然の禮でございますが、私共夫婦と嫁の兩親は年寄同志のことですから元旦の御祝儀などもお互に電話ですませておきますし、娘の緣付先へも儀式立つて參りません。主人など四年ぶりで參つて笑はれるくらゐでございます。併し主人は一月元旦にはまつさきに上野の東照宮へ詣で、それからお墓所の天王寺へ參り、次に淺草の廣德寺へ參詣いたし、二日には參內の禮服の儘で橘の兄の許へ年禮に參ります。この禮式だけはむかしから一年でも缺したことはございません。





日曜日

松平鏡子

濡れた髪の毛撫で上げ乍ら、上草履突掛けて臺所に出る。仄白い湯氣を吹き立てゝ、食欲をそゝる樣な、物の匂ひ。四時半では未だ薄暗く、電氣の光りに勝の横顔が浮いたやう‥‥。

「私、つい寢坊しちやつて‥‥」

「否、私も今起きましたところで御座い升の、何でお遲い事がございませう！？」

勢よげに云つて立ち上つたが、斜に身を曲げて、お釜のふたをすかして見て、

「まあよくふきますこと、少し軟か過ぎた樣でございますねえ、また若樣が、かうお顏をおしかめ遊ばして、そしてあの‥‥勝にも困るなあつて‥‥」

「ホヽヽヽ、その代りね、千いさんが喜こびますよ、乾度‥‥、お禮を云ふかもしれないわ」

長火鉢の灰をふるふと、綠が失くした失くしたつて云つてた留針が出て來る。灰の中へ落としたのが見付かるなんて、どうした運の好い子だらう。こゝへ來たら早速、お芽出度うつて不意云つて、驚かしてやりませうと思つて、しつかり帶の間に狹んでおく。

今朝の味噌汁の實がわかめだつて文句を云つた小弟が散々に兄樣から油を取れたが食べてみてそんなに嫌でもなかつたと見えて、とう〳〵一椀平げて了つた。

桶になみ〳〵水を汲んで、下つて來たお椀やお皿を、音のせぬやう靜かに底へ沈めてゆく。他の物は、重なり重なり落ちてゆくから好いけれど、お椀ばかりは幾何してもぼこ〳〵と浮いて來て、眞實に始末の惡







いつちやあない。だから椀だけ別物にして一番あとで洗つてやる。それも一緒に入れると手にぶつかつて、大びらに動かす事も出來やうないんだもの。で、仕様事なしに一つ宛、入れては洗ひ、入れては洗ふ。これが本式なんだらうけれど、私には面倒なものゝ一つだ。

　鏡子にさせると、お椀のふちを皆缺いて了つて困るつて、母様からよくお小言を頂く。私だつて其樣ことしたかあないけれどだつて仕樣がないんですもの。食器入れの戸棚にいくらかの空席を作つて、ちんまりと片附けたいと思へばこそ、積み重ね重ねて入れて置くのに、ころ〳〵ころ〳〵人の氣も知らないで、ころがり落るくせに……つまりそれは自業自得といふもので、私のちつとも知つたこつちやあないんだわ。

　洗つた物を臺の上へ載つけて拭いてゐると、やう〳〵に御用聞きが來る。釘に懸つた塗板を見て、次々に用を云つてやる。始めの中は、用を云ひつけるのが樂しみで堪らなかつたが、此頃では、斷るのが一つの誇になつた。昨日も今日も何にも取らなかつたと思ふと、嬉しい……いふのも少し變だけれど、大した手功でも立てた樣に鼻が高い。厭に世帶染みたもんだ。十七位でかう老ひ込んで好いものかしら。なんて、笑談ぢやあない、つく〴〵考へさせられる

　でもねえ、朝の事はどうかかうか追つついてゆきますけれど、夕方の時はどうしても母さまのお手を借りねばなりませんの！日曜だけは一人で切り廻すつもりで力味反つて居ながら、私なんか矢つ張駄目。お恥かしいけれど、まつたく意氣地がないんです。

　根氣よく、せつせと拭いた甲斐があつて



板の間の艶が見違へる程よくなつて來た。茶の間へゆく廊下の障子や唐紙なんかゞ、水に映つたやうにさかさまに見えるのを、坐り込んで默つてさすつてた事もありました。銅壺磨きも日課の中に入れては、さして苦痛も感じられぬ。赤銅の艶が美しく、桃色に似て光るのを凝視ると、自分の顔も髪も襟元も、軒先に枝を延した楓まで、くつきりと眸に入る。

水瓶に水汲み入れると、二つの手桶は日當りの好い物置の戸袋へたてかけておく。とん／＼といふ、廊下を走る雑布がけの音ざぶ／＼といふ洗濯の水のひゞき、とだへ／＼に聞えて來る。あゝけさは、臺所が一番早く了つた。

×

「お客様は誰方？え、田中さん？　さう」とばかり庖丁片手に里芋切り乍ら、後振り向けば小妹がうなづく笑貌。

「田中さんならそんなに飛んで歩かなくつてもいゝんだわ、お香の物さへ充分あれば申分なし‥‥」

アクセントがおかしいつて、綠がきやつきやつと笑ひこける。

「不作法な、何です」

天晴れ姉様振つて口では叱つたが、われから失笑を禁じ得られぬ。ぷつと吹き出すと二人とも、果はホヽヽと笑ひくづれた。鏡子の切つた芋は小さすぎて屑芋のやうだの、二つ頬張らなけりや齒糞になつちまふなんて、意地の汚ない事をいふ兄様なんかお話に成らない。ホラ、こんなに好い形容に切つてるのに、文句を云ふなんて我儘が過ぎ升。勝のゝやうな頭も尻もそつくりなのが好いつて、まさか仰有るんでもありますまいねえ‥‥。







大きな鐵鍋には里芋を入れて竈にかける松葉や薪で炊いたものは旨しいの風流だのつて云ふけれど、下手まごつくと、慾得離れて聊か煙つたい。あんなに高い天井が眞黒になつたのも、みんな鏡子と勝の仕業だなんて、ひどい事を仰有るのねえ兄さまは……いつかなんぞ餘計なおせつかいして、あんなにいぶして了つた癖に、目を開けちやあ居られないから、按摩製造所だつて云つて上げたら、惡口いふともうしちやあやらないぞ——とは、少し勝手過ぎやしないでせうか——だつて私、ちつとも頼みやしないんだもの。

七輪には西洋鍋をかけて、即席オムレツ、有り合せの挽肉に玉ねぎを刻んでつかふ。今日は魚屋がおそくつて頼んだものも持つて來てくれないから、一同のお菜もこれと定めた。

花形の丼に、細く切つた澤庵の黄が、丁度花の蕋のやう、こんもりとうづ高くふくらんでゐるので、葩の白いのが半隱れて、一輪をぽとんと散つた茶の花の、それかと見えて美くしい。

このまへ、お客茶椀を出して上げたら、小さすぎて度々お代りするのが面倒臭いとか恥かしいとか仰しやつたから、けふは撰りに撰つて一番大きい、五郎八をつけて上げる。淺黄の色がずんと濃いので、模樣がひどく毒々しく見える。

食臺一つ徴發されたので、こちらは平常より賑やかにすませた。

二階からは案の定お香々のお代り。即座に鼠入ずに用意の豫備兵を出陣させる。もうこの手段をよくしつてゐるから、初めは好いのを出して上げない、二度目の時には味噌漬だの奈良漬だの糠味噌の大根小蕪迄



すつかり召集して御目に見參！

志村さんはねえ、日本人の癖に、お箸が滿足に使へませんのよ。豆なんぞ挾む時の滑稽さ加減と云つたら、パックにさへ無い圖だ。私がわざと黒豆だのぶだう豆だの出すもんだから。

「君、鏡ちやんて意地の惡い子だね」

意地の惡い子は秀逸だ。全く素的だわ。

えゝえゝもう、意地のわるいのとつむじの曲つてるのは、大變な評判なのよ、千里眼より有名なんですとさ、貴郎のお箸のつかへないのとね、つて、思ひ切つて云つて上げたかつたんだけれど……。

夜の御飯が一番旨しいけれど、晝は後片附が樂だつて勝も云つてゐた、これからは、だん〳〵寒くなる一方だし、さうすると汲置きの水はつかへなくなる。銅壺の水もふやさねばならぬのだらうし、湯たんぽをわかす手數も入る。こゝいらは霜が多いから、水汲が容易な事ではない。今から冬が思ひやられる。

×

「何かする事はなくつて？」

紅く夕日の射た臺所の明みに、ひよつこり浮いて出た妹二人！

「もう濟んだの？」

つて訊くと

「えゝ」つて千代子は澄ましたもの。

「水撒きしたつて水ばつかし撥ねかすんだもの、厭になつちやつた」

緑が零し切つて居る。此樣に涼しくなつて水撒きなんて御苦勞樣なことだ。暑中休暇からの習慣で、撒かないと變だと見える。

「別段何にもないわ」

つていふと

「あすこにある枝豆は好いの？　どうせ明日



するんでせうわたくしして上げますわ」

「そんなら邪魔だからあつちの方でして頂戴な」

籠ごとむかふに押やると、元祿袖の腕まくりして坐りこむ。

「前掛がその戸棚の二番目にありますよ、膝を汚さない樣にね」

「出して下さいな」

「わたくしにも……」

世話の燒ける人達つたら。——勝が笑ひ乍ら出して渡す。

七輪にかけたお鍋が頻りに吹くので

「緑ちやん！　あゝ千代さんの方がいゝ、い、だしをとつて下さないな」

「はい」

元氣よく立ち上がつたのは好いけれど、

「これからどうしたらよくつて？」

さしつけられたお鍋をのぞくと……まあ大變だわ千いちやん！　肝腎のお汁の方を捨ちまつて……。

「困るわ、今になつてこんな事されちやあ一體千代子さんは何のつもりなの」つて、散々に當つてやる。

「だつて知らなかつたんですもの」

鹿爪らしくうつむいて、足の先で板の間へ字をかいてゐる。もう五時半だのに……私もう面倒臭くなつちまつた。

いつそぬきにして了はうかしら。お汁なんてなくたつて、今晩の御馳走があるんだもの。母樣にゐらしつて頂だかうか、そして伺がつたら、何と仰しやるであらう？、止しても可いつて云つて下さると嬉しいけれど、萬一……もしも……。

もう蜩も啼かずなつて、朝夕の寒さが感じられる、木の葉も半染まつて了つたし。——秋逝く音か、冬來る囁きか、わたしの胸の底も寂しい！……（完）

覺え書

一年間の失敗

◎皆樣は如何ですか、私は自分ながらあきれる位のそそつかしやで、大概毎日一回位しくじる人間です、とは少しおまけですが、其れで少し氣をつけろ爲にとの考へで帳面へ毎日失敗をつけては時々計算して統計を作りますと幾分づゝ效果を得ます。こゝにはざつとその事件だけを。

◎先づ初めの中は下女も居りましたが、たつた二人で下女なんて不經濟といやに敏腕ぶつて、自分でする事にして取りかゝりました。さて、二人分とは何の位か一寸見當がつかぬ、まづたりるやうにといふつもりで御飯をたきましたが食べても〳〵減りません、丁度暑い時で明日までには惡くなるでせうと心配でした。翌日は朝から旦那樣はじめ冷飯といふ始末、待つてる乞食も參らず仕方ないから庭の隅へ穴を掘つて。今に罰があたるだらうとおそろしうございます。

◎お客が有つて少しのものを出した時、お氣に召すとすぐ、おかはりと、やられて隨分心細うございました決して少ないものは出さぬ事ですよ。

◎從弟が來たので餘程上手なつもりの茶椀蒸しを出した。從弟の曰く「大變結構だ！　お湯を澤山沸かして置いて下さい。なぜつて？　君の所では雞の安賣だと見えるね」とは唖然、此の時は私風邪引いて味が少しもわからなかつたのですもの、否決して辯解ではありませんよ。

◎お客に出したお菓子をしまひ忘れて朝起きて見たら殘らず鼠の齒牙の跡。

◎梅雨の時分でした。戸棚の砂糖、菓子一切蟻あへになつて居ましたには何分後の處分に苦しみました。

◎瓦斯を引いて、なれない間は七輪のやうな氣で鍋などおろして其のまゝ、氣がついてあゝさう〳〵。

◎豆を煮るのをかけて置いて外の事してたら、さあ大變ピチ〳〵いふ、見れば煮えもしないのに底だけ眞黑。新しい鍋の瀬戸を剝がさせてしまひました。

◎土瓶を瓦斯にかけたら底が取れてしまつた。いくら

私だつてこんな事知らない程の馬鹿でもないつもりですが、お客でもあるとすつかり周章てゝ、お湯がぬるくて紅茶が入れられなかつたのでれ、遂にんな事を

◎

又先達なんか、大概の氣の弱はい人ならたしかに氣絶騒ぎのところ、全く私も、火事を出したと、觀念してしまつた。其の時は夢中でしたが、臺所の障子が眞赤でしたの、一番端のゴムに火がついたのでボー〳〵臭い事〳〵。之は何度も動かすため、ゆるんでゐたため。

◎

燈をつける時急に引つぱつたせいか、ホヤがおちて粉微塵、此の時こそ、「お前は何でも早いかはり亂暴だ、少し女らしくしろ」と。我家の擂鉢は此の頃たゝくと妙な音がするやうになつた。これは私が三べんも棚から落したから。

◎

茶滓を捨てるつもりで、急須を落して眞二つ、之れが二度。茶椀、皿まぜて四つ割つた。

◎

障子破りは餘りがさつな様でお恥かしいけど、六へん、勝手のは濡れ手で開閉するため三日位すると、紙がボロ〳〵になつてしまふ。破ぶるのはお定まりの引手から手をすべらして。

◎

栗を賣りに來た。「こんないゝ栗は何處へ行つたつてもないだよ、三升も買つて於いておくんなせい」、私も欲しいし、よいつもり買ひ込んで、早速ゆでた、お歸へり待ち構まへてゐたら、例の從弟も來たので、「今日はよい御馳走しますよ」なんて自慢しながら、食べはじめたら、驚いた〳〵、どれもこれも蟲ばかり、半分はだめ、此のお陰げ様で今に皆から冷かされてゐます。「お孃様上りのお買ひ物は之れだかられ」と。

◎

縁側から水のはいつてゐるバケツを落下して、底をぬいて、又叱かられた。けれど無性したわけではないいふわけ、まけおしみ御無用ですと。

◎

買物して歸へつて、お金の勘定したら、四錢五厘使ひ過ぎてたが、何處で間違つたか、わからすじまひ。誰とやらは、妻君の月末計算の結果に三厘不足を生じた爲め離縁したとか、まさかねエ、私も追ひ出されないやうに氣をつけませう。思掛けなく出來るやり損ひも、澤山ありますけど、多くは不注意と、無性とからですもの。





西洋の日常生活（三）

中村春雨



△食事の時間

米國邊は然うでもないが、歐羅巴――殊に自分の經驗によると英國や獨逸などでは、朝飯と午飯との間の午前十時頃に、日本で云ふお茶時がある。朝のコーヒーとパンと丈では、とてもお腹が持てないので、一寸とした間食をやる習慣になつてゐる。例へば腸詰とか、サンドウイッチとかいふやうなものゝ摘食をやるのである。

學校へ出てゐる學生とか、事務所で働いてゐる事務員なども皆、この間食を紙包にして、ポケットへ忍ばせて置いて、時刻が來るとムシャ〳〵立食をやつて平氣である、次の午食は從つて多少時間が遲れて、午後一時頃になる、午食は一日中で最も御馳走の出るのは勿論で、肉とか、鳥とか、野菜とか、凡て暖い物が並ぶ、ビールや葡萄酒などの飲料も屹度附く。酒のいけない人には炭酸水などを出す、茶やコーヒーの類は、食後の飲料と定つてゐるので、食事中は決して用ゐない事になつてゐる。

又日本では、食事の時には默つてゐるのが禮になつてゐるが、併し西洋の家庭では、ナイフや、フォークを執りながらも、盛んに談笑する、殊に、コーヒーの出る時分になると、皆我を忘れて喋舌り合ふので、午食の後が、一種の談話會となつて了ひ、半時間も一時間も食卓を離れないと云ふ事は珍らしくもない、普通鍵と鍵とで劃られた室々の中で、皆が自分の獨自を守

つて生活してゐるのが、此の食事の時丈は、顔と顔とを並べ合はすのだから、一家團欒の和氣は自づと食卓の周圍に溢れて來るのである。

午食が濟むと、四時頃に又お茶時があつて、それから七時前後が夕食となる、この夕食は冷い肉で簡單に濟ますのが例である、それから、八九時頃には又お茶時がある、一日に六回も七回も食事をするのだから、日本人の考では一寸と奇異な感がするが、一つは、西洋の食物の消化し易い上に、西洋人の立働きが活潑なから早く空腹を感ずるのでもあらうし、殊に夏期などは日が長くて、午後九時頃になつてもまだ暮れ切れないといふ事があるので、自然、彼や是やが、かゝる習慣を作るに至つたものであらう。

この西洋の食卓の周圍のいかにも樂しげに、賑やかであるのと、西洋人の各自の個人生活の飽くまでも秘密主義であるのと、對照して來るとこゝに面白い意味がある、即ち西洋人は何處までも個人本位を守つてゐるから、その一面に社交的な、多人數寄り合つて、打ち解けて談笑したり、遊戯したりする餘裕が出て來るのである、自分の室内では思ふ儘に振舞ふ事が出來、自分の勝手をする自由が十分に保證されてゐるから、一旦、その室を出でて、他人と交る場合には、自ら規律を守り、禮儀を紊さない。又、猥りに自分を作り飾らないで、快濶に無邪氣に行動する事が出來る、それに比べると、日本人は自分一個の自由を妨げられないやうな場所が何處にもない、自分の部屋さへ、自分の秘密を保證してくれないから、勢、多人數に接し、世間に立交る場合にも、兎角、我儘勝手が先に立つて、社交的訓練を受くるの餘裕がない事になるのであらう

△新家庭の組織

西洋人はかく個人本位の生活をしてゐるから、日本の家庭の如く、聟を取つたり、嫁を取つたりして、一家を相續させるといふ事はない、息子や娘が結婚すれば、必ず別に新らしい家を作る事になつてゐる、姑や嫁やの同居から起る日本の家庭の悲劇は、西洋では殆

想する事も出來ないものである。

又云ふまでもない事だが、自分の息子や娘が結婚の相手を捜すのは、當人の自由選擇に一任してあるので當人等は例へば舞踏會の如き社交場裡へ頻に出入してゐる中に、自分の一生を共にする資格のある者を見付けて最初は交際する、だから一人の娘が、三人も四人も、若くはそれ以上の多數の男子を友人に持つ事になる、而して往來する中に、相手の氣象や、學問や、地位財産などを確めた上で、選擇に選擇の結果、最も適當した人と約婚の指環を取交はす事となり、それから一年なり、二年なりの歳月を經過して、始めて公然結婚式を擧げる段取となつてゐる、その間は互ひに操行を謹んで、忌はしい風評を立てられる様な事は決してしない、日本の娘の如く、年頃の男



子の傍に行けば直上氣して、前後不覺になつて了ひ、いろんな間違の生ずるやうな初心の事は西洋の娘には先づないと云つてよい、彼等は幼少時から多數の男子と交際して、握手位な事は平氣でする修養が出來てゐるから、一時の熱に浮かされて終生を誤るといふやうな失錯はナカナカ仕出かさない、男子は一度、女子の肉體を自由にしたら、それから後は輕蔑したり、玩弄したりする態度を取る様な性癖を持つてゐるものだといふ事を觀破してゐるから、假令、いかなる戀愛の中でも、又已に約婚した後であつても、一向、その邊の用心を怠らない、否、一層謹愼してゐるのである、その一面には、約婚のある娘が、その當の相手以外の男子には、

往々、自分の肉體を自由にさせてゐるといふ奇怪な話もチラ〳〵耳に入るのである。

△持參金の解釋

又、この結婚の資格の中で、財産といふ事がナカナカ重大なるものゝ一つになつてゐる、結婚した以上、別に全く新らしい一家が成立する事になるのだから、その家の基礎をなすのものは即ち財産である、日本では持參金附の嫁を取るなどいふ事は、男子の耻辱のやうに云はれてゐるが西洋では、この持參金の附かない嫁を取る方が、働きのない男子だと輕蔑される、無論その持參金なるものは、男子が貰ふのではなく、妻君の所有財産なのであるが、已に男女が寄合つて、一の新らしい家を形作る以上は、生活の保證が附かなくては前途が甚だ心細い譯だからである、西洋の結婚は一見戀愛中心のやうに受取れるが、而も、その一側面には、斯うした打算的の處があるのを忘れてはならぬ。

この持參金といふ事は上流は勿論であるが、中流、下流も亦ソレ〳〵相當の事をしなくてはならぬ、若い女子が事務所で働いたり、商店で勤めたりして、いろんな苦勞をするのも、三百圓也、五百圓也の、纒つた金を作つて、結婚準備に充てんが爲めである、已に約婚は濟ましても、その準備の出來ないために五年也、十年也の歳月をそのまゝ空過してゐるといふ氣の毒な婦人も少くない、遂には一生、結婚の相手が見附からないで、寂しい老孃の生活を送るといふ者の多數に出て來るのもその理由の一半は玆に存するのである、その點から云へば日本は結婚のし易い國で、或意味では若い婦人に取つて幸福な事だとも云へやう。

△夫婦の間も金錢は別

サテ、西洋で斯くして新家庭が出來上つたとすると新夫婦間の愛情は、無論、日本の見合結婚の新夫婦などよりも、遙かに濃厚で、所謂「蜜月」の季節の長く續くのは當然であらう、乍併、財産が已に夫婦別々の名儀になつてゐる如く金錢上の事は夫婦間にもソレ

ぞれ區劃が附いてゐて、日本のそれの如くダラシ無くない、イヤ金錢上の事許りではない、例へば手紙の如きも、互ひに秘密を犯す事が出來ない、憲法上に所謂「親書の秘密」は夫婦間に於ても嚴密に保たれてゐて、米國の如きは、この一件が離婚訴訟の一理由とさへなつてゐる程である、それから夫婦共、別々に室を持つてゐるのだから、互ひに往來する場合にも、矢張、戸をコツ〳〵叩かなければならない、突然に闖入したりするのは無作法でもあるし、若し亦錠がかゝつてゐれば入らうにも入れないのである、かゝる事から、家庭の紊亂などいふ忌はしい事件も隨分起つて來る、所謂一利一害はこゝにも免れ難いのは事實である。



▲愛情の發表

乍併、夫婦間の愛情を發表するのは客人の前でも毫も會釋する處はない、殊に妻君の母とか、父とかなどが訪問して來た場合などには、その眼前で、抱き合つたり、戯け合つたり、又互に接吻などまでして見せて、二人の愛情の如何に濃かなるかを見せて、老親を安心させる、日本の夫婦間なら舅姑の前では一層謹ましく行儀よくして見せるのを禮儀のやうに思ひ、當然のやうに考へてゐるが西洋では全く反對で、舅姑の方でも夫婦間の愛情のいかにも濃やかなのを見せてくれなければ安心しない、滿足しないといふ風である。

斯の如く、西洋人は一面に露骨を喜ぶといふ習慣がある、天眞爛熳といふ子供らしい心を常に失はないでゐる處がある、從つて日本人の如く、いゝ、むやみに卑下し

たり、謙遜したりして自己を作り飾る事を美事善行と思つてゐない。

だから西洋の母は、自分の娘の寫眞を客人に示して「別嬪でせう?!」と誇りがに云ふ、決して串談でなく、眞面目なのである、それも然う云はれて見ると「別嬪ではない」と思つても、然う直言する事は出來ない、相槌を打つと、母は非常に喜んで、尚滔々と、その娘の學問や、特長や氣質などを褒め立てゝ、大に自畫自讃をやるのである。

△自己推薦

娘や息子の自慢ばかりではない、西洋人は凡て露骨に自己推薦をやる、例へば職業に就かんとする場合などでも、充分に自己の技倆や、經驗や特長などを遠慮會釋する處なく並べ立てゝ、相手をして信任せしめんとする、無論在もせぬ噓を吐いて、直ぐと尻から剝げるやうな馬鹿な眞似はやらぬ代りに、東洋流の「能ある鷹は爪を隱す」と云つた風な、控へ目な、尻込をするやうな事は決してしない、雇主の方でも、そんな事を參酌してはゐない、相手の言を充分信用して、それに依て能否を試すといふ行方になつてゐる。

この自己推薦といふ西洋人の氣風は、室内の裝飾などの上にもよく現はれてゐる、日本では床の間に軸一つ掛けて、一輪挿でも据ゑて置いて、大いに澁がつてゐるといふのを上品な好にしてゐるが、西洋人は此と反對で、何んでも彼でも有り丈けの物は列べ立てゝ見せるといふ行方である、繪畫でも、什器でも、苟も自分の家にあるものは、一つも藏しては置かないで、客間や廊下や、壁や飾棚などに皆飾り付ける、だから佛國のルーヴル宮殿の如きも、一面から云へば繪畫展覽會場の感を與へるのである、中には珍らしい鉢や皿などの類まで、一々裝飾用にしてあるので、下手な陶器屋の店を歩いてるやうな氣をさせる家も見かける、

又骨董陳列所のやうな觀を呈してゐる邸宅も決して少くはない、繪ハガキまでハート形にして壁間を飾つて喜んでゐる者もゐるのである。

だから、日本の中流以上の家に附屬してゐる倉庫のやうなものは西洋には殆んど見ない、商店などは格別だが、普通の邸宅には、その必要が無いのである、家そのものが一面は倉庫の代用となつてゐるのである。

それから又西洋の家の必要な附屬品は樂器である、ピアノの一臺位は、中流以上の家庭には必ず備へ付けてある、これは月賦拂ひの方法で購求する事が出來るから、相當の信用のある者は容易に手に入れ得る事になつてゐる、三味線とか琴とか、生花とかゝ、日本の中流以上の家の娘の身嗜みとして一通り修養して置かねばならぬ習慣になつてゐる如く、ピアノを彈く事、ダンスを演る事等は、西洋の中流以上の家の娘の必ず覺えて居なければならぬ一の資格である殊に婿を探すといふ責任のある身に取つては交際場裡に出入する唯一の武器として、必ず修練して置かねばならぬ必要に迫られてゐると云つてもよいのである、又例令白髪の嫗さんになつた身でも、青春の樂しかりし昔を思ひ出の手すさびに、ピアノの臺に凭れかゝつて、手馴れの鍵盤を叩いてゐるのを見ると、彼等が何時までも氣の若かく、常に生を樂しく生きんとする氣込を賴もしく思はずにはゐられないのである。





冬衣の用意を上手にする妻

女子高等師範講師　高橋岩次郎

女子高等師範學校の講師として專ら實地洗濯法の教授を受持て居られる高橋氏は明治母の會で日本服の洗濯汚點拔等の方法と學理と經驗に照して深切に講話されました左に掲ぐるはその大要でございます。

▲洗濯の方法

洗濯の仕方は乾燥、濕潤、蒸氣、濕潤の內の尋常洗濯等種々ありまして、織方や汚れ方に應じて適當の法を執るのですが、日本服ならば、盥、刷毛引、流し洗などの尋常洗濯だけ巧者に出來れば紺屋の手をかけずとも大抵間に合ます。で先づ全洗らひ物から申上げませう。

▲全洗らひ

垢や汗で內部が汚れる常の單衣類は、裏返して初めに襟、次に袖と順々に汚れた處を、板の上で洗濯劑をつけたブラシで洗ふのです。洗濯ブラシには豚の毛とシユロの毛とありますが木綿物は廉いシユロの方で宜しい。大抵一箇十五錢位です。絹物は麻の毛の張物に用ふる刷毛が宜いのです。若し汚點が表について居れば、ふつて洗はずにブラシへ洗濯劑をつけて表から敲くのです總て汚れた場所を揉んで洗ふと、地が暴れますから、ブラシを用ゐた方が宜しい。

▲絞り方と乾し方

普通全洗ひ物を絞るのに、丈の儘長くねぢつて絞りますが、あれでは始末も悪し萬遍なく水氣が取れませんから、袖疊みにして二つに折り、片端からグル〳〵と巻込むと太細もなく、丈も短かくて誠に絞り良いのです、常の夏物は日光に當つても色や地は大丈夫ですけれども乾す時には裏を外へ出した方が宜しい。糊付も、矢張り袖だゝみにして盥の中の糊を着け乍ら絞る時のやうに巻込み、ざつと皺延し爲て全體を引張るのです。又その儘乾し上げてから霧を吹て皺延しても良いのです。

▲部分洗らひ

部分洗ひ即ちつまみ洗らひは、汚れた部分をつまみ洗ふか又板に載せ、切の下へハンケチか何か白い小切れを敷いて置き、ブラシで洗濯劑を着けて洗ふて何れも洗ひ終れは乾た手拭で敲き取り、その周圍を堅く絞つた濕りたる手拭で押へ乍らぼかすか又は霧も吹て乾た手拭でトン〳〵たゝきぼかし出すのです、現に角つまみ洗ひ爲た周圍が座ぐらぬやうにすれば宜しい。それから泥なぞを落すには、もむと却つて切れへ泥が染みつきますから、切を十字形に前後左右へ引張り、布目の中の泥を表面へ浮き出させて、ブラシで敲くか擦くかするとよく落て了ひます。

▲解洗らひ

第一に織物の强弱を見るのが肝心で、それには一度水をつけて縦と横に引張て見ると、弱いのはぼりぼりとホクチのやうにきれます。凡て綾織類は、丈夫のやうでも洗ふと弱るような物が往々ある。これは綾の凸起したところが自然に擦れて居る爲に、水に入つて綾糸の位置が少し變ると、擦れた糸が拔けるのです又木綿物の中に交りたる絹や、絹織物の中に交りたる木綿糸が弱いのは、木綿の中へ織込む絹は光らせて値の安いために細いのを用ゐ、絹の中へは絹の見えない樣に細い木綿糸を雜るからで何れも夫等が摩擦せられて傷みますのです(俗に拔けると申ます)そこで布地の

強弱に依つて洗方を選むので、厚く強い敷布の類は煮沸か蒸氣洗濯を爲て後、臼で搗く法もありますが、木綿着銘仙、紬類は盥洗、刷毛引洗何れにても宜しく地の寄る薄物は、刷毛引に爲るのです。盥洗ひは洗板を盥の中へ斜めに置き切れを載せ、汚れたる以前の表の方からブラシで輕く擦つて洗ふ刷毛引洗は張手へ掛け引張つて刷毛で洗ひ其儘乾かすのです。ブラシの使ひ方は平織なら縦横に、繻子類は竪ばかりにこするのです。

洗ふ前に染色の強弱を見るのには、水に浸した白い切で布を押へ、ソツと取て見ると水に弱い色だけが白い切につくのでよく分ります。紺は御承知の通り正藍染と藍の下染のとがあります藍が多いのが丈夫ですが、この多少を見分るには、布のほつれへ一寸火を點じ白い陶器又は紙へかざして見ると藍の多いのは濃藍色が陶器へ映じ、少いのは淡藍色が映ります。それで上染などを致ました色の弱いものは色止めを爲てから洗ふので其薬には

タンニン酸と吐酒石を別々に水に溶し先づタンニンへ漬けて洗ふて水洗して後吐酒石の汁へ漬込んで又水洗するのです、又重クローム酸、硫酸鐵其他にも染色の工合に随て適當なる色止劑を使ふことがあります。反物の中に一度色が出てもあとは出ない者があるのは、織る時に糊へ色素を交ぜためすですから、これらは色の出た水を一旦取易て洗ふが宜しい。

序に洗濯劑のことを一寸申上げます。先づ普通の垢なら灰汁か石鹼、ソーダ等を用ゐます。又フノリの中へ温飩粉かフスマを加へ、袋に入れ揉出して用ゐるか袋の儘汚部を擦つても宜しく、色の弱いものや絹物はフノリ、ウドンコ或は豆腐汁等が極適當であります。盥の水は大抵五六升位で反物が泳ぐ位の容量があれは宜しいのです、昔から用ゆる灰汁は却々効のある洗濯劑で、却つて石鹼やソーダより落ちもよし經濟的なものです、先づ四斗樽一杯へ、バケツ二杯の灰を溶したるものは丁度一貫六百目位のソーダに匹敵します。凡て洗濯劑を選ぶには、洗ふ前に先づ布端を洗劑液

に浸して試ろみ、色のはげぬ物を用ふるのが宜しい。

▲張り方の樣々

金巾、キヤラコ、縮緬の類は端縫た布の表を内にして張手へ掛け、刷毛張りに爲るのです。張手が無ければ布を袋ろに縫ひ兩方へ棒をはさみ引張つても宜しい

シンシ張には用ずして兩耳を引出して張てもよろしい

板張は從來のやり方の如く張板を斜めに爲ずに、何か臺を爲て板を平らに置き、布を板の中央に張て片側をよく壓しつけ、片側を引張て布巾を揃へるやうにする

普通布の見當をつけるために一方を板の緣へ張りますが、あれは布幅が片方丈出まして兩方へ揃つて出ませんから成るべく中央へお張りなさい。而してふのりの中へぐしやりと布を入れずに、板へ載せてから板張刷毛で、ふのりを刷き乍ら張りつけるのが宜しい。板張刷毛は大抵一箇二十四錢位のものです。

染色によりますとのりの内へ少しその色の染料を交へて張ることもあります。

湯通しは微溫湯（攝氏四十度）の中へ布を繰り込み暫時にして絞らする板の上で疊み上げる、壓して水氣を取り乾かすのです。

霧吹糊入はフノリを溶しキリ吹で布へ吹かけ一晩疊に付け火熨斗又は湯熨斗を掛ける。

張上た物へ艶を出すには、紙又は布切を心にして布を卷き上に他の切を一枚かぶせ、槌で輕くうつのです又シンシで張らぬ物はこの卷打にして皺を伸すと同時に艶を出す方が宜しい。

艶消は水か湯に布を浸して後、乾すか又は湯氣にかけるのである。

▲汚點拔

位置拔、蒸氣拔、浸漬拔の三種あります先づ普通は汚點拔板の上へ白い切を置き、汚點ある布を其上へ載せ、薬材をつけて、擦らずにブラシか又は箸の如きものにて、別の切れで押つけ、上下の切へ汚點を溶し移すのです。、汚點が取れたら、周圍へ霧を吹き又は濡手

拭で周圍をぼかして手鏝又は其儘干すのです。

汚點汚の藥材を選ぶには最初布の端へ藥を少しつけて見て地色をこはすか否かを見定めるのです。藥劑は過滿合酸加里、酸性亞硫酸曹達、アンモニア、ベンジン油、酒石酸、又は醋酸、其他汚點の性質に依り種々のものを用ゐます。

墨の汚點は油を付けて敲くか、輕く擦つて落ちたらばベンジン又はソーダ汁を付けて清めるのです、其他豆汁或は蛋白質を用ゆることもあります。

インキの汚點は赤インキならアンモニア或は石鹼、硅酸ソーダ等を用ゐ、黑インキにはアンモニア、シウ酸又は酒石酸ハイドロサルフアイト等を用ゐます。

酒の汚點は水かアンモニアの溶汁。又はアルコールを用ゆ。汗汚點にはアンモニアベンジン等。

油の汚點はベンジンが宜しい。

血の汚點は牛乳或は蓚酸、ハイドロサルフアイト、又はアンモニア等。

汚點拔の藥劑はかやうに種々ありますが、何の汚點か分らぬ場合には試驗して見るのです。先づ最初水かアルコールを用ゐて見て落ちなければ、石鹼、ソーダの汁を試み、これが適當しなければ、酒石酸か蓚酸の汁でやつて見る、それでも落ちないものは、過マンガン酸加里、醋酸性亞硫酸曹達、ハイドロサルフアイト等を用ゐて見ると云ふ風にするのですが、汚點の性質に依ては數種の藥を併用して落すことも往々あります。若し藥の加減で地色まで拔けた時は繪具で上繪して地直しすることもあるのです。





燈火のもと

こうばい

△頭の双つある魚

交通不便の山國に生れた女、十六の年にある家へ奉公に行くまで、魚といひては干ものより外、たえて見し事なかりし女あり。一日鯵を煮て惣ざいに添へしに、いぶかしげにうち眺めて、此の魚は頭が一つしら無い、わしらが國で見る魚は、年が年中、ちやんと二つ並んでついてゐるのに…。

△ちまきと納豆

同じ女の、端午の節句にかざり臺のちまきを見て、あれ彼方に納豆があげてある。

△小山内薫を侮辱す

某女學校にて聞えたる變通の人あり。ある時共に電車に乗しに、對ひの側に文士小山内の君ありしを見て、その人いろ〳〵に評せしかば、われ小聲にて、貴女は小山内さんを御存じ？と問へば、えゝ〳〵知つて居るどころですか、兄と極く親しくしてお出でゝしてねよく遊びに被居ては、時々面白いお話をうかがひましてよ。

△珍客にそうめんの茹湯を呑ます

伯父の家にては、夏のうちをいつもむぎ湯つくりては瓶に入れ、井戸の底ふかく冷しおきつゝありしが、一日來客あり、自慢の冷しむぎ湯に白砂糖を加へてすゝめしに、客は一口飲み下すや、是は何だか妙なものだと親しき中とて遠慮もなく云ひすつれば、ナニ、妙な事があるものですか、家ではこれでも自慢ものです、どれ私もお招伴をと、同じく一口





つけて顏をしかめ、ヤ是は……嫁がそうめんの汁と間ちがへたと見える……。

△兩親の亡きをうらやむ

魂祭りのよ、遠近にてむかへ火といふもの焚くに、ある家の子、表を通りかゝる同じ年頃の子を呼びとめて、あたいの處では、母さんと父さんが來るんだから、今おむかへ火を焚くんだよ、○ちやんの家ぢやあ焚かないの？といへば、その子うらやましげに、あゝ、あたいの宅ぢやあ誰も死なゝいから焚かないの……つまらないや。

△雅びごゝろのある人

如月は雪の日、上野は竹の臺わたりを、男女つれ立ちて七八人、心やさしうも此の銀世界をたゝへむとにや、ひさご盞などたづさえ片々として飛びくる粉雪を袖たもとにとめて日もくれ近きに急ぎもやらずさまよひ居たりしが、そのうちの一人、やがて太やかなる櫻の木へ手をかけて、足駄にはまりしを根元にて蹴はらひければ、もとより輕き春のゆきの梢たわゝにおほひしがさら〳〵翻れおちしに中にても眉やさしき若き女のつと寄りて、あれ花が散りますのに……とのみ、あとは詞もなくてたゝずみぬ。――かりそめの事なれどわれは忘れず。

△潔癖

知るべに清元の師匠をせるまだうら若き女あり、潔癖にて、日々もの喰ふ器はさらなり家の內なども、隅々までくろもじにて掘らぬばかりになし居たりけるに、或人たはむれに御身は常々冷性なりときく、われ鹿の肉を手に入れたれば、少々なれども分ちまゐらすべし、とて一塊の肉を贈りければ、女はうちま





ろこび、これを食さば身體の温まらんとて、たゞちにその夜、喰べ馴れぬ肉の胸にもつをこらへつゝ、うちよりて、喰ひ終りぬ。その後ほどすぎてその人の見えければ、とりあへず先の日の禮を申しのべけるに、さらば全くあの肉を喰ひたまひしかとほゝ笑みつゝいふに、少し頂きづらかりしが……と答ふれば、その人、さてはまんまと我が手にのり給ひしよ彼肉は鹿にあらず、その上の文字の馬と申すものなりと云ふをきくや、女は堪へかねて勝手に入りさま、したゝかに汚きものいだせりといふ、喰ひしはやがて、七日ほど前の夜なりしを……。

△望遠鏡

おなじ人の十三の年に、われと共に母につれられ、箱根の蘆の湖にあそびしが、ホテルの樓上より、あたりの景色をながめつゝありしわれの、ふと、彼所に西洋人がボートに乗つて居るといひしをきくや、遠眼鏡を眼にあて、マア實際によく見えること、あ、何だか英語でしやべつて居ると云ひつゝ、あはてゝ眼鏡を耳に當てぬ。

△豆腐屋の聲

これも同じ人の、轉宅の夜、細かき用事に追はれて思ひがけなく夜をふかし、晝のつかれさへ加はりたれば、さながら死したる人のごとく、ぐつすりと、ひた眠りに眠りしが、翌くれば冬の日の短かさ、はや暮れ近きにやう〳〵眼をさまし、かたへの女中をゆり起して、ちよいと、今豆腐やの聲がするよ、まだうす暗くて早からう。

△鍋焼うどん

さる家につとむる男の、晝のうちは暇さへ





あれば小說によみ耽り、夜は寢しなに鍋やきうどんといふものかゝさで喰ひければ、その主人、奉公中そのやうに錢づかひが荒うては、とても金はたまらぬぞよ、凡そ世の中に其方ほど鍋燒の好きなものはないと云へば、いえ私ばかりではありませぬ。主人驚き、まだ朋輩の中にあるのか。ナニ、鏡花も大好きでござります。

△田舍芝居

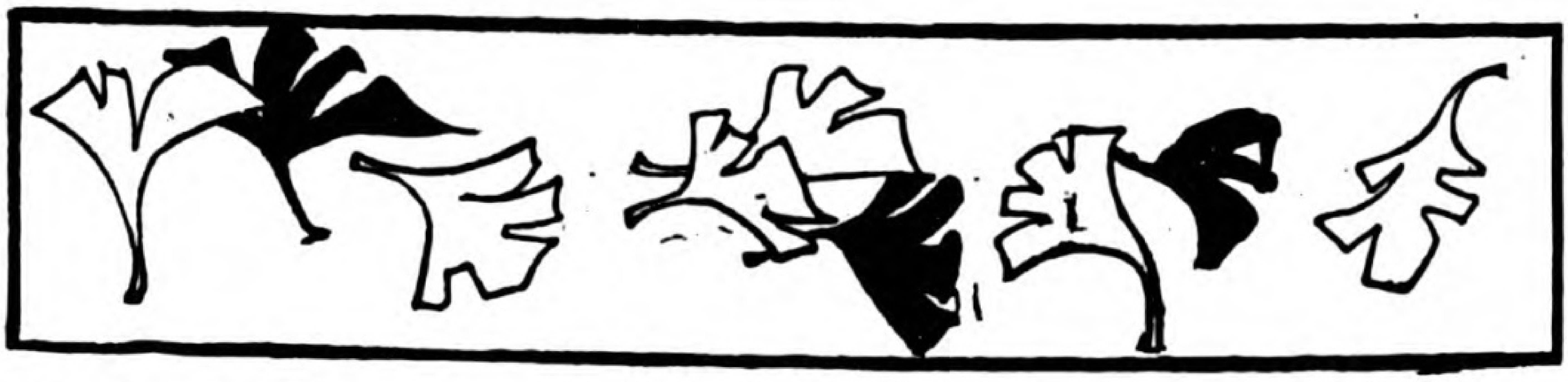
某といふ俳優の、ある年の冬地方に出で、廿四孝の狂言にて横藏をつとめけり。折しも風邪氣にて、一日筍掘りの場にて弟の慈悲藏とわたり合ふうちに、いつしか己が鼻の下にあやしき露のおちかゝりたるさへあるに、三角にきざみし雪のそこに一片とゞまりてけるが赤面に塗りたれば、拂ふにもはらはれず、降りつむ雪の中にまろびては、兄ぢやぞよ、兄ぢやぞよと云ひ〳〵、スン〳〵とすゝり込めば、紙はたゞ鼻道の入口にひら〳〵とひらめくのみなるに、慈悲藏に扮したる男の、可笑しさにたへかね、いつしかそこに笑ひくづれて、切角の一幕、舞臺の雪もろともに消えてけりとぞ。

△頓才

長唄の浚ひに、初心の人床にのぼりて、外記猿のはじめを、まかり出でたるそれがしは……といふべきを、まかりいでたる風雅もの……といひ出でゝハッと心づき、きわどい處で心を据ゑ、ずんと氣輕なそれがしは……と唄ひまぎらし、やう〳〵人の笑ひを招かですみぬ。

うね〳〵するものはといふ題を得て、林檎のむき皮、月のわの都どりなどいへるもよけれど、幼き人の、ふとかたはらより、鯉幟の竿とこたへけるもをかし。





盗賊を防ぐ用意

△戸締り

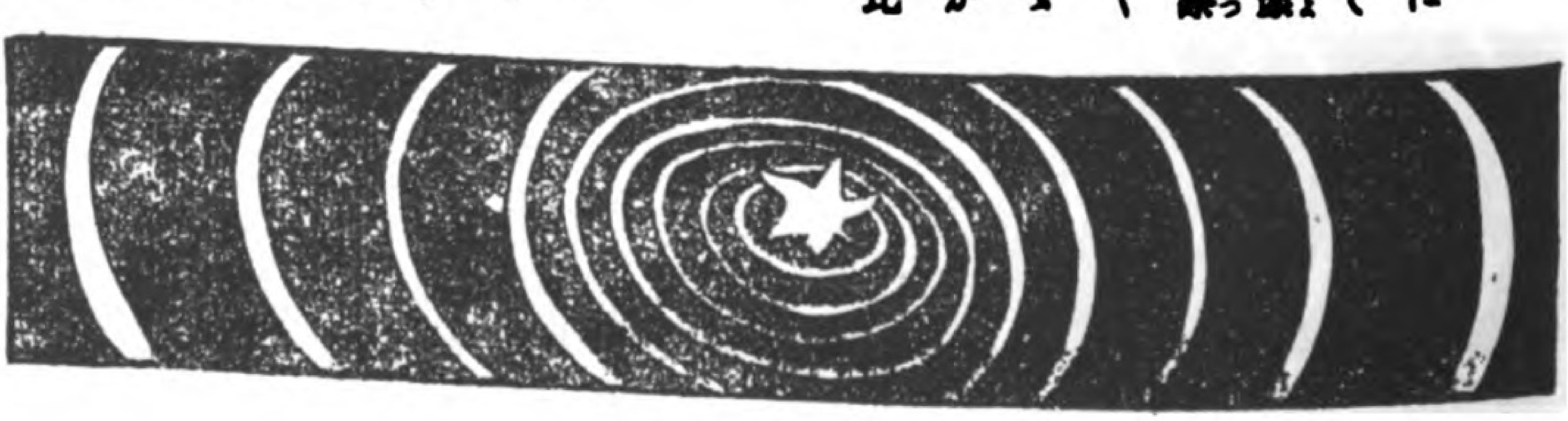
最も可い戸締の方法は、戸の一番下にある棧の二ヶ所に穴を穿けて、五寸釘を突き差すことです。尚一層用心するには、戸と戸との合せ目にも、右と同様な設備をして置くのです。此の方法は、曩に大浦子爵が警視總監時代に勧められた事であります。敷居が磨滅した爲め、戸の辷らぬ爲めに、敷居の外の方へ鋲を打など云ふやうな小刀工細は、賊の目には殆んど児戯の様に見えるのです。要するに賊は戸を開けるには鋼鐵製の時計の彈機に似たものと、金挺とを使ふから、此の二つの兇器が役に立たない様にするのが肝要です。戸締の油断から賊の被害を受けた統計は、十中の八九であるから、主婦たる者は戸締に就て、くれ〳〵も。下婢下男に注意を怠つてはなりません。

△盗難とゞけ

それから前夜賊に忍び込まれたのを、翌朝になつて警察へ届け出でるのは、策の得たものではありません。賊に這入られたら、一刻も猶豫せずに直に届出るのが宜しい。然うすると警察の方でも直に活動が出來ます。翌る朝テク〳〵警察へ届け出で、被害品はこれ〳〵ですなど云ふ愚痴を零すよりも、電話を利用して、只今賊が這入りましたと、届け出ると盗品の發覺も比較的早いのであります。

△賊に向つた時

強盗も他人の家へ忍び込む場合には、無論一生懸命です。世間では強盗は度胸が宜いなぞといふが、何うして〳〵先づ忍び入る前には必ず酒を呷つて、勢をつけて忍び込むのが多いのです。斯樣に強盗は先づ酒を飲んで精神の中樞を失つて居るので、一度恐怖心を起させると、無我夢中になつて、思はず知らず獰惡殘忍の擧動に及ぶから、なるべく賊をして恐怖心を起さ



せないやうにすることが肝要です。若し被害者が賊よりも充分腕力が優つて居る場合には反抗しても宜しいが、さもなければ何等かの方法を設けて追ひ逃すか、隙を覗つて警察か交番へ届出るのが宜しい。併し大抵の家庭では、恐怖して仕舞つて遣り損ふ事が多いのです。何時ぞやも或る家で三人の强盜に襲はれし時、氣丈な妻君は戸外から賊が頻りに押し入らんとして、烈しく戸を動かして居るにも恐れず、内から確り戸を押へて置いて金盥を叩き家族は起きて居るぞと賊に知らしましたが、却々賊の方で去る氣勢がないので、已むなく下女を裏口から出して、警察へ訴へさしたのです。其處で透さず巡査を現場へ差向けたので。其時未だ逃げ損つてマゴ〳〵して居た一人を直ぐ逮捕し其者の自白に據つて、他の二人も捕縛する事を得た。然れば其の機を逸せず警察へ届け出ると云ふ事は、家庭の自衞上許りで無く、警察の方でも、手配をするのに大變便利になるのです。

△番　犬

番犬を邸外に置くのは甚だよくない事です。折角賊の用心に飼養して置きながら、賊に計れるやうな事になるのです。夫れは如何によく主人に馴れて居る犬でも、そこは畜生の事ですから、直に賊に欺かれるのです。賊は豫め牛肉を用意して來て、番犬を手懷け、牛肉だけで釣れぬものは毒薬を喫はせて殺して了ふから、番犬に夜警をさせやうと思ふなら、邸内からよく〳〵邸外の物音が耳に聞える場所に置くのが宜しい。番犬を利用して盜難を防いだ例は隨分澤山あるが、其他賊に對する用意として、互に隣家の應援を受ける事の出來る樣に、豫め適當の裝置をして置くのも宜しいでせう。（警視廳警視矢野氏談）

久方の天の河せの秋ならで
　もみぢを渡す峯のかけはし
（迺　氏）

良人を去らんとせし妻の手紙

村雨



胸の血しほの高鳴るうら若い女に、揺るがない人格を求めるのは無理でせう。絶えず外界の刺戟や壓迫に左右されて居る若い女に、殊に虚榮心に唆されて、自己をも欺きつゝある若い女に、揺がない人格を求めるのは困難でせう。けれども漂ふ萍の様な人格の萠芽が現實の荒潮に養はれ鍛はれて、見るから氣持のいゝ強い彈ねかへすやうな人格となることがあります。

私は三保子さんを思ひ起さずには居られません。三保子さんが、輝く前途の希望と胸に高浪さわぐ豫想とを持つて、法學士森上良哉氏に嫁がれて、京都へゐらつしやつたのは五年前でした。五歳の時に御兩親を喪つてから、私の家に引きとられて姉妹の様に育てられた三保子さんは、冷酷な運命の手に自ら男性的な強い獨立心と、憬れの熱情とを養はれて、逢ふ程の男子を魅し盡さねばやまない魔力を持つて居らつしやる。

かくて戀の競爭が烈しかつたが、兩親の慈愛に育まれなかつた三保子さんは、まだ當時Jの襟章を附けて居らした良哉氏の烈しい戀の誘惑に誘はれて、愛の言葉を報酬に相思の中となつた。

けれども蘭燈紅閨の下、濃やかなりし楊臺の夢もいつしか醒めて、甘い歡樂が次第に苦い澱と變つた時、停滞した平和な小家庭の澱となつてることに驚かされた。そして暗い人世の谷間に退歩して行く悲哀を感ぜずには居られなかつた。かくて五年間の現實の壓迫と嘲笑とに幻の様な希望も豫想も打破られて悩みに悩んだ揚句、自己をも他人をも冷靜に批判して堅い自覺の楯に身を護りつゝ運命の嘲笑と爭うて居る。

今私から三保子さんの身の上を申し上げることをやめて本人の手紙の中から事實をぬき出して見ませう。

「…私が離婚したいといふのを御不審に思ふのも御道理でせう。仰せの通り、良哉は如何なる時でも優しいといふより外は厶いません。また男子には有りがちの茶屋遊などもお交際の外はした事も厶いません。そして今日迄私はあまり叱られたことが無いのみならず、殊に病氣の時の行き届いた親切…涙ながらにお禮申しあげることも度々厶います。



法學士といひ、親切さといひ、世間からは立派な男の様に見えませう。また恁んな温和い男を欲して居る人も厶いませう。然し私はこの弱い優しい親切が熟々いやになりました。男子は溫い心を胸に藏しつつ冷靜な頭腦を持つて、もつと男子らしく時には妻を叱つたり擲つたりする位であつてほしいのに、いつも私の機嫌ばかりとつて居て、家庭の小い平和を貪らうとして居る。なぜ恁んなに意氣地がないのでせう。先日も會社が休みなので、

「お三保どこかへ遊びに行かうか、近頃どこへも行かないからなア」と申しますので、早速身仕度して出かけました。

「さアどこへ行かう？」

「どこでも貴方のお好きな處が宜う厶いますわ」

「お前どこへ行きたいのか、どこでも連てゝあげるよ」

「私にはお構ひなさらないで貴方のお好きな處へつれて行つて頂戴」

「そんな事云はずと何處へ行きたいか云つたらいゝぢやないか」

恁んな押問答の末、嵯峨へ出掛けました。奥嵯峨の二尊院から大堰川に沿うて大悲閣に登つてるうちに午砲が鳴りましたので、

「お前日本料理がいゝか、西洋料理にしやうか」

「どつちでも宜う厶います」

「そんな事いはないでさ、どつちが好きだ、茶碗むしにしやうか」

「貴方のお好きなものが結構ですわ」

「お前はいつもそんな事云うて俺を困らすのだねえ、鰻にしやうか？」

男らしくもない、些細な事でもこの通り。なぜさつさと自分の意志通りにしてくれないのでせう。あの弾力のない親切が私は歯痒くて耐へられません。

良哉は天性優しう厶います。正直で厶います。然し優しい正直などいふことは、いゝ人、おめでたい人、のろまといふ代名詞でせう。

政ちやんは恁んな男で満足が出來ますか？私は他所の奥様が夫に打たれたり蹴られたりして、泣いて訴へるのを聞きますが、却つて羨んで居ります。たとへそんな短氣な夫でも、貞節な罪もない妻を打つことは出來ますまい。打れたり蹴られたりするのだつたら、どんなに力強く感せられるでせう。私だつたら思ふ存分打たせてあげて、後でお胸の和ぐやうにお詫を申します。乾度以前に優つた樂しい家庭が作られると思ひます。

私は平安な停滞した家庭には厭きました。

* * * * * *

……山に入つては海を戀ひ、海に臨んでは山を慕ふと誹らるゝかも知れませんが、私は熟々良哉が厭になりました。

同窓生は高等文官に及第したり、種々な方面で眼醒ましい程活動して在つしやるのに、良哉は會社から歸ると、ぐつたり弱つて身體が惡いというて書物など手にしたこともムいません。

昨夜も同窓の蠣崎様、安部様、南部様とが私の宅で落ち合うて、久しぶりに議論の花を咲かせました。若若しい元氣に滿ちたお顔に書生らしい眼が輝いて……蠣崎様などは大きな松の枝の様な腕をまくり揚げて、厳丈なお膝を叩いて議論して在つしやるのに、良哉の青白い痩せた顔が淋しさうに笑ひつゝ點頭いて居る。

政ちやん貴方が良哉の妻だつたら、恁んな悲しい對照を涙なしに見て居られますか。

今夜も良哉は謠曲のお稽古から歸つて好きな繪葉書をいぢつて居たが、すぐ寢てしまひました。私は勉强して痛快な議論をする人と、ものうい謠曲や繪葉書に時間を浪費して居る夫とを思ひ比べずには居られません。私は先刻も良哉の氣を引立てるつもりで、不必要な袷衣を縫ひ直しつゝ、

「ねえ貴方、來年は文官試驗を受けて御覧なさいよ。一度や二度や失敗つたつて構ふものですか」

「うん、受けてみやうかな」

「幾度もうける人もムいませう」

「大抵二三度は受けるよ」

「ぢや、さア今晩から勉强して頂戴。通つても通らなくても樂しみですわ」

「まア明日からだ」

政ちやん「明日から」は聞きあきました。よし明日から初めても何かの機會ですぐ廢してしまひます。良哉は試驗は受けたくても、落第したら自分の威厳が落ちる様に思うて恐れて居ります。なんて意氣地ない男でせう。

嘘一つ、曲つた事一つ出來ない小膽な良哉は、男子と云ふよりは氣弱い女に近い性質です。家政は總て私

が整理して苦しい家計のことなど唯の一度も聞かせたことは厶いません。それに『なアお三保、月給で立つて行けるか』と聞きますから、

『行けますとも‥‥そんな家の事なんか御心配なさらずと、確り勉強して試驗でも受けて頂戴』

「だがお前に餘り苦勞させても濟まないからねえ。で俺の財産の部分を今の中別けて貰つて、貯金にでもして置かうかとも思つてるのだが、どうしやうかな。』

　私は恁んな弱い、優しい心が熟々厭になつて來ました。



世の荒浪を知らない臆病な優しい心は意氣地ない心です。良哉には強い男性的な彈力がありません。社交的才能も、幕下を切廻す技倆も厶いません。からと云うて文學や音樂の趣味は少しも厶いません。私は小說を讀むことを禁せられて居ります。他の書物を見て居てもお氣に入ません。

　政ちやん、柔かいからと云うて、眞白いからというて踏み耐へのない砂原が一日中步いて居られませうか良哉に奮發させやうと思うて、時には皮肉も云うて居ります。離緣せよと云はぬばかりの素振も見せてやります。それでも良哉は怒りません。これでも家庭が

愉快でせうか。なぜ怒つて私を擲つてくれないのでせう。そして勉強してくれないのでせう。あゝ私は叱られたい、蹴られたい、離縁すると云はれたい。
　政ちやん何等の努力をも試みない良哉の前途には、何等の光明も希望も厶いません。あゝ私は今から人世の谷間の暗いどん底に沈んで行かねばならんのでせうか？再び上つてくることの出來ない、あの暗い死の谷に！あゝじれつたい。私はまだ二十五歳です。これから向上せねばならぬ。發展せねばならぬ。私は希望を持てる體です。私は奴隷ではない。けれども良哉の妻となつてる限り私の希望も豫想も儚い廬生の夢となるでせう。あゝ私は離別れたい。厭と思ふと一日も居るのが厭になる。幾度、離縁を云ひ出さうかと思うたか解りません。けれどもどうしても口に出すことが出來ません。私の心の中では絶えず相容れざる二つの物が暗闘しつゝ、鼓動するハートを噛み破つて、若い血しほを呑みつくさうとして居る。そして激せられた感情が熱い涙に柔げられた後は、勞れて冷かになつた心に、云ひしらぬ陰鬱な悲哀が犇々と迫つて來る。』

　恁んな手紙が來て間もなく大阪の新聞に△△會社の社員淘汰の記事が載せてあつたが、その中に森上良哉以下十數名としてあつた。

　私は慰めの手紙をやつたが、二三日にして三保子さんからお返事が來た。

「鴫の堤の秋更けて、知らぬ間に風は遠方の冬の音を乘せて來ました。まア今宵の物淋しいこと。まだ十時が打たぬのに、淋しい下鴫の奥は、下駄の音一つも聞えませぬ。老樹を渡る風の音と笹の葉ずれの絶え間には、楢の小川のせゝらぎの音が微に聞えるばかり。良哉は午すぎから博士のお宅を訪ねて行つて、まだ歸りません。私一人が差し當つた不幸と行末の慘じめとを繰り返へしつゝ、遣るせない涙にくれながら御許樣の玉章くりかへしました。

　お優しい慰めのお言葉に、よゝと打ちなかれつゝも「妻が強い時は夫が次第に弱くなる」とのお誡……犇々と胸に釘打たるゝ樣に覺えました。淑やかな靜か

な心が女の玉飾とは知りつゝも、勝氣な私の心がいつしか弱い夫の心を凌ぎつゝ、不知不識荒れ遊ぶのに氣がつかなかつた。優しい處女らしい御許様の玉章をうち眺めては、我身恐めしく感じました。

　さりながら私の家庭では私が男勝りに成つて居らねば立つて行けない境遇…時には私の虚榮心を充たしつゝも防ぐ充すことの出來ない大きな空虚を感じます。

　政ちやん、△△會社のことは御存じの通り、良哉は無能者として淘汰されました。廣い世の中に力と頼んでる夫がのろまと云はれる程悲しいことが厶いませうか。それでも發憤して勉強でもするのならまだしも、不運と諦めて失望して居る良哉の姿を見ると、可憐想と云ふよりは焦慮つたくて果はやるせない涙にくづ折れます。



「なアに俺の位置を取りたい奴の魂膽ぢや、これ位で見くびらないで呉れよ、俺の體は粉に成つてもお前一人位、なにしてゞも食べさせるよ」と涙を呑んで申されました。

「そんな意氣地ないことでどうなさいます。食べる位なら私が内職してゞも食べて行けますから、もつと奮

發して頂戴。そして來年は文官試驗に此の恥を雪いで頂戴」

「これから確りやる！」

良哉の心では忍耐してやる積りですが、大學を出たといふ心の弛みと弱い意志の爲に續けることが出來ません。中學時代には特待生だつた良哉が、なぜ恁んなに意氣地なく成つたのでせう。良哉の心は、運命と世と人とを呪ふには餘りに弱々しうムいます。私は冷酷な運命と世の嘲笑とを嗤ひつゝ、倘開拓して行くやうな男子が夫に持ちたい。叩けば音のする樣な男子が夫に持ちたい。彈力のある男の助がしてみたい。

私は一生こんな停滯した家庭で何の報酬もなしに終らねばならんのでせうか。私は再び光明の世界に出ることが出來ないのでせうか。

先日も良哉に代つて横濱の兄樣――良哉の姉婿――の御宅へ行きました。面倒な話が纏まつた後で、

「どうだ、お前は良哉の樣な男で滿足が出來るのか」

と半ば嘲笑の色を現はして兄樣が申されました。

「ぢや一層離別れませうか」と串戯申しあげると、

「さうだ、あんな男に附いて居ちや出世の見込なんかありやしない。お前だけの才氣があつたら俺がどこでもいゝ所へ世話してやるよ」と眞面目になつて申されました。

政ちやん、女ばかりが人間の作らへた道德に從順でなければならないのでせうか。そして一生涯悲しみつつも男子の奴隷になつて居ねばならないのでせうか。女の價値を無視した東洋の古い道德に、女の自由も權利も蹂み躪られて、若い胸の血しほを乾しつくさねばならないのでせうか。

私は若々しい元氣に充ちた青年を見る每に、私の胸は刳られて心臟の血しほを啜られるやうな氣がします。私は鏡の前に立つ每に、次第に褪せ行く顏の色に闇い悲しみを覺えずには居られません。あゝ焦燥つたい、なぜ私は決心することが出來ないのでせう。恁んなにして居て、もしや切ることの出來ない絆が出來たらどうしませう。

政ちやん、私はどうやらさうらしいの。先月頃から何だか體の具合が變つて來ました。一寸した事にも烈しく激したり、遽に氣が鬱いだり……まアさうだつたら如何しませう……あゝ私の前には絶望の淵が近づいて來た。愛のない家庭にどうして立派な兒が出來ませう。平凡な兒！凋落した姿！あゝ私はどうしませう……。』

＊　＊　＊　＊

その後まもなく良哉樣は東京の某會社に奉職したので、三保子さんも東京に引越された。不平を鳴らしつゝも、また一年經つたが、その中に可愛い男の兒を儲けられた。私は三保子さんのために喜んだ。

然し良哉氏の上に定められた不幸の一幕は、まだ發展せねば止まなかつた。それは氏の兄樣



が投機業に手を出した爲め、氏の財産まで悉くなくしてしまつた事であります。

この出來事が私の心を占領して居るうちに、又もや慘ましい報知に接した。それは氏が免職になつた事であります。

私の家では、兩親とも今更の樣に良哉樣の無能に驚かされた。父の意見に從うて、良哉氏が相當の地位を得るまで、三保子さんと匡さん――赤ん坊――とを暫く歸して置くやうにと申し上げた。折り返へして來た三保子さんのお手紙を見て、私の一家は驚かされ、且つ健氣な決心に勵まされました。

『……良哉はお友達のお宅へ行て、まだ歸りません。匡は柔い小さい。手に乳房を抱へながら、すや〳〵寢入りました。私は幼な兒の顏を眺めつゝ當前迫つて來べき行末の慘さを靜にくりかへして

熱い不覺の涙がハラ〳〵……はつと驚く幼な兒の柔頰にかゝつた涙を拭ひつゝ、暫しあやして側の小蒲團に寢つかせました。

良哉の身が固定まるまで歸つて居れとの仰せ、嬉しさと悲しさに故家戀しく偲びました。けれども今は一日も良哉の側を離れることが出來ません。

私は今迄妻の岡目から、良哉を一人前の男子と思うて勉强や努力を要求しました。私の虛榮心は、妻の爲に高等官になれと迫つて居りました。然し良哉は生れながらにして罪惡を知らない天使が、地上の榮華には興味を持たない樣な人であると解りました。烈しい競爭に打勝つて、周章しい不安な驕奢や名聲を貪るよりも、平安な貧しい家庭の和樂に隱れるのを願うて居ります。私の前に輝いて居た光明は全く消えてしまひました。然し私は良哉の側を離れることは出來ません。

正直な弱い良哉に取つては、此世は最も住みにくい處でせう。今度でも不正な事をするつもりなら會社を出される樣なことは厶いません。正直な良哉が居ては邪魔になるものですから、無能を口實に辭職を强ひたので厶います。良哉は此の世に住んでる限り强い惡者の爲に窘められるでせう。財產は兄樣に奪られ、やつと食べて行かれる職業は他人に奪られました。三百圓ばかりの慰勞金はすぐ無くなつてしまひませう。良哉は荒野の雪に捨てられた犬ころの樣なものです。どうしてお側を去られませう。厭と思ふ心、焦慮つたく思ふ心は無くなつて、今は一向良哉を慰める氣になりました。

私の虛榮心は暗に、人なみな不正をして出世せよと勵めました。良哉は今まで、奸惡な社會から窘められたばかりか、唯つた一人の味方である私にまで窘められて居りました。然し今、私の痲痺した良心が良哉の潔白な自然の心に醒まされて、虛榮の光明を失ひつゝも初めて妻らしい心持になれました。

私は昨夜良哉の前に手をついて、涙ながらに過去の不貞をお詫した時、心の暗い重荷が下されて、初めて神聖な夫婦の愛を感じました。

『俺もお前の爲を思うて、あの仲間に這入らうかと思うたが、俺にはとても不正な事が出來ない。會社の樣な所は俺には不適當だ。もつと正直でやつて行ける職業に就きたい』と悄然として申されます。

『私のことには、もうご心配しないで措いて頂戴。不正な事してまで生きて居る必要はムいません。餓ゑて死んだらそれまでのこと、是れから正直で行ける職業を二人して探しませう』こんなに夫を慰めつゝも過去の私の心をふり顧つてみて、赤くなるほど愧かしうムいました。

昨日無名氏から一通の手紙が來ましたが、表に横濱のスタンプがありました。

世の中は四角に丸く渡るべし

唯これだけ書いてあるばかり。然し正義でも弱い者は滅ぼされて、不義でも強い者が勝つて行く世の中で、律義一扁の良哉がどうして角く丸く渡れませう。この廣い世の中で、弱肉を食ひ破る爪牙の只中で、良哉の味方する者は私一人です。惡い強者の壓迫をも、自己の運命とのみ悲しむ良哉を慰める者は私一人です。社會が良哉を窘めるだけ、私は良哉を慰めねばなりません。

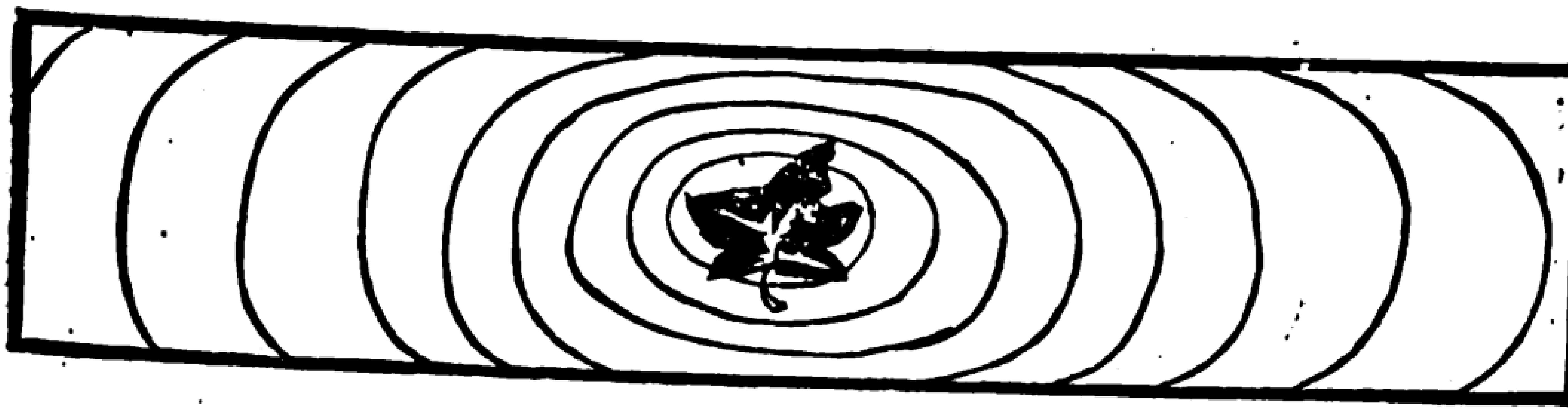
私は世の壓迫と嘲笑とを嗤うて、夫を慰めつゝ匡を育てねばなりません。私には古い賤しい希望が破れたけれど、遠い彼方に冬の日光の樣な新しい優しい希望――『世』といふ希望が沸いて來ました。私は今、人世の奥底に潜んでる意義がいくらか解つた樣に思はれます。私は最早一日も良哉の側を離れることが出來ません……。



音樂修業旅行

日本樂は全部諳記で覺え込むから、長い間には自然に覺え違ひや何かで、同じ流儀のものでも師匠に依つていくらかづつ手も違つて居る上に、その強弱、緩急などは殆んど統一がありません。それで全國を視察して、箏曲三絃の重なる人達に一度集まつて頂き、協議をしまして、その手法を定め、後世誰が見ても分る洋樂のやうな完全な樂譜を作りたいと思ひます。箏曲の樂譜は是迄私の作つたのが澤山ありますが、私には前からその希望があつたから、わざと強弱、緩急などはつけずに未成品としてあります。

箏曲は昔から傳はつてゐる本曲といふのが四十何曲ありますが、ある家には十何曲又或家には廿何曲といふやうにちり〳〵になつて傳はつて居るのです。夫を皆秘傳として中々容易に教へませんので、頑固なお師匠さんになるとやう〳〵死際に高弟に傳へるといふやうなのもあつて、今の内に調べて置かないと、もう段々失くなる一方ですから私は全國修業に出立することに決心しました。けれど手法が亂れに亂れ一つの曲でも五つも十も師匠に依て違ひますから之を調べるのは却々骨が折れやうと思ひます。(大阪高松樂家女史)



結核の入込み方

原因の知られたのは、彼のコッホの結核菌發見が嚆矢で其當時は種々の反對もあつたが、今日では最早何人も疑はず之を以て結核症の病源として居る。

凡て吾人の身體は非常に都合よく出來て居るもので、自ら外敵を禦ぐとが出來る。例へば膿菌が他から皮膚部を犯して來るとする。さうすれば其處へ一種の白血球が集つて來て、此膿菌を滅ぼさんが爲めに之を自己の體中に攝取して仕舞ふ。其處で彼の膿が出て來るので、膿は白血球と膿菌との戰爭の結果其戰に斃れた白血球から出來るのである。若し此際白血球と云ふものが無かつたならば、膿菌はドン〳〵奥の方へ入り込んで來て、身體の到る處にいろ〳〵な害毒を生ぜしむるに相違無い。されば白血球は吾人身體の自然の城壁である。

結核は何うして出來るかと云ふに、彼のコッホによつて發見せられた結核菌が吾人の體內に入り込んで來るとなれば、血液中に存する一種の白血球(白血球には幾つも種類があつて結核菌に對するものは膿菌に對するものと

は異つて居る）が出て來て、此結核菌と戰ふ。而して其戰うた結果は黴菌との戰ひの場合のやうに膿とならずして所謂結核と云ふ白い結節樣のものを作る。これ即ち菌の名の由つて生ずる所以である。斯く結核を作つて一旦防ぐのであるが、結核菌の勢力が甚大である場合には、すぐにそれで防ぎきれぬ。菌は其障壁を打破して更に前進する。茲に於て白血球は更に戰鬪を開始して喰ひ止める。結核菌は又更に此障壁を打破すると云ふ風で、だん／＼猖勢か募る。

通常結核と云へば肺結核と解せられるが、結核菌の入込み得るのは全身何處でも同じことなので、決して肺と限らぬ。唯肺結核患者の數は他の結核患者の數を合した位も多數あるから、結核と云へば肺結核と解せられるのである。此肺結核の外に多いのは消化器系殊に腸の結核である。之は食物と共に結核菌を嚥下することがあるからでそれが胃の中では鹽酸の爲めに十分活動することが出來ぬから胃の結核と云ふことは稀であるが、腸の方は餘程多い之は肺の結核に罹る前に已に罹つて居るものが尠く無い。此他彼の瘰癧と呼ばれる皮膚い結核もあれば、又骨を犯す場合もある。（醫學博士今裕氏）

茶の味と煎茶法



我々の日常用ひてゐる茶の中に煎茶、玉露、番茶、挽茶などの種類がありますが、普通吾々の用ひて居るのは煎茶であります。之を拵へるには、八十八夜の時分に茶の新らしい芽を摘んで蒸籠で蒸し、之れを揉みながら焙爐で乾かすのです此の揉むのは、畢竟茶の葉の中に含まれて居る液を壓し出して、一つには乾きをよくする爲め、二つには茶を湯に浸した時に其の含まれて居る物を早く溶け易くする爲めです。

何れの茶でも其成分は大體同じで、種類に依て成分の割合が幾分異ふばかりです。それから茶も矢張り外の植物と同じ樣に蛋白質や纖維や炭水化物等で成り立つて居りますが、此の外茶には單寧、茶素、芳香物の三つの成分が含まれて居ります。

單寧は茶の澁い味を出す物で、鐵に遇ふと黑くなり、又膠質や蛋白質などを凝固させる性質を持つて居ります。茶素と云ふのはコフエーイン又はテインとも云ふ物で苦い味を持つて居つて、神經を刺戟する性質を有して居ります茶にうかされて夜眠れぬと云ふのは即ち茶素の爲めであります、芳香物と云ふのは茶の良い香りのする源になる物であります。

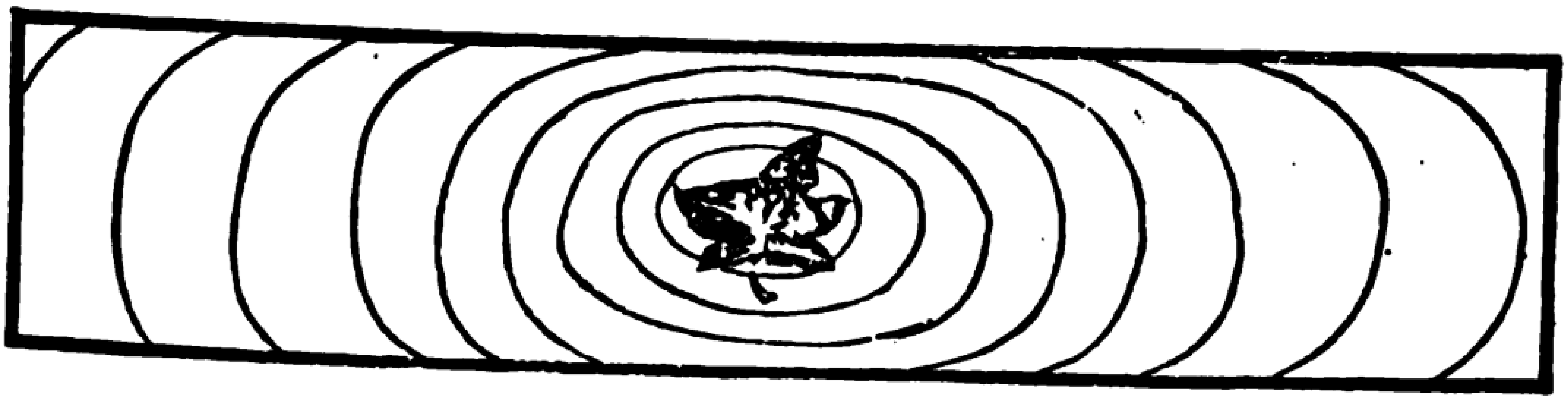
茶の味の良否は、實に此の茶素や單寧や芳香物などの多

い少ないの割合によつて違ふのであります。それに茶には又た糖分も含れて居つて、斯云ふ物が溶けて香氣、澁味、苦味、甘味などが出るので、此等の物が丁度よい鹽梅に溶け合つた時が一番甘いのであります。從つて茶を旨く飲むには煎じ方が大切です。

一體茶の味に大切な各成分は何んな湯に溶けるかと云ふと、第一芳香物は非常に熱い湯に遇へば直ぐと揮發し、茶素と糖分とは早く湯に溶け、單寧は遲く溶けるのであります、ですから非常に熱い湯は固より可けない。又長く煎じ出すと澁味が多くなつて可けません。それで餘り熱くない湯で少しの時間煎じ出すと茶素や糖分がよく溶けて單寧の方が少なく溶ける。それに芳香物も逃げては行かないから、此の時には茶の味が大いによろしいのです。即ち煎茶法の秘訣は只湯の温度と煎じ出す時間に充分注意するにあるのです。それに今一つ茶の味は水に因て大層相違がありますが、是れは硬水を避けて軟水を用ふる樣にすればよろしいのです。(原才太郎氏)

脅迫愛情

女學生の一部、若くは其他の若い婦人間に、内々流行しつゝある「オメさん」、註に曰く「同性の戀」なるものは抑も



如何なる心的狀態から來るのであらうか。

一體愛其者は一で、此一の本體が何物かに向つて結付いていろ〳〵微妙な作用をするのである。而して一旦何者かに挑發されて結付くと、始終それに附纏ひ、綿々として離れられない。例へば煙草を好んで集める人がある。又古錢や古切手杯を愛翫して蒐める人がある。彼等は日常耳目に觸るゝ森羅萬象の中より特に如上の物が第一に愛を挑發し夫に結び付いたのである。

愛は普通の場合、異性に結び付く、そして一番初めに本能を刺戟して結び付いた愛は長へに消えない。其證據には一番始めに愛した婦人は、左程美人でなくとも、終世忘れられない、それが心理學上の規則である。

女の頭腦の組織は愛と其對象（人間でも品物でも）との聯合作用が男子よりも非常に迅速である。即ち早く對象と結び付く。女は善惡に拘はらず、一の興に心を奪はるゝことが頗る早い。瞬間の刺戟に依つて心を集中することが男よりも大に強い。而して一度結び付くと全く其奴隷となつて了ふ。併しそれが永く續くや否やは疑問であるが、兎に角一時は非常に熱中する。殊に神經衰弱、ヒステリーに罹つて居る婦人は一層劇しい。

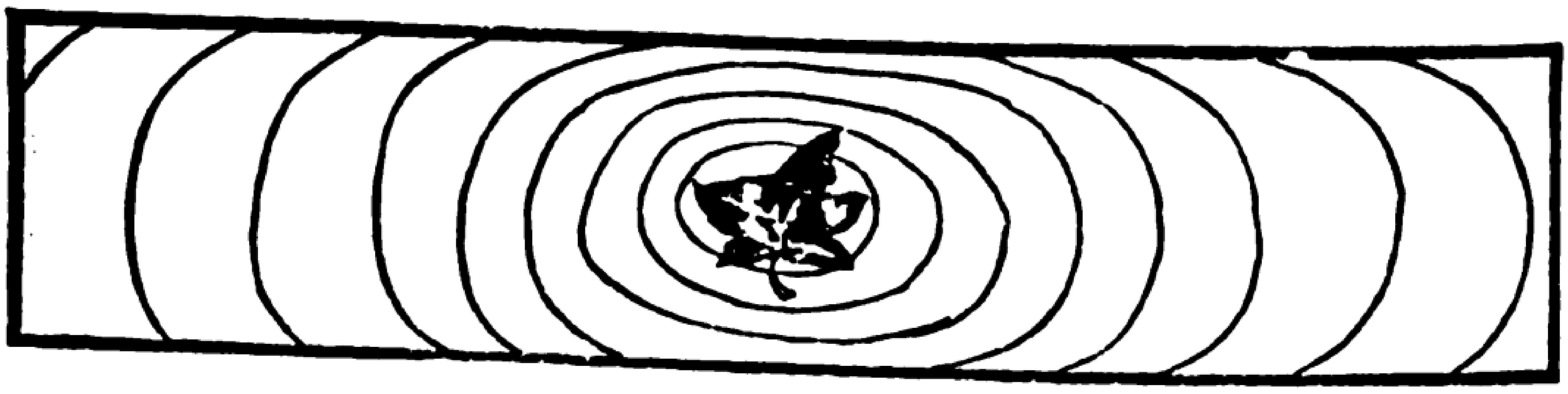
愛は普通異性に結び付くが、不圖したはづみで同性に向

っても結び付く。女學生などが學校で仲の好い友達が出來互に懐かしく思うて居る中に色々な原因の爲めに、知らず識らず異性に對すると同じ愛に進んで行くのがある。そして單に懐かしいと思つて居る間は差支ないけれども、愛が亢進して愈々同性の戀となり、自分でも惡いと知りつゝ止められないのは、既に一種の脅迫愛情となつたのである。

之を矯正するには、餘程嚴格な方法を取らねばならぬ。兩者を隔離するのも其一つ、甚しい場合には精神病院に收容する必要がある。（文學博士隔來友吉氏）

娘のよき職業

通信省に居る全體の女子事務員は九千人からある。單に貯金局だけでも本局支局を合せて約八百人と云ふ頭がある。私の預つて居る原簿課は百三十幾人である。原簿課の女子に就て調べた處によれば彼等の事務員になつたのは百人が百人悉く嫁入支度を調へる爲めである。官吏の娘もある、銀行員の娘もある、一廉の商人の娘もある。それで學力はと調査して見れば、大多數は小學卒業の者であるが、中には高等女學校を中途退學の者もある。卒業したものもある。立派に小學校教師の免狀を有つて居る者もある。女子大學の卒業生も現に三人勤めて居る。次に年齡は平均十九



二十と云ふ所で、一通りの支度が出來れば大概サッサと止して終ふ。此の事務員を採用する資格としては、勿論其學行も調べるし、能力も試驗するし、假し一旦見習として一二ヶ月の見習ひ期間に技術の完全に發達せない者は容赦なく刎ねて終ふのである。だから現在此課に奉職して居るものは技術も學行も兩つながら先づ／＼申分のない女子許りである。其の部／＼で何處にも一種の氣風があるものだが原簿課には矢張一種の空氣が流れて居る。田舍からポット出の野暮な娘が此課に入ると段々捌けて人中に出てもさして臆せず口も利ける樣になるが、光つた着物をぴらしやらしたがる部風の娘達は、一年二年と居る間にスッカリ質實な風に變る。

日々何千何萬枚のカードを整理し絶えず算盤とペンを手から離す事がないから、緻密な頭腦は愈々緻密になつて、長い熟練で恐ろしく算盤が上手になる。判任官となる程のものは殺たばしる小手の下盤上珠なく指もなしと云ふ所にまで漕ぎ付ける。清水ミキ子の如きは暗算の天才と言はれるが暗算ばかりではない、一度手にした事のあるカードは二百枚綴りでも三百枚綴りでも、上の一枚を見た丈けで一錢一厘の相違もなくスラ／＼と悉皆讀み當てるから凄い。偖て一通りの支度が出來てから是等の女子事務員が何んな

所に縁付くかと云へば、官吏もある。軍人もある、會社員もある。銀行員もある。商人もある。而して私の知つて居る限では彼等は何れも極めて平和な家庭を作つて居る。先頃の事だが本郷邊の或る可成の商家の主人が態〻私を訪れて來て、伜の嫁に保險課に勤めて居た娘を貰ひました處、算盤でも、帳簿の整理でも官署の手續きでも、十年以上店に居る番頭連より遙に上手で、今では店の切盛は一切嫁に委せて居りますと禮を言はれた。實際保險課では(各課でもやつて居る)望みに依つて英語、習字、國語の三科目を教へもするし、毎金曜日には音樂、毎土曜日には生花も習はして居る。嫁入支度も一通り出來るし、一家の主婦たる素質も養はれるし、相當の教育も施される。斯した點から見ても、貯金局の事務員は一般の娘の職業として最も恰好であらう。

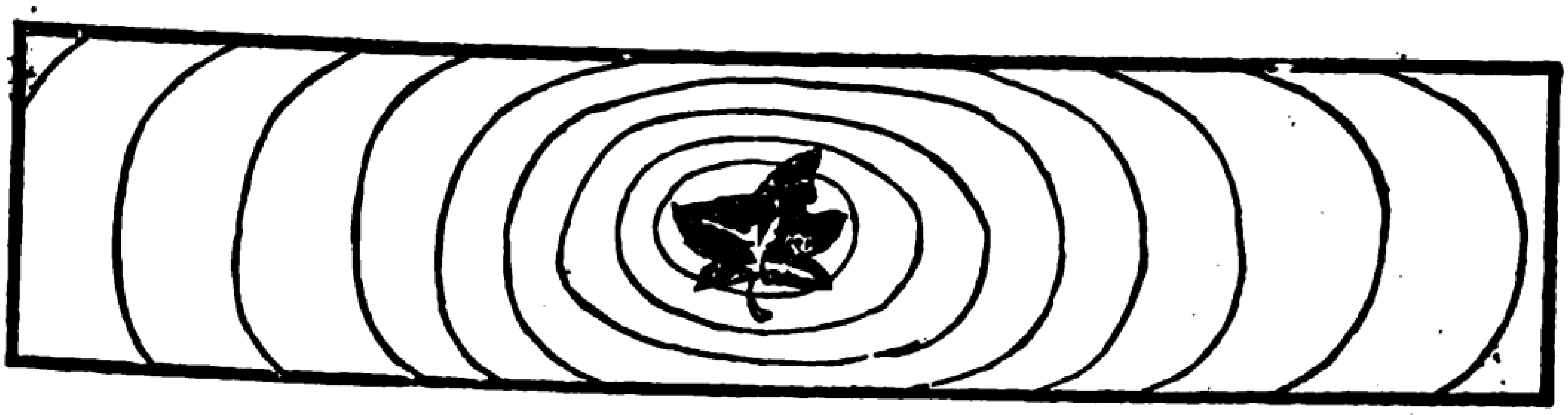
(貯金局多田正雄氏)

長壽者の生活

長野縣下に百歳以上の老嫗二名あり、其の生活狀態左の如しといふ。

▲北林せん(文化八年十月生百一歳)

三、食事は極めて少量にて、二椀位を普通とするも特に餅を好む。



四、酒、烟草、茶何れも絶對に欲せず。

五、入浴を非常に好み、毎夜洗湯に行き、五日目位は中里先きの淺間に參る。

六、夫死亡の時は四十二歳にて五十九年前。

七、子供九名あり、男五、女四、孫十三名、曾孫五。

八、家計は農自ら馬を稼ひ、大作をなす、天候の變り目に頭痛あり、角力を好む、長壽の血統は母方にあるが如し

▲鮎川すゑ(文化九年十一月生百歳)

三、麵類と果物を好む。餅を好むこと甚しく三四日位ゐは餅のみにて滿足し居れり。

四、壯年中少し飲みたるも今は飲まず、烟草は大好なるも一日四五回位ゐにて、一回の量た二服以上の事なし。

五、食事は非常に少量にして、何程の嗜好物たりとし過度に用ひず。

六、入浴は非常に好み、湯のなき時は晩食後必ず余身丸水にて洗ふ習慣あり。

七、子供は全くなし。

八、若き時には時々病氣の爲めに半日ぐらゐは病床に臥したることあるも、醫師の手に掛りしはこれまで僅かに四回のみ、夫死して單獨生活を續けしも、此の五六年前養子を迎えたり。

●現代本書に匹敵し得る作文辭書他に之ありや●

●美文韻文記事紀行和歌俳句等凡て所期の文直に成る●

文學博士　井上頼圀先生新著

現代文章寶典

特價提供壹萬部限金壹圓五拾錢

■新時代の新思想を顯表せんと欲せば先づ直ちに本書に依れ■

文を成すの要、其言はんと欲する所を自由に言ひ得るの利器を獲得するにあり、利器とは何ぞや、詞藻を豐富にする其一、我情緒に適切なる姿體を執る其二、文章の組立を巧妙にする其三、本書は其詞藻を供給するに於て、古今現代を通じ、美文、韻文、敍事、抒情のあらゆる文體より最も模範とすべきものを採りて男女壯少の何人にも應用の自由を得せしめ、別に文章の要訣作法を懇示して、古今名家の文範を示し入門者百方の便を計る近者作文辭書の偉觀之を本書に求めずして斷じて他に得べからざるなり、敢て江湖の淸鑒を俟つ。

總クロース金文字入
頗美製本函入全一册
定價金壹圓八十錢
小包料金十八錢

■各項目に聚集せる佳句名句紙上に溢る正に是文章速成の寶典■

●斯くして本書は作文辭書界の覇王と稱す可く●

●學生及び一般家庭に必須の書たるを斷言し得るなり●

女(ろの一)

發行所　東京市京橋區中橋廣小路六番地　電話京橋三七七番　振替貯金口座東京一四〇九番　前川文榮閣

女(るの三)

女(ろの六)

（その七）

女事務員の顰み



黒柳慶子

幼かりし折、父が寝物語に、

『今の女は、高等教育を受けた證書さへ持たば、よしお荷物は少くとも、名望地位ある學者や、紳士紳商に嫁がれるのぢや。お前も學問して立派な人に貰はれたら、乃公も安心するし……。』

何時もこんな話を聞かされながら、無邪氣の中に小學を出ました。お婿さんより何よりも、カシミヤの袴にウオッチ持ちたさが先に立ち、勧めらるゝ迄もなく勇んで○○女學院へ入學いたしました。

所が、時代は何時までも、證書一枚振りかざす譯には行きません。私の卒業する頃には、いざ婚談となると、容貌財産が先に立ち、學問は有つても善し無くも可しといふ風で、中流生活以下の私等では、何事も不合格でした。

けれど世間は廣し、萬更婚談を受けなかつたでもありません、が氣ばかり高くなつた私は、二言目には

『私が描く理想の夫は……。』

の前提で、手にも歯にも合はぬ、それは〳〵強い我儘言放題。母様は

『お前の樣に、さう小六ヶ敷くお云ひでは……。』

と叱るが如く仰在りながらも、奈何か善い婿持たせたい、苦勞はさせたくない、ならう事なら姑小姑の無い氣樂な所へと、始終心を痛めて居られました。

歳月は猶豫なく夢の間に一年はたつても、未だ見合ひまで漕ぎ付けた婚談はありませんでした。今まで足繁く往來せし仲人も、一人去り二人離れ、遂に

『彼所のお孃さんは、御望が高過ぎて。』

と呼され、それきり頓んと話の持込みてもなく、父を苦め、母を泣かし、仲人を驚かした揚句の果ては

「御縁がなければ、獨身生活するまでのこと！」

と澄ましました。

八名あつたクラスメートは、その昔學窓の玻璃を透し社會を眺めながら、相互に空想に耽つた當時の覇氣にも似ず、多くは有るが儘に結婚し、一時は卑下もした高等下女になられて、殘るは私一人。それからは隔月開催の同窓會にすら出席する勇氣も抜け、そろ〳〵くよ〳〵思ひ出しました。

けれどそれが爲め、セダクチャープされる様な私ではありません。御縁の遠きは自業自得としても、何時迄も親の扶養は受けられぬ。奮勵一番新時代の風潮に乘つて、女ながらも男子に遜色をとらぬ丈けの働きをして、侮蔑せし連中を喫驚さしてやらんと、飛んだ所に力瘤を入れ、否む兩親に納得させ、思案に暮れし伯父の袖に縋りつき、やつと〇〇銀行神戸支店の調査係に就職する身となりましたのが、丁度今から三年前の春でした。

妙なものは人心で御座います。私が銀行へ勤めまして、貳拾圓近くの給料にありつきますと、今迄は訪ねても呉れなかつたクラスメートが繁々遊びに來て、

「貴女、結構ですネー。」

羨むだ人に羨まれる身が果して幸福でせうか。此所に偉大なる活きた教訓が伏在するので御座います。

* * * *

始めの程は、隨分皆さんからチヤホヤ重寶がられ、時には歯の浮さうなお世辭構ひ立もされましたので、思つた程にもないものだと腰を据ゑましたが、段々馴れて來て、忌憚なく交際もして見ますと、今迄善解して居た私の理想は、全然曲解であることが判りました。一體銀行などの男子は、心の淡泊した、親切で大様で、そして義侠心に富んだ思遣りのある、又自分の仕事は自分で整理し人手を籍らず、其日の行務は其日に片付けて、怠惰る様な事は爲しない、實直なものと思つてゐたに、案外な、あれでは行金を費消したり、拐帶す

る様な不徳漢の出るは有理であると思ひました。

最う行員等の執務振りを看破した私、なにとて油斷いたしませう、職務で御座いますもの、扱ひ書類が私のテーブルに上りましたが最後、書類中の手落、異例、違算の件は容赦なく暴露し、ハイカラ男一匹ギユーの音も出ない様にいはせて、少しも寛容いたしません。時には隨分苛酷な行爲もありました。で、どうせ初めから惡まれ役に廻つた私、兼々覺悟と決心の臍は固めて居ましたが、半歳もたゝぬ内にもう私の一擧一動、罵倒讒謗の焦點となり、引いてあられもなき白羽の矢が立はじめ、冷評は四隅に起り、至る所で惡口雜言の反響が聞かれました。融通の利かぬ者、惡る叮嚀な帳面主義、支配人の權勢を肩にして惡く威張るの、などゝ執務振りの酷評ならばまだしも、遂には聞くさへ堪えぬ私行上の侮蔑を浴びせかけるに至つて



は本當にあきれるではありませんか。

學海航路の行手は唯一向、時に暴風怒濤はあつても、根かぎり漕ぎ分け、彼岸に達するに何等の不平もなければ懊惱もないが、際限しなき社會の海路には、思ひも懸けぬ颶風が起つて、船諸共魚腹に葬られる、がその難路を忍耐、努力、奮闘して見事乘切つてこそ人の上にも立たれるもの、生中女々しき心を惹起しては、と弱き心を引締め、苦悶を制し、謂はゞ獨身生活の糧、僅少な俸給に縛られて、毎日變化も興味もない落度探しを繰返し、周圍の人等に氣兼苦勞しながら從事してゐるもの〻、如何にも堪えられぬ。縱令この苦闘に見事打勝ち雜輩共を制御したにせよ、天晴れ未來第一流の銀行家になれる譯でもなく、善く行つて主任書記、さもなくば平凡に終るが關の山。

こんな事考へ出しては、張りきつた心もゆるみ來て一日も勤まらず、いやだ〳〵と日を送るうち、ふと二年前に同じ學院を出られた芳子さんを思ひ出し、あんな働き甲斐のある有爲な地位に身を置いたら定めし愉快であらう。趣味に富み變化に長ずる貿易業。一とつお袖に縋つてお賴みしてみたら、後進の私、萬更むげにお見捨ても下さるまい、成る事ならと思つて、早速お宅へお訪ねすると

「マア、府賀さんよく來て下さいましたネ……貴女銀行の方へお勤めですつてね……銀行事務は緻密な頭のあるものでなければ迚も勤まりません……貴女は學院での「マセマチアン」でしたから有望ですよ、どうぞ母校の名譽と思つて奮闘して下さい！」

這麼調子に出られて、初めからウント頭を壓へられた私、いくら厚顏しいからつて、その快辯に抗してまで「銀行は勤まらぬから」とは流石に言へませんでした。其日は不得要領で歸宅いたしたもの〻、迚ても此上面接して直願するの勇氣なく、今度は前以て委細の事情と、胸中の苦悶、自活の辛苦を筆に書かせ、どうか貴女の御手近くに御使役下さいませ、貴女のお指圖ならば水火の勞もいとひませぬ、いづれ拜眉の上で改めて御懇願いたします、と申出て置き、其翌々日又候

お宅へ御伺ひいたしますと、「先日その御用で被入つたのでせう？」けれど府賀さん、銀行などに御勤め惡うては、迚ても商館は駄目です！」

　こんな風に、初めから彈き出されましたが、夫れではと退下ることのならぬ境遇、それから二度ならず三度四度切に御願ひいたし、やつと當分見習にとの條件で、同じ商館に就職することになりました。



＊　＊　＊

神戸居留地〇〇番商館、英國ロンドン市に本店があつて神戸はその支店、業務は輸出入貿易、館主は英國人で日本語には通じないとのお話。自分で初對面の挨拶位は言へぬこともないが、將來の事もあるので、御紹介を願つた芳子さんと同道して、御目見得することにいたしました。

　應接室に館主の出勤を待つ間、芳子さんの仰在るには

「貴女は高等科出身ですね。……けれど府賀さん、年月と精力を傾注した學問、その貴い學問が銀行で少しはお役に立ちましたか。……さうでせう、言譯ばかりに學術の斷片を鵜呑して、お茶を濁した相互ですもの。世間は學問一途では渡れません、どうぞこれからは人に同化して、人に使はれる人となつて下さい。卑屈にならぬ範圍で、先方がどんな

階級の人にしろ、相當のレヴエレンスの念を拂ふて接して下さい。

「來て見れば、左程にもなし、富士の山。」

と云ふ態度は、絕對に私等奉公人の禁物です。

「聞きしより、思ひしよりも、見しよりも、
　上りて高き、山は富士か嶺。」

です。解りましたでせう。」

「お言葉よく理解りまして御座います。以來は必然その心懸けで溫良忠實に從事いたします。何事も不案內の私、御指導御庇護下さるやうお願ひいたします。」

性來下から出た事のない私に、どこから此樣阿詞が出たらう。とは云ふもの丶、自己本位、世間知らずの私にとつては、處世の要道を知らしむる極めて趣味ある敎訓でした。

館主及び夫人に初見參もすみ、心を愈々奉公人根性に入れかへ、翌日から夫人の執務室でお傍に侍し、命せらる丶がま丶に、書類の淨書や、書信の整理など致して居りました。夫人がお手すきの時分には、色々複雜なる商業上の取引、商習慣、輸出入、仕入書の書き方往復文の書式及び認め方などの指導を受けました。

只管將來の光明を夢みつ丶、事なく一年程は勤めてゐましたが、昨年暮より愈々本務につき、出入商人と直接利害の關係を持やうになりましてから間もなく、又候私一身の周圍に、苦情を浴せかけらる丶運命に立ち至りました。

外國の取引先から參ります買付文の電報や書信は、極めて秘密にせねばならぬものでありますが、今迄は公然の秘密として幾分は外部に漏洩され、それで買込商人も思惑を立て品物の蒐集に取りかゝり、時には相場の高下も致したものでありますが、私が其の書類を取扱ふ樣になりまして、極めて規帳面に整理し、少しも商人仲間に漏らしませんので、自然買込商人等の商機に關係を及ぼし、濡手で粟のボロイ利益もなく、又尠なからぬ思惑違ひを致して損耗を招く樣になり、引いて番頭連が貪ぼるコンミツシヨンが消滅いたしますので、館員からも「最う少しお手柔らかに」なんて蹴

訴されますし、氣早い連中は館主に苦情を持込みますし、一時は當惑いたしましたが、其の内に夫人から『在來の習慣でもあるし、今假に其樣する譯にもゆかぬから、そこは手加減して與れ。』との御注意。そんならと申して商人が望むがままに内示して居れば、一番番頭の室谷さんが、小蔭へ私を手招きして、可成秘密にして與れ、との内訓…でなくつて寧ろ叱られた方、どうすれば可いのやら、どうせ女の淺智慧、權謀術數、虚々實々、表を見せて裏をかく、なんて氣の利いた働きがありませう。



努力、奮闘！　心に張りをかけ、芳子さんを黒幕に頼つて男子に對抗し、段々經驗も積み商機に通じてから、やつと手加減も出來るやうになりましたが、何と云つても相手が利己主義の人ばかり全然苦情の絶えることはありませんでした。

併し館員等は銀行員とちがつて、平素京大阪中國九州邊から來ります得意客を、商政略上商談に取懸る前先づ一應料亭に案内するの慣例がありますので、自然婦人に接し女なれいたしてゐます丈けに、私等に對する態度に平素か

ら些の圭角もなく、極めて圓滿滑脱、時に執務上より譏訴を受けぬでもありませんが、それも起因する所自己收入の打算上で、直言すれば彼等の生命とする、コンミツシヨンの渇滅から沸くことで御座いますから、そこは此方からの仕向け一とつで、制御の出來ぬことも御座いませんが、其の手腕が、凡骨の私に……噫！女はなぜ恁うも意氣地がないでせう？

四國九州邊から、未だ一度も取引きいたしたことのない商人が參りまして、何々品の手持はありませんかと問合せに來ます場合、三井倉庫、棧橋倉庫、又は三菱倉庫に品物は山程ありましても、懸引上手元に皆無だと申したり、實際品切の品物でも、お客の種類に依つては他所に遣らぬ算段から、見本を示して即席注文に應ずるが如き場合もあります。要するに嘘八百を列べ立て、それが實際眞實らしく見せかけて、商人の信用を得ねばならんので御座いますから、その呼吸が頗ぶる六ケ敷しいので、それも赤の素人ならばまだしも何と云つても商人相手の仕事。その邊の懸引はどうしても男子の方が巧妙に行きます。

船會社へ參りまして、積出日限や船繰のことなどを談判いたします場合、男子が參りまして喧嘩腰になつて申しますよりも、私が膝を七重八重に折りまして、直接支配人に賴み入れます方が、多くは即座に埒のあく事もあります。けれど事柄によりまして、私が豫期して參つた通り談判が成立たずに居ますものが、男子が再度參りまして好結果を得て歸つて來ますと、サアそこが女心、何だか先方が私を侮蔑した樣に思はれて、主人に對して不面目腑甲斐のない樣に當り、甚だ口惜しく腹立つことも御座います。

或る時這麼失敗をいたしました。英國本店から、三ケ月間にグラスコーに到着する樣、丁銅五千ピクルの注文が這入りましたので、直ちに主人に通知して、他に漏洩せぬ内に私が大阪へ參りまして買入談をいたしました。が折惡しく品不揃で纏まる迄との約束で、相場は極めずに歸りました。併し買入談は彼我の間には頗ぶる秘密を守つてゐましても、品物の動搖が、英敏

なる市場に注意を惹起し、それ〇〇番の買占め、と云ふ風に直ぐ市場に知れ渡り、忽ち相場は騰貴する、結局高價なものを買入れねばならぬ破目に陷いつて、非常な失策をいたしました。必竟商機を見るのが下手であつたので御座います。

* * * *

自白いたします、私は元來口不性で、碌にお愛相お世辭一とつ滿足に申されぬ質です。けれど職務とあれば申す丈けの事は口に出ましても、その口吻が如何にも木に竹を接いだ樣な言振り。時には却つてそれが成功せぬでもありませんが、臨機應變のお世辭、即妙な嘘八百は、どうしても相手を納得信賴せしむる丈けに言はれません。爲めに之れが失敗の因となつて、思はぬ損失を主人にかける事がないでもありません。

今日迄身を粉にして努力し、猾智に長けし商人相手に、極力奮鬪し極力活動いたしましたが、その努力活動に酬ゆる丈けの趣味と快樂を惹起しませんのみならず、却つて實業界そのものに一種不安憎惡の念慮を生じ、私は全く死地に沒落いたしました。

私に未だ勇氣と精力があつたならば、憤然此所を去つて、職を他に求めたでせう。私の能力手腕を試み得る地位があつたならば、漁つても見たでせう。なれどその元氣、その氣力は全く喪失し、女子が能力手腕の眞價を、實際に會得した私には、かゝる向上心の曙光すら認められません。

時代の風潮は私に高等教育を授けました、生意氣にしました、柔順であるべき天質を剛性に化し、爲めに嫁期を逸し、獨身生活に失敗し、遂に再度奮起の活力をなからしめた。

進取主義であつた私は、翻然保守主義を謳歌する樣に退化いたしました。

「女子は女子らしくするこそ天職なり。」

と云ふグラッドストンの金言に服從する樣に感化されました。實際聞きしより、思ひしよりも、見しよりも渡つて高きは社會の波濤です。

* * * *



貧しき少女の話

工場通ひの辛き經驗

紫水女

一昨年父と兄とを亡くしてから、少しばかりの家や田地も人手に渡り、無情な伯父に宜いおもちやにせられた母と子、私はまだ十四、父や兄の働手を亡くした後に安閑と學校通ひも出來ねば、惜しい勉强もよして後は母と二人のわび住居、藝は身を助ける不幸とか、母は近所の子供相手に三味や琴の御稽古。

　父の兄、私には天にも地にも只の一人の伯父ですがおとなしい母と、東西わきまへぬ私とをうまくだまして、百にも足らぬ金子で何か商へとの事。母はとても小店など出す事は出來ませぬと答へたら、それでは勝手にせよと、すげないしうち。泣く〳〵母子は人手に渡つた我家を後に、母の一人の妹をたよつて此の地に參りましたのは昨年の春そこゝに梅の花が美くしく咲きそむる夕べでした。叔母、大變親切に世話してくれましたが、二人はいつまで厄介になる事も出來ねば近所にさゝやかな家を借り、私は工場通ひを致しました手織木綿の筒袖に、さらさの帶、雪の朝風の夕べも音丈け聞いても身の毛のよだつ紡績工場の門をくゞり千に近い女工の中に、荒々しい言葉、下卑ないさかいを聞きながら、糸つなぎの仕事をさせられて、一日賃金二十錢。母は近所の二三の兒供に三味線おしふる傍ら賃仕事。

　元々私は奉公にでも出て母を叔母が世話してくれる筈でしたが、氣弱な母は如何しても私を離してくれません。それでは私も母と共に賃仕事してと申しましたが、人家少ない此の村では、思はしい仕事もなければやはり定まつた賃金の取れる方がと、叔父の進めに私

はまあ女工とまでなり下りました。
此の村は人家二十戸、人情は實に淋い處です、叔母はずつと前から此處へ引き越して來たとの事で、言葉もそぶりも土地の人とちつとも變りはないけれど、私等母子の姿は實際目に立ちました。目引き袖引き囁せらるゝ其のなかで、恥かしい工場通ひ。勿論此村の女兒半分は、皆それ〴〵近くの工場通ひはしてゐますけど……、通ひ初めて以來朝は五時から家を出かけますが、若草もゆる道、青葉なつかしい堤を三々五々、いづれもおなじ不幸の兒。
あゝもうこんな仲間にはいつてしまふと、人間も末です。十七八花の盛り、再びとだに來ぬ青春時そ、變



ポー〴〵と女子のたしなみもなく、いつも變らぬ汗くさい單衣に細い縄の樣な帶、ワレかオレかの言葉使ひ七時の笛がポーッとなると、それ〴〵自分の受け持ちに、專心働らいてゐる人もあれば、いやな節のついた俗歌を鼻歌まぢりに機械の樣に手を働かしてゐる人もあり、機械の音で何をしやべつてるやら、つひ近所の人ばかししか話聲も聞えませんが、只々ワーゴーツーゴーすさまじい音、なれぬ間は頭痛ばかりおこしました、何の味氣もない此の中に生活してる人達の家庭、處の風習とてか女が十四五になれば、良家の兒

も貧家の兒も吾一と通ひ初めて、嫁入り仕度する。其の良人となるも重に仲仕か男工で、如何しても一生ワレかオレかで暮す人達、歸る道々には、荷車で關東燒きだの、御すしだのと、山の樣に積んで、賣つてゐるのを吾勝ちにさい布のそこをたゝいて、花恥かしい二八の乙女の立食。

「オイ江戸ッ兒、うまいし、食べんかよ」

妙に語尾に力を入れる私の事を皆が江戸ッ兒〳〵となぶる。私達の退けるのは午後の五時で、五時の笛がなると歸り仕度して



名簿に印をおして頂いて門を出る。ホッとかたの荷をおろした樣な氣がして、早く歸りて母樣に此の無事な姿を御目にかけようと思ふ。立食する人などには元より見むきもしませんが、「お金がないから買はんのかよう、ほしいかよー」と目の前に燒芋などつきつけられると、恥かしいといふよりもむしろ其の人の品性の下劣なのを哀れんで、思はず涙がこぼれます。

初めのうちは皆私の樣に恥かしがつて食べないが、終には卒先して食べる樣になると聞いては、身の毛もよだちます。あゝこ

の人達の仲には、良家の處女もまじつてゐるが、初めはおとなしい人だつたのだらうに、今のこの在樣。しかし無理もない。まだ十五や十六の人達よ、口でこそ化學だの物理などゝ學校でむつかしい事習つて、歸つたらすぐ戸棚の中をのぞいたり、お母樣何ぞ頂だいねなどと甘へて見たりする令孃があるのですもの。同じ女子と生れながら、一日中綿くづて頭から雪でもかづいた樣にくすぶりながら、イキセキ働らいて、此人達には何の感じもないこの細道を一里餘もテク／＼と通ふ。ホツとするのは當前。見えも外聞もかまはず、吾一に腹を充たすのは更々無理はないけれども私は決して眞似はすまいとかたく決心してる。

　風の朝も雨の夕べも、テク／＼と通ふ細道、春はすみれやタンポヽが美くしく咲いてゐる。夏は若草、秋は萩きゝやうが清く美くしく咲いてゐる。右手の名もない細川の流れには、船だの目高などがあちこちと快よげにおよいでゐる。こんな道を月清い夕何思ふ事もなく一人散歩して見たらどんないゝ詩材がわくでせう

「可哀さうに又今日もお京やんが手を卷き上げられたんやし」

　とだしぬけに後の方で話聲がした。私は思はず振り返ると、第二工場の女工二人、私には別の關係のない人だから、妙な目つきして私の顔を見てゐる。他の一人の女工は、ウンともスッとも言はないで、私がこちらへむき返つた時、後でクス／＼と笑つた。

　何が可笑しいんだらう。折角夢境に入つてゐる私を驚ろかしておいて、まあーそれにしてもお京さんが手を卷き上げられたつて、可哀さうに。幸にして私の工場には危險は少ないが、第二第三は時々怪我人を出すお京はどんな女だつたか、なんとも知らないけど、私は氣の毒でならない。今朝までは、雪はシン／＼降りつもる、なんて歌ひながら働らいてた人が、夕には亡きがらとなつて父母の許にかへる事がまゝある。そんな事を思ふと一日も、こんな仕事はいやになる。

　もう遠近の村々にはポッ／＼火が見え出した。あゝ私の母樣も、お湯をわかせて、好きな御かづを御膳に

ならべて待つてゐて下さる。せまいながらも母子水入らずの我家、蚊やりの烟もなつかしい。千鳥ばしに來るともう宅へ歸つた樣な氣がします。

「御苦勞だつたね、」と母樣はイソ〳〵とお湯をとつて下さるやら、團扇で風を入れて下さるやら、勿體ない母樣、不甲斐ない我が身。日に二十錢、月に積りて六圓の收入、母樣が賃仕事やら御稽古人から頂かれる謝金五圓許り合せて十圓餘の金子で、せまいながらも一家をかまへて行くつらさ。親しい友とてもない私、女學世界が唯一の友、萩香さんだの花散る里の君などの花やかな日記拜見する度に、物心ついて以來一日もカルタだの園遊會だのと夢にも知らぬ私には、此人達は何といふ幸福な方だらうと思ひます。昨日も母樣が千日前の蘆邊パークへいつて御いでと三十錢下さつた。あゝ一日半汗水たらして頂くお金子、よしや金子の出處は違つても何でもムザ〳〵使はれませう。發行後二十日を待つたのにまだ手に入らない本月分女學世界を買ひたさに、新道澤田までいつて、おくればせに九月號を買ふと、小僧は、十月號になさい、もう來てゐますからといふ。けど何だか號をおはないと物足らぬ氣がするので‥‥。そして母にも甘なつとう五錢袋入を買つて歸りました。母は涙こぼして嬉ばれました。

母一人子一人のたよりない淋しい境遇、二三日あとから朝夕の風はヒイヤリとはだ身にこたえます。本日は幸ひ月に一度の樂しい休日、洗ひざらした母樣の袷を私が縫うて着せませう。

うらの堤には萩やきゝやうが咲きこぼれ、名も知らぬ蟲は美しい聲をはり上げてないてゐます。淸い美しい月は夜を照せど、朝の五時から夜の七時まであくせくと働く私には、こんな自然の樂しみ、好畫題、好詩材を控へながら、シンミリと筆取る事も叶ひません。本日は休日、せめてもの思ひやりに、初めて拙ない境遇をまはらぬ筆にのせて見ました。

つゆの宿より

（まだ見ぬ友へ）

野菊女

逢ふことは雲井はるかに鳴神の音にききつゝ戀ひわたるかな。

京子様、今夕立は晴れました、御覧遊ばせ、虹の橋!! 七彩燦たる神のたくみを……。

軒端に通ふ松風の調、玉琴の音のふとやみて、捲きあげられし小簾のひまより、そと大空打仰ぎたる麗人――それは京様あなたのよ。あなたもやつぱり此霓の色に憧れの瞳をなげていらつしやるのでせう。

きのふのお文、例ながら幾度繰返したことで御坐いませう。ほのかに匂ふローズの香は深く〱私の胸に染みて、止度もなく涙が流れました。何といふ不思議な、えにしで御坐いませう。

思ひあまりてとる筆に、友となりてよ、妹と思してと情をよせて下すつた文の友も、ひとりやふたりではありませんでした、……が、京様、人の心は浮草の、きのふは東、けふは西、千代もと誓つた友どちも、さばかり永く美しいものではありませんでした。忘れはせねど忘らるゝ身の不遇をなげくよりほかありません。其中に、あなたばかりは何といふ有難いお心なので厶いませう。逢ひもせず見もせぬ君と十年の交り、文の上では、何事も明しあひ語り合ふ、所謂肝膽てらす交らひの、しかも十里に足らぬ都と此地とに、住みながら一度もお目にかゝらぬなんて、ねえ京様! なんといふ御縁なのでございませう。

それは私とて、お目にかゝりたいのは山々、折節出京の度毎に、お訪ねしたい……と思ふ想ひは溢れながら、いざとなつては氣おくれがして……。あゝ私はほんとに心弱い……。學窓にあつた頃のお友達さへ、私はめつたにお訪ねしません。涙もろい私は人一倍に懐しい思ひは胸にみちながら、どうも臆劫でしかたがないんです。まして敬愛なる京様に見られるのは、何だか恥しいやうな、恐ろしいので御坐います。どうして

でせう……。

「うすむらさきの花の姿やいかならむ……、匂ひやかなる御眉のあたり、物の給ふ御口元の笑こぼるゝばかり……」とは、それは京様の、電氣團扇とやらのゆるくめぐれる、御閨の中、絽友染のお掻巻の中の御夢！正身のさま、みそなはしなむには、さこそはおびえさせ給ふらむ。おほゝゝゝ。まあ〳〵京様、尚しばし、美しいお胸にふさはしい、想像の私に親しんで下さいませ。おゝ、いつもあなたの讃美遊ばす美の權化、さわらび様――ねえあの奥様を、世話にくだいた女房振それが私の仇姿と、まあ、さう思召してねえ、おほゝゝゝ。

「住み給ふ其城趾の町もなつかしければ……」と仰しやいますの？　何の貴姉、城趾とはいへ、高々二萬三千石の小城下、人口七千戸數千四百の田舎町、見るべきものも御坐いませぬ。

唯一つ……、竹束城趾、其昔、太田氏の手によつて築かれたと申す城は浮城！　昨年の大洪水の時など、町へは浸水もいたしませなんだが、南を繞る綾瀬川、北を流るゝ元荒川の、怒れる浪は町裏の田畝を泥海としました時、城山周圍の水田は皆浮て流れました。やれ寺の竹籔に田が一枚つかへたとか、某の芋畠の上は、そつくり稻の波だとか、嘘のやうでほんとのおはなし……。底になつてる竹の束が、稻のせたまゝそつくり浮いて流れたのでした。

さても此城、太田氏滅びてよりの三百年間は、高力青山、阿部、板倉、戸田、松平、小笠原、永井の各城主を經て、大岡氏八代居住の地……ぢやによつて當町名物の第一は蚊……。あら京様そんな不可解のお顔遊してさ、おほゝゝ。眞實ですよ蚊の多いこと〳〵、おきやしやな京様など、團扇なしに十分間もゐらしつたら、靑くなつておしまひなさるわ……。だつてねえ大岡様の御城下ですもの……。大岡はオホ蚊に通ずる名詮自稱ね……。殊に町の南にはカクヲと申す所まであるんですもの……。

「岩槻に過ぎたる者が二つあり、兒玉南柯と殿様の鐘」

——と唄はれたのは昔の事、南柯先生の墓苔に埋れて訪ふ人もなく、殿様の時の鐘は、非常の時に撞かれるばかり！ 意氣な岩槻甚句とやらの唄聲もめつたに聞えぬ、今の岩槻では、この縞の袴召した藪蚊の群が、昔の名殘りを示し顔……、

それはねえ京様、藪や木立の多い所なのよ。只今でもね、町の周圍には舊城の外廓が殘つてゐて、俗に土圍と申して居りますの！ 一望涯なき武藏野の原に、古杉雜木枝を交へ、熊笹千草生ひ茂つた一帶の圍み、靑く廻つて、其外濠の死んだ様な水溜りには、氣味の惡い蠑螈が棲んで居りますのよ。



東の方、元荒川に臨む一廓は、お林山と申しましてね、これが城山……。鬱蒼たる森は神秘の色をこめて、礎までこそ殘りませんが、曲輪のあとも濠跡も歷然として居ります。

春は曙、川邊の物見臺跡に立つて眺むれば、紫匂ふ筑波は遠く霞こめて、山より高い雲雀の聲、のどかに聞え、對岸の平野の堤には、雲か雪か、今を盛りの花も匂ひます。こゝの川下は、かしこきあたりの御鴨場、かの荻島に續く御獵場ですから、小鴨や鳰の群が緩く流るゝ春の

水に、浮きつ沈みつ遊ぶ風情は、ほんに京様にもお目にかけたいやうな……。私共が蕨折るべく分け入るのもこゝで、飛びたつ雉子に驚かさるゝも度々でございます。

夏草やつはもの共が夢の跡。朝、山百合の香をとめて、色ある露に裳裾を染め、夕には風に亂るゝ女郎花、招く尾花が袖の下に、松蟲あさる人もあります。此の草深い城趾と藪蚊！　ねえ、矢張藪蚊は町の誇りで御坐いませう。おほゝゝゝ。

一たい、此の町は、昔からして、此の地方産物の集散地、一六の市日は賣る人買ふ者、中々活潑に取引せられて、米、麥、木綿、甘藷や青物や、それ〴〵、額に汗して得た收穫物を車に積んできては金にかへ、肥料に代へする農家の人々で町は中々繁昌しますが、それも次第に凋落の、年々歳々、市はさびれてゆくばかりなので、町の人の額には、深い〳〵悔恨の皺がきざまれて見えます。それはね京様……、今は昔、舊日鐵線の鐵道が敷かれます時、大宮驛から、こゝへきて、停車場を設く計畫であつたのを、三百年來、太平の夢まだ醒めやらぬ頑固連は、すはや一大事！　我町の死活問題ぞとあつて、つまり、そんなもの置かるゝと、町の繁榮も富も他所へ運び去らるゝに違ひない、かまへて、一歩も町に入らしむる勿れと町議一決……、美事に汽車を撃退して了ひましたのよ。さる程に産物の集散場は汽車便のある地に奪はれてしまひましてね、さしもに殷富を誇つた岩槻市も、人影稀なる古城落日の態……、ほどでもありませんが、とにかく、大變寂しくなつてしまつたので、遲蒔ながら近頃、電車敷設の相談などが、ほつ〳〵聞えて參りました。

要するに此地は平凡な所で御坐います。物貨は安し水は清し、平凡な私等には、まあ適住の地でございますわ。

日比谷、上野の夕涼みも珍らしからず、櫻の艶なるダリヤの麗なる、白薔薇の清い色も、御目にあきた京様の、此の平凡な田舍町嫌ひとの仰せ、御無理とは申しませねど、いぶせき野末の醜草まじり、かくれさく野

菊の花などは、わざ〳〵玉歩を勞し參らす程の色香はござんせぬに…、あけてくやしき玉手箱のそれとは異ひませうが、逢はぬ昔がなつかしいとの御想ひおさせ申すのは心苦しい…。折角かうして永の春秋を、趣味ある文の友垣、結んでいただいた中らひの、お目にかゝつたが最期…、美しい虹の彩は、京様のお胸から永久に消え去つて、殘るははかない運命に泣く、私のうらぶれの姿ばかりが、痛ましい思出の種ともならうかと…。京様！　私はそれを恐るゝのでムいます。所詮は見ぬうちが花——これ金言——。寫眞をと仰しやるのをも、むげにお斷りする私の苦衷あはれんで下さいますわねえ。御立腹なさりやしませんわねえ。

どうぞねえ京様、かくれた野の花は露にまかせて…風にまかせて…たゞ荒るゝにまかせて下さいませな。露にすだく蟲のかごと、風に亂るゝ露の聲、折々毎にきこえあぐべきは千代かけて、草の命のあらん限りは…。

訪ふては下さいますな京子様…。

あなたばかりはきて下さるな…。　かしこ

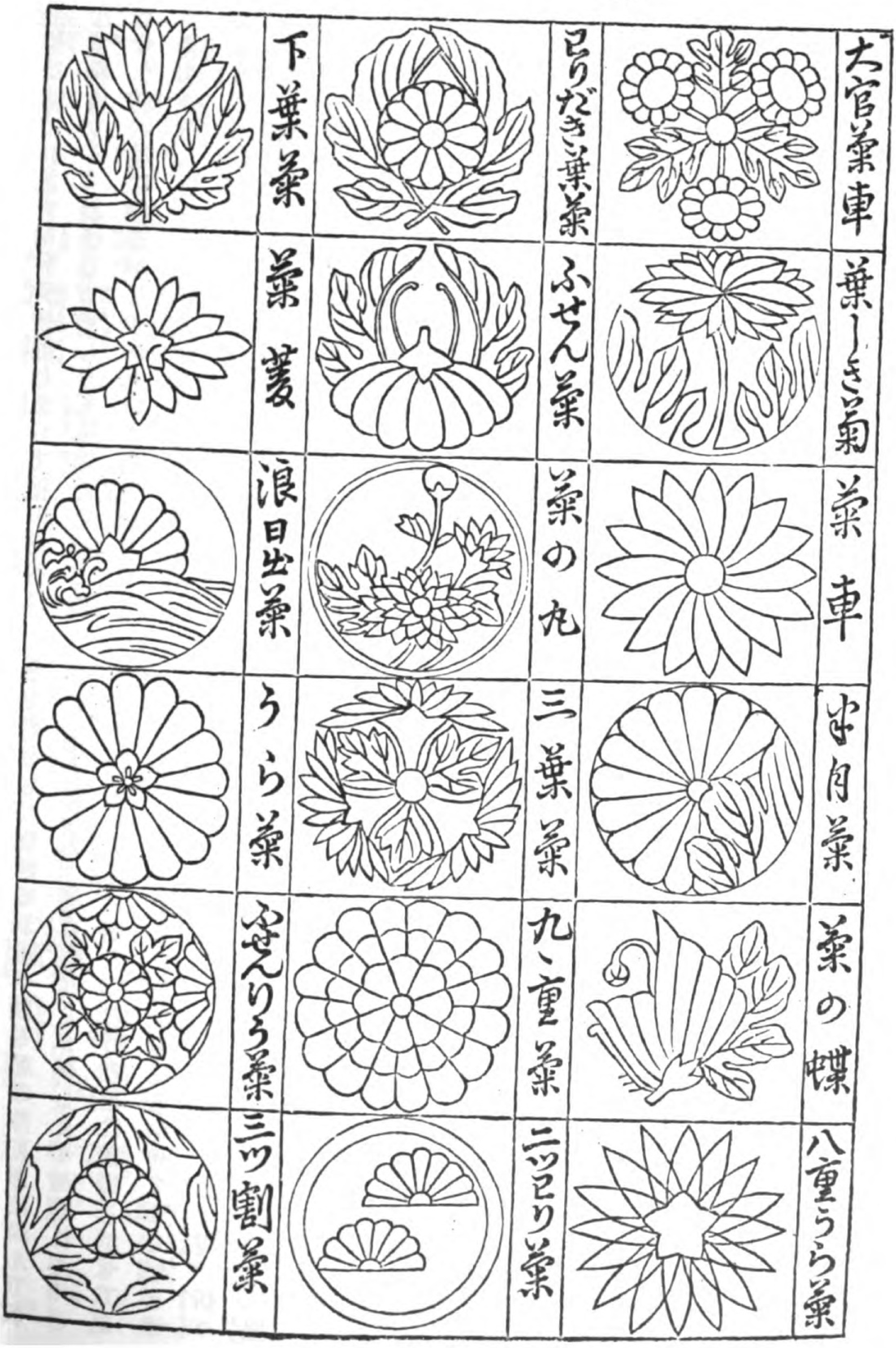
野菊の露より

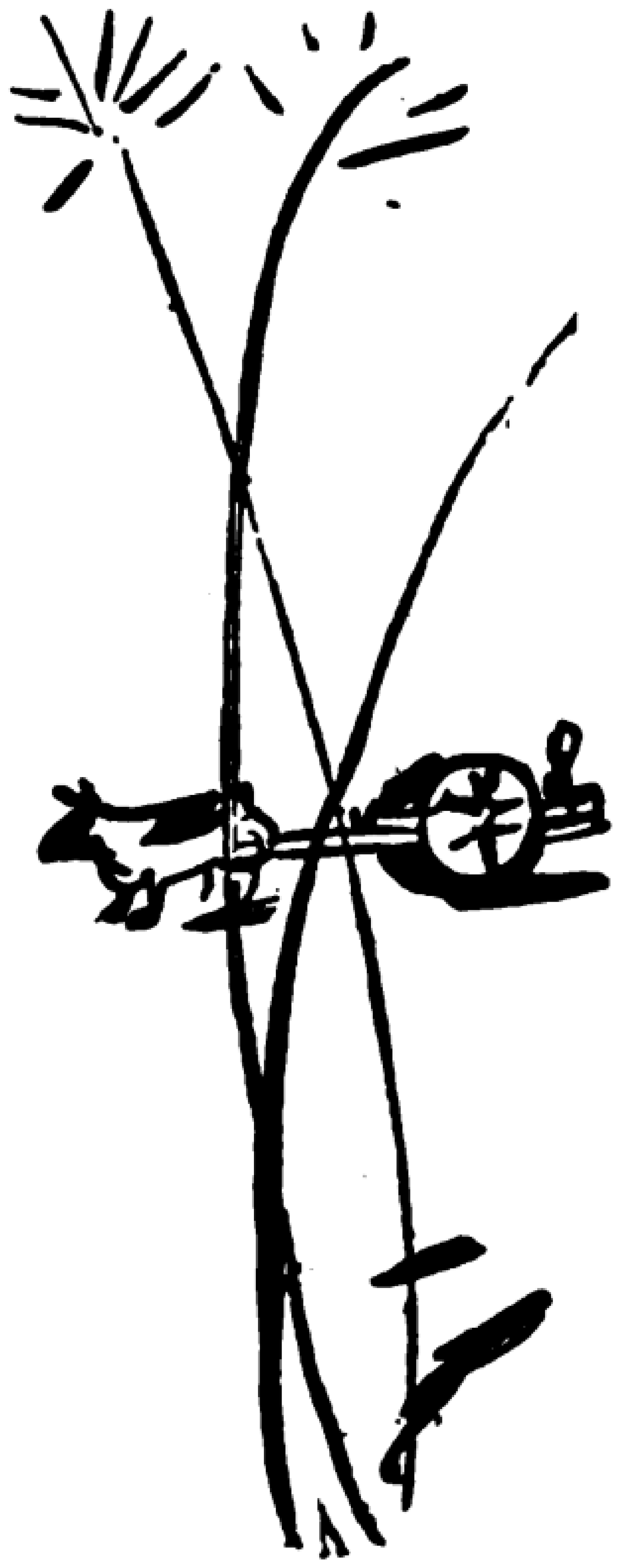
澤庵に茶づけでは濟されぬ

文明といふも、進步といふも、畢竟國の生活狀態を向上せしむるといふに歸するぢやないか、平たくいへば、多くの人が日々汗を流して働いて居るのも、つまる所安全な樂しい暮しを仕度いといふに過ぎない。即ち立派な家に住んで、好い衣物を着て、甘い物を食ひ度いといふのが人間自然の生慾である。又他の一方からいへば、社會が進むに從つて我々の活動は激しくなり、體力腦力を使ふことが段々酷くなる。その當然の要求として滋養物を多く食はなくてはならぬことは免れない、恰度機關の運轉が烈しくなればそれ相當の動力を要すると同じことで、今日の複雜な社會に活動する我々が、昔の簡單な社會に暮して居つた人と同樣に飽く迄澤庵に茶づけで通すといふ譯にも行かぬ。昔の人の流りに澤庵に茶づけで通せ、決して味い物は食ふなといふことになつたら働く者がなくなるかも知れぬ、それでは迚も社會は進步しない。

（道山醫學博士）

菊の意匠


大宮菊車
巴りだき葉菊
下葉菊
葉しき菊
ふせん菊
菊菱
菊車
菊の丸
浪日出菊
半月菊
三葉菊
うら菊
菊の蝶
九ゝ重菊
ふせんりう菊
八重うら菊
二ツ巴り菊
三ツ割菊



歐米印象雜記

内ケ崎作三郎

△古都ローマで見た各國婦人

夏未だ淺い頃であつた、恰度、復活祭の休暇を利用して、私は伊太利地方を旅行した事があつた。佛蘭西からアルプスの峻嶺を越えて伊太利の地に入つたら、何となく日本に歸つたやうな感じがした。それは伊太利の山のたゝすまひ、川の流、野邊に亂れ咲く草花や緑に繁る森の姿が日本のそれに、似て居たからで、辷るやうに走る汽車の窓より飽かず眺めて懷しい思に耽つた。でミランよりヴェニスに至り、更にヴェロオンナ、フロレンスよりネープルスに南下し、夫れより北上してローマに至つたが、時は恰も世界的大祭日――復活祭であつたから、ローマは世界各國の旅客、觀光團、新婚旅行者、學生團體等の人々に依つて充たされ、古の藝術の都は、今歡樂の街となり、典雅優婉なるローマの繪畫や、建築に憧れて居る各國の人々は、空に聳えた寺院や、樹陰に隱れた美術館、灰色の街の中をば三々五々隊をなして歩いて居た。斯る群集の中に英國の婦人は、際立つて私の眼に觸れた。それは恁うして華美を極め、粹をこらした各國の婦人の中に、獨り英國婦人のみが極めて質素な服裝をして超然として居たからであつた。

△電車中の姫君

由來貧しい國の婦人程却つて華美な服裝をして居るやうである。比較的貧しい南歐の婦人が却つて富める北歐の婦人よりも華美な服裝をして居るし、世界の最貧國ともいふべき日本の婦人は、服裝には中々贅澤なやうである。我國では、電車の中や、往來で見る女は、

服裝からは其の女の階級の判斷が殆んどつかない程である。

或る日の午後、空色のパラソルに、水色のスカーフ着物は野暮な人間には何といふのか分らない程綺麗で、粋な鼻緒の空氣草履を輕く踏むだところは、恁う見ても華族の令孃か、さもなければ倉の中には黄金の唸る程ある金満家の娘としか見受けられない程着飾つた女が、須田町で電車を乘り替へて、巣鴨行のものに乘つた。乘客の視線は一時に此の女に集つた。やがて巣鴨に電車が止まると、女は朝の割引切符の片切れを車掌に渡して下りた。はて不思議と見て居ると、「お、お稻、今歸つたか」と女に言葉をかけた人がある故、側を見ると、一人の車夫であつた。聲かけられた女は顏を紅らめながら「お父さん今歸りました」といひもあへず、スタ／＼と彼方へ走り去つた。

華族や金持の姫君ではなく、華族や金持を乘せて曳く車夫の姫君であつた。そして朝の割引電車で下町邊の會社へ通ふ女子事務員でゞもあつたものと見える。

△世界に一頭地ぬいた婦人

獨逸の婦人となると、娘時代より既に母親氣質があるやうである。そして體軀は一般に肥大せるものが多く、尙ほ見識の高い事と、精神の修養されて居る事は、他國の婦人の遠く及ばざる所である。殊に勤勉の美風のある事は、英國の婦人と共に大に世界各國の婦人に誇るに足ると思ふ。

但し英國の婦人は一體に、つゝましくて、晩餐の時などは、ホーク、スプーンの上げ下しさへ音もたてない位であるが、之れに反して獨逸の婦人は中々快活で、且つ無遠慮な傾がある。殊に獨逸でもプロシヤの婦人は甚しく無遠慮なやうである。

私が獨逸に居た時、知り合の獨逸人からテイー、タイムに招かれた事があつた。主人は大學を卒業して辯護士を開業してゐる人で、家族は主人夫妻と、二人の娘と、四十ばかりになる獨身婦人とであつた。家族は皆な日本贔屓な人達だから、日本の留學生などが絕え

ず出入すると見えて、招かれた席に私の姿が現はれると、細君と、矢張り其の席に招かれた二人の婦人は、日本の學生から敎つた怪しい口つきの日本語で私の名を呼びました。そして席に着くと、婦人達は早速私をつかまへて、日本の文學や、美術の事などを尋ね初めた。而かも一人の婦人と未だ談の濟まない中に、他の婦人が又側から談しかける、また他の婦人が談しかけるといふ有樣で、獨逸婦人の無遠慮なのには驚いた。



△樂しきティー、タイム

しかし其の家はライン河畔に建てられてあつて、河流を上下する汽船や、其の間を縫ふやうに走る小蒸汽が手にとるやうに見え、遙かに大西洋に沈み行く夕陽が、微かな殘照を伯林の市街に投げ、灰色の大都會が紅に暮れ行くのを見ながら、カツフヒーを啜つた時は、實

に得も言はれぬ愉快であつた。

歐米諸國を通じて一般に家庭にはティー、タイムといふ日本なら「お茶の時間」といふべきものがあつて、午後三時頃になると、自分の家庭に親しい人や、珍らしい客などを招いて家族と共に紅茶や、果物などを食べながら樂しげに談笑しつゝ、團欒の中に親子夫妻の愛情、また友情などを厚くする事になつて居る。これは誠に好い習慣であるから、日本の家庭にも是非勸め度いものである。

△勇ましき巴里人

佛蘭西の婦人は英獨の婦人に比較すれば服裝や、生活が一般に派手なやうである。殊に巴里の市街を徘徊して居ると、顏に白粉をコテ〳〵と塗り付けた婦人の多いのには驚かざるを得ない。英國では白粉を塗る者は大抵如何はしい女にきまつて居る。さもなければそれに近い賤業に從事してゐる者で、一般の婦人は決して之を用ゐないやうである。つまり一般の婦人が質素なのと、また婦人が、自己の與へられたる自然の容貌を傷けない爲の心懸けからであらうが、佛蘭西の婦人となるとする事が粹で、心も從つて浮き〳〵して、どちらかといふと、節操といふ感念が一般の歐洲人に比して弱い樣である。故に巴里には道德上の犯罪、法律上の犯罪で婦人に關する事件が殊に多いやうである。そして此等の事件は比較的敎育のない下級社會にあるのではなくて、中流以上の社會に多くあるのを見れば如何に巴里の婦人が墮落してゐるかゞ分る。

巴里の婦人が以上の如くであるから、男子も亦た其んな樣にニヤケて居るかといふと、これは想像と正反對で、中々勇氣があつて男らしい男が多いやうである。先達も新聞に見えたやうに、巴里郊外に起つた飛行機墜落の大慘事なども、全く彼等の勇猛心より生じた大慘事である。巴里の郊外に行つて見ると、大勢の男子が大危險を冒して飛行機に乘つて居るのを見受ける。これは一例で、男子は一般に勇氣に富んで居るやうである。實に不思議な現象である。

△意外な米國婦人

歐洲大陸の婦人を見て次に米國の婦人を見た時は、何となく異様な感じがした。私が日本に居た時に想像した米國の婦人とはまるで正反對であつた。米國は女尊男卑の國で、女は男よりも遥かに威張つて居ると聞いて居たが、實際は全く正反對で、電車の中などでも、老婦人は兎に角、若い婦人が乘つたからとて、男子は決して席を讓るやうな事はしない。米國は一般に生活費の高い處で、男子が一家を經營するには多大の費用を要するから、男子は余程働かねばならない。其故米國の男子は活動に肉體も精神も疲れ果てゝ、顔に何處となく頽廢の色が見える。之れに反して婦人は體軀が大きく、肥滿して丈夫であるから、何も電車の中で疲れた男子が、丈夫な婦人に席を讓る必要は全くないのである。米國は女尊男卑だなどいふ人は、全く米國の社會の眞相に通じない人であらうと思ふ。そして米國の婦人は直に佛蘭西の婦人の流行を模倣して居るから



服裝などは中々派手で、殊に東部諸州の婦人は殆んど服裝の粹を極めて居るが、然し植民地だけあつて、色んな人々が入り込んで居るから、婦人が歐洲大陸の婦人に比して一般に思想や、智識が低級なのは已むを得ない。

△家庭と理化學の應用

歐米諸國人の家庭を覗いて見て驚くのは、瓦斯や電氣、其他理化學の應用の盛な事である。一體歐米諸國殊に米國などは下女の給料が中々高い。先づ一人の下女を傭ふには、一ケ月三十弗（日本の六十圓餘）位を出した上に、三度の食事をさせるから、一人の下女も容易に傭はれない。そして米國あたりの下女は日本の下女のやうに、主人が朝から晩まで自由自在にコキ使ふ事が出來ない。日々の定まつた仕事の外、臨時の仕事でもさせる場合には、特別な報酬を與へなければならない。そして下女は大抵自宅から通勤するので、一日の定まつた要事を濟ますと、サツサと歸つて仕舞ふやうな有様であるから、一人位の下女を傭つたからとて、家內の掃除などが中々行き屆かないので、自然と人の力を借りないで、大抵の仕事を濟ますやうな仕懸けにして置くのである。で、大抵の家庭に於ては、室內の掃除などは電氣か若しくは瓦斯で掃除するやうに出來て居る。例へば室內の隅には、瓦斯管、若しくは電氣などを通して置いて、一寸ネヂを廻はして管內に瓦斯や、電氣を通ずれば、室內の塵埃は其の瓦斯管や、電氣管などに吸ひ取られて、室內は奇麗に掃除されるやうな具合になつて居る。またキツチン、ルーム（料理場）なども多く瓦斯や、電氣の力を借りてするから、主婦は大に勞力や時間を除く事が出來る。そして主婦は他方面、即ち子女の教養、讀書、修養とかいふ方面に力を注ぐ事が出來るから、自然と人格が高尚になる次第である。

△新聞趣味の低い婦人

之れに反して日本の婦人は、朝から晩まで庖丁や、

雑巾を手にして薄暗い台所で、バタバタ動いて居るから、色も青白く、身體も精神も何となく疲れきつたといふやうな有様である。台所の什事以上、子供の教育も碌々出來ないし、勿論讀書をして修養するなどといふ考もなく、やつと毎朝の新聞の三面記事を讀む位で三面や一面の政治や、外交、社會、文藝も知らなければ、甚しきは内閣の更迭なども、他所の國の出來事位に一向御存じない様な有様で、一等國の婦人として誠に心細い次第である。



一等國を代表する現代の日本の男子が、無智、無學な低級思想の婦人と同居して家庭生活を營まなければならないといふ事は、最も心苦しく感ぜらるゝ事であらう。

來るべき將來の國民が、かゝる低級思想の母の遺傳を受けて、皆な低能兒ばかりになつたならば、一等國所ではなく、却つて國家は滅亡の危機に陥らねばならないやうになる。

△世界中の野卑な服裝

歐米諸國の婦人を觀察して來た私の眼が、一度び日本の婦人に觸れると、全く意外な感じをせずには居られない。歐米の婦人を其の家庭に訪問した時の感じと、日本の婦人を訪問した時の感じとは、全く鮮かな差別があるやうである。歐米の婦人は、其の時の話の題や、其の時の態度が全く日本の婦人の時とは違つて居る。歐米婦人の話の眼目は大抵文學、美術、音樂などか、其れに類似した話で、あまり自分の家庭の事などは話さないやうである。また話をする時の態度は、何處となく嚴格な處があつて、決して其の態度を亂さないやうである。之れに反して日本の婦人は、進つて話するは大抵家庭の出來事か、左もなければ愚痴を零すのが多いやうである。また其の態度が如何にも家庭生活に疲れたといふやうに見える。殊に不愉快に思はれるのは、日本の婦人の服裝があまりに挑發的なる事である。夏の電車などで見る婦人の中には、薄い襦袢の上に、透き通るやうな麻の單衣を着て胸を展げて白い肌を見せ、殊に麻の單衣から紅い蹴出しが浮いて見えるあたりは、全く挑發的なものであつて、また婦人自身の大切な肉體や、節操を防衛し難い、最も危險な服裝である。こんな服裝は速に改良しなければなるまいと思ふ。



若き人々

白菊

草深き山の手とはいへ青春の血の漲る處女の集りし私立裁縫學校ですもの虚榮の風にあふられる方も中々少なく御座いませんのよ其の虚榮にもいろいろございますから可笑しうございますわ私は只同じ窓にまなぶ友のいくたりかを御ひき合せ致しませう。

△百合子樣

お名を承りますといかにもしほらしく女らしい女のやうでございますけれども實際は大違ひ、誰やらが「今度演藝館にでた照吉と御姉妹のやうね」とささやかれたのも此の君の事ですわ大層な自尊家で裁縫の時は我膝中にありといふようなお顏していらしやるのよ始終私達凡人のみてもわからないような洋とぢの本裁板の下に潜ませお晝休の時など丁度辭書のような本開いてあたりの人にお講義なさるのでいらしやりたての方なんか

「あの方先生でいらしやいますの」

とよく仰しやいますわそれもその答救世軍が大道に演ずる如く



手を振りお顏をいがめおからだをゆすぶつて遊しますので私達なかまは

「ほら又地震がはじまりましたわ」

つてよく申ますのあたりにひゞけるんですもの電車になんかお乘りになるといつも英詩なんかひろげていらしやるんですつていつか學校きつてのすつぱぬき家といはれてる芳子樣が折惡くおのり遊したので百合子樣少からず御迷惑遊しましたつて。その時例によつて例の如く英詩の本ひらいて乘者の顏と等分に見ていらしやるので芳子樣ゐからず

「それ何でございますの」

と仰しやつたら彼の君少しほゝをお染めになつたそうですがそこは自尊家さあらぬ体にて

「是れ、――あの、やつぱり外國の詩でございますの」

ですつてホヽヽヽ痛快ですわれえ

△貴美子樣

此の方は去る方の人妻とおなり遊しましたけれど虚榮の心なか〳〵強く嫁らしやるについて面白いお話がございますのよ某日仲よしの百合子樣と二人三越においでになりましたのそしておついの羽二重のおみハびお求めになりましたのは結構ですけれどふと寫眞部の前にいらしやつた時

「うつさなくて？」

「えゝ」

御相談一決お二人とも寫眞部の中にお入りになりましたの

そして其のまゝおうつしに なればいゝのに日頃の御病氣かでましたのかこともあらうに振の袖おもき三枚がされ、つゞれ錦のおみ帶、胸に輝く金ぐさり、すつかりお借り遊して天晴れの令孃ぶりおうつしなさいましたの 私どもとうにある方のおしらせで存じておりますのにしろやしらずや彼の君はゐましげに

「これ先日うつしましたの」

つて皆さんにお見せ遊すの何にも御存じない方は

「まあお立派ね」

「いゝお召だわねえ」

つておほめになるのでおか しくつてともすればこゑの出そうなのをこらへてゐる苦しさ

顔見合せるとふきだすので敗さんと二人下むいていましたわ

かくともしらぬ年上の方は

「御姉妹が多いと仰しやるに皆 樣にこうなさるのはお母樣もお大抵ではありませんねえ」

「えゝそれはもう‥‥」

私達おかしくていたゝまれずとう〳〵逃げだしましたわ

その後ありて幾日今の御良人樣から御縁談がありましたので



およしになればいゝのに早速お振袖の寫眞を先方にお渡しになつたので向ふのお姑樣も此位なら仕度も あるであろうしと善は急げである日お見合をおすませになりましたのその場所が三越と申ますから面白うございますわねえ吉日をゑらび、式の日迄きまりましたが夢のようなお振袖はいくらじだんだふんだつて叅りませんので少なからず小さき胸いためていらしやいましたあの寫眞お目にかけたからには式のだけでもお振袖でなくてはとお母樣のお苦心の 私一通りではなかつたそうです

とにもかくにも出來ましたからよございますけれどできませんでしたら大變ですわねえ

あゝつゝしむべきは虚榮の心かな

△敏　子　樣

お年は廿の上四つ五つこしていらしやいますけれど其あでやかさどうしても二十位にしか見えませんわ

「お若いのねえ」

つて申ますと得意の笑は兩の頬にあふるゝ計お化粧のお上手なるまゆはへ際、もみあげにいたるまで人知れず心いためていらしやいます

此の君は何時かかう言つて居ます

「私 外交官でなければ嫁く氣になれませんわ」

「お背があまりお高くもないのに洋装遊したらさぞいゝでせうね」とは芳子様のかげ口

三度のお食事よりも三越がすきで何でも

「これ三越でもとめましたの」

と仰しやいますのお休時間に老木にもたれとほき佛蘭西の都なる巴里を夢みて一人ほゝゑんでいらしやるのは此の君でございます

何でもこの春三つ違のお姉様がとほく南米の地においでになりましたとかでよき縁もがなとお思ひ遊すのか雑誌お目にかけても何ふの某何々家令嬢といひます口絵なんかすん〲おくりになつて新郎新婦何ふといふのがありますととみかうみつく〲御らんになりましてはふとき息さへおもらしになりますのでいつかは新郎新婦の君といふ尊號をたてまつりましたの・・・・尚此の方のお従兄様は外交官とかで現に今任地に職務をはげんでいらしやいますとか

△みさ子様

終りにのぞんでさつぱりした方おひきあはせ致しませういつも油けのないおぐしをふつくりと束髪に遊し白粉なんぞ薬にしたくもなく少しそり身になつて袴のもすそかるげにすつすつといらしやるスタイルなか〱ハイカラですわ目白を中途でおやめになつたんですつて私ども女學世界だいて



「内藤さんのがでてますわ」

「野菊さんのは？」

「内藤様てばこんどスヰートホームといふ本ができたのね今月のに廣告してありましたわ」

「あら、そう早速買つて頂くわ」

こうして私どもかたり合つてる時みさ子さんは一人冒険世界よんでほゝゑんでいらしやいますの私がつい口すべらして

「それほんとの事ばかりじやありませんて。その通りだつたら大變ですわ」

つて申ましたら

「うそでもいゝの、私すきなんだからそんな柔和な文より血の湧り肉のおどるやうな壮絶快絶の方がどんなに面白いか知れませんわ」

ホ・・・・おこられてしまひましたわいかに押川先生とて女にしてかゝる熱心な愛讀者あるとは御存じないでせう私が男だつたらとはよくおもらし遊すことば

ずいぶんよくかきちらかしましたわねえ之でもう失禮いたしますわ又なりがありましたら面白い私どもの一日をおはなしいたしませう。さらば皆様健やかにおはしませ

秋の家庭料理

△日曜日

一　松茸飯　　二　松茸豆腐　　三　色玉子

(一)松茸を濃き鹽水につけ置き手にて細くさき醤油にてよく煮米一升に醤油一合酒一合位に前の松茸を入れて炊く。

(二)鍋に湯を沸かし鰹節と醤油を程よく入れ前の樣にしてさきたる松茸と豆腐を金杓子にてそぎながら入れて椀に盛る。

(三)玉子を十個以上ゆで幾度も水をとりかへ皮をむきて黄味と白味と分け白身の方は鹽を利かせ黄味の方は砂糖を利かせて味をつけ置き、程よき箱の底へ穴を明けてよく水のあくを抜き其四方へ美濃紙を味淋でしめして敷き其中へ前の玉子を白味から先に裏漉にて漉しながら入れ黄味も前の通りにしてよくならし蒸籠に入れて十五分間位蒸す。

△月曜日

一　ビフテーキ、附合せジヤガ芋。

二　小松菜の胡麻びたし。

三　蓮根の酢煮

(一)牛肉を五分位な厚さに切り兩面へ鹽、胡椒をふりかけ。フライ鍋にヘットを溶かしてよく煮立ちたる時、前の肉を入れて火の通るまで兩面を燒く附合せはジヤガ芋を二、三分位な輪切りにしてゆで柔かになりたる頃、湯をしぼり鹽を少し入れて粉のふくまで煮て前の肉に添へる。

(二)小松菜を鹽湯にてゆで黒胡麻をよくいりて擂鉢にてすり、醤油砂糖を入れて又すり前の菜を切りてまぜる。

(三)蓮根を薄く切りて一旦ゆで水氣を去り、酢と白砂糖と少しの鹽を入れて煮る。

△火曜日

一　烏賊の照燒　　二　鳥の吸物　　三　さつま芋餡かけ。

(一)丸烏賊の背へ斜に十文字に庖丁を入れ醤油味淋を煮つめたる汁を幾度もつけながら燒く。

(二)は鳥の柔かき肉をよくたゝき、メリケン粉と玉子と混ぜて小さき團子とし鰹節の煮汁の中へ醤油を少し入れて前の團子をあまりかたくならぬ樣に、ねぎを細かくきざみて青味に入れ椀に盛る。

(三)はさつま芋のあくをぬき、白砂糖と鹽にて煮、葛にて餡を作りてお芋にかけて出す。

△水曜日

一　鰯のかばやき　　二　しらあへ　　三　田毎豆腐山葵

(一)鰯を開きて骨をぬき醤油、味淋を煮つめたる汁をつけて燒く。但くしにさせば猶よし。

(二)人參とこんにやくを短冊に切り鰹節と砂糖と醤油をきかせて汁のなくなるまで煮てさまし置き、別に豆腐をよくしぼりて水氣を去り白砂糖と鹽少し入れて擂鉢にてすり前の二品をあへて皿に盛る。(豆腐

は十人前に二丁位。)

(三)豆腐(絹漉ならば倚よし)を二寸位に切りてゆで別に葛を溶きて煮汁と醤油と少しの砂糖とを入れて餘り濃くならぬ様に餡をこしらへ、前の豆腐を椀にうつして中央を匙にてくりぬき其孔へ玉子の黄味を入れ上から熱き餡をかけ山葵を添へて出す。

△木曜日

一 茶碗蒸　二 鰆の味噌煮、附合せ、新生姜

(一)玉子二個を三人前位の割にて先、煮汁をこしらへ、醤油をつけ玉子をよくかき混ぜて種にはあなごのかば焼き松茸、栗、三葉等を入れて十五分間位蒸す。

(二)鰆を切身となし、甘味噌のすりたると味淋と少しの醤油とにて煮、皿にうつす、新生姜を形よく切りて添ふ。

△金曜日

一 湯豆腐　二 ホウレン草のフライ　三 鱚の刺身

(一)鍋の底へ板昆布とイナ(魚)を敷き其上へ豆腐を入れて中の温まるまで煮、醤油、砂糖、味淋、煮汁を程よく煮たる汁をそへて進む。

(二)ゆでたホウレン草を細かく切り、フライ鍋にバタを溶かしてよくいため、塩胡椒にて味をつけ、其上へ半熟玉子をのせて出す。

(三)鱚を片身卸となし、皮を去り、刺身庖丁にて小口より斜に薄く作り形よく重ねるなり、褄には大根のかつら、(初に皮をむき、刺身庖丁にて皮をむく様に薄くそぎて小口よりきざむ)と黄菊と大根卸の上に山葵を添ふべし。

△土曜日

一 鰯の酢入り　二 五もく豆　三 松茸のバタ焼、卸生姜

(一)鍋に湯を沸かし其中へ醤油と少しの酢にて味を附け鰯の頭の去りたるを入れて煮立ちたる時火よりおろし、深き器に盛て卸生姜を添ふ。

(二)大豆三合位に人参、蓮根、昆布、木くらげ、の類を細かくきざみて少しづゝ入れ、稍煮へたる頃、砂糖を入れ、充分柔かく煮へたる後醤油を入れる。(但深き鍋にて半日位、弱火にて煮る。)

(三)松茸を薄く切りて両面にバタをぬり、あみにてよく焼き、温き中に食す。

(完)

〇困難は到處にあり

英國のある老人が、その養女の結婚する時、一本の箒と、鏡と、刑場のヤソの像とを贈つて、其れに手紙をそへて、『願くは此の箒を携へたる姿を寫眞にとれ。これは勞働の印にして、勤めて怠らざれば、惡念を萌すことなし。又た朝夕おのが身に過失なきやうにとこの鏡に照しみよ。されば人と物爭ひするが如きことなく、家内圓滿に治まるべし。最後にこの耶蘇執刑の像を胸にかくるを怠るべからず。少くとも輕き十字架、即ち多少の困難はいたる處にあり。最良の家庭にも尚ほ此は免れ難きものと記憶せよ』と言ひ與へたりといふ



入水せる我が姉

松の露

つくづくと軒の雫をながめつゝとは誰やらの歌であつたが此の頃の樣に毎日〳〵斯う降り續いては何をする氣にもならず裁縫も差當り冬物でゝもなければないのでこんな時にこそと二階の書齋にはいつて、色々な本を取出して見、本といつた處が書棚に一つぱいあるのは英文の許りで私にはさつぱりわからない、そこで戸棚の古い本箱から國文のものばかりあれこれと出して見る中にふと眼についたは松の雫と題する亡き嫂上の遺稿であるもとより渺たる小冊子ではあるけれど私には忘るゝ事の出來ない大切な形見である。

卷頭第一にあるのはお懷き嫂上が溫容玉の如き其の面影、凝乎と見つめて居ると何か物を仰有りさうなお口元、あゝお姉樣私は肉身の妹ではありませぬ、けれど緣あつて姉と呼び妹と呼ばるゝ上からは姉上の如き潔き心の御方を私は如何して義といふ字が用ひられませう私は何時迄もいつ迄も眞實の姉上樣とお慕ひ申して居りまする不肖な妹とお叱り下さりませ。」

あゝ思ひ出づれば早や一と昔廿五歲を一期として、あはれ逝きましゝ姉上樣、女廿五といへば花爛熳の奧樣盛り殊に姉上にはいとほしき愛兒が三人迄あるものを、健なる御身をもつて、我から命を縮められた、愛する良人のため、其身を贄と捧げられた貴く悲しき物語りは、女子の節操頽廢せんとする今日、好箇の清涼劑となるであらう。

姉上はもと、德川幕府の本陣たりし○○地方の素封家の某氏の長女で、此▲▲家に嫁がれしは未だ蕾の春

淺き十六の年であつた。今より數ふれば廿年の昔、其頃の習ひとて別に深き教育はなけれど、女一通りのわざはもとより、祖父の君より受け傳へられた敷島の道に明るく、四季折々に詠み出で給ひしもの數百首に及びしを集めて、紀念の冊子としたのである。

お舅樣は一郡の長として名望高く、兄上は國産の貿易に從事して敏腕の名人に知られ、お姑樣は勤勉にして賢、姉上は年若き身を持つて舅姑に事へ、多くの弟妹を愛し婢僕を指揮して至らぬくまもなく、「御年若いのにほんとに感心な御方樣と、郷黨間の褒め者であつた、姉上は三人の女兒を擧げられて一家増々睦じく和氣靄々として歡樂の聲常に絶へ間なかりしに、姉上廿三歳の秋お舅樣俄の煩ひに逝かれてより、家政改革の事起り、兄上は母樣と妹二人を殘して、弟等と共に居を東京に移し一家の、内政擧げて姉上に委ね、自分は商業の手を京濱阪神の間に擴め東奔西走、席暖まるの暇もなき程であつた、爾來姉上は鷄鳴に起き、夜半に寢ね、家計、商務、教育、炊掃、裁縫に至る迄も弱き一身に負擔して、敢て重しとせず毫末の亂るゝ事なく切り廻はされた、其上に姉上はかゝる繁忙の間にありて、思ひを國風の道に寄せ、良人待つ間の詠草は故萩の家先生の許に送りて、常に添作を乞はれつゝありき、あゝ如何にやさしくけなげなる姉上よ、世の常の婦人ならば廿三四の盛りの花、三越、白木と流行に浮身をやつす年頃「あらそんなタイプは昔だわ」と現代の奥樣方は仰せらるべしされど若きマダムよ聞き給へ、かゝる婦徳全き婦人ありてこそ、男子は心安くそが驥足を縱横に、己が職業に對して伸ばす事を得らるゝなれ、此力こそやがて家を富まし國威をひろむる礎となるを知り給はずや、情緒纒綿花の如く裝ひて、疲れたる男子を甘き泉に醉はしむるのみが女の本分ではありませぬ、かくて家運隆々、世は長久に春ならんとして、好事魔多く、其翌年姉上廿五歳の春も暮れて世は青葉に包まるゝ頃、兄上は偶と腦脊髓を病みて身體不隨となりぬ。姉上の驚愕如何ばかりぞ、晝夜病床に侍し、衣帶も解かず、心身を碎きて看護されしかど、

病勢進むのみにて、其年十一月寒き風身に染む朝な夕な病愈々革りて遂に主治醫より死の宣告を受くるに至りぬ。名ある博士に診察を受けしも數回、何れも不治の難症と見放さる、今は人爲の施すべき術もなく、只此上は姉上は食を斷ち己れ身を代りてと神佛に祈願を籠め給ふ兄上の命は明日とも知れぬ風前の燈、今や正に明滅せんとす、危篤の報に驚きて上京し給ひし母上は言はずもがな、弟妹親戚一族打集ひて一家暗雲に閉さる此時、姉上は意を決し給ひけん、三歳の幼兒を抱き觀世音に詣づるとて家を出で、車を驅りて高輪に到り、竹芝の濱に身を投じて良人の命に代りしは、霜月廿六日寄ては返へす白浪に、弦月ほのかに照りて千鳥しばなく淋しき夕べなりき、あはれ短かりし春秋や、ひたすらに良人を思ふ一筋に、足手まとひの稚兒諸共、品川の藻屑と消えし姉上の心や如何に、嗚呼誰かよく這般の消息を解するものぞ。



飯田町の家にては兄上は病篤く姉上は夜更くる迄歸り來らず、一家は上を下への大騒ぎ一方兄上の看護に一方姉上の捜索に人手を別ちて求むれども、姿見えず、其夜半昏々として死せるが如き兄上俄と眼を開きて、水を呼ぶ。

「おゝ氣がついたか確固してお呉れ」

「兄様御氣を確かに」

前後左右より枕元に取縋らるゝ兄上は、妹の差出す水を手を伸べてグッと一息

「おゝお前手が動かせるではないか」

「あら眞實に不思議ですね、如何して急によくなつたのでせう」

「兄様お足は如何です」

迭代りにせき込みて聞く、足も此通りと、兄上は布團の上に起き直らんとし給ふに夢かとばかり一同驚喜の眼をみはりて

如何したんでせう、不思議な事があるものですね」

異口同音に叫ぶを兄上は靜かに制して

「とし子は居ないだらう…」

此言葉にはつと家人は吐胸を衝き、今尚ほ姉上の行方知れぬを何と答ふべき？と家人等しく顔見合して誰も無言兄上はハラ／＼と落つる涙を拭ひもあへず

「とし子は…嗚呼とし子は死んでしまつた…」

「えッ如何してゞす、何故姉樣がなくなつたんですか」

「あれは私の代りに命を捨てゝしまつた明日は皆で高輪の濱へ迎へにいつて呉れ」

「お前如何かしておいでだね、としが如何したといふのです」

母上始め一同不審の眉ひそむるに、兄上は流るゝ涙滂沱として

「今とし子が歸つて來てさう言つたのです私のよくなつたのは皆あれの御蔭だ喜んで呉れ」

嗚呼姉上が其身を捧げて良人の命に代らんと祈りし眞心、神もあはれとみそなはしけん、さしもの大患頓に癒たるいぶかしさ、地下の靈如何に嬉しとやほゝ笑み給ふらん。其昔相模の海に身を投じたる　橘　姫の故

事にも似る事にて常識を超越したる物語ではあるが、世には理外の理としてかゝる例もなきにしもあらず、正しく姉上は肉體に死して靈に生き給ふ、其後も度々兄上の夢幻に來りて國風を和し、世の出來事につき報ずること屢々であつた、いふまでもなくこれを今日の常識より論ずれば一も二もなく、無分別の骨頂にして、病夫を捨てて獨り自から自殺の罪を犯せる、白痴女の亞流として大に排斥さるゝは勿論の事でありませう、

私はこれに對して一言の辯解も致しませぬ。それを辯解するは時世を無視する事、又文明の光輝を非認するの業でありますから、かゝる世論の下には姉上を唯一種の主觀に囚はれたる精神病者と見るの外はないでありませう。併し私は私のみひそかに姉上のこゝろを神聖なものとしてをります。

大和女の武士道を發揮したる潔き死!、世には同情の涙に咽ぶやさしき君もあるべし、姉上生前の詠草數ある中に兄上病中折にふれたる述懷一二を

定めなき世の浮雲も今しはしやかてさやけき月を見るらん

くれて行く秋のあはれをしのへとやなく音淋しき蟲の聲かな

おもはしとおもひかへせといかにせむ又もせきくる我涙かな

又兄上の病中庭前の椿風もなきに僅一輪を殘して落花せるを見て兄上いたく氣を痛めしかば

植置きしあたら椿の花は散れと葉かへぬ色のかけそ久しき

即座に讀みて慰籍したるなど機智ある働きである又左の三首は姉上が辭世とも見るべき歌にて一七日の夜兄上の枕邊に來りて詠み給へるもの

吹風によしや散るとも松の葉の深き操はかはらざりけり

限りなき沖つ白浪月ながら岸の岩根によりてくたくる

いまさぬをしのひかねつる折々に母の形身とみをかへりみよ

兄上も亦姉上のすゝめにより折々の詠草少なからず

姉上のために病癒えたる折。

まほろしに語りしことは殘れとも消てあとなき人のおもかげ。

又姉上の行方知れずなりし時一同いぶかしく或は恨みもしたりしときゝて

あたなりと恨みし雨はなか〳〵に花まつ時のなさけなるらん。

幼兒を伴ひて散歩しける時

我母に似たりといひて追ふ子とも知らでや人の道いそくらん。

秋の夕なき人の墓前に詣でゝ

折々にとふも悲しきくさむらに蟲の鳴く音をひとりきくかな。

姉上が死を悼みてそが三七日の靈前祭に知人より手向けられし歌

波の上に影はけぬとも大空に萬代かけてブあけの月　清丸

せこいためおもひ深めて海底に身まへしつめしあはれ其妹　胤平

高輪の五百里の波をふみ分て入りにし君の跡そかなしき　義顯

有明の月は波間に消ゆるとも君がみさをはあらはれにけり　丘之助

靑やぎの絲より散りし白露は再びはすの上におくらむ　直文

あとに殘る子等をしのひて死出の山路度君はかへりみるらむ　つる子

かきあつめ千代の寶と殘してよ操正しき松の落葉を　養保子

白浪と共に消えにし其妹のいさをは今に殘りけるかな　靜子

時ならぬ松の落葉のこゝろをば千代につたへて風も吹かなむ　茂子

風に落ちし松の二葉を見さりせは深きみさほを誰か知らまし　弼生

咲きぬるをまつ間なかきにくらへては花の散るこそはかなかりけれ　　とし子の母

此外詩文數多あれども餘り數重りてはと省きつ、時の移るも知らで讀み終れば今更に時のさまの偲ばれて袖さへしめりつ

ありし世の昔をしのぶけふながら夕べの夢のこゝちこそすれ

あゝ今は兄樣も姉上のあとを慕ひて・・・・。

好きな食物が一番良い

衞生上より食物の事を細かく言はうすれば迚も一朝一夕のことではないが、要點を一括すれば、好きな物を食ひ嫌ひな物を食ふな。食ひ度い時に食ひ、食ひ度くない時には食ふな。此一言に歸する。之が衞生上健康上の大原則である。人に依つては色々なことをいふ。一日に蛋白質の物を幾ら脂肪質の物は幾らといふやうに大變細まかいことをいふ學者もあるけれども、特殊の人に對してはさういふ必要もあるかも知らないが、一般の人に對する原則としてはさういふことはない。卵は滋養に富んで居るから食へとか、牛乳は薬になるから飲めとかいつて勸めるけれども、それが嫌ひな人には何の役にも立たぬ。のみならず却つて其爲めに胃や腸を惡くする例もある。貝類は不消化物で胃に惡いと誰もいふが、予は性來貝類が好きで毎週三度や四度は必ず貝類を食べる。身體に何ともない。又餅は不消化物で胃を害するといふけれども予の母は餅が無類の好きで、少し腹の工合の惡い時に餅を食べると直ぐに癒つて仕舞ふ。幾ら滋養分でも嫌ひであれば卵や生肴などを食ふよりも外の好きな物を食ふ方が身體の爲めには餘程役に立つ。何ういふ譯かといふと、食物は體内に入つて消化液の作用に依つて初めて消化さるゝ。所が消化液といふものは涎と同じ理窟で自分の好きな物が眼前に來るとだら〳〵と幾らでも流れ出る、嫌ひな物には少つとも出ない。卵であらうと肉類であらうと其人が嫌ひであれば消化液は少とも出ないから消化が出來ない、嫌ひな物を食うて腹を惡くし下痢をするといふのは此譯である。（醫學博士遠山椿吉氏）

紅葉の意匠


ちがひもみぢ
菱もみぢ
立もみぢ
三ッ割もみぢ
桐もみぢ
三ッもみぢ
割もみぢ
ふせんもみぢ
糸輪三ツもみぢ
立田川
だきもみぢ
枝もみぢ
もみぢ枝丸
蝶もみぢ
ぎやうもみぢ
蝶もみぢ
枝もみぢ

日光の山に別るゝ日

赤　央　柳

紫の靄、綠の山、淸けき流、直なる老杉、いづれなつかしからぬはなき此日光の山を、私はけふを限と見捨てゝ又塵しげき都の空に歸らねばならぬことゝなりました。

起きては朝もやかすむ綠山をながめ寢ねては淙々の響に枕して安かなる夢をむすぶ、都の住居とは思ひもよらぬ靜な明暮をつゞけて來た私はならば身を山賤になしても此まゝ此處にと思つて居りましたものを嗚呼京にかへれとは…………親しみては僅か二旬お馴染は淺いけれども此山の色、此水の響、私は生涯忘れません忘れる事は出來ません。かつては都の熱鬧の中に煮かへされて萎へに萎へたこの身體の今漸くよみがへつたやうになつたのも全く此山のおかげでせう。

疊り疊つた屈托の重みに壓されていたくも熱した此胸の甫めて涼しさを覺ゆる樣になつたのもこの溪水一掬の賜物ではありますまいか、二旬の昔、疲れ果たからだを日光に運んで來た私は爽快の氣健康の身體となりて歸京る今あゝいかなる謝辭を述べたらいゝでせう

旅館の老婆は是非紅葉の頃までと昨夜もしきりに勸めました。すゝめる人より勸めらるゝ私何で秋までゐたくない事がありませう、名所の秋、私はどうかしてそれまでと思つたのですけれど、けれどまだ全く浮世に離緣されない私の身體には住む家の待つもありそこにはなすべき義務の山と積つてゐるのですもの、惜しいけれども明日は思ひきつて歸京ります、恢復した身心は又浮世の中に奮鬪すべき義務を持つてゐませうから

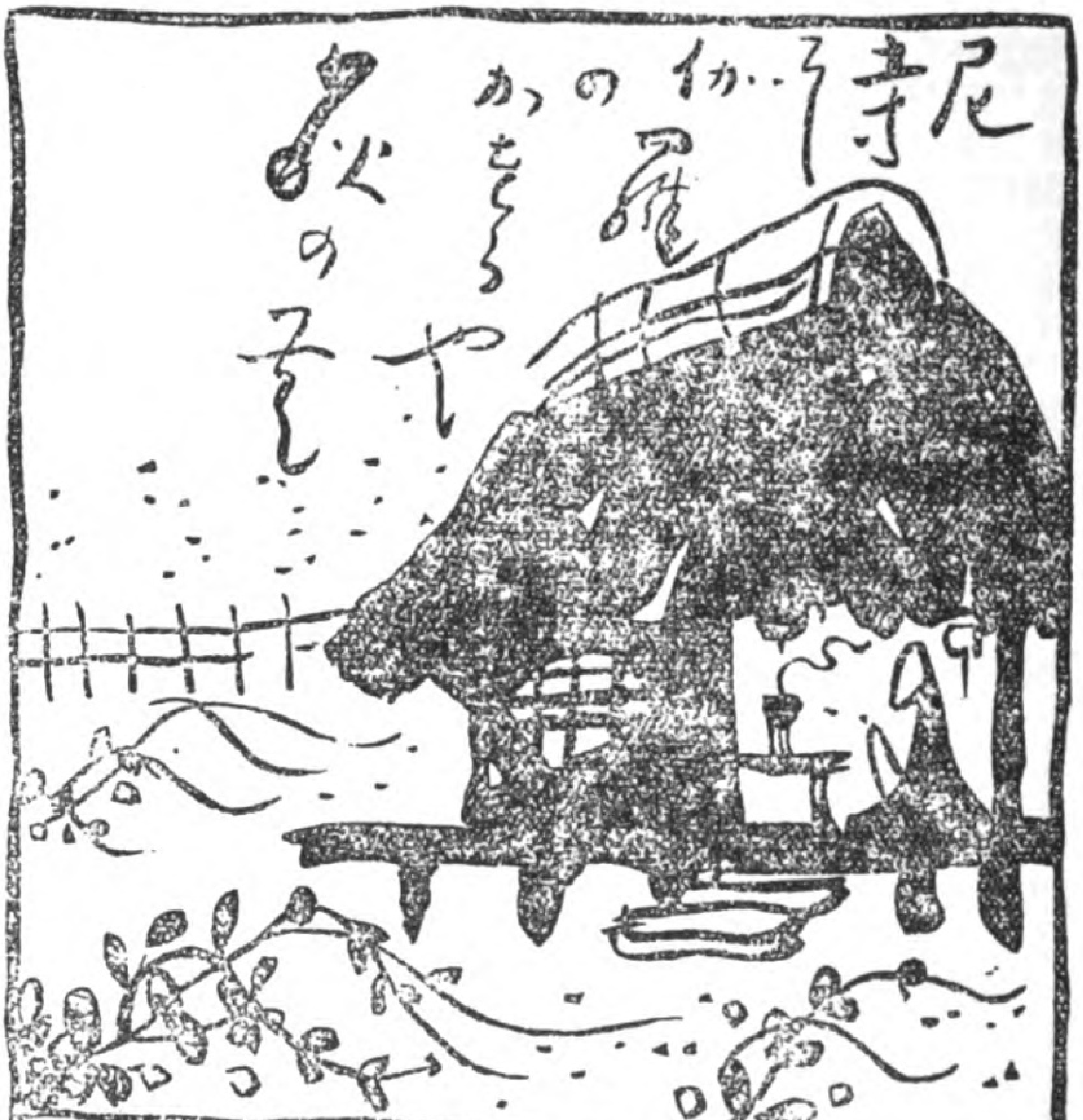
名殘惜しむはけふ一日と今朝は一しほ深い霧の中をわけて御山から町へ散策に出かけました。

夜は全く明け離れたとはいへ老杉古檜枝をまぢふる樹下道はまだほのぐらうかすかに蟲の音さへ聞えます

鳥すまぬ山は明鴉の聲だに爲ず、獨り行く道の淋しさよ、紺土沙の天井張つた樣な茂みの中に朱の色見ゆるが東照宮の御門です、今朝はお別れの、參詣まだ誰

も參つてゐません。
見上ぐれば森々と天を摩して茂る老杉の下金碧燦爛たる幾多の殿堂樓門廊殿は彫刻の粹、色彩の美をつくして蠟塗朱塗の色美しう立つてゐます、それらを限りに苔むす二百の石階の上青銅の寶塔の中には徳川三百年の太平を致したる東照公が靈魂のとこしへに安く眠つて居らるゝのでせう。

同じ世界に同じく人と生れ來ても業もとげ得ず名もなさず空しく醉生夢死する輩多かるを在りし日の覇業は言はずもがな亡き後までも、かゝる壯麗の莊にいつかれて譽を千載に殘したる偉人が一生を思へば女性の身にもそゞろ欽慕の心が起ります、襟を正して社前にぬかづけば無量の感慨胸に湧く、私は今更千古不滅のかの遺訓を心にくりかへしました。人の一生は重き荷を負ひて遠き道を行くが如し急ぐべからず―



大谷川の朝のけしきは御目にかけたいやうです峙つ山の青さ、碎くる水の白さ、赤い神橋のさても美しさよ、清いこの流を眺めてゐると胸のくもりもとれて心はいつか澄んで來ます水の冷いこと。

しかしもしこの水上の華嚴の瀧であることを思ひ出すと私はいやな感がして來ます中禪寺湖の落口、直下七十丈の壯觀は昔も今も渝らないでせうけれどあさま

しい澆季の世には可惜天下の名勝も世の敗殘者が墳墓と化してもの凄い響を世に傳へるに至つたではありませんか、かの操以來もゆるやうな胸を抱いた青年の魂のそも幾何その瀧壺に砕け散つたことでせう二旬の滯光中私は華嚴の瀧へはつひに參りませんでした。

橋の欄干に凭つて先刻から凝と川面を見入つてゐる一人の旅裝甲斐〳〵しい青年があります、私が町へいつて寄木細工のお土産や繪はがき買つて歸るときまだ其人はそこを動きませんでした何を考へてゐるんでせう。向から大原女の樣な女が澤山來ました日光の町は今日も往き來るさの觀光客の腕車が細い流に和して勢よく聞えます、貨車を牽いた單線の電車が旅裝の人を滿載して山の方へ疾走していきます、旅舍はいづれも客の送迎に忙しさう私も明日は送られる客の一人です宿にかへつた時は髮も衣服もしつぽりと霧に濕つてゐました前の山は半ば雲のかつぎしてたをやかなる其山容さながら早乙女のはぢらへるが如し。



夕方から珍らしう空晴れて月が出ました私は又しても裏門からさまよひ出ました今宵こそこの里に最後の名殘を惜しむべき時だと思ひまして。

山里の夜は極めて靜です草葉のそよぎ水の音他には聲もありません只かしこゝにギーカタンカタンと水車が廻つて居ります、其淋しい併し何となくなつかしい引つけられるやうな音は胸の底の琴線にふれて無限の響を起します、里子にいつてた上州の田舍、螢を取つた美濃の山里、私は幼い昔を想ひ出しましたそして私は幼い頃兄の本箱にあつた少年世界で見た水車の歌を想ひ

出して口誦んで見ました

靜けき里の夜はふけて　淸き流の小川には
落花をしたふ蝶もなく　月影戀ふる笛もなし
人も草木も野も山も　眠の幕のたれし時
ひとり醒めたる水車　不斷の調音いや高く
「不撓不倦」その歌を　夜のみ神に捧ぐらん

あゝ不斷の調いや高く靜けき里にいつまでも此車は廻つてゐるでせう東京へ行つた後にはこれも思出となるでせう庵へかへつて机に向つた時ふとかのコスモスの君を想ひ出しました、高い希望に心をこがして大谷川岸邊に悶へ給ふ君、お別れに際して唯一こと申し上げませう。

「淸き流の大谷川邊に咲けるコスモスの君、君には此日頃都の空を戀ひ都の學び舍に學ばん日をのみ夢見たまひ而も御事情はこれを許さずとか、思うて成らず成らざるを思ひて煩悶し失望し給へるを妾はゆめ理なしとは申し侍らねど徒に都の高き學舍に學びたりとてそれをしも誠の幸福とは申し得すと存じ候況して都は想の外に塵しげく都の學舍は意外にも虛榮の雲深く候を淸き天地に住み馴れ給ひし御君のかかる巷にいで給ひてよしなき名利の競爭に可惜わかき御心身を疲れしめ給はんよりむしろ山水明媚のこゝ大谷川のほとりに浮世離れし御住居けがれなき里の撫子おほしたてゝ安けく長閑けく暮し給はんこそ實に羨しき詩の御生涯と存じまゐらせ候、榮譽何！　名聲何者！　笑の陰に涙あり暗の彼方に光あり、都人の笑の聲は大きくとも裡には悔の涙も潜むと聞く君が行く杉の下道暗くとも行手は塵なき大空にうるはしき太陽の照ることも候べしあはれやさしきコスモスの君よわらはは君がよしなき靑雲の望を捨てゝ淸き大谷川のほとりに其尊き天職をつくし給ひ悔なき涙なき平和の日を此勝地に送り給ひて花に紅葉に豊なる詩想練り給はんことをすゝめ參らすにて候さらば君よ　御身を愛し給へ。

筆を措いて窓を押せば冷かなる夜氣は水の樣に流れ入つて山は只黑う立つて居ります更けた夜を瀬音のみいや高う、さらば山よさらば水よ、さわがしき都にかへりたらん日も綠の色よ我目に映れ淙々の音よ我心に響けかし。

過ぎ去つた人生の春

さみどり



日誌や教案の整理を終へて時計を見れば四時に少し前、男の教師は何れも學期末の忙しさにセッセと筆を走らしてゐる。何だか先へ歸るのがきまりがわるいが、思ひきつて紫メリンスの風呂敷小脇に校門を出た。つひ此間まで黄金色の穂並美しかつた稲はいつしか刈りつくされて、早や青い麥が二三分のびてゐる。かうして麥が日一日とのびて行くやうに、私の胸にも日一日と云ひ知れぬ悲しみと寂しみとが迫まつて來る。口にこそ清き天職だの、愛らしい天使のと言つてゐますが、心には常に自分の矛盾を悲しんでゐます。朝な夕な通ひなれた道を、考へながら村はづれの土橋の所まで來て、立止まつて、涸れつくした水の面を見ると、音もなく流れる水が、折柄散つた木の葉を浮べて、流れ去る。それが遠く夕日に反射する田の畔に消える樣をヂーと見つめてゐると、又しても無限に孤獨の寂しみが襲うて來る。重い足を引きずりながら、歩きだすと、向ふから、二人づれの男女が樂しさうに語りながら私の方へ來た。そして女は丁寧に私にお辭儀をした。見れば三年前に自分が教へてゐた山川と云ふ生徒で、少し見ぬ間に見違へる程大人びてゐる。

家へ歸ると、何だか頭がピン〳〵するから、すぐ床についた。炬燵の中へもぐりこんで、すゝけた天井を見つめて居ると、無意味に涙がこぼれる。

今日、職員連がストーブを圍んでの雜談に、よくは聞きとれなかつたが、女學校卒業―虚榮―獨身――女教師――老孃――何でもあまり理想を高くして相

當の縁談も皆片ッぱしからはねつけた上くのはてがあの態だとか何とか私の事を言つて居ました。

あゝ私はなぜこんなに誤解されるのでせう。私だつて何も好き好んでこの年になるまでかうやつてゐるのではありません。女學校時代は虚榮と空想との最も盛な時代ですから、結婚と云ふ問題を非常に輕視してゐたとは云ふものゝ、心の中では、女と生れた身の、何れはどこかに片づかなければならぬ運命と豫期しながら、とやかくそんな事を云ふのが他人の手前に對してはづかしいものですから、つひ二三人親しい友達と行末の事なんか語り合つても、いつも其結論は束縛された家庭の囚となつて良人や子供の犠牲となるのはつまらない、それよりか自由な獨身の方が良いと云ふのでした。けれどもこんな簡單な解決では滿足しません。今假りに獨身生活をするとすれば、何か特殊の生活して行く道を求めなければならぬ。けれど女の先生方なんか、大分お年を召してゐらつしても、未だに孤獨でゐらつしやるが、どことなく淋しさうに見える。そして妙に心がひがんでゐらつしやる。これもみんな孤獨の淋しみから來る一種の哀寂でせう。私も獨身生活をすると丁度先生のやうにならう。それも何だかいやだそれでは結婚をするとすればどうなるか。先に卒業した方なんか、結婚なすつてからはもう昔の美しかつた面影はうせて、大ていは世話女房となつてゐらつしやる。それも又つまらない。やつぱり獨身生活の方が良いなどゝ考へた事もありますが、けれども學校も卒業してしまふと、もう年頃ですから、自然方々から結婚の話が持上がつてくるし、又自分に於ても將來の運命と云ふ事を痛切に感じ、一種の哀愁と胸深くひそめた懊惱とが始めて感じられます。やつぱり女だから結婚しなければならない、そして愛してくださる良人、樂しい家庭、などゝ云ふ事が常に頭の中に循環してゐて、良い良人を持ちたい、立ばな人の妻になりたいと云ふ欲望は、どうしても抑へきれません。そんな具合で、自分からもこんなに色々考へるのですもの、外からは毎日のやうに嫁に、むこにと親切に云うて下さ

る。今まで獨身するの獨棲するのとさわいだお友達も一人嫁き、二人嫁きして、だん／＼とかたづきなさる。さうなると、自分もあの人のやうにと羨ましくなつて來る。緣談はふるほどある、一層の事早くきめて下さればとじれつたくなつて來るが、どうしても／＼母樣が御承知なさらぬ。

金持なれば釣合はぬ、金持のうちへやると、金を鼻にかけられて娘が辛抱しにくい。金がなければ無いで、そんな貧乏な家へやつては可愛さうだ、月給取は身年がつかぬ。親や兄弟があれば辛い辛抱しなければならぬ。又親がなければ肩身がせまい。やゝ方角が惡い。近すぎる、遠すぎる、と澤山の緣談をとやかく難くせをつけて斷はつてしまひなさる。兄や姉や親類の者なんかあまり年をとらない中に、そして又願つてもないよい緣談だからと云うても、いつかな母樣御承知がない。ありとあらゆる方面から易だ、みくじだとさわいで、一つでもかけた所があれば、すぐ斷つてしまふ。かうなると意地になつて、母樣がいけないと言ふと、却つてこちらから先方の肩を持つ。するとすぐ「お前は考なしだ」とか、「自分の將來を不幸にしてまで早く嫁きたがる」などと叱られる。こんな具合で、毎



日母樣と物言ふにも妙にひねくれてたてつく。こんな事をしてゐるまに、だん／＼その年もくれて、一つ年をとると、姉さんなんか早く早くと云ひ出した。けれどもこれも人の言うて下さる時が花で、あんまり氣ままを云つたから、今まで親切に言つて下さつた人も、もう言つてはくれなくなりました。十九といへば、田舍では早いとは云へませんが、母樣はそんなに急がずともゆつくりして時の來るのを待つがいゝ、何もそんなに頭をさげて貰つてもらはなくても、お前には相當な財產も別けてあるのだから、まさか違へば獨り身で暮したつて何不自由がないのだからつて、一向平氣なんですもの。そしてどし／＼年下の人が嫁つてしまひなさる。もうほんとうにじれつたくつて、家にゐても不愉快でたまらない。一層の事家を飛出してもつと高等な學校へでも入學りたいとお願ひしても、女にはそんなに學問はいらない、とはねつけられる。さうしてはなるべく私を手放さないやうにしなさる。勿體ないが家の母樣はなぜこんなのだらう、子が可愛ゆくないのだらうか、子の將來はどうでも良いのだらうかと思ふと、くやしくて、いつも床についてから、一人で夜具にしがみついて泣きました。泣いて泣いて充分母樣を恨むと、それで一時は心が休まる。そして今まで自分の泣いたのが馬鹿らしくなる。何と思つて自分がこんなに泣いたのだかわからなくなるのが常でした。

元來私は末つ子で、殊に母樣の秘藏娘で、私の言うた事はどんな無理な事でもきいて下さるのに、縁談とくると顏をしかめて、皆獨斷でことはつてしまひなさるのです。それは決して私を惡しかれとするのではなくて、あまり私の前途を心配しすぎるからですが、これには尙ほ一つの理由があります。

其理由と云ふのも、さして重大な事ではありません、が、私の家は今でこそ、財產も大分傾きましたが、母が結婚する當時は村内屈指の資產家で、母が此家の長女と生れました。田舍の事ですから、まだ十四五の肩上げのとれぬ時から、婿に、養子にと、云ふ人がありましたさうですが、其ころ私の父が親しく出入してゐ

まして、いつの間に祖父をときつけたか、遂に母の婿と定まりました。其話がまとまると、親類から苦情を申込むし、母も厭だから破談にして下さいと頼んでも、昔氣質の祖父は、一旦約束した事は反古に出來ないといつて、とう／＼結婚の式を舉げたのが、丁度母の十六の時でした。けれども元來父は母の婿として來たのではなく、財産を見あてに來たのですから、固より祖父や母とは折合ひません。そして金のあるにまかせて、外では放蕩をする、内では祖父や母を虐待する事は一通りでなく、一家の經濟や金錢問題には、指



も觸れさせず、それのみか、祖父と氣が合はぬといつて、別家さしてしまひました。其時母も共にと願つたのですけれども、いつかな承知せず、母が度々祖父の處へ行くのが氣に食はぬといつて、門外一歩も出させませんでした。此父の無道極る仕打に、一言の不平ももらさず、四人の子供を相當に教育した母の辛苦は、並大ていの事ではなかつたらうと思ひます。其うちに祖父も亡くなり、――その亡くなる時など、母や親類の看護するのを非常に怒つて、少しもよせつけませんでした。言はゞ祖父を見ごろしにしたのです。其時只一人の親の看護もなし得ず、あるに甲斐なき命をながらへるよりはと、

幾度か母は死を決したか、わからなかつたが、後に殘る子供の事を思うて又思ひかへし、父の虐待に合ひつゝも只子の前途を一縷の望に、涙と共に月日を送つてゐたさうです。其うちに、父も漸次年もとり、今までの氣質も大分違つて來て、以前に比して非常に圓滿になつたとはいへ、父の母に對する態度は恰も囚人に對する看守人のやうでした。こんな風にして母は何不足なき資産家の娘に生れながら、連れそふ良人の爲に、終生を悲慘の裡に暮さなければならない樣になつたのですから、いつも口ぐせのやうに、子供等には再び自分のやうな不遇に泣かせたくない、不幸なる結婚をするより終生獨身で暮す方がどれだけ自由でたのしいか、知れないと、始終云ひ通しでした。

それと、もう一つは私に一人の姉があります。ところが此姉が結婚する時にも、母は自分の、經驗があるから、上の上の上吉でなければやらないと意氣ごんでゐましたが、丁度十八の春祖父が以前心易くしてゐた家で、財産といひ、人物と云ひ、とても私のうちのよりつけもしない家から、是非にと懇望されましたので、これには母も一も二もなく承知しました。其當時誰一人として姉を羨まぬ人もなく、家庭も至極圓滿で、いつも姉の家には春風がみちてゐました。ところがどうでせう。子供が出來てあへなく兄が亡くなり、それに加へて兄の姉で他家へかたづいてゐる方の旦那さんが米國の方で非常に商業に失敗して、破産の悲運に合つたからと、三人の子供をつれて歸つて來ました。それからは今までやさしかつた御兩親も、うつて變つて姉を邪魔者にし、途もすれば子供までもひかげ者にして、姉さんの子を可愛がりました。昨日まで人に幸福よと羨まれた身が、早や涙と共に過さなければならぬ身となつて、まだうら若い身で良人にわかれ、氣むづかしい姉さんや薄情な兩親の機嫌をとつて行かなければならない樣になつたのです。そんな具合で母といひ姉といひ、非常な不幸な運命に合つたのですから、母が私を手放さないのも無理はありません。それはいくらよいお家から申込まれても姉さんはよい家へ行つて

もあんなに不仕合せだから今よいといつたつて末はどうかわからない、男といふものはこわい者、妻となり母となるのは辛いものと、母は始終云ひきかせてくれました。お友達などが、よく母が「お前をお嫁にやる時は立ばにしてやる」の、「よいお嫁になれ」のつて云ふとおつしやるが、自分の母はなぜ私にお嫁に行くなと言ふのかと思うて、なさけなくなりますが、私には母さんに反抗するだけの勇氣もなく、却つて母さんの言ひなりにした方が孝行にもなるのだからとあきらめてゐました。

それから其年もくれて、二十歳の春、小學校敎師の檢定試驗を受けて見たらとの母さんの言葉に、あまり進みませんでしたけれども、何も月給取しなければならぬと云ふ譯でもないのだからと、勸めてくれますので、つひ其氣になつたものゝ、小學校敎師にならないでも、他にいくらも獨立自營の途はある。よし不合格でもかまはぬと大膽に勉強もあまりせずに受けました所、私の爲に幸か不幸か、間もなく合格の報知が來ました。かうなると、何だか物ずきに出てみたくなるし、丁度村の學校に缺員もあつたので、ともかく其四月から私は敎師として出勤ことになりました。何といつても田舍ではあり、女敎師といへば、あまり類もなく、どちらかといへば無敎育者ばかりですから、村人からは非常に尊敬されるし、子供もよくなづくので、もう只面白をかしく一二年は夢中に過しました。其一二年の中にも、私の身の上にはいろ〱の縁談がありましたが、中にも櫻井さんなんか、お家柄もよし、財產もあり、それに第一非常に私を愛して下さつた。ああ母さんさへお許し下さつたら、今頃はどんなに樂しい家庭をつくつてゐるか知れない。それを母さんは、方角がすこしわるいといつて、私が泣いてお願したけれど、お許しがなかつた。それから二十六の今日まで縁談もちよい〱ありましたが、あんな事があつてから、どうも氣のりがせず、もう仕方がないから、あくまでも運命に服從しやうと決心しました。けれども女ですもの、若い御夫婦などが連れ立つて行くのが目に

注いて、羨ましく嫉ましくて、妙に心がいら立ち、不安と苦悶は痛切に身を責めてきて、途もすれば書齋に閉ぢこもつて悲しくなるのが往々でした。

又世間の人たちも、この年になるまで、斯うやつてゐるのですもの、いろ〳〵な取沙汰をして、體にきずでもあるかのやうに、云ふ人もあれば、氣が高くてあまり好みすぎて嫁きはぐれたなどゝ、隨分聞くに堪へないやうな事を噂されます。さうなると今まで一向無頓着で頑固な母さんがやかましく云ひだす。けれども斯うなつたのも、言はゞ母さんがこんなにしたのだから、あまり表だつて言へませんから、心安いお方なんかに頼みまはつたり、それは〳〵口にこそ出しませんが母樣の苦心してゐる樣子はあり〳〵とわかります。何といつても二十六といへば普通子供の二人や三人ある身分ですから、誰がこんな年増を相手にしてくれませう。時々は母さんなんか、あの時にやつておけばもう子供もあるだらうし、仕合せもしてゐたらうに、あんなに嫁きたがつたのだから、嫁つておけばよかつたなどゝ、今更後悔してゐます。

あゝ人生の春!! 私はこの華やかな光榮ある人生に再びなき春を、いたづらに義理のきづなにほだされて開くべかりし花もさかせず、匂ふべかりし香も放たず、かくして草深き田舍にくち果てなければならぬ身となりました。

この貴い再び得られぬ人生の春を失うた私に、又再びあの時代のやうな華やかな時が得られぬかと、過ぎし昔を偲んではそゞろ身のはかなさを悔ゆるばかりです。





筆のしづく

○姿見かゞみを讀みて

田鶴子

五月雨でもあるまい、彼岸日和でもあるまい。それは何か知らないが兎に角よく降る、ふるわ〳〵。

とたん屋根の筧を傳ふ雨垂の音は宛然微妙な音樂でも奏するやう――、さう〳〵、いつか玉露さんもこんな事を仰有ったわなどゝ思ひつゝ不知不識夢路の境に入る、

ふと、目が醒めた、枕元には新刊の――嬉しいと抱きしめたのは姿見かゞみ、無理も御ざいますまい、二ヶ月以來病床に臥して、氣短になつてる私は無聊のあまり、十五日發行とは承知しつゝも十三日頃から毎日郵便の來るのばかし待つてた、それが十七日も駄目、十八日もだめ、もう〳〵自烈つたくてじれつたくて堪らなかつた、その雜誌が今めの前、否私の懷に抱かれたのですものどんなに嬉しかつたでせう。半ば夢中でパラ〳〵と繰つたページの幾枚、常にもまして美くしく新らしい記事は如何に私の弱い胸をそゝつたでせう。

みる〳〵めくられた二百餘頁――讀み了つて私も何か書いてみたいと思つた。元より批評などゝ名のつくやうな事は出來ません、けれども――けれども、みな樣おゆるし遊ばせ。

○良夜

自己の境遇を僞つてまでも姫を迎へる澄男と芳江。侯爵令嬢の君ともあらう方が、あまりと云へば此の擧動本氣の沙汰とも思はれない、何だか昔噺じみてる、全く記者樣の仰せの通り不自然も甚しい、が、然し文の形式は實によく整つてる一分の隙もない、美くしい作。

要するに此の君は、やはり從前通り主觀的に自己本位でおかき遊ばす方が一段と引きたちはしないか――とも思つた。

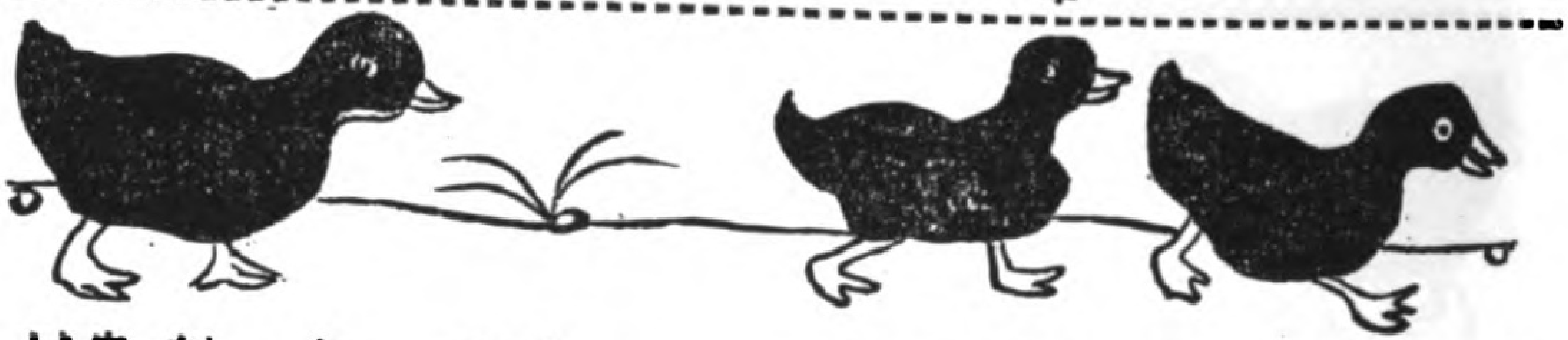
○其日〳〵

折々痛快な事をおかき遊ばしては天下？の耳目を欹てしめるみなつくし樣の、此のお作は實に穩健なもの情は深く愛あつき、床しい母樣ぶり淸く健實な軍人の家庭はよく君が健筆に寫されてゐる。

○今樣心學道話、人格小主觀

今關樣、稲垣樣、どうも有りがたう。

お蔭樣で、倫理學のよい復習しましたわ、私も精々修養して五官以上の人、やさしくしてしかも強き日本婦人となり



ませう。

○自慢話

いくら大阪だつて何もさう、十把一括に仰有らなくつたつてよささうなもの、萬一之が事實とすればですれえ、私大阪の住居いやになつちやつたわ、否、物質的な大阪婦人を五官以上の——しかも覺醒たる婦人たらしむるこそ私等の擔へる使命——!!! ホヽヽどなた?「遠き未來のために心を勞する愚者」とお笑ひ遊ばすのは、之等が所謂「曉の月をみようと夕方から待ちくらす」の類でせう?　奇髻々々

○街はづれの記

松平さんは生粋の江戸ッ子、誕生祝を初めとして七人の兄弟、斷腸餘などみんな垢ぬけした作、殊に街頭記は今までの作よりも一層勝れた立派な藝術的作品、

床しい母樣、やさしいお兄樣、さては卑劣な早川さん、それ等の人たちの性格は遺憾なく現はれてゐる。

「お十七の年よりはやく小柄な、鏡子さんはいつも唐人髷に白丈長床しい、下豐れの寛けき御顔——のそれは〇〇の姫宮樣酷似ぢやないかと私は思つてよ」——と、かつて友の一人は語つた。

「詰らない事も厭な事も、他人の前では顔や擧動に出してはいけません、人の氣をわろくするばかりで、何の得る處もないんですからね、自分の不平は自分の胸で始末がつけられなければいけませんよ」

被仰る母樣、こんな賢い母樣をおもちになる鏡子樣は幸福者

「私のお掃除は一體長くかゝつて不可い、片付る事がすきでよく文庫なんかを引つくり返しては、叱めるくせに書いたものでもあると、開けてよむ、捨てやうとしたものさへも、いつか役に立つ事があるかもしれないなんて、當にならぬ事をあてにして、また藏ひこんでしまふ。書棚の中を拭いて本を並べやうとしても並べ乍ら開いてよむ、どつちをしてるのか分らないつて母樣によく叱られます」

あら……鏡子さんも、そんなの?

隨分大英斷で思ひきつたつもりでも、亦それでもなんて反古紙同然のものを藏ひこんだり、襷がけで仔細らしくハタキは持つてゐても、整理してるんだか讀んでるんだか、本箱の前の行動は怪しいものだよと、始終母に笑はれるのは、蓋し私一人でもあるまい、諸姉の內にも大分同感の方もあると思ふ。

殊に女中の手も借りないで、兄樣の汗ばんだお單衣衣桁にかけて、新らしい白絣におみ帶まで添へて出してお上げ遊



ばす鐵子樣、なんて可憐しいんでせう。わたし、此の丼全然氣に入つちやつたわ。

自分では思つてゝもそれを自由に筆する事の能はなかつた私の感想を遺憾なく、かいて下した——とも思はれてわたしは此の作全篇を、滿足と感謝の中に拜しました、拜し給つて君に捧ぐるものは「會心の笑」只之あるのみ。幸に自重、自愛、益々御奮ひ遊ばせ。

○千どり

美以さんの綿樣なる人の心意氣、私は他人事ならず嬉しつかた、再讀、三讀、同情の深い作。

○意地の人

古い因襲の衣をわざと新しい者の上に着せてゐる人、意志が強くて拗れ者のくせに強い情火は熖と燃ゆる壺の井さんの性格は、優にして而も痛快なる君が得意の健筆に遺憾なく現はれてゐる。

わたしが想像の磯千鳥の君、それはしんみりと奥床しい内にも凛とした、たとはゞ春の寒風に吹かるゝ白梅の——それよりも猶氣品高き方、

それが一度筆をおとりになると縱橫自在心のまゝに、少しの澁滯もない御筆の彩、實に此の君が御胸に秘め給ふ學殖の深さは底知れじ、益々御發展を祈る、

○華族系

立てこめし朝霧はいつか晴れ渡つて、水天髣髴の間に薄すりと伊豆の島山の——

と、讀みはじめたのはつひ先刻でしたのに

とゞろ〳〵とゞろく濤聲、ザラ〳〵と風が鳴ります、病葉が二つ三つ舞ひ落ちました。

と、もう一氣に讀んでしまつた——何と云つても萩香樣のお作だもの、讀み了つた私はほつと吐息して眼を閉ぢた、更に兩手を胸に挾んで眼を開いた。

兎角の評はあるけれども何と云つても、內藤さんは俗裕家中の白眉。

一字——一句——それはみんな若き女の脈搏をそゝるやうな強い熱と強い力とが充ち滿ちてゐる。

それを、やれ浮つ調子だの、いやハイカラだのと被仰る方たちこそ、餘程何うかしてらつしやるんだわ、然し何とでもお評なされはなさるだけ、それだけ內藤樣のお作に注意を持つてらつしやるに違ひない——と、すると此君等もやはり內藤宗かもしれない、折々のそしり、さすりは羨望のあまり



の弱い、女の叫び聲とも思はれる、兎に角華族系は秀中の秀、作中に現はるゝ多くの人物はみんな自由自在に描かれてる、殊に高山の若樣と語る時のお葉さんは眼に見えるやう。

「形はすてぬ、影を追ふ泪は君も許すらん――」

勝氣で意地つぱりなお葉さんの性格は描き盡して遺憾なし。印象の深いお作。

……………　……………

お葉さん、重井さん、それから街頭記の美知子さん、全然とはいきませんがある程度まで、共通した性格を有つてるのも一寸妙では御ざいませんか、妄評多罪。

露時雨もる山陰の下紅葉ぬるゝたさらん秋の形見に　　家隆

木の本におらぬ錦の積れるは雲の林のもみぢ也けり　　讀人しらず

散かゝる谷のせ川の色つくは木の葉や秋の時雨なるらん　　攝政前右大臣

となせ川音には瀧と聞つれどそれは紅葉の淵にぞありける　　堀川右大臣

飛鳥川もみぢは流るかつらぎの山の木の葉は今しちるかも　　讀人不知



松茸と栗の手輕料理

宮美子

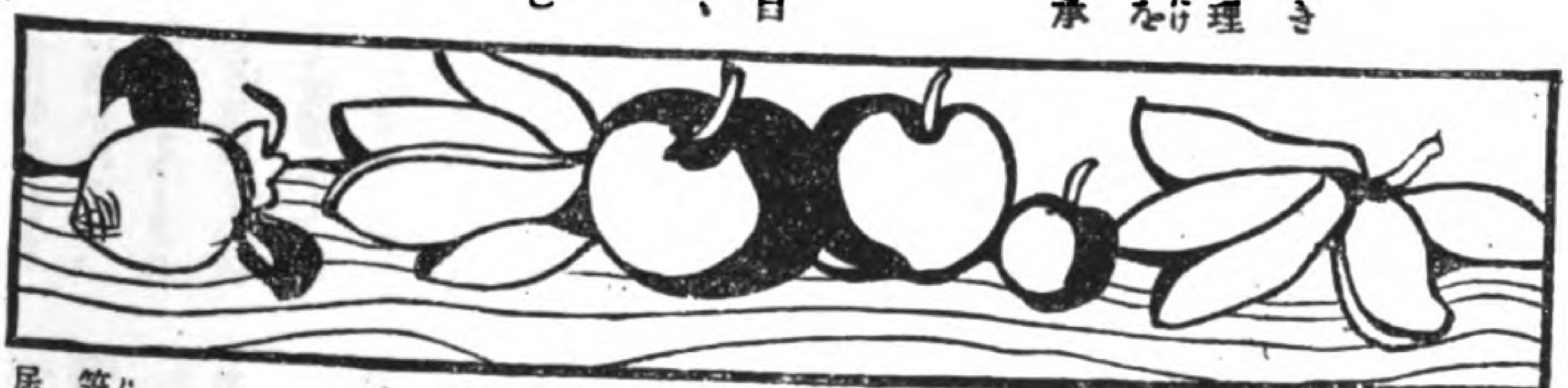
材料となる松茸は、指で押しても莖が堅く太くて笠の開き過ぎない肉の厚いのが、蟲も附す最も味の良い品です。御料理をする前に、鹽水でよく洗ふと殺蟲の効があること、又松茸を喰べる時に、豆腐の料理を添へると毒消しになることを御承知おきを願ひます。

△松茸飯

此の炊き方は人に依つて種々にしますが、一番上品で、自然の香氣を保たせるには、初め松茸をよく洗つて石突をとり、短册に庖丁して鹽水に漬けて置き、別に普通の櫻飯を炊き、御飯の吹き上つた時に前の松茸を入れ、平常よりも長く蒸らし釜から移す時によく混ぜて出します。

△椀

昆布と鰹節で拵へただしに味をつけ、薄く切つた松茸と、いあられに切つた豆腐を入れ、燒海苔をもみ掛けて、吸口にはそぎ柚子を浮かします。松茸は煮え過ぎると香氣が失くなるから、椀に盛る少し前に入れます。



△土瓶蒸し

鹽水で洗ひ石突をとり、根元から指で裂いて土瓶に詰め、酒醬油、鰹節をほどよく入れ、土瓶の口を紙でふさぎ、弱火にかけてよく蒸し上つた時にその儘出します。添汁としては、柚子を絞つた汁に普通の酢を混ぜ、醬油少し加へたものを用ひます。

△田樂

前のやうに洗つて石突を取つた松茸へ、横に二本づゝ竹串をさして燒き、山椒味噌をつけて温いうちに出します。

△甘酒漬け

松茸の太く大きいのを選り、莖ばかりを用ひます。之を鹽水で洗ひ、蒸籠で蒸して濃い甘酒へ漬けておき、三四日經つてから出し、短册に切つて出します。

△裏白むし

是には、前の料理で殘つた松茸の笠ばかりを用ひます。初め笠を掌へのせ、上から箸でハタハタと叩くと、裏に附いて居る蟲がすつかり落ちてしまひます。其れを鹽水でよく洗ひ

笠の裏へ、海老か鯛平目のやうな、白い身の魚を摺身にして、味淋と醤油で味をつけたものを詰め、蒸籠に並べて蒸し上つた時に、柚子酢を絞り込んで出します。

△三杯酢

ざつと湯がいて短冊に切り、柚子酢と鹽と砂糖の三杯酢を掛けて出します。

△焼松茸

笠の開かぬもの許りを鹽水で洗ひ、濡れ紙に包んで温灰の中に埋め、氣長にむし焼きにして取りだし、水へ入れて紙を剝し根元から裂いて、ソースを添へて出す。

△蒸し松茸

太いのを丸のまゝ洗つて蒸し、矢張り根元から裂いて出しますが、これには、生姜味噌か胡麻味噌を添へます。淡さりしたのを好む方には、山葵醤油かソースを添へます。

△山葵和へ

笠のつぼんだものをざつと湯がいて水氣を切り、小いから丸く庖丁して、温いうちに山葵醤油で和へ、火取つた淺草海苔を



もみ掛けて出します。

△炮烙むし

初め、銀杏の皮をとり、柔く煠でゝ薄皮を剝いておきます。次に松茸の石突をとり、縦に四つ位に裂き、炮烙の底へ青松葉を布き、松茸と銀杏を並べてさつと鹽を振り、その上へ又松の葉をパラ〳〵とふりかけ、炮烙の蓋をして針金で十文字にしばり、上下に火をおいて蒸しやきにし、客へ出す前に松葉の上から柚子酢をふり掛けます。

此の他にまだ種々仕方がありますが、大凡似たものゆゑ、この位に止めて、栗の方にうつりませう。

△栗飯

上等の大栗を澁皮ともに剝きとり四つに割つたものを五合位、半日程水へ漬けておきます。そして一升の米に鹽味をつけ前の栗をよく混ぜて炊きます。

△ふくめ煮

粒の大きいものを選り、鬼皮をむき、薄刃庖丁で澁皮をとり温湯を入れた鍋へ栗を入れて一度沸立たせ、又別の鍋へ温湯を入れて、半煮えの栗を掬ひ入れて沸立たせます。かうして二三

度くり返して充分柔く成つた時、味淋と砂糖と鹽とで味をつけ、もう一度沸立てゝから鍋を卸し、そのまゝ煮汁へ漬けておき、冷めたところで器にとります。

△金團

これも栗を含め煮のやうに拵へ、其のうち形の崩れないものを半分とり除けておきあとの分を擂りつぶして裏漉しにかけ、薩摩芋の蒸して裏漉ししたものと半々に混ぜ、少量の水飴を入れ、弱火にかけて煉りつめ、とり除けておいた栗を和へて器に盛り、別に長芋を煠でゝ裏漉しにかけ、味をつけ、食料紅を少し溶いて加へ、引筒に入れて押し出しながら、金團の上へかけて出します。

△茶巾しぼり

前のやうに煮た栗の大粒のを一つづつ麻布に包み、かろくひねつて布をそつと取り、口取などの傍へ添へます。

△子持栗

白餡にひき茶で色をつけ、强火にかけて煉り、微塵粉をつなぎに入れ、前のやうに煮た栗を包み、ほいろに掛け、上から摺り蜜を塗つて乾かします。



△栗かん

鬼皮と澁皮をとり、二三度水をとり替へて柔く煠で、よく蒸らしてから裏漉しにかけます。別に角天を一本水につけて置き、その水のまゝ鍋に入れ、火にかけて沸立たせ、砂糖を程よく加へて裏漉しにかけます。それから前の栗と混ぜて火にかけて煮つめ、鍋を卸して流し箱の中へ流し入れ、冷めて固まつたところを取り出し、羊羹のやうに切つて出します。

△揚物

栗の澁皮ともに剝き、二つ割にしてアクを抜くために二時間ほど片栗粉の中へ埋めて置きます。かう致しますと、生栗の澁味が悉皆り除れてしまひます。それを五つ六つづゝ衣でよせて掻き揚げに致します。松茸も生のまゝ縦にうすく切り、四五枚づゝ、三葉を混ぜて衣で固め、菊の葉なども綺麗な葉を選り布巾でよく拭き、一枚づゝ衣をつけて、揚げます。此の他に百合根を一枚づゝ剝がして生のまゝ衣をつけて揚げ、又、銀杏をざつと燒いて澁皮をとり、細い竹串に五つほど寄せてさし、衣を固い加減にして揚げ、後に、形の崩れないやうに串をそつと抜いて皿へ盛りますと、淡ぱりとした五種の品が揃ひます。これに大根を澤山卸してざつと絞つて傍へ添へます。

日光山紅葉の旅

あとみ　神月道子



今日は日光へ修學旅行。未明に玄關前に揃ふと、校長先生もにこ〳〵として、お立ち出でになる。空を仰げば、一面に眞黑な雲に閉ぢられて、大粒の雨が袂に落ちかゝつた……。

寢衣に手拭、齒磨、楊子、石鹼箱に櫛道具、クリームの壜まで用意した私達の包は、皆一つに大風呂敷につゝまれて、車に乘せてある。見送りの友達が、

「御きげんよう、お端書頂戴ね、お土產を願ひますよ」

と口々に云ふのを、聞きながして、校門をくゞる。

もの皆未だ寢りよりさめず、街燈の光點々として處々に輝くばかり。

先登にふりかざす提灯の灯が、絹張りの洋傘からポタ〳〵落ちる雨垂にうつつてきらめくのが美しい。彌生町を通りぬけて、觀月橋にさしかゝつた時、上野の鐘の音が、靜かな空氣を震はせて、餘韻は遠く、不忍の池の面に消えた。

停車場につくと、未だ一番汽車には二十分程間がある。人はさう多くはゐない。暖かさうな外套の襟深くたてゝ、鐵砲を抱きながら、コクリ〳〵居眠つて居る銃獵家らしい人があちこちのベンチに四人ばかり。

男の先生が三人、女の先生が四人、校醫一人、生徒三十五人の一行は、三等の一室を占領した。

汽笛一聲、上野驛をはなれて、日暮里にさし掛る頃、明くるに遲き雨の朝もはやほの〴〵としらみそめた。

雲低くたち迷うて、車窓にけぶる秋雨の音侘しく、頭の重くなるやうな鬱陶しさも、車中では、羅漢まはし、言葉附けなどを始めてキヤツ〳〵といふ騷ぎ。

村崎さんが、

「ふりそゝぐ」と書いて、折つて渡すと、吉村さんが二の句をつける。次は眞山さん、道部さんと私、さて、出來上つた歌を開けて見ると、

ふりそゝぐ雨うらめしき汽車の窓
　今日の旅路の雨のおとかな

ドツト上る笑ひ聲。向ふでも又一派を募つて笑ひこけて居る。

大笑ひのうちに宇都宮驛について乘りかへ、日光についたのは十時三十分頃。道が惡いので、岩ケ鼻まで電車で行く。

電車を降りてから、各々、ハンカチ、寶丹、手帳などの入つた手提袋の中から、皆お揃ひの塗油紙のマントを出して着たり、麻裏草履に後がけをしたり、着物の裾をはしよつたり、色々準備をして、さて、後になり先になり、思ひ〳〵に進んで行く。

このマントは、油紙の大きいのに、白のチツプで紐をつけて、襟と胸のあたりで、キユツとしめるやうになつて居る。昨夕、皆がよつてこしらへたもので、新發明の油紙のマント、名づけて「秋の木の葉衣」といふ。たゝむと小さくなつて、携帶には至極便利です。

しかしこれを着て歩く格恰はあまり好い圖ぢやない。いゝパツクの材料です。

向ふから大學生らしい二人連が降りて來てすれ違ふ時、

「ヤ、こいつあふるつてる、君等は好い事を考へましたね」と、笑ひながら行きすぎる。私達も顏見合して笑つた。

雨の中を眞白に渦卷きかへる大谷川の奔流を左に見て歩を進めた。

私と眞山さんと岡野さんとは、中禪寺まで競爭をする約束をした。

笑ひ〳〵、追ひ越されたり、追ひ越したり、いつともわかず馬返しの蔦屋について、こゝで晝飯を戴く。

食後暫らくしてから、又こゝを出でたつ。後がけの紐が旨く結べないで困つて居る間に、眞山さんと岡野

さん、須藤先生たちは、もう木の間がくれに見えなくなつた。

吉村さん達と一緒に、勢一杯早くと新道を辿つて行くと、道の悪い事一方ならず、お汁粉を流したやうな泥が、足袋の上までかぶさる心地のわるさ!。

歩き馴れないせいか、胸にはドキ〳〵動悸がうつて、咽喉はかはく、足はだるくなる、うつかりすると、坂道がズル〳〵滑るし、雨は用赦なく降りしきるので、立ち止つて休むわけにもゆかず、あゝ、もうとても、勝つ見込はないと、半分泣き出しさうになつた時分、遥か、に見える一軒の掛茶屋、ヤレ嬉しやと、あへぎあへぎ、そこ迄かけ登つて一息ついたら、がつかりした。



額ににじむ汗を、ふき〳〵見廻すと、般若瀧、方等瀧と並べて書いた札が立つて、轟々とはげしい音が、聞えて居るが、さて、立ち上がつてそれを見る勇氣もない。

側にいらしつた橋口さんに、眞山さんは?と伺つて見たら、「もうさつき、いらしつたらしいのよ」ですつて。……

オヤ〳〵と思つて、瀧見物は歸途にゆづり、輕からぬ足を引きずつて、又上りかける。

後ふりかへれば、私よりもまだ遲い人が三々五々上つて來るのが見えた。

鬱蒼たる杉の並木、美しい紅葉の幾株を左右に眺めつゝ、裁縫の草谷先生と、英語のミス、サンマース先生の一行を追ひ越して、なほ滑り〳〵行くと、後から高く靴の音が響いて來た。

「なか〳〵早いんですね、どうです。勝てさうですか」と、淺江先生が一人でいらしつた。

左手の崖を見おろすと、濃き淡き紅葉が底もわからぬ程、枝さし交して、その奥より大谷川の水音が、小やみなくふる秋雨の音をも消してひゞいてゐる。

「新道を行きますか、舊道にしますか」と、先生に聞かれて、

「どつちが早く行きつきますの？」といへば、

「そりや、舊道の方が早いさ、あなたは、負けるのが嫌なんですね」つて笑はれた。

舊道を取つて進んだが、木の根、岩角が雨に滑つて中々大變な道、折々立ち止つては襟元の汗をふくので、その度毎に先生が、

「勞れたんですか〳〵」つて、お聞きになる。

熊笹生ひ茂る中をわけ、こんもりした林をぬけて、やゝ暫らく行くと、ふと、打ち濶いたる平地に出で、轟々たる水音を微かに耳にした。

此の平地を大平と云ひ、あれが、音に名高き華嚴の瀧の水聲ときいた時、物なれぬ私の胸は、どんなに跳つたでせう。すぐにも驅けつけて見たかつたが、この雨では霧がかゝつて見えないから、歸りにした方がいいと注意されて、殘り惜しい思ひに振りかへり〳〵右の方の道へそれた。

中禪寺湖畔の米屋旅館につくと、女中が二三人出て、式臺に膝をつく……、

「〇〇女學校の生徒は、もうきましたか」と先生がおつしやると、

「否、まだ誰方もお見えになりません」、

ミア、それぢや私が先着と微笑みながら足を洗つて茫然として居た。

「ま、神月さん、‥‥私、まけたのね」

柔かい手が肩にかゝつたので、ふりかへると、眞山さんと岡野さんが後に立つて口惜しさう。

湖の水を汲んで沸したお風呂に入つて後、寄宿舎にお留守番のかた〴〵や、故郷の父上、母上に、紀念のスタンプ押した繪葉書を贈る。明日は湯元に向ふ筈。

二階へ登る。

障子を押し開けてうち見やる我が眼の前、足の下に、名にしおふ彼の湖は横たはつて居る。湖上を覆ふ霧深くして、歌ヶ濱の邊は定かに見えない。

誰が乗り捨てし小舟にや、小波のまに〳〵たゞよひつゝ。もやひの綱が解けさうになつて、眞白な鳥が一羽そのほとりに浮んで居る。水の翠と、紅葉の紅と。この鳥の白きうちに今宵から寝の夢を結ぶ私等の幸を思ひつゝ、暫し



＊　＊　＊

「道子さん」輕く肩をゆすぶられて、ハッと目を開くと、寝衣姿の吉村さん

が、枕元に坐つていらつしやる。昨夜、お願ひして置いたから起して下すつたのだ。

時計を見ると、三時半。

手拭をさげて、顔洗ひに行く……

手を入れると、指も切れさうに冷たい水、フー〳〵いひながら、やつと洗ひ終はる。

夜來の細い雨はいつしかやんで、明皎々たる月が、湖水の半面を照して居る。吐く息は白く凍りて、身震の出る程寒い。まア、今日はいゝお天氣よと心嬉しく、いそ〳〵仕度にかゝる。

六時頃、朝飯をすませ、中宮祠前に集つて紀念の寫眞をうつす。

こゝより舟三艘に分乘し、舳を揃へて菖蒲ケ濱に向つた。旅館の屋根の上あたりに、巍然として聳えたつ男體山は、紫色に晴れわたつて、頂のあたりに烟のやうな浮雲が、僅にかゝつて居るのを、かへり見つゝ、鏡の上を滑るやうな、穩な湖の上を、艫聲悠々、小波たてゝ走り行く心地よさ！、

朝日の光、まばゆき迄照り映えて、クリーム、青磁、藤紫、色とり〳〵の洋傘が、水の面にうつつて、得も云はれず美しい。

割合に早くめざす岸について、どや〳〵と上陸した。うつすりと置きわたしたる草葉の霜も、日影の所は、まだ溶けやらず、美しく染めたる紅葉は、靜かな朝風に折々散つて居る。

うす霜のおきわたしたる草の上に
　音なくちるよつたのもみぢば

などと、手帳の端にかきつけながら、落葉重なる楢林の中をぬけて、養魚場を見物する。

黄ばんだ一葉がひら〳〵と散つて水に浮んだのを背にうけて、彼方此方、泳ぎまはつて居る眞黑な鱒がかはいかつた。

こゝを出てから、十二三人連で、龍頭の瀧へと心ざす。ぬかつた道は、落葉に埋まつて、歩く度にガサガサ音がする。

瀧見の茶屋でお茶を一杯のんで、又、暫らく歩きつ

づけると、一望極みなき大平原が前に現れた。

戦場ケ原!!!

黄ばんだ叢の中から、丈高き尾花が、スイ〳〵と伸びて、冷たき朝風に折々そよぐ…。

右に高きは二荒山、麓のあたり、落葉松の梢に日がさして、いふに云はれぬ程うるはしい。



ゆくてに聳ゆる太郎山白根山杯の我等の旅をことほぎ顔にみえるのも嬉しい。

遥かの彼方に、丁度白絹をかけ

たやうな眞白なものが、見えるので、何かと尋ねたらあれが湯瀧ですつて。

私思はず、

「湯瀧つて、暖かいのでせうか」つていつたら、淺江先生も、橋口さんも、皆さんお笑ひなさる。

「湯元の湖から落ちる瀧だから、湯瀧つていふので、矢張水です、伊豆の湯瀧はほんとの湯ですが、こゝのはたゞの水なのです」つて、先生がおつしやつた。

長い〳〵平らな一筋道を、どこ迄も〳〵、洋傘かたげつゝ、さゝ流れの板橋を渡り、險しい崖の片岨道をゆくうち、だん〳〵瀧の音が、はげしくなつて來た。

ふと氣がつくと、翠色深き湯の湖は、立ち並んだ紅葉の間から見えて居る。かけよると、こゝは湯瀧の落口で、水は、眞白な泡を飛ばし、巖に碎け水煙をたてて落ちて行く、その勢の凄しさ！

汚れては居るが白い足袋、紫の袴の裾に、眞紅なうるしの紅葉が散りかゝるのは、繪を見るやうな心持がする。老杉高く空に聳えたち、名知らぬ小鳥が枝を潜りつゝ鳴いてゐるあたりを通ると、硫黄の香り鼻をついて、むせかへるやう、各々の襟元はしつとりと汗ばんだが、白根山上には早やほの白く雪が見える。

松本旅館について晝飯をいたゞく。

靜かな湯の宿のまひるの庭！　日はまともに照らし、ク、ク、と鷄がないて、ひらり〳〵ともみぢが散る。

歸途は湯瀧の下迄降りた。うね〳〵と曲りくねつた眼の廻るやうな急な崖を、怪しい足どりで滑り降りる危なさ、見てゐるだけでも冷々する位。でも、わけなく驅けおりて、さて改めて見上ぐる瀧のめざましさよ!!!

山中だけに、人の影といへば私達の仲間ばかり、至つて靜かな往來を、大聲に話しながら、又もとの戰場ケ原迄戻つて來る。

「道子さん、あなた昨夜どことどこへ、繪葉書お出しになつて？」と、眞山さんがいふ。

「私ね、父と母と、それから‥‥」

「あなたの『オメ』には？」

「ホヽヽヽ、出したわ、あなたも？」

「エヽ、ホヽヽヽ」

ハラ〳〵と落葉松の葉がこぼれて、日は斜になつた。

風は永久に戰場ケ原をふく。

舟に乘る時佐保子さんは、鼻緒ずれが出來たつて、びつこをひいていらしつた。

順風に帆を上げたら、少し波だつた湖の上を、矢を射るやうに走り進む。

つきぬ名殘に幾度か、顧りみる湯元のかた、山の一角に夕日が當つて、カドミユーム色に映々とした所は、油繪にふさはしい。旅館に歸つたのが、五時半。

お風呂に行くとて吉村さんと二人、素足に冷たい廊下を爪立てながら、浴室の戸をスーッと開くと、濛々とこもつた湯氣のうちに、人のけはひ。…危ふげなランプの光にすかして見ると、まつしろな襟をうつむけて、流しにかゝまつた後姿。ハッと思つて。

「ごめん下さい、どなた？」といふと、振り仰いで、

「あら、神月さんなの、私よ、道部」

湯氣にほてつた頰を、冷たい風にふかれながら、欄干に手を重ねてひざまづき、うつとりして居らつしやる折から、山の端を離れた圓い月は、湖面に金波銀波の彩を織つて、めもさめるやう。袂に寒き男體おろし、身にしみ〴〵と吹き來る中に、立ち並んだ三四人、手を組み交し、聲を揃へて、湖上の名月をうたふ。

今宵この幸の湖べに旅ねして
　波間にゆらぐつきを見るかな

* * * * * *

たゞ見る、山も水も空も、今漸々その靜かなる眠より醒めんとし、空に輝く有明の月影も微白みて、光つめたく、湖上よりたち登る朦朧たる水氣は、一沫の霧となつて山の頂に舞ひのぼる。

折しも東の雲やぶれて、輝き出でし朝日子の影、雲より水に、水より山に、眞紅の色をみなぎらせて、次第次第に明け渡つて行く。あはれなつかしき、中禪寺

湖の曉の色。

六時半、この懐かしき旅館に別れを告げて、いでたつ。今日を限りと思へば、さすがに悲しくて、左に仰ぐ男體山にも、木の間がくれに見ゆる幸の湖にも、惜しき〳〵別れをさゝやきながら、道しるべの石をたよりに、華嚴に向ふ。ものゝ本にて讀み、人の噂にきいた計り、あゝだらうか、こうだらうか、見たい〳〵とあこがれて居た、日本三瀑布の一を、今目の前にみた私は暫しの間、口もきゝ得ず、うつとりとして見とれてしまつた。

嗚呼、華嚴の瀧!!! 雪かとまがふ眞白な水烟をたてて、落下する事七十丈、水氣湧き起る瀧壺をさしのぞけば、霧にさへぎられて、そこともわかず、たゞ足のふるへるのを覺えるばかり。

虹! 虹!

さけぶ聲にふと心づくと、あゝまつたく虹!!!

湧きのぼる水蒸汽に、朝日の光が照り映えて、瀧壺のあたりから落ち口へかけ、七色の浮橋がかゝつて居る。

白樺の幹が日光に照されて、白く光るのを左右に眺め、登山の折の苦しかつた事を思ひ出しながら、盤若、方等の瀧まで降る。床几に腰をおろして、遙に白い二條の瀧を見ながら、梨を喰べて居ると、横の方でパチと小さな音、ふりかへると、まあ、淺江先生のお手に寫眞機械、とたんに、ドッと上る笑ひ聲、あゝ、私はほんとに、泣き出しさうになつた。

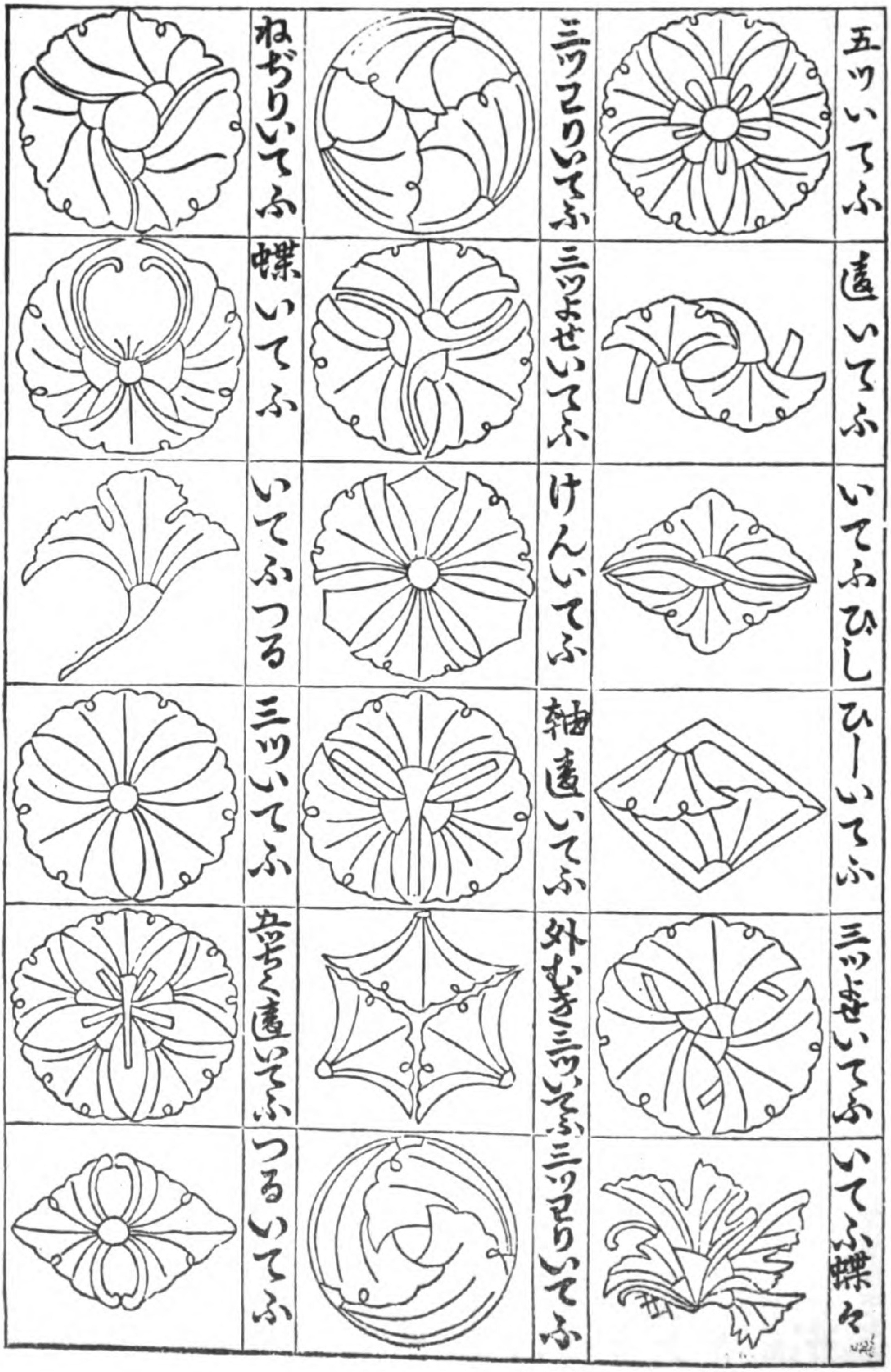
秋の日赤く氣は清く、紅葉の林かせ凪ぎぬ。馬返し迄いつて力餅を食べ、岩ケ鼻より電車に乘る。

足尾への通ひ路を行く荷馬車の影が二つ三つ、秋とんぼが澤山飛び交して、うすい羽根が、キラ〳〵と日にひかる。

日光町で都へのお土産を求めた。父様へお箸と箸箱母樣にお盆と糸卷、それから友のあつ子さんには寄木細工の秘密箱と日光羊羹とを…。大きなお土産包みを手に提げて我等は車中の人となつた。

幸の湖!! 男體山よ。さらば!!!

銀杏葉のいろいろ


五ツいてふ
三ツとりいてふ
ねぢりいてふ
違いてふ
三ツよせいてふ
蝶いてふ
いてふひし
けんいてふ
いてふつる
ひーいてふ
軸違いてふ
三ツいてふ
三ツよせいてふ
外むき三ツいてふ
五ツちく違いてふ
いてふ蝶々
三ツとりいてふ
つるいてふ

手軽に出來る寫眞繪端書

眞壁一郎

一、繪端書は思出多きもの

あり ふれた名所の繪端書でも、懐かしき友より送られたものには、必ず面白き聯想が伴ふので、人にも見せ、自分も打ちかへしつゝ、徒然なる折の心をも慰め、さびしき夕の友とも眺められませう。徒然草の中にも、『此頃ある人の文だに久しくなりて、如何なる折、いつの年なりけむと思ふはあはれなるぞかし』と書いてありますが、これが繪端書であつたら、そのあはれさも、一段と深からうと思はれます。心つくしの秋は、月の色にも蟲の聲にも、風の響にも雨の音にも一しほ友の戀しさを催す時でありますから、友より送れる音信の嬉しき如く、友も亦、わが音づれを懐かしみ看ることでありませうが、この音信に添ふるに、最近の寫眞を以てしたなら、之に接する時の感興極めて深いことではありますまいか。小春の日和の麗かなる午後、椽先の柱に凭れながら、庭のコスモスに看とれて居る時、郵便脚夫の投げ込んだ信書に交つて、親しき友よりの肖像入の繪端書があつたとしたなら、物をこそ言はね、さながら遠來の人に對する心地がせられませう。芭蕉をたゝく玉水の音が、身にしみ〲と淋しき夕、俄に思出でゝ友に送る手紙に、自ら作つた繪端書を用ひるのも面白からうが、友よりの返書にも矢張この種の繪端書を使つて貰ふことにしたなら、山河百里を隔てゝ居ても親しく手を取つて語り合ふ樣な暖かい情味を覺えられませう。寫眞繪端書は、自分の手で簡便に拵へられます。一枚の寫眞原板と、數種の藥品を用意して置けば、僅の手數で、雅致ある端書がどれ程でも出來ます。私は昨年の夏、富士に登りました時にも、出發前にこの繪端書を拵へて置いて、記念のために富士の頂から親しい友の許に送りましたが、同行の人達からもいろ〱と羨まれ、友人などからもよい記念だとの賞辭を送られました。私も初めは寫眞屋でな

ければ、寫眞繪端書は出來ぬものとのみ思つて居たのでありますが、實際手を下して見ると、さう六ヶ敷ものではありませぬ。少し器用な方なら、一二回の實驗で必ず精巧な製品を得られようと思ひます。ありふれた繪端書でも興味ふかいものでありますが、これは又アルバムを飾つて、永き思出ともなるのでありますから、一度お試しになつたらいかゞでございます。

二、どんな器械が必要か

繪筆をとるには餘程の練習がいりますが、寫眞繪端書は機械的につくられますので、一二回經驗すれば、どなたの手でも相應の成績が得られます。これに必要な器械といひますのは、

一、キャビネ形燒枠　一個　代價五拾錢位

一、キャビネ形現像皿　一個　代價四拾錢位

▲これは平皿でまにあはせることも出來る▼

一、混合鍍金液　一瓶　代價三拾錢位

この三つだけあればよいのであります。少し馴れた人なら、燒枠の代りに、二個の狀ばさみを用ひることも出來ますが、初めての方には是非この燒枠が無ければなりませぬ。これは寫眞の原板から印畫を作る時に用ひるので、寫眞の材料を賣る所ならば何處でも求められます。上等のものは一個一圓以上もしませうけれど、實用に堪へさへすればよいのですから、さう高價なものを求めるには及びますまい。器械としては燒枠と皿とがあればよろしい譯ですが、印畫を作るに最も必要なのは、寫眞の原板であります。御承知の通り、寫眞は、最初に感光劑を塗つた硝子板にとりますので、これさへあれば何百枚でも同一印畫を作り得るのであります。故に、寫眞繪端書を拵へますにも、この種板が大切なのですから、寫眞師について嘗て保存してあるものを讓り受けるなり、また特別に種板を貰ふ約束で撮影させるなりして、相當のものを手にいれて置かねばなりませぬ。種板の大きさは、キャビネットならば端書をつくるに適當の大きさですが、圖の大きさに應じて輪廓を拵へさへすれば、二枚掛でも手札でも決し

て不都合はありますまい。知人の中に、素人寫眞に巧みな人などがあつて、その人に頼んで撮つて貰ふことにすると、家庭に於ける趣味ふかい印畫をつくることが出來ませう。黒人の寫眞師には黒人としての誇りがありますが、素人にはまた素人としての苦心も伴ひますので、そこには黒人の及ばざる特殊の趣味をそなへて居ります。人物の撮影には寫眞師の寫場がよいには相違ありませんが誰しも同じこと、寫場へ參りますと、とかく他處行の顔になつて、少しも表情のないさながら蠟細工の樣な寫眞が出來てしまひます。日本の女には、愛嬌があつて、人なづこい點が多いといふのに、寫眞で見ますと、いやに納りかへつた、無愛嬌きはまるものが多いのではありませんか。後に殘るものであるからとの懸念もありませうが、友人の許に送る寫眞などは、やはり暖かみのある表情に富んだのが面白からうと思ひます。その畫を手にした時、將に語り出でむとする如き趣があつたなら送られた人の心の糸に如何なる響きを傳へるでせうか。外國の家庭では、近來寫場でとつた寫眞よりも家庭で撮らせたものを愛ではやす傾があると傳へられますのも、かゝる關係より起つたことではありますまいか。咲き誇つた庭の萩に朝の露をめづる樣、穗に出でたる尾花のもとに蟲を聽く趣、圓窓によれる姿、柱に凭れて雁をきく俤、何れも友に送るに似合しき畫となるではありますまいか。話が、つひ横道へそれました。項を改めて、印畫を作



る手續を話しませう。

三、印畫紙をつくる順序

寫眞繪端書を作るには、紙質のよい無地の私製端書を求めねばなりませぬ。普通の郵便はがきでも差支はありませぬが、私製のには、これよりも紙質のよいのがありますから、文房具類を賣捌く店から「ケント」か「ワットマン」の樣な紙質の良いものをお求めになるが宜しうございます。そして、感光液を塗る準備として

蒸溜水‥‥普通のコップに半杯
食　鹽‥‥小匙に半分

の水を、むらの出來ぬやうに、脫脂綿か何かでぬりつけ、火熱を與へて乾かすのであります。尤も急に作る必要がなければ、自然と乾くまで新聞紙の上などにひろげて、塵のたたぬ所へおいてもよいのですが、急に試みようといふには、前に述べた通り火にかざして乾かすやうにしますと、三分か五分で望みをみたすことが出來ませう。何れにしてもムラの無い樣に塗るのが大切なので、少しでもムラがありますと、印畫に不結果を來すことになるのであります。この手續が濟みますと、いよ〱感光液を塗ることになるのですが、感光液の調劑は、最寄の藥舖に命ぜられるが便利だらうと思はれます。

感光液處方

一、硝酸銀　四、グラム　一、蒸溜水　六〇、cc
一、枸櫞酸　小豆粒程(以上拾五錢位)

この液は、印畫をつくらうとする前に、一寸巾位の繪刷毛か何かで、準備してある端書の上を縦横になでつゝ、ムラの出來ぬやうに塗りつけるのでありますが、成るべく、暗い室内で行ふのが安全ですから、翌日使ふべきものを、其の前夜に作ることにすると都合がようございます。しかし、これも急に拵へる必要があれば、塗りあげると同時に、火熱の上にかざせば直に印畫を作り得ることになるのであります。たゞし、感光液が乾くにつれて、太陽の光線に感ずるやうになりますから、乾きましたら、雜記帳の間かボール箱の中かに收めて、その害を防がなければなりませぬ。それに、感光液を衣類や疊につけますと、除去し難い汚點をとゞめる虞がありますから、これもよく御注意を乞ひます。ことに、之を塗抹する際、指頭を汚しますと、一週間位は、いやな色にかはりませうから、之を防ぐ便法として、小兒の用ひる哺乳器の乳首の大きなもの(未だ穴を明けざるもの)を二つ程求めて、その口の所を切りとつて、指頭をおほふ樣にすれば、極めて安全になし得られます。大分くだ〱しくなりましたから、以上の手續を今一度述べておきませう。

一、食鹽水を無地端書にぬりて乾かすこと。
　火熱をかけて乾かすも可なれど、ムラなく塗ぬるを可とす。
二、感光液を塗りて乾かすこと。
　火熱をかりて乾かすも可なれど。うす闇き室内にて行ふべし

三、乾きたるものは、直に印畫をつくり得るものなれば光線にあてぬ様にたくはへ置く事。

四、印畫と仕上げ

感光液を塗つた紙が乾いた時は、印畫をつくるに差支へ無い時でありますが、これには成るべく晴天の折をえらんで試みますと、頗る好結果を得ます。印畫をつくる順序は先づ、燒枠を開き、よく塵を拂ひ、之に寫眞の種板を入れるのであります。が、種板をいれる時には、硝子面と畫の寫されてある面とを見わけて、硝子面を外側にむけるやうにし、畫のある面をば、感光液を塗てある印畫紙の面に密着させるやうにするのであります。しかし、端書の全面に繪をつくるよりは、四邊へ輪廓をとるか或は端書の中央部などに少さく畫をあらはす方が趣がありますから、それには種板と印畫紙とを密着させる時に、その中間に畫をあらはすに必要な部分だけ切りぬいた輪廓をはさまなければなりませぬ。これも寫眞の材料店などに參りますと、種々の形に拵へられた賣品がありますが、墨をぬつた古端書に、◇形、▯形、▭形



等、自の好みに應じた切りぬきを作つて、それを輪廓の代りにすれば、畫はその切ぬきの穴だけにあらはれるのであります。たゞし、この切り方は、多少手際を要しますから、最初に鉛筆を用ひて古はがきの上に好みの大きさの輪廓を畫き、その線をたよりに鋭利なナイフを以て、三角定規をあてながら、硝子板の上で切りますと、失敗することなしに、好みのまゝの輪廓を得られませう。かくて燒枠に裝置したら、後のバネをかけ、硝子面の方へ白紙を一枚はりつけて太陽の光線にさらしますと、數分の後には紫黑色の畫が端書の上にあらはれて來ます。印畫を作ることは寫眞をやる人の樂みの一に數へられるもので、はじめて試みられる方にも、やはり趣味深いことゝ考へられます。で、燒附いた度合を調べますには、燒枠のバネの一方だけを取放して、そつと後の板をかへし、端書をあげてみるやうにすればよいのですが、日のチリ〳〵照りつける所では、光線の害をうけますから、すこし光線の鈍い方に向いて調べなければなりませぬ。燒附の度合なども、一二回經驗すればすぐ判りますが、仕上げの時、餘程うすくなる傾がありますので、お好みの色あひよりズット濃くなるまで燒きこむがようございます。燒附が終れば燒枠から印畫を取出し、光線にふれさせぬやうに、雜記帳の間にでもはさんで、更にまた新しい印畫紙ととりかへる。かうして五枚なり十枚なり、必要だけの數に達しましたら、燒附をやめて仕上げにかかるのであります。本文のはじめにあげた混合鍍金液といふは、この仕上げに用ひるのでありますが、燒附を終へた印畫は、この液中にひたされて完全な印畫となるので、寫眞をやる人はこの處理を調色又は鍍金と稱して居ります。仕上げにかゝる前に、燒附けた印畫紙を清水に投じて數回水をかへると、白色の濁りを生じますが、その濁りのなくなるのを度として鍍金液を平皿の中に盛り、五六枚の印畫をその中にいれて、下のものより、段々と上に重ねるやうにして居ると、一旦、赤褐色に變つた畫は、再び美しい紫黑色を呈して來るのであります。温みのある色合を好むものには、ま

だ赤味の全く消えぬうちに印書を引上げ、冷調を愛する人は、全く紫黒色に變ずるまで調色をすゝめると、好むがまゝの雅致ある繪端書を作りえませう。調色が濟んだら、五分間毎に水をとりかへて、三十分乃至一時間位水洗をなし、吸墨紙のやうなもので、水分を除去き、塵のかゝらぬ所で乾かせば直に友人の許におくる繪端書となるのでなります。鍍金液の處方も、繪端書のつくり方も、この外にまだ完全な仕方がいくらもあります。簡便なものから複雑なものにすゝむが、ものゝ順序かと思はれますので、今回はこれでやめておきます。年末より歳首にかけての音信にも、かゝる端書を用ふることは、面白いことであります。



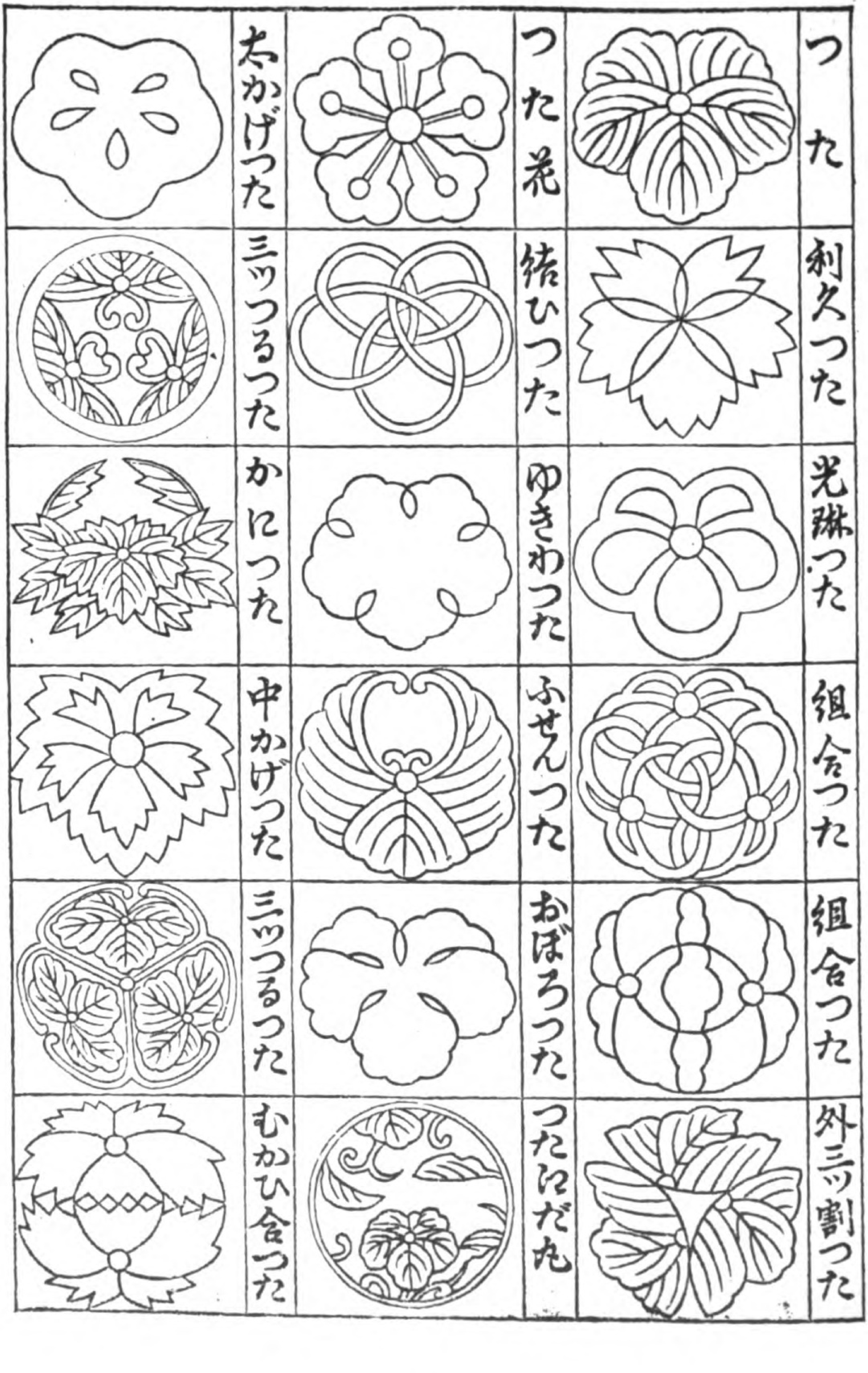
「由之瑟奚爲於丘之門」
我門の松のこえにはかよはすてあらきしらべの琴の音にして

「過猶不及」
風なくば浪路こがれぬ大船もあらぶけばまたくつがへるなり

「莫春々服既莫冠者五六人童子六七人浴乎沂風乎舞雩詠而歸」
花染のたもと振はへ吉野山友うちむれて櫻狩せん

（論語百首の内）

蔦のいろいろ



つた
つた花
太かげつた
利久つた
結ひつた
三ツつるつた
光琳つた
ゆきわつた
かにつた
組合つた
ふせんつた
中かげつた
組合つた
おぼろつた
三ツつるつた
外三ツ割つた
つたにだ丸
むかひ合つた



巷の噂

△親子の情（東郷令嬢の事）

すつきりと高い姿のコスモスも、鮮かな色のダリヤも、轉た秋の日に醉うて咲いた。東郷大將の令嬢がまだ嫁がれないずつと以前の事である。

日露の危機が迫つて、東郷大將が出發の日、大將は生憎風邪を引いて居られた夫人は征途に上られる事とは夢にも知らず、『お風邪を召して居らつしやいますし今少し御養生遊ばしては……』と、云はれると、天下の大事を胸中に秘して居た大將は、『何ッ』と云ざま、ハタと夫人を打つて出て行かれた。夫人は別に恨しい顔もせられなかつたが、凝乎として見送られた中に愁容は覆ふべくもなかつた。此の有様を見たお嬢さんは、父上の跡を追うて新橋驛に行かれ、『母さんは、何も御存じなく、あゝ仰しやつたのですから、萬望お詫をなすつて下さい』と願つた。流石に勢ひ込んで居た大將も、此の一言を聞いて『俺が惡るかつた』と微笑された。お嬢さんも夫れに滿足して歸られ、『お父さんは、お詫をして入らしてよ』母堂の愁眉はこの一言に開けた。

△緣不緣（石本夫人の事）

高師出の確か牧野榮子さんとかいふ方だつた。今は何れの空にお在でか、ひよつとしたら未だ獨身で敎鞭を執つて居られるかも知れぬ。今は時めく陸軍大臣の石本さんの、少尉時代の昔のこと、ふと花を欺くやうな浦若い榮子さんを思はれ人をして、結婚の申込をされたが、『軍人は好かない、少尉位な方ではねえ』と、



てんで問題には成らなかつた。そこで或人が氣の毒がつて、特に推薦されたのが今の夫人である。夫人はお顔は旦那さまの御自慢なさる程でもないが、至つて貞淑な方で、人交際も好く、澤山のお子様を育てゝ居られる。

子福者は石本家の血統で、彼の方も男では六番目の新六ですが、男女合せての九人目の末生の方で、有つても無くても可い人のやうに思はれて居た。姓名は聞き洩したが、某といふ女が新六さんを引受けて育て上げたのださうで、さうしてこの方の今日あるを得たのは、全く此の女のお蔭だと云つて、今は養老金を毎月三十圓づゝを贈與して居られるさうだ。

△命令結婚（乃木夫人の事）

今を距ること三十年の昔話しである。少壯士官の率ゐた一隊の兵が、テッテケ〳〵で毎朝赤坂の溜池邊を行過ぎるといつもきまつたやうに、湯地定幹さんのお屋敷からお孃さんの顔が現はれる。さうして、お孃さんの眼は、兵隊の足並ではなく、英姿颯爽たる一人の少壯士官の上に注がれてゐた。士官は何心なく行き過ぎるが、お孃さんはトットと行き過ぎる人を他人のやうには思へなかつた。

いつしか心の火が何物にか誘はれるやうに、とろ〳〵と燃えた。朝な夕なの思を思として、人の姿は幻影のやうに髣髴いた。顔に愁の色を湛む時、父親は早くも夫れを讀まれた。

『ウム、適切り彼れだ。』

定幹さんは薩摩人だけに、お互に知り合つてゐる、時の鎮臺司令官少將野津鎮雄閣下（野津元帥の兄）を訪ねて、可愛い



娘のあこがれびとを物色した。

『誰だらう？』野津さんは、肘を卓にもたせて髭を捻られた。

『腕に太い線がある、男らしい立派な士官……』

『夫れでは乃木だ。乃木に違ひない。』と云はれて、彼れなれば未だ結婚せぬ筈、夫れに有望な士官だ、宜しい俺が媒妁になつて遣らうと磊落に出られた。

直様使を遣つて、乃木さんを呼ばれた程なく、男らしい立派な少壯士官は、閣下の前に直立した。

『お前は、まだ妻帶しとらん筈だな。』

『はい。』

『然うか。幸ひ良縁の申込がある……』と、巨細の事情を述べ聽かせた後。

『……不足は無い、妻にしては何うか。』

『はい。』

事は命令的に極つた。乃木さんは服従を軍人の美徳と心得て居られたので、一言の返し言葉もせずに、閣下の命令に従はれた。斯うして嫁がれたのが、今の乃木將軍夫人として、令名の高い、靜子夫人である。

△孃ちやん育ち

（長谷場夫人の事）

此のたび文部大臣になられた長谷場さんの奥様は、確かりした信仰を持つて居らつしやる基督教徒だが、交際界には些とも御顏を出されない。何處となく世間見ずの、孃ちやん育ちと云つた風な所がある。

夫人は九州の政界に働いてゐる濱田康喜さんの姉君で、十六の時、さる金滿家に嫁がれたが、可厭で歸り、夫れから同



志社女學校に入學された。そこを卒業してから、虎門女學館の教師をして四十近くまで老孃の生活を營んで居られたが、世話する人が有つて長谷場さんの後室となられた。里方の母堂や誰彼が長谷場さんの議長になつた時すら非常に喜んで居られたから、今度と云ふ今度こそ大臣になられたので、どんなに喜ばれたかと思ふと、九州の空には美しい虹が掛つてゐるやうである。

△一度はお嫁に行く

（龜田米子の事）

仙臺の東北中學校數學教師の龜田米子さんは、嫁がず娶らず童貞の淸きを守つて育英の業に心身を捧げて居られる。頭髮を飾り氣の無い束髮にキリツと結んで、袴を胸高に穿いて、チョークの粉の中に呼吸してゐられるが、それでも烏羽玉の黑髮を島田に結うて、長い袖に羽子を突いた昔もあつた。

米子さんがまだ島田に結はぬ十三四の頃、八百屋の養女となる約束が出來た。米子さんは、唯最う可厭だ〳〵と頭を掉つた。家の人々は『女と云ふものはね、一度は誰でもお嫁に行くものです。』といつて聽かせたので、米子さんは頓に機嫌を直して、『夫れぢやね、妾お嫁さんに往つてよ。』と二つ返事で養女に行つた。

するとニ三日經つてから、ひよつこり歸つて來て、さうして、母上の前にすわつて、『母さん、妾一度お嫁さんになつたから、最う何處へも往かなくつても可いでせう。』と重荷を下したやうに、優しい氣息を吐いた。

夫れからと云ふもの、米子さんは專心



數學を修めて、誰に勸められても、誰に言ひ寄られても、キッパリと斷つて動かなかつた。

△夜の十二時

（佐々木母堂の事）

母體教育とか、胎内教育とか云ふ事から話がはづんで、教育のある確かりした女からでなければ、秀でた人物は生れぬと、誰方か言出した時、こんな反證を擧げて笑はせた方があつた。

高師の佐々木さんの母堂は、體格の良い人だけれども、教育と云ふものは受けて居なかつた、或人が夜の十二時の汽車で立つとか何とか云ふ話をされた時に、さも驚いたやうに『夜にも十二時が有るんですか、私はまた正午ばかりだと思つてゐた。』と云はれたさうだ。是れは今でも土地の人の話の種となつて居る。

△時計の紐と洋服

（山川夫人の事）

九州大學總長の山川博士は氣骨のある人物で、樣子などは一向お構ひなさらない。夫人も其の感化を受けられたものかやはり質素な扮裝で、簡易生活を樂しんで居られる。

博士は金時計を手に入れられた事もあつたが、直ぐに同郷出身の某辯護士に與へて了つて、今後生大事に持つて居られるのは、大形の古い銀時計である。いつぞや其の紐が損じて不可くなつたので、夫人が打紐の黑紐を買うて來て付けて上げられると、『是れは上等だ。』と喜ばれて今も依然としてそれを用ゐられて居られる。



斯様な風に、些とも見えを張られないが、夫人は流石に十年一日のやうに著古した良人のフロックコートだけは氣に掛けられて、不時の用にと新形のを調製された。けれども、夫れを良人に進める機會に接しないので、簞笥の底に仕舞つて置かれた。されば新形はいつしか流行遅れとなり、更に古形となつた。

其の間にお子様が赤門を出て、學士となられ、園遊會の催しに招待されたか、何かで絹帽とフロックコートの用が起つた。で母上に『何うかして下さい』と云はれたが、差當つて新調する事も出來ないので、長い月日の間簞笥の底に潜ませて置いたフロックコートを出して、『之をお召しな』と微笑まれた。

親と子の固より體にはシックリ合はなかつたが、夫れを著し、父親の絹帽のともすれば眉を蔽ふ程の大きなものを被つて、平氣で出て行かれた。山川博士の家庭は變物の寄合の淋しさうで、實は却々に和氣が籠つてゐる。

△あの連翹

(志村夫人の事)

勸銀の副總裁で、近く總裁に陞任されるとか噂のある志村源太郎さんの夫人は岩崎彌之助男の令孃で、新婚の當時はさしも朝日に囀る小鳥のやうにおもしろい家庭でした。

佳く晴れた日の朝、志村さんは新家庭の人生を味はつた隱し切れない愉悅を面に湛へて、彼方此方と庭の面を散歩して居られると、いそ〳〵と緣側に出て來られた夫人が、寢衣姿を取り繕ひ乍ら、『貴郞!』と鈴を振るやうな聲で呼ばれた。

衝と振り向いた志村さんがニコ〳〵して傍に行くと、

『貴郎！履物を貸して頂戴な。』

『散歩かね』

『いゝえ、彼の連翹の一枝を……』と、庭の隅を指された。見れば、靜かな朝日の前に黃色な連翹の、花の一瓣一瓣が照り輝いて居る。

志村さんは突如自分の脊を向けて、『さあ、負つて上げよう』と、兩手を背後にして海老腰になられた。夫人は極り惡げに颯と頰を染められたが、『貴郎、能くつて？』と羽二重の樣な白い手を良人の肩に掛けて、ちよと身を浮かせた。志村さんは心得て、『誰がよ〳〵』と兒守唄の節面白く身を左右に振り〳〵、連翹の許まで行つた。幾たび春逝き、秋來つて、ただ子夫人は最う四十幾つかになられた。



活社會

職業紹介所へ行つて見た記

宮城野

「英文翻譯者數名至急入用」との新聞の希望廣告を見て、私は直ちに其廣告主なる神田の××職業紹介所の暖簾を潜りました奥行の狹い店の、一方の壁には幾つかの細長い塗板が下がつて居て、それに信用貸金紹介だの、地所家作賣買周旋だのと、金文字麗々しく書いてある其下に鯱揚格子を据ゑて、中に机に向つて切りに筆を動かして居た四十恰好のでつぷりした亭主は、ふと面を上げて私を見るなり、

「いらつしやい」

と愛想よく頭を下げました。

「あの、英文の翻譯をする者が入用の所が有りますそうで」

と、私がもぐく口籠りながら尋ねますと、

「エー、御座います」

と筆を措いて、

「まあお掛けなさいまし。相變らず鬱陶しう御座いますな」

と座布團取つて私に進めました。

「どんな仕事なのでせう、私なぞにも出來ませうかしら」

と、訊きますと、

「エ、御婦人方も大分やつてお出でなさいますそうで、ナニ一通英語の心得さへあれば誰にでも出來ますのです」

と、じろく私の樣子を見廻しながら造作もないやうに亭主は言ひます。

「で、兎に角其見本といつたやうなものは此店には有りませんでせうか」

と訊けば、

「有りませんな、それは先方へお出でなさらなければ」

とニヤリとする。

「一體どちらなのです、其仕事を出すといふ所は」

「さやう……、まづ麴町區内で」

「麴町のどの漑です」

とかされて問へば、

「エヘゝゝ」

と亭主は賤しく笑つて、

「それはなんです、一定の手數料を戴いた上で御紹介しますので、[illegible]ゝ」

と言ひます。

「お成程」

と私は思はず顔を赤めましたが、

「それはもう、いよ〳〵紹介してお貰らひするとなれば手數料も出しますが、併し私なんぞにも出來るやうな仕事か如何か、一向其邊が判然しないものですから……」

と當惑したまゝ、彼方は早くも見て取つてか、

「イヤ決してそんな六ケ敷ものでは無いですよそれに第一、内職として此職以上のものは、まあ有りますまいからな、缺員が有る度に始終手前共の手から入れて居りますが、皆喜んで、お蔭でうまい仕事にありついたと言つては禮にお出でなさいますよ、何しろ貴孃、少なくとも日に一圓から一圓四五十錢にはなるのですからな」

と空腹に牡丹餅のやうなことを言ひます。

「まさかそんなには……」

と笑へば、

「イヽエ全くです」

と亭主は言葉に力を入れて、

「現に此近所に住んで居る人ですが、最初はほんの一時遊んで居る間の小遣取にやつて見たんです、すると日に一圓四五十錢は樂に取れる、月に積つては四五十圓でせう、しかも金の支拂は至つて確實で、イヤモウ斯んなことなら、再び小役人になつて人にペコ〳〵するにも當らないと言つて貴孃、最初は、、間借に自炊をして居た人が一軒の家を借りましてな、國元から妻子を呼び寄せるといふやうな騷ぎで、ハヽヽ、結句今は喜樂に暮して居りますよ」

と、申すのです。

果して其言葉に僞がないならば、私も一人の老母樣を樂に過させますことの出來るものをと、流石に心が動きました、

話してゐるうちにふと、

「英文の翻譯物が有るちうが」

と、九州訛りの濁みた聲が後ろに聞えました。ハツとして振り向くと背の高い、正直さうな一人の青年が其所に立つて居ました。お定まりの紺絣に小倉の袴を穿いて、片手に角帽を持つて居ますが、其緒い嚴丈な額からは汗が流れてゐました。

「いらつしやいまし」

と亭主は莞爾やかに迎へました。

「自體どげん仕事か喃、若し己共にも出來得ること　あればやつて見たか思ふばつてんが」

「お左樣で」

と亭主は受けて、

「エヽいろ〳〵の物が有りますさうですが、……まづ重もに雜誌類ですな」

「雜誌類？　そげんもんなら易か」

と、ドカリ店に腰を下ろしました。

「失禮ながら、學校はどちらで」

と、帽子の徽章に目をつけながら亭主が訊きますと、

「帝國大學の法科たい」

と、これはいさゝか得意さう。

「それはお結構で、是非ひとつ願ひませう、法律政治向のものも大分ありますさうですよ」

と、亭主はもう私の方などは見向うともしませぬ。私は口惜しいやうな又覺束ないやうな氣持になりましたが、

「あの、それでは先方へ紹介してお貰らひするとしますから」

と、五十錢銀貨を其行に置きました。

「はい〳〵」

と、亭主は机の引出をあけて、粗末な一通の封書を出して、

「之を其名宛の處へとお持ちになれば宜しいのです」

と、私に手渡しました。

「いろ〳〵お世話でした」

と、其紹介狀を受取つて裏をかへして見ました。

○○區○○町○十○番地、合資會社英文飜譯所御中と活字で印刷してあります。○○區の○○町といへば、此所からはなほ一里餘りもある、一旦我家に引返へしてからと思ひましたが、何やら早く先方の樣子が確めたく、電車で行けばわけはないと、其儘私は停留場へと急ぎました。

處に飜譯事業をやつて居ると紹介所の亭主の言つた、其合資會社なる飜譯所といふは、實に相應の見すぼらしい一軒の家でありました。若干の保證金を納めて、急ぎといつて受取つた一冊の原書を、私は十日餘り夜の目も寢ぬ位にして仕上げました、しかも種々の難癖をつけられて得た處の價は、其勞力に對して實に涙の出る程僅少のものであつたのであります。

生馬の眼を拔くと言はれる都の内には、決して甘い餌は落ちてゐぬのでありました。

これは新らしい人が眞情も眞相もさらけ出した處に力があるのだと思ふ。古い宗教や道徳は、新時代の人に對しては最早權威を持つては居ない。三千年の昔、三千里の彼方雪山の麓に衆生の迷霧を拂つたといふ佛陀の光も二千年の昔髑髏が岡に萬民の爲に流したといふ聖者の血も、現在の人に向つては餘り力がないやうである。よし力があるらしく見えても、それは人前を繕ふ爲の力で、假面を被つて利口に世を渡る方便に使はれてゐるのである。若い女の心に反響するものは、若い女の眞情の聲である。現在の人の心を動かし且つ益するものは現在の人の聲でなければならぬ。こゝは新聞雜誌に期待せればならぬのである。

妙齡の女を誘惑する蜘蛛の手

あき子

色慾とは何ぞ、此所に私の周圍に起つた事の二三の例を擧げて、如何に私達妙齡の女に向つての誘惑の手が擴げられて居るかをお話をしませう。

一、艶書

春や四月、堤の花の盛なるある日の午後、郵便の一聲に投込まれたピンク色の小さい角封筒、表には……子樣御許にと、細いペン字の走り書、裏には何の何子よりと町名番地も判然とはした事の無い人からですから、不思議には思ひましたけれど、同窓會の事か何ぞだらうと、さして氣にも留めずに、開けて見て私はまあどんなに驚いた事でせう、見も知らぬ男からの艶書、中にはちやんと男の住所姓名が書いて有るのです、中の文句は言はずもがな、唯、甘い〳〵クチナシの花の香の樣なとのみ……けれ共其終の方は「……もしも我、此、切實なる思ひを情なくも斥け給ふとならば、其時こそは〳〵如何樣なる恐ろしき災の御身に及ばさる可きかをあらかじめ御承知ありたく候」などゝ書いてあつたのです。

此の種の物を初めて受け取つて見る人は餘程の人でも、其見た瞬間には或一種の惑に打たれるでせう、それがもし少しでも意志の弱い人でゞも有つたら、自惚れと、好奇心と、多少の恐れとが瞬間に起つて直に應じてしまい、終には救ふべからざる墮落の底深く沈んでしまうのでせう、私は其儘捨てゝ置きました所が五日許りも過ぎて又來ました、見るのも穢らはしいと思ひましたけれど、夫でもさすがに氣になるので兎にも角にも開けて見ました、恐ろしい〳〵脅迫狀でした「我部下十五名は道に御身を見つけ次第必ずや思ひ知らすべし」だの「血を見では止まぬ……」などゝ穩かならぬ文句が書かれて有りました、一月二月は外出もひかへ日々恐ろしさの中に送りました、而し其間に何にも變つた事は有りませんでした、勿論其後から今迄一年餘の間何事もないのです、やつぱり〳〵一時のおどかしに過ぎなかつたのです、もしも私が恐ろしさの餘り其男の意に從ふ樣な事があつたらどうでしたらう、今頃は親兄弟にも見離され、日に〳〵深い淵瀨に沈み行きつゝあるのでしたらうに、考へてもゾツとします。

其後も種々の人からピンクやライトブリユーの角封筒、艶ぽい和封筒などが時々舞ひ込みました、殊に活動寫眞の中などは危險です、私などは何時も家族一緒で參りますのに、歸つて見ますと何時も一本位は入られて有ります、其文句は千篇一律、甘つたるさお話になりません、時たまにはクロバーの押したのなどが入られて……彼等は書いて置いては始終持つて步いて居るのださうです、そして一寸でも目に觸れた者があれば其總てに舞ひ込ませ其中一人でも成功す

れば満足なのださうですが「十人入れた中で一人か二人は必ずものになる」つて彼等の告白ださうです、夫が驚くではありませんか弄ばれると知りつゝ我から好で堕落の底に沈む人があるとは…あたら清かるべき花の時代を唯一時の快楽の爲めにむざ〳〵散らしてしまつて一生取返しのつかない不幸を招くなどゝは愚も甚しいではありませんか、すつと美人よりも概して餘り美でない者の方が彼等の手に陥り易い様です、餘り人からも騒がれないのが急にそんな事があると忽ち美人のつもりになつて…勿論意志の弱いには相違ありませんけれ共慎むべきは好奇心や自惚心にかられない事です、そしていやが上にも意志を堅固に…。

二、言ひ寄る人

是れは唯私だけに實際あつた事で普通一般の例にはならぬかも知れませんが参考の爲め申上ます。眼には金縁鼻下にはカイゼルとやらの美髯を蓄へ、色飽く迄白く、目、鼻、口、共に秀でた高等の地位を占める天晴な當世紳士出づるにも入るにも金紋付御手車の家には齢廿四歳許りの美しい奥様と可愛盛の女の御子とある御身世間では完全無缺な旦那様と誰しも尊敬しない者はない位其人はフト事から私の兄と心易くなつて毎日の様に遊びに來る様になつた、家中の者は他人とは思はず春のお花見折にふれての御芝居など大抵の時に誘ひ合す様になつたのです、父のない私は兄の次に頼むべき人ともおもつたのです嗚呼それが一日ほろ〳〵とこぼれる萩の花の風情に、我とはなしに縁に出て見とれて居た秋の日の夕暮、いつと後から肩に手を掛けたのは其人何をそんなに考へて居るのですなどゝそれから種々嫌らしい事を言ひ掛けました。嗚呼妻あり子ある其人迄がと少なからず驚きました、尚も相當に地位のある人ですから、家の者に打あけて恥を與へるのも心苦しいと小さい胸に秘めてゐましたが其後も度々かゝる事がありますので詮方なく母に打明ました、母は大變に怒りまして直に宅に來る事を一切断はつてしまいました青年よりも概して壯年老年の人の方が鐵面皮です。

兄が法科に居た時分の友二三人、一夜歌留多會にて招いてからは、其人達及び其人達のつれて來た名さへもろくに知らない様な人が折々訪れて來る様になつて其中の二三の人は折に觸れ事によせては遠廻しに言ひ寄ります、要するに是等の多くは九分九厘迄一時の欲望を満足させたい許りにするのです、かうした魔性を帶びた男は世のあらゆる場所に隙間なく存在して居るかも知れません。

三、尾行

家からは程遠からぬ友達の家、急な用事が起つた爲めに下女をもつれずに一人さまよひ出たのはまだほの暗くなつた許りの時分一町許りも歩いたと思ふ時分、後から私の名を呼ぶ人があるのです、ふりかへつて見ると二十二三の學生風の男、私は知らん顔して急いで友の家迄往つてしまいました、用事をすまして出て來ると(三十分も過ぎたでせう)驚くぢや御座いませんか、其男が其處の門の傍の電柱の陰に立つて居るのです、ドギツとしたのを無理から平氣を粧ほ

つてスタ／＼歩き出すとやつぱり二間の距離を置いては尾行いて來るのです。そして或家の藏と黒塀との並であるうす位い所迄來ると（一本路で外に通る路が無かつたので……）忽ち傍へよつて來て「後生ですから僕と一緒に一寸來て呉れ給へな」なんて言つたのです、秋は知らん顏してずん／＼歩いたのです、けれ共あんまり五月蠅く言ひますから「知らない方と何處へも一緒に往く理由はありません」て言つてやりますと「貴女の方ぢや知らなくても僕の方ぢやちやんと知つて居ます何時も思つて許りゐて言ひ出す樣な折がなくてなどゝ言ひますから私は物らいはず落着て歩きました。けれどもやつぱり同じ事を反復へし／＼言つて居ります、丁度交番の近く迄來ましたから是幸と巡査に言ひつける風をして急ぎ足に行きましたら、向ふも驚いて逃出しました、けれどこの時は隨分恐ろしう是も皆私の威嚴の足りない故だとよく／＼自分の平生を氣をつける樣になりました。

脅迫的に或は權威を以て金錢を以て蜜の樣な言葉を以て外見の美麗さを以て、又は服從的にあらゆる手段を以て、あらゆる階級の男が日と云はず夜と云はず、私達妙齡の女を陷れよう隙をうかがつて居ります皆樣御用心遊ばせ。





祇王傳

嵯峨野の露

一

「萠え出るも枯るゝも同じ野邊の草、何れか秋に逢はで果つべき」麗かな春の光の底に、新らしい生命の力を藏した野邊の草も、軈ては朽ち果つる秋の哀れに逢はればならず、人間の榮華も一旦の夢、覺むれば冬枯の寂しき曉を、誰か歎かぬ人がありませう。古今東西人の心は長に變らぬ世の掟を守つて居るのであります、一たび歡樂の巷を去つて了へば、浮世は誠に濁つた穢土に外ならず、花に歌ひ月に舞ひ、紅のリボン、紫の御召、いふ間こそ實に人生の花、「明日ありと思ふ心の仇櫻、夜半に嵐の吹かぬものかは」冷たき頰の皺を撫でればならぬ將來を思つたならば、何として生命が樂まれませう。

京都は嵐山、嵯峨は往生院、古い僧庵、低い萱葺の屋根は崩れて、松風咽ぶ寂しき邊に、主は永劫、青苔の下に眠つて居る主とは誰？　嘗ては榮耀に誇りし身の、空しく秋の雨に打たれて、わが祇王は憐れなる女の恆を示して居る。

彼の太政入道淸盛が、天下を掌の中に握りて、榮耀を極め、世の誹議をも尻目にかけて、己が欲する儘を仕盡さむと權威を藉りて不思議の事を厭はなかつた中にも、祇王は即ち其の犧牲となつたのである、

祇王は其の頃、京都で名高い白拍子であつた。歌舞を演じて客の心を取る職であるから、當時の貴紳の弄び物たりしは免れない事實である。

祇王の妹は祇女、これもやはり白拍子であつた、一人の母は刀自と名乘つて、今は齡も傾いて居るが、もとはといへばやはり同じく遊者であつた。祇王初めて淸盛に召されて、

「蓬萊山には千歲經る、萬歲千秋重れり。松の枝には鶴巣ひ、巖の上には龜遊ぶ。」

聲朗かに歌ひ澄し、心を盡して舞つたのであるから容色と共に、忽ち彼の氣に叶つて、直樣召し抱へられ母には毎月、夥しき贈品があつたので、彼女の一族は春の光を浴びたのである。美は單に皮相のみとは云へど物質に事を缺かさぬは今も昔しも同じ容色の德である。

かうして三年は經つた。祇王は大權者の寵を縦にしたのである。彼れ祇王は白拍子としての理想は實現せられたのであらう。

ところが好事魔多し!!!

茲に加賀の國に其の名を佛と呼ぶ白拍子があつた、その聲名忽ち物好な京人の間に傳唱されて何時しか大評判となつた。媚びる者あッて早速入道に紹介すると婦人に就ての好奇心の盛なる人で然かも榮華、權勢共に兼備へた淸盛何條これを默過すべきとは思ひの外であつた、入道は殊の外立腹で祇王に勝る者が天下にあるべきか、佛であらうが神であらうが祇王が傍に侍る限り、一切他人は寄せ附けぬとの言、これは流石に淸盛である、これを聞いた祇王は、遉がに同業者の好意で自からの昔しの心持を語つて嘆願に及ぶと、然らばとの返事であつた。

「君を初めて見る時は、千代も經ぬべし姫小松、御前の池なる龜岡に、鶴こそ群れ居て遊ぶなれ」と召されて佛は歌ッた。これはこの頃の習慣と見える、祇王にしろ佛にしろ、これが即席に歌ひ得られたものとすれば、當時の白拍子なるものは婦人の社會に於ては相應に思想もあつたものである。

楊貴妃が花の顏、李夫人が芙容の睫、夏野の萩の風に靡く有樣、翠の山に月の出づる裝なりとは佛を形容した盛衰記の詞である、平家物語は此の間の消息を述べて、

「佛御前は、髮容より始めて、見目貌世に勝れ、聲よく節も上手なりければ、なじかは舞は損ずべき、心も及ばず舞ひ澄したりければ入道相國舞にめで給ひて、佛に心を移されたり」とある。

此の最後の一句が祇王に落ち懸るべき運命である。

佛はまだ年はやつと十六、寧ろ可怖い感じが伴つたのであらう。もとより推參の者なれば、早々暇を賜はりたいと申し出たのである。

「新を賞で舊を棄つるは世のさが、人の癖なれば、入道更にゆるし給はず」と盛衰記は語つてゐる、この一句權勢を弄する人の眞髓を遺憾なくあらはして居る。新陳代謝は人間の上に始終適用されてゐる、誠にかゝる人に寵愛を受けて居る女こそ實に風前の燈とも云ふべしだ。



佛の辭するを見て、扨は祇王が居る爲に、かく言ふのであらう。祇王疾く〳〵出でよとさても淸盛は直情經行の快漢である。

固より卑しき稼業の身であるから、早晩然るべき運命に遭遇する事は豫知して居たのである「つひに行道とはかねて聞しかど昨日今日とは思はざりしを」彼女はたゞ運命の激變に驚いたのである。祇王はもとより金殿玉樓に起臥するのが強ち其の目的では無かつたが住馴れし棲の離れ難さと、寵愛を奪はれし無念さとに心を奪はれて、今は唯泣く

より外はない。百石百貫の仕送りを絕たれるからといふ樣な、物質的觀念に左右されるにはまだあまりに若く且つ餘りに溫和であつた。彼女はたゞ我身を怨むばかり。苦痛は自己に訴ふるより外はない。自分は最早此の家の人ではない、芥にも劣る身を提げて、黑髮を引き剃らるゝ思の中に、扨は障子に、「萠出づるも」の歌を書き殘して、泣く〳〵西八條の邸を立去つたのである

二、

歡樂の人を見すてゝ
　歡樂の巷街を避けて
夜の眞膝に打伏しつゝ
　心の苦痛訴ふるとき
涙はしづかに流れ
　長しへに流れて已まず
あゝされど、心のもだえの
　ほのほは涙に消えざるなり

と獨逸の抒情詩人は謳つた。祇王は家に歸つて、たゞ泣くより外はなかつた、女の第一の武器は涙である、明けても暮れても袂の乾く隙はなかつた。

「かくて今年も暮れぬ、明くる春になりしかば入道相國、祇王が許へ使者を立てゝ、いかに祇王、その後は何事かある、佛御前があまりにつれ〴〵げに見ゆるに參りて今樣をも歌ひ、舞などをも舞ひて、佛なぐさめよとぞの給ひける」

梨の礫の音沙汰も無かつた所に、而もか樣な無しつけな挨拶、女の身に取りて、これ程の侮辱が何處にあらう。祇王は無論返事をしない。

ところが淸盛は殊の外立腹で、言ふ事を肯かなければ承知ならぬというた。後難を恐れて母の刀自は泣く泣く祇王に說き勸めたのである。

「年來有難く世を過しつるまかなひも、偏へに入道殿の御恩なり。されば日來の情を思ふても參るべし、後の難も恐ろしければ參るべし、さらば老いたる親に憂目見せ給ふな、入道殿の御心としては女なればとて、よも外には置き給はじ早出立ち給へ」

靑春の意氣地は、猪の道を走るが如しとある、左右を顧みぬ祇王もさすが分別ある母の詞に思案して張り

裂ける思を舞衣の袖に包み妹と共に六波羅の邸に伺候したのである。

扨、參つて見ると日頃の座敷とは違つて一段下つた所に設けられたのである、彼女は腦天から水を浴せられたやうな感じさぞ血の涙を溢したであらう。

「佛も昔は凡夫なり、我等も遂には佛なり、いづれも佛性具せる身を、隔つるのみこそ悲しけれ」と折返し〳〵三度歌つたのである。「滿座哀を催して袂を絞る者もあり」と餘所の見る眼も同情に堪へなかつた。清盛も幾分か心に應へたと見えて、今一つと所望して止まなかつたから。

「君かあけこし手枕の絶えて久しく成にけり何しに睦なくむつれけむなからへもせぬもの故に。」

けれども彼の男の胸は既に已に冷えきつて居たのである、

「あはれ祇王は今樣は上手かな上代にも聞き及ばす末代にも有難し、此後は召さずとも常に參りて、今樣をも歌ひ舞などをも舞ひて佛慰めよ」との言ひ草、これが三年も寵を專らにした人から聞く詞であらうか、祇王は今更ながら後悔し



たのである。

思ひ窮まつてみれば、世の中は急に狹くなつて來て所謂五尺の身體の置き場が無くなつたのである、して見れば此の際慰安を與へて與れるものは死神の腕より外はないのである。

虚榮、嫉妬、悲哀、厭世、女の蹈むべき階段は正しく右の順序に從ふのである「かくて此の世にあるならば、又も憂き目に逢はむずらむ、今はたゞ身を投げむと思ふなり」と、心の駒は一徹に狂ひて、厭世の念は黑雲の如くに群がり來たのである。母は之を聞いて、「…但しわごぜが身を投げば、妹の祇女も共に身を投げむといふ。若き女どもを先立てゝ年老い齡衰へたる母、命生きて何にかはせむ、なれば我も共に身を投げむずるなり。未だ死期も來らぬ母に、身を投げさせむずることは五逆罪にてやあらむずらん」と恩愛の義理より責めて自殺を思ひ止まらしめ、更に「此の世は假の宿なれば、恥ぢても恥ぢても何ならず、只永き世の闇こそ心うけれ、今生に物を思はするだにあるに…後世にさへ惡道へ赴かむずる事の悲しさよ」と說いたのである。

これが正しく當時の人生觀である、歷史を繙き物語を讀むに當つては、先づ其の時代の人情、文明を考へなければならぬ。

かくして祇王は出家の志を決したのである。「蜻蛉の有るか無きかの身を持ちて、朝露のそけば消えける命なり、女は心やなかるべき」と遂に剃髮した妹の祇女も、姉の姿の變つたのを見て、同じ道にと志し、嵯峨の奥往生院に、母子三人、菩提の月を眺むる身となつたのである。時に祇王は二十一、祇女は十九刀自は四十五。

祇王の其後は如何なつたか、

花を手折つて、朝夕身を香の煙に漂はして居て果して完全に佛道の修業が成就せられるものではない。よしや薙髪の尼となつて、墨染の法衣を身に纏ふたとて、其の昔の心持と何れ程の差異があらう。呼吸の通つて居る間は血も通へば涙も湧く。百八の珠數を爪繰つたからとて婦女はやはり婦女に違ひない況して祇王の身に取りて、其の出家の原因は佛であるから、折に觸れてなほも煩惱の焔が燃え上つた事であらう。

「かくて春過ぎ夏たけぬ。秋の初風吹きぬれば、星合の空を詠めつゝ、あまの戸わたる梶の葉に、思ふことかく頃なれや夕日の影の、西の山の端に隱るゝを見ても、日の入りたまふ所は西方淨土にてこそあんなれ、いつか我等もかしこに生れて、物を思はで過さんずらんと、過ぎにし方の憂き事ども思ひ續けて只盡きせぬものは涙なり」の調で十分青盤してある。

其の夕方、竹の編戸をほと〳〵と叩く者があつた。訪はるゝ覺なきまゝに、訝かしながら明けて見れば、こはそもいかに、佛御前であつた。

今が今迄、ゝゝにくしと思ひし其の人が、眼のあたり差控へたる姿を見た祇王の心は、如何程亂れた事であらう。「憐れなるものよ。汝の名は女也」との言が思ひ出されずには居られない。

ところで一方、佛の胸中は如何であつたか。常時の白拍子は驚くべく情がこまやかであつた。

言はゞ佛は勝利者であつた。而も其の勝利たる、祇王といふ大なる犧牲を拂つて得たのであるから、若き佛の心は、たゞ只管に迷つたのである、其の迷の爲に彼女は苦痛を忍んで入道に仕へて居たのである。「わごぜの出られ給ひしを見しにつけても、いつか又我身の上ならむと思ひ居たれば、嬉しとは更におもはず。障子にまた、「いづれか秋にあはで果つべき」と書き置き給ひし筆の跡、實にもと思ひ侍りしぞや。いつぞや、又わごぜの召され參らせて、今樣歌ひ給ひしにも思ひ知られてこそ候へ」と祇王に語つた佛の言葉は、このこと乙女の眞情である。かく苦痛の種が重なり、剰へ祇王の出家せしを聞き終に同じく佛弟たらむとかくは遙遙尋ねて來たのである。

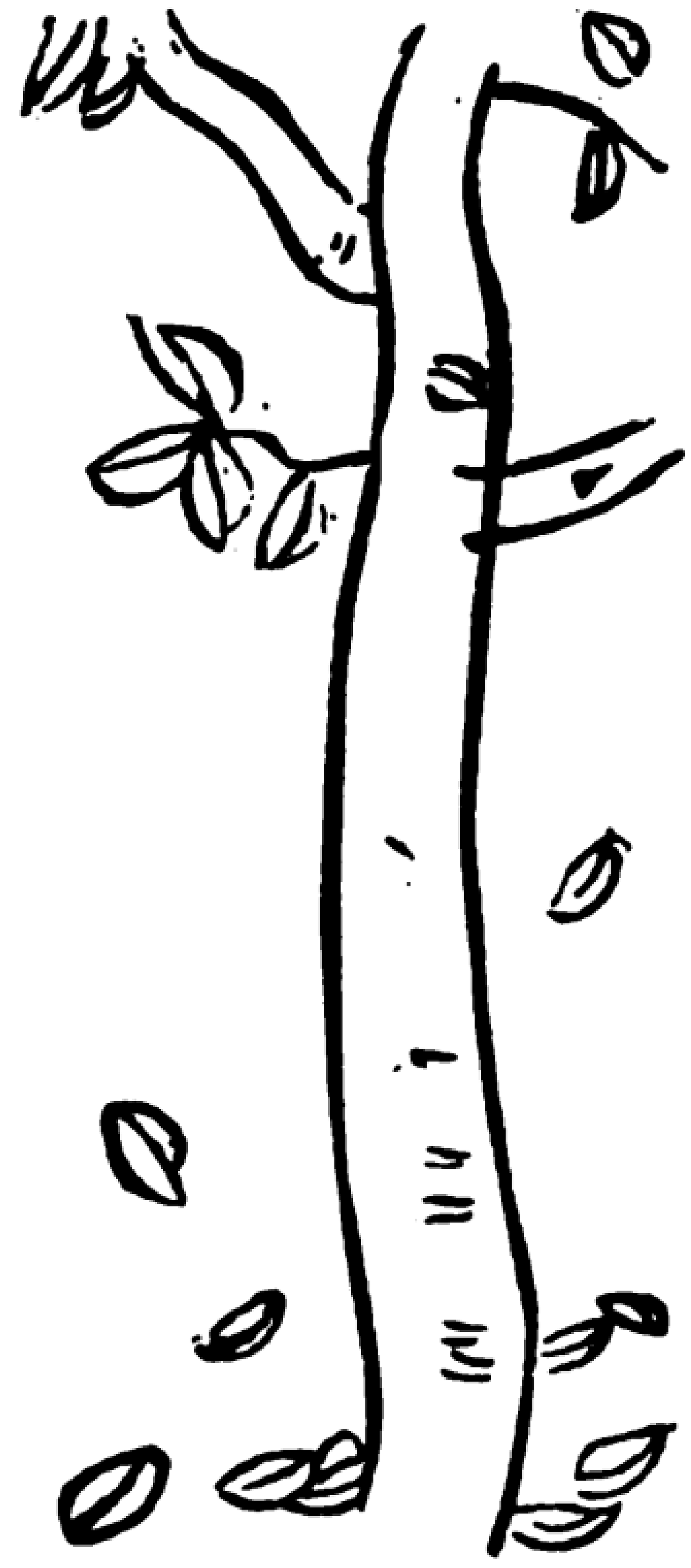
この趣を祇王に語つて、被つて居た衣を除けた時、見れば圓頂の尼であつた、あはれ二八の花は未だ秋にも逢はぬ内に早くも亂れ散つたのである。

これを見た祇王の妄念は氷の樣にサラリと消えて了つた。

「浮世を厭ひ、誠の道に入ても猶迷の心の悲さに、思歎きは絶えずして、佛だになかりせばかゝる憂目は見ざらましと、つらき我が身を顧みず只人の事のみ恨めしかりつるにかく思ひ立ち給ひける有り難さよ、之も然るべき善知識にこそ、今は妄念晴れぬ」と、吁、世の中に懺悔程、清淨潔白なものはない、蒔くものは刈ると謂ふ、今は祇王の心中、何物も無いのである、謠

曲「祇王」は次のやうに結むで、ある。
「人は何とも縹の帶の引き易へ心はうつるとも、祇王の心に懸け給ふな。我名は佛、神かけて、深き契の中ぞとは、よしなや謂はじと諸共に、恙ごとなくこそ契りけれ」
かくして祇王の煩悶は終つたのである（完）





帝都の秋

萩香

×

「野に呼ぶ人の聲いづこ、生命の泉、はたいづこ春は十七、若き血の、」

男らしい美しい聲でした、双側の屋敷の木立の梢から・星の降るやうな宵である。美雄ちやんをお家まで送つて上げて、かへりにまつ暗な學士町を通つてくると、すれちがつたその人が、くるり歩を返したかと思ふと、急にすりよつてなれ／＼しく肩をたゝいた。ふり返るまもなく、街燈の光りで長く道におちた影法師は、角帽かぶつて袴はいてることは分かつた、酒くさい息を吹きかけて、

「君、君、」とばかり云ふ。

「何なさるんです失敬な、無禮をすると承知せんぞ。」

「いゝですよ、ねえ、いゝですよ、散歩しませう、散歩しませう、」

耳に口よせて、後から肩を抱へられ私はほとんど引ずられるやうに、ふら／＼と一緒になつて歩きました。絶えずさゝやかれるを、キット睨みつけ、人にでもみられたらと思ふと氣が氣ぢやない。

「無禮者！、狼藉者！」

泣聲になつてふり飛ばして、敷石に下駄をならしてうちへかけこむと、

「おや、いまの聲は貴女で……」

顏をみられてハッとして「いゝえ、ね、よつぱらひ、です。」莞爾したがとぎれ／＼でした。

我乍ら子供らしい、はしたない、あんなにあはてなくつてもよさゝうなもの。つかまれた手首がピリ／＼す

る。

この時先刻の人は笑ひながら表を通り過ぎたやうでした、都の花は危險です。

×

朝から縁の下でこほろぎがなく、日光は濃色のコスモスの露にきらめけど、風がつめたく、朝每櫛にもつる落ち髮も秋なれやと寂しい。けふは物ずきにお下げに結つて、花色のリボンをかけました、はさみ切れなかつたローマ止めが、これ、こんなにユル〱になつて了つたんですもの、肩揚をおろしてからのお下髮、可笑しかァないかと思つて幾度もふり返つた。

また圖書館行き、日比谷で下りて公園の中をぬけてみた、いつのまにかもう桐の葉はまつくろになつて、地上をかさ〱ころげてゐた、ヒラ〱と舞ふ櫻紅葉、どこからともなく木せいの香がつよくたゞよふて來る。

天高く澄み、氣は淸し、のどかなうら〱に凜として透きとほるやうな秋日和、暗紫色の姬萩や、朝顏ほどの芙蓉が二ッ三ッわびしく咲き殘つてゐる、うちの花壇のことを思ひ出す、耳をすましたら浪の響もきこえはしないか……

また圖書館へ泣きに來たかと有仰るの、いゝえ、もう泣きはしないわ、私のなすべきことは多かつた、泣いてゐるべき秋ではなかつた、人知れず望郷の涙、ほろほろとこぼれこぼるれど。

奔馬とをどつて火のやうに熱かつた胸も、この頃少しはおちつきました。

芙蓉の日、萩の夕べ、大川にはボートが走ると云ふ、草は移ろひ、葉は紅に燃えて、學校の運動會は近づくけれど、私は何處へも行きたくない。

でもけふは夏目さんの「猫」をおもひ出し、何だかお雜煮が食べたくなつて、午後からこゝを出で松屋へ行きました。可笑しいでせう、えゝ、食堂が第一の目的だつたかも知れないけど、妹の袴を買ひましたの。三階の見切物のところと云つたら、玉露さんぢやないが、

つく〴〵恐ろしく淺ましかつた、我勝にガア〴〵引かきまはし、抱へこみ、首をふりたて、人をおしわけ、私はたちまちのぼせ上つて、陽氣のかげんで近頃おこりかゝつてるむし歯がチク〳〵とうづいて來た。早く縫つて送つて上げませうネ、禮ちやん、薄紫地の友禪縮緬にこの海老色のお袴重ねて、天長節の晴姿……。

ふと正面の鏡にうつゝた私の顔は、晴やかに笑つてゐました。美しい妹の笑顔をおもひ乍ら、いそ〳〵と包みかゝえて外へ出ました。



夕方行李を開けて片づけたら、先日おべんとうの代用にした餡パンののこりが袋のまゝ、メリンスの單衣の袂から發見された、香水の匂ひがしみこんで妙な味になつてるむしつて池の中へ投げこんでやると、パク〳〵と金魚等が可愛い泡をふいて浮いて來る。

夕陽がまばゆうガラス戸に反射する。

×

小やみもなく秋雨がふる。朝戸を開けたら物干竿に幾十となく露の玉がつらなつて、ぶら下つてはこぼれて

ゐた。

けふは十三夜だときゝました、八百屋の店に薄が出てゐた。本郷通りがアスフアルトになつてから、一名物のぬかるみは一掃されたが、私の足駄は歯の入れたてでカラ〳〵歩のがきまりが惡い。まるで人を見下してるんだもの、だから「内藤さんは澄ましこんどる?」なんて云はれるのよ。

合羽が通る、マントが通る、海老茶が行く、紫袴が行く、つき當る、傘がかち合ふ。自轉車が飛ぶ。

四の日故放課後しづくする、紫蛇の目かたむけて、彌生町から池の端へ下りて觀月橋を渡る。

雨に暮れ行く池畔の秋色、空も地もたゞ一いろに打けぶつて、夢のやうな街燈は薄すりとまたゝいてゐる。

はら〳〵、はら〳〵と蓮の葉を白玉がすべる。

たゝずめば、向ケ岡の時計臺よ、いつもなら人足しげきこのあたりも、チラホラと行き合ふばかりで、それは〳〵さびしかつた。

紫苑を活けた、つゝましい手つきでチヨキ〳〵などやりながら、ほんとに時間の不經濟だなんと思つてるも

本郷三丁目で電車を下りたら、黒木綿の紋附羽織の人にニヤリと笑ひかけられてふるへ上つた。イヤだからすぐ俥にのつて了つた。

考へてみれば馬鹿々々しくて、あれはきつと俥夫のまはし者かも知れない。ぬれてチラ〳〵美しい夜の町を流るゝやうに走り行く。

×

この頃は身にも心にも、暇なく暮してゐます。

いそがしいので髪も自分では結へないから、きのふからまた大桃割の銀丈長、久しぶりに長い髱が襟につかへて氣持がわるい。

今朝は寒くてネルの着物に綿入のお被布を重ねた。思ひ切つて華手な紫矢飛白に、青磁色のふさ、紅いうら何だか氣恥かしくてたまらなかつた。日本髪で被布を着ると浪さんのやうだつてみんなが云ふ、こんな重たい浪さんがありませうかつて大笑ひ。

串談ぢやない、いま私がもし病氣にでも取りつかれたら大變だと、眼を皿のやうにしてると、針のやうにとがつた神經は、隣家の三階にゐる人の、折々こんく\と力のない咳をするのが、さア氣になつてならない。ごほん、ごほん、と三聲ぐらゐづゝきこえるのですよ、どの室にゐる人だらうとそつとのぞいたこともあつた、制服や角帽が壁にかけてあるから、大學生にちがひない、可哀想に……。あれでも學校へ行つてるのかしら、お友人がイヤがり　ら」つて、





はしまいか、下宿の女中達は危險だわねえ、こんな事ばかり考へる。貴重な頭腦を惱の極だとは思ふけれど仕方がない。御當人は案外不氣で、窓から痰をしたりする。

袴をたゝんでゐたら、紅く色づいた可愛い木の葉が一枚机に散つた息ふきかけて飛ばさうとすると切手箱の中に落ちた。

夜雨人で春木町まで買物に出かけた、にぎやかな活動寫眞館の前を通つた。

夜の湯本

さわらび

誰そかれ時に小田原を過ぎて夜の湯本に電車が着くと窓外に連なる提燈のしるしを其儘、福住で御座います、新玉の湯はこちらへ鈴木へ御越しでは御座いませんか、一の湯では？とさつしける火影を避けて「今晩は善うこそ」と例のチョーカンダーが小腰をかゞめて私の見たい思ひ切つた笑顔をみせた。チョーカンダーは私のつけた渾名、それは玉の湯の支店と云ふ休茶屋の女房で年は卅六か七か、美人と云へるか如何か知らないが、目、鼻、口に一種の特徴があつて一度みたら如何しても忘られない顔立だ、初めてみた時から私は妙な心持であつた、愉快な様な氣味の惡い様な、なつかしい様な、到底形容の出來ない感じをもつて私はいつも此人に對する。全體暗い調子の中で兩手を乳の邊りで交して下向に垂れ美くしい一重瞼の中の黒い瞳と兩端の少し上つた口元とで何か深い意味を語つてゐるが、喜んでゐる樣にも怒を含んでゐる樣にも、冷笑してゐる樣にも、見る人からさま〲に見えると云ふ世界の名畫モナリザ、ダヴキンチがチョーカンダーと云ふ畫題で畫いたと云ふ其型を私は生きた此人に見出したのだ、で其チョーカンダーが

「一寸」と彼方へ向いて手招ぎすると暗い方から駈けて來た男、袢天新らしく襟に記した字は白く鮮かに洗心樓玉の湯と讀まれた。

大形の鞄壹個を男に持たせて水音高い早川の岸ぞひを歩いてのぼる、無數の石に碎ける水は白く、暗い水面に一條の金龍の走るは山の端出る月ではなくて心ない廣告の火飾、硝子戸の內は畫をあざむく箱根細工賣る店を左にみてやゝ登ると又暗い山陰の細道、左手に小さい田舍家が一二軒、透洩る火影が路の半までさしてゐる、先に立つた洗心樓の男は

「明日は宮の下の方へでもお越しですか」と問ふ「イヤ明日は乙女峠へ行うと思ふが天氣は如何だらう」と輝樣が聞くを

「ヘイ乙女峠へ左樣ですか」此男少し耳が遠いとみえ

て天氣の方の答はない、無言の儘少し行くと『思ひ出さずに忘れずに……と玉川の一節を低くうたふ嬌音が聞えた、ふとみるとハツキリはわからないが潰島田で荒い縞の袢天を着た女と結び髪で黒い着物に黒い帯その片側が白つぽく派手に目立つのを、やけに引つかけにした女



とが丈高い商人風の男を中に振り返りながら摺れ違つた、是は秋の事であつたが何となく春の宵の様な氣がした。

康秀

草も木も色かはれど
もわたつ海の
浪の花にそ秋なか
りける

＊
＊
＊



論語百首（二）

○「君子無所爭」

小田になりゐしべに立ちてあのさとも
たづはむつれてあそぶなりけり

○「祭神如神在」

かしこくも神靈を仰ぐ眞心に
まつらば神も受んとぞ思ふ

○「獲罪於天無所禱也」

我心よこしまならば諸々の
神はませども禱るべきやは

○「關雎樂而不淫」

波よする浮洲のみさご音になく
なれ遊べどもおぼれやする

○「里仁爲美」

花さくら匂ふ吉野の里なれて
すめば心ものどかなりけり

○「苟志於仁矣無惡也」

雨露のめぐむ心も忘れずば
花も咲まし實もなりぬべし

○「君子無終食之間違仁」

雨の夕風の旦は草に木に
めぐむは春の心なりけり

○「朝聞道夕死可矣」

ゆきかへる心の道のあかるくは
日は暮るとも悔はあらじな

○「吾道一以貫之」

野山なる草のもゆるも春雨の
めぐむひとつの心なりけり

○「父母之年不可不知也一則以喜一則以懼」

見ればかく樂しき菊な日をへれば
霜も置んといとはれにけり

○「子使漆雕開仕對曰吾斯之未能信子說」

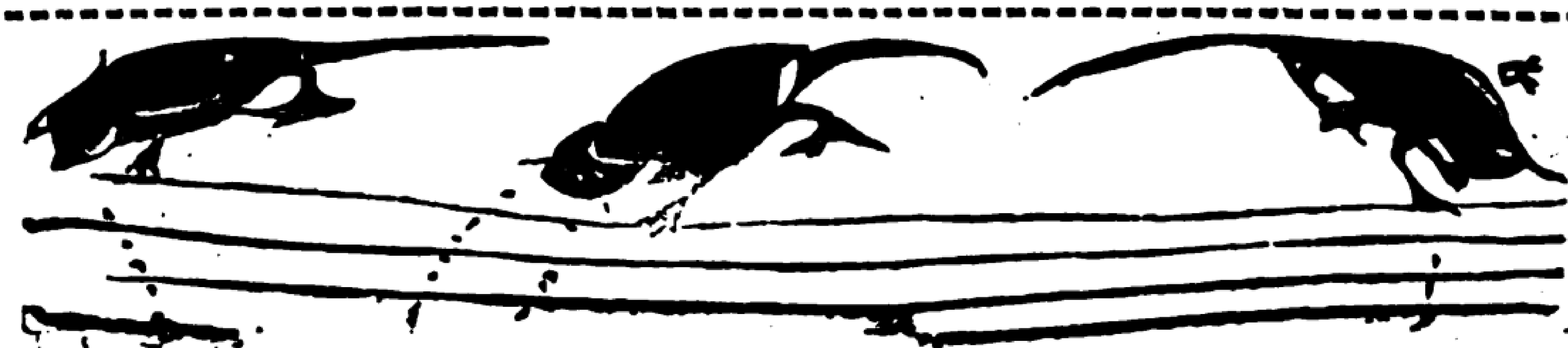
實のならん程もわかられば花としも
嘗うせぬこそよろしかりけれ

○「乘桴浮于海從我者其由與子路聞之喜」

世を厭ふ心も知らで海原に
うかぶことばにいさむものかな

○「聽其言而信其行」

美はしく咲ける言葉の花にまた
知らぬ匂ひも思はれにけり



○「聞二其言一而觀二其行一」
色香添ふ言葉きくとも咲く花を
　見れば中々實は知れぬかな
○「夫子之言性與二天道一不レ可二得而聞一也」
久方の日月のかよふ天の道
　知る人さへも云ひ難きかな
○「晏平仲善與レ人交久而敬レ之」
濃霜にうつらぬおなし籬の菊は
　見るたびごとに香り増しけり
○「孰謂二微生高直一或乞レ醯焉乞二諸其隣一而與レ之」
有職な人にはすれどかり衣の
　下着綿はぬつまは見えけり
○「願車馬衣輕裘與二朋友一共敝レ之而無レ憾」
友のためわがかす衣はやれぬとも
　ぬへる心は見たゝざりけり
○「願無レ伐レ善」
低く籬た傍所に咲ても白菊の
　われは顔には匂はせぬかな
○「老者安レ之」
うつろへる老木の櫻むつれとぶ
　蝶の羽風もよきてとぞ思ふ

○「朋友信レ之」
すゑに實のなるをたのみに咲く花は
　色稱くともうとからぬかな
○「不レ遷レ怒」
すなほなる眞心あらばよこしまに
　人怒るとも厭はざりけり
○「三月不レ違レ仁」
動きなき礒邊のいはほ荒波の
　打寄するとも靜なりけり
菅の根のながき春日の心より
　おのれと草も木もめぐむなり
○「孟之反不レ伐奔而殿將レ入レ門策二其馬一曰非二敢後一也馬不レ進也」
後れつゝ咲くとはいへど山櫻
　匂ひは遠く香りけるかな
○「誰能出不レ由レ戸何莫レ由二斯道一也」
柴の戸をいづれば道はあるものを
　など道しとてふみも見ざらん
○「知レ之者不レ如二好レ之者一不レ如二樂レ之者一」
ふみゝても心に深くたどらずば
　何しか道のたのしかるべき



○「知者樂レ水」

船筏を通はす水の力をも
心に汲みて樂しかりけり

○「仁者樂レ山」

靜かなる心よりこそ常盤山
松の千年に身もならふらめ

○「學而不レ厭」

伊勢の海濱の玉藻をひらふ蜑は
ぬるゝ袂もいとはざりけり

○「誨レ人而不レ倦」

邪路をふみまよふ人をいざなはゞ
月日いとはでしるべなさなん

○「不善不レ能レ改」

難波潟あしと知りてもからで置ば
繁りてよしのおふかたぞなき

○不レ憤不レ啓不レ悱不レ發」

奥山の花見ん心なき人に
何しか深く道しるべせむ

○「曲レ肱而枕レ之樂亦在二其中一」

草の庵にひとりまろねの手枕も
すめる心は樂しかりけり

○「三人行必有二我師一焉擇二其善者一而從レ之
其不善者而改レ之」

難波潟友のよしあしかりわけて
したがひもせよ改めもせよ

○「子與レ人歌而善必使レ反レ之而後和レ之」

糸竹のしらべにむつむつれあひ
うたへかへしてまた歌ふなり

○「君子坦蕩々」

たひらけき心の海の浪路には
千舟百舟行かよふなり

○「小人長戚々」

花咲けば死しと厭ひ花散れば
わびかこちつゝ世を恨むかな

○「溫而厲威而不レ猛恭而安」

雪はゝ風になびきて青柳は
枝折れもせずのどかなりけり

○「人將レ死其言也善」

春風に散り果ぬとも言の葉の
花は殘りて世に匂はなむ



病中の感想

ひで子

晴れて雲なき小春の日射が、開け放された南の縁から室の隅まで流れ込んで、床に活けた大輪の白菊がいとはしい藥の香の中に紛れもなふ氣高いにほひを漂はして居る。

馬も肥ゆといふ好時節を、三月あまりのいたつきに痩せ細つた身に、つれなくも吹く秋の風、マーガレットでは校内一とたゝへられた黒髪も脱けに脱けて……

ふと發病の時を思ふた。

忘れもしない七月二十五日の晩であつた。宵からの強い吹き降りが更くるにつれていや增る。棟木をゆする風の音、雨戸にしぶく雨の足、ゴーッと響くは海鳴りか、暴風雨暴風雨。さながら魔界にでも引入られる樣な物凄さ。外で人聲が聞える樣だが戸をあけて見ることも出來ぬ。然し戸を閉ぢて守つたところがこの暴風雨が一層ひどくなればこの家位こはすのは何でもない。蝸牛はいたづらつ子が來ると殻の中へかくれるけれどやつぱり殻ごとつぶされてしまふ。天災に遭遇ては萬物の靈長たる人間も蝸牛と少ともちがはぬ。

こんなことを考へて居ると、玄關の方へ見まはりにいらしつた夫が「洪水だ洪水だ」と仰有る。飛び起きていつて見ると床へつく間一尺とはない、夢中で家内を取片づけた。

疊をあげるばかりにして樣子を見てゐると恐ろしかりし風雨の音も次第〳〵に靜まつて來た……と愁眉を開いたのは束の間、明れば二十六日の午前一時第一回の海嘯はすさまじい勢でおそふて來た。床とスレ〳〵の濁浪を見た時にはほんとにどうしやうと思つた。下から押して貰つて押入の上へはひ上る圖は隨分振

つたものだつたらうと今になれば可笑しいやうなもの。その時は一生懸命、まだ明け切らぬほの暗さに、大森名物の蚊の襲來、坊やをさゝせまいと絶えず團扇の手を動かしながら不安な思に水の模樣を見てゐると間もなく襲ふてきた第二回の海嘯はとう〳〵我家を濁浪中のものとした。床上約一尺の浸水。

夫は裾を高くからげて始終水のさし引きに氣をつけていらつしやる。

「深けえ〳〵」かまぼこやの若い者が胸までの水の中をガップ〳〵とどつかへ行く、近所の妻君や老人子供は皆んな負さつて逃げて行く。お前も逃げるならといはれたけれど、何ぼなんでも私にやきまりが惡くつて出來やしない。押入の中で蚊にさゝれて居る方がよつぽどましだ。夜は全く明け放れた。さしも猛威をたくましうした風雨も止んで、床上の水は引いたが外は一面の湖、豆畑や葱畑の上を小舟が幾艘もゆき來して居る。

この夜かりそめに引き込んだ風邪が原因で惹起した胸の病、熱が高い、寢汗が出る、よく肥つておとなしい坊やは乳を離された、全快しても哺乳することはかたく禁じられた。

乳のみ兒を持つて病氣をする程こまることはない。確かに人の世の悲慘なことの一つだらうと私は思ふ。

アヽ癒るのであらうか癒らぬのであらうか、これが二年前ならばよしや死んでも……親には不幸にあたるけれど……

夫も子もある今の身の一日も早く癒えよかしと、あせればあせる程、はか〳〵しからぬこの容體——思ひなしか少し面痩せた子のいぢらしさ。

よく出る乳は幾重にも〳〵卷いた布を通して寢卷の胸をしとゞぬらした。乳の出ない樣な體の人は、子供も出來なかつたらばよからう、少し出る人は子供も少しゝか生れないで……と玉露樣は仰つたが乳が出てもそれをやることの出來ぬ樣な體のものはなほ悲しい。

哺乳をすると容色がおとろへるとか仰やつて、あつたらお乳をあげておしまひなさるハイカラな奥樣も少

なくはないが、私は加藤博士の嬰兒の食物は母乳より外に無いといふ御説を深く信じて居るので、我子にお乳をやれないのは終生の恨事である。

園の白菊

団

身にかへて
愛でし撫子
いかにせん
つちかふ水
の泉たゝれ
て

＊＊＊

今まで泣かつて居た坊やも、やつと寢ついたと見えて、姉さんの小守歌も聞えなくなつた。

玻璃窓の外がホンノリ明るい。月が出たのであらう。



「雨降らば降れ、風吹かば吹け、半塊の――灰をとゞめで――我は消えてん」

靜寂を破つて朗々と詩吟の聲。

襖の模様の映り榮する洋燈の火影を見つめて居るといろ／＼と過去の事が思ひ出される。

尋常小學生の時、地久節の式場で、腦貧血をおこして卒倒した自分の姿が見える。つゞいて叔母の臨終の時從兄の顏を見つめてホロ／＼と涙を落した光景……

それがいつか自分になつて居る。そつとして目を轉じると今日夫が挿してくれた縣花活の紅葉がともしびを

うけて珊瑚の様にひかつて居る。

まだ紫の袴にバンドをしめて居る時分であつた。友達三四人で瀧の川に遊んだことがあつた。植ゑしともなくたちならび、薄くこく染めなした木立の紅、流れの汀に下りたつて「渡らば錦中やたえなん」と小聲にうたつた柳様の美しいお姿はいまだに忘れられぬ。

高い理想や希望にかゞやく瞳美くしい君達が、ともすれば未來の夫赤門の秀才、外交官等と、若々しい話題に興がる中に、いつも超然たる態度で居る力子さんが、いつか私は風采などはどうでもよい、人種が異つてもなんでも、勇敢な剛毅な男らしい男をのぞむといつた。それから誰いふとなく力様のことをデスデモナと呼ぶ様になつた。

果してオセロ將軍の様な夫をもたれたかどうか……永き生活が變調を來すとき、人は皆詩人の心となるものである。と、病んで三月串ごとに浮ぶ胸の思は落つる木の葉の一片々々に書きつけてもなほつきぬ。

蟲の音はサラ〳〵〳〵と雨の様、海近き家の秋の夜

梶の葉いろいろ


平戸梶
梶菱
二ツ割梶
梶の葉
三ツをい梶
鬼梶の葉
独立梶
梶の花
三ツよせ梶
三ツかぢの葉
梶の蝶
梶の抜丸
梶車
三ツ割梶
梶葉桐
一ツ梶
二ツ梶
色紙梶



和歌

一等

春はむかしぞゝむかたりて猿の啼ふ世としも知らでわれ泣きしかな

川越　綾部登美子

評、青春の涙はこれ女子の誇りなるべし

二等

秋雨はわが泣くによし若人の墓の白木にしく〳〵と降る

麹町　牧野銀杏子

評、愁情多恨、詩趣横溢

二等

われ夢に望みなき戀かないなばとくさめぬまた死なんとぞ思ふ

兵庫　石井ちゑ子

評、後半千鈞の値あり

三等

とび石に松葉ぼたんの花めぐる廣きみ庭ぞ思ひぬ

宮城　沼倉孝子

評、景情優美掬すべし

三等

髪梳る君が腕の白きより悲しき冬の立ち初むるかな

本郷　中村園子

評、艶又凄

三等

鷄頭の花をむしれば夕暮は嫁かざる日の思ひ出悲し

越後　五十嵐花子

評、人事凡そ荼蘼が爲

秀逸

野木ひともと梢明るう暮れのこるあひゞきの子の唇を吹く風

下谷　大上菊子

評、風亦寒し

強き非口には言へど我も又女なりけり心にて泣く

栃木　高松たへ子

評、女丈夫の心情偲ぶべし

○ 丸亀 白露女

人生の春老いたりな底すごく光りそめたる我瞳かな

評、實感

○ 横濱 桔梗庵愛石

天地はいとすゞやかに秋立ちぬ都大路の朝のしづけさ

評、清麗

○ 鶴岡 野口菊子

花に蝶うかるゝ春の夢も見ず淋くおくる人の世の秋

評、平凡にして又捨て難し

○ 三重 久保かず子

十八の乙女てふ名に早や飽きぬとは云へ妻てふ名も物淋し

評、現代女の感想皆斯のごとけん

○ 愛媛 小萩

花の夢ほのかにかほる紅裏の小夜着なつかし秋雨の宵

評、紙灯も風にゆれて

○ 越後 關みゆき子

紙のべてわびし思ひに筆とれば只筆かみて今宵もやみぬ

評、面白し

○ 伊勢 森田まさ子

狂ほしき心このまゝ火となれよ焔となれよ秋風の吹く

評、結句にて生く

○ 備後 松下露子

小砂原松影更けて高波に死骸あがる夜月靑ふ照る

評、趣想の奇なるを採る

佳作

○ 河内 緑若御野子

戸に倚りてわが世を泣きぬわくら葉の落つる淋しき秋の日の暮

○ 下總 澤田ふさ子

コスモスの花咲くゆふべかなしくもまたわが心君にはせゆく

○ 深川 なでしこ

羽黍つし秋の蚊ひとつ蜘蛛の巣にかゝりて煩ゆ世の人の如

○ 河内 山木靜子

新らしき白膠色の壁によりて金木犀の甘き香を吸ふ

○

池水の上にやどりし中秋の月にならびて我かげもあり

○ 札幌 俣野恭子

木がくれに湖みて白樺の落葉ふむ赤城平の斑黑の牛

○ 下關 木本園子

初冬の日は窓ごしに背伏せて物思ふ子の片頬にさしぬ

○ 東平 渡邊梅子

暮るゝ秋朝顔の實のさゝなりて風は瘠せ行く猶に冷たき

○ 門司 秋千草

すてられし我にはも似て穢草の陰にかなしく泣ける蟲かな

秋田　六子

○夢うつゝ心痛めし十八のかの夜の秋をまたしのぶかな

島根　秀子

○世にひとり殘されしことさびしくも黄昏時の海の音きく

三重　島田靜子

○行きくれて宿らむ家もなき宿に心ほそくも眠なく夜かな

埼玉　愛

○灰いろの雲ひくきほはわが心われな無みして死をおもふかな

山梨　森とし子

○君去りし宿の小庭になよ〳〵とコスモス咲きてうらさびし

富山　高田千代子

○小さき胸に君が情の文秘めて夢安かれと星に祈りぬ

河内　いとやさ

○百舌鳥の鳴く峡の小家に乳母と居し昔戀しき菊日和かな

鹿兒島　橫山はや子

○生といひ死といふ境にみ手とりて心弱くも淚せしかな

橫濱　四絲子

○日の外にまばゆきものゝひとついて我が胸てらすそは男の子にて

弘前　英子

○弟の逝きたる夢は今しさめで撫でおろす胸に血の音高し

青山　美代子

○歸らまし歸ましやはと胸いだき秋の濱邊に郡しうで思ふ

下總　坂本その子

○うら寂しりボンの如き美くしき戀てふものゝひらめきしのち

越後　東樹常子

○丘に立ちて別れし時の淚など思ひてあれば秋の風ふく

留萌　岡所こつ枝

○秋日和射土根深き外れ矢ぬくアイヌの釉に涕ろ蝦夷衆

美作　花容

○忘れたる人の面影思ひいでゝ暴風雨の夜半をすゝりなくかな

岩代　百合香

○酸く苦き藥の瓶の橫すじに夕されば襲む暗の淋しさ

御影　山田靜子

○文机のおそば近くによなべして小夜ふけぬれど浴す事もなし

橫濱　嵯峨野月江

○あやまちてきりし指よりにじむ血につら〳〵秋の淋しさをしる

比律賓セブ　田代きち子

○白銀の光り千草にたゞよひてかれの音淋し外國の里

仙臺　南喜美子

○一片の黄雲に染めて山陸を月出でにけり秋風の國

京都　こずゑ

○うら淋し眞葛が原の夕暮ぞ秋てふ色の胸にしみぬる

川越　吉田登喜子

○くるしさもまたかなしさもわが生の約と定めてこの世送らむ

大分　安部ふじ子

○豊州路の秋は美し我が父の生れし郷の稲みのる日よ

靜岡　竹ぞの

○いつとなく佗寂の色深ふて夏は逝くなり秋は來るなり

京都　享子

○綿々とゆくゑしられぬ雲の如果敢なき戀に秋もくるゝか

○　仙臺　安井きしい
すぐしてそゞろあるきし森中の夕べなつかし水引の花

○　金澤　山田他美
母を戀ふ幼き妹を背負ひつゝ秋の月夜をさまよひにけり

○　分　下田綾子
あか〳〵と夕日にはゆる紅葉ばのもとにつなげり白きわが胸

○　京城　みどり
さゝがにのすがける糸に紅の落葉かゝれる秋の暮かな

○　新潟　のぶ子
月やどる尾花が末の白露をそと吸ひて見ぬむし鳴く夕

○　信濃　深井靜子
よむふみの殘れるまゝに日は暮れて雨になやめる栗の實の落つ

○　尾張　操子
西の海の底よりいづる玉の色のしづむ夕日にかげやそめけむ

○　麹町　牧野はん子
靜かなる夜の光にコスモスの花の白さがむらがりて咲く

○　芝區　島泊子
むさしのに黄の雲出でゝ種々の落葉舞ひくるたそがれのそら

○　淺寺　谷口あさがほ
何事も神の手になる運命かゝ幸なき我身あきらめて見し

○　奈良　蘆邊美那子
鬢重く鏡に映る背姿潤ふ瞳君知らずして

○　京都　小夜千鳥
白芙蓉淋しく掛けし小書院に朝日つめたき金襖かな

○　仙臺　橋本淑子
かみ結び白粉をかざ涙しぬこよひを晴れのふり小袖見て

○　肥後　紀秋女
み形見の御文抱きて悶ゆなり萩の花散る寂しき夕な

○　備後　操子
瀧の音は木だまにひゞく温泉のうしろ紅葉彩どる夕照の色

○　澁谷　ふぢの葉
旅枕にこほろぎ飼ひて寝なんなど思ふゆふべのうらなつかしき

○　濱松　山下彌世子
岡へあらむれを抱きてひとりねのまくらに淋し松蟲のこゑ

○　小倉　千代子
見るかぎり只淋しさを覺えぬる冬近き日の夕ぐれの空

○　門司　安藤君子
みだれ咲くコスモスの花ほの白き夕のかどに君をまつかな

○　下總　月沖百合枝
妹のなで肩に來てなく蟲の細きにあはれ秋も徂くかや

○　横濱　小豆澤四絃子
夕されば港の船に灯ぞともる春の夜ぞらの星かげに似て

○　神戸　中根もとゐ子
ひし〳〵と胸にせまれるかなしさをうたにもうきてひとり泣かばや

○　旭川　夕月
馬洗ふ野川に淡く月影のゆらぎて鴨の聲しきる夕

○　靜岡　伊賀咲枝
蟲むせぶ野路の細道籠さげて行くや乙女の何うなたるゝ

○　和歌山　しらぎく
かず並ぶ佛默して日は暮れぬ五百羅漢寺初しぐれして

俳句

天

絹擦れの裾づれ唄や秋夜長　本郷　長岡波満子

地

軸すれの壁這ふや晝のきり〴〵す　芝　篠崎せい子

人

膝に眠る猫に戀なき夜長哉　小石川　中川暮子

秀逸

再嫁この愁ひに淡きコスモスか　四谷　笹原清子

野分稍々安堵の鷄に夜明けゝり　下谷　小林しげ子

雁仰ぐ田柳月夜北斗踏む　三河　美枝女

月光り淡き障子や茶立蟲　群馬　重田八重

神苑にほろ啼く鳩や露の朝　尾張　房香

峪郷の芹振るや草の月風に　豊橋　平出しづ子

張板に友染切れや赤とんぼ　埼玉　秋山ゆう

砧の輪に鄙を戀ひする歌もあり　大阪　東海子

石門にかゝる神斧や峰の霧　四谷　春野綾子

灯にゆるゝ庭の小草や露ほろゝ　越後　東樹ふみ子

冬籠りたらひに鴨を飼ひにけり　伊豆　土屋つれ子

木犀の香動くや月淡き庭　埼玉　林畝子

陷穽に喰がせ餌盛るや黍の秋　横濱　樋口小生

白樺は林せり稲妻の雨　横濱　山崎美都

松山の中に色づく紅葉かな　兵庫　吉田輝子

朝寒や絲にからむ蜘の糸　滋賀　草場貴志子

奈良は鹿の記や旅日割早立ちて　豊橋　松尾晶子

鬼灯や一人はほしき女の子　大和　藤田とよ

遷宮の今朝靜かなり渡り鳥　深川　居山光

街燈に横吹く雨や散る柳　神田　貞女

雁鳴や網場餌蒔も妻が役　下谷　大上菊子

峪峰の紅葉に迫る落暉かな　小石川　越沼スゲ子

砥の粉搗く臼に日うとし枇杷の花　石見　青柳秀子

廉米蟲二度の干日な秋晴れて　香川　大井久子

長江の溯航や秋の空晴れて　長野　小林くに代子

門川に葱洗ふや今朝の霜　小樽　林美代子

民謡いて狐待つ夜の野分哉　藤枝　山内豊十
秋の日や海に捨てたる羽毛乾く　京都　美穗子
鬼灯を鳴らすも淋し啞娼　麻布　小倉ふみ
綿弓の音高なりて小春かな　深川　安田春江
糸瓜の長さ妹の髪の長きと何れ　名古屋　瀧本逸子
月落ちて湖にすごき小雨かな　北海道　五十嵐やす子
裏山に入れば露滴つ草木かな　愛媛　中島忠子
五位鳴くや茶の花白き畑の月　土佐　松浦和氣子
雁鳴くやたそがれ雨の遊女町　越後　東山善子
馬市に牽き行く馬や秋の雨　越後　東樹賢子
小春日や鱶の鰭乾す濱廂　横濱　鈴雨
木犀にむせなく月夜狐かな　埼玉　野巻若葉
神の灯に鹿の啼き寄る夜寒哉　大阪　羽根傑子
内職の衣縫ひ急ぐ夜寒かな　神奈川　佐藤月女
雛僧の経學ぶ夜や秋の雨　大阪　白菊
朝寒や大津の宿の脊だゝみ　愛媛　近藤とめよ
蟲の音や萩の小波の月出頃　横濱　小豆澤しげ子
コスモスや姉逝きて悲し雨のみぞ　横濱　愛石子
大空に雲一片の芒かな　宮城　三井廉子
山の井の水や紅葉の庭明り　山梨　芹澤つるよ
血天井や結行脚づれのうそ寒し　高知　野田加奈子
色褪せし松葉ぼたんや秋の雨　府下　秋山いの子
鰯漁も島…朝木の葉散り初めて　神戸　森見もと子
旅宿の灯更けたり蟲の聲　陸中　黒澤美江
夜花切る園中の灯に露降りて　三河　小百合

仰ぎ見る古杉や秋晴るゝ露　三重　つれ子
コスモスに日の暮れよどむ垣根哉　島根　和崎トシ子
眺め下町城窓開く日渡鳥　尾張　淺野むめ子
折しもの桐の一葉や俳句など　伯耆　濟香
廢村の水車動かす秋の暮　千葉　白鹿の子
怪談に燈かき合す夜寒哉　巣鴨　田中仙子
旅人の灯を乞ひよるや秋の暮　越後　東樹花子
干網に干からぶ雑魚や秋暑し　大阪　櫻好く人
人形ほす出水の跡や百日紅　札幌　俣野恭子
雨添ひて黄昏寒し秋の山　相模　飯田美智子
秋風や人なき磯に日の落ちて　京都　内藤邦祐
盲女が子の盤賢行くや秋の街　根室　齋藤ふじ
野分すや高原雲の低ふ飛ぶ　藤枝　山内花子
芋の葉に黒む初霜の知られけり　熊本　二子石利子
今朝の雨打つや野分の名残草　瀧の川　田島貞子
露ぬれし繭ころがるや花芙蓉　埼玉　森寂子
八朔や詣で鎮めづる獅子頭　芝　篠崎きみ子
引き舟や蘆の穗さむき霧の雨　茨城　春野三千緒
鬼灯や遊女が窓の遊閑に　越後　田澤氷山
馬子唄や笠袈に遠き楓紅葉　石川　井上みよ子
佛灯にいよ〳〵白し萩の花　靜岡　松島順子
松林や茸の露に朝の月　茨城　中林たけゑ
萩原や人になれたる狐の子　肥前　隈部芳子
魚割きし盥の水や秋の雨　横濱　元泉きくえ

誌友倶樂部

▲九月號の本誌相變らず面白く拜見致しました磯千鳥樣の「新徒然草」、いつもながら觀察の深いのには感服の外なくよみました、「饒舌」を書かれし方、あんな事はいはずもがなと思ひます風間不二子樣の御作を拜見致し、又後の「誤解された日本婦人」を讀み、何卒私共この雜誌の讀者婦人だけなり交際の實質を得る事につとめ吾々婦人の地位を高めたいと思ひます、終に秋雨樣近頃御作を拜見致しませんが如何遊ばしました（小倉、うたかた女）

▲女先生の性格をおかき遊ばした森の花樣つて何處の御方でいらつしやいますの？ 先生の御名や御担任の學科も少しは違うて居りますけれど、中の事がらはそつくり私の學校の先生ですわ、家事科の先生をくさすのは皆さんですけれど、文學史の先生をおほめ遊ばすのは御自分が大もてだつたものだから（與謝の浦にて友千鳥）

▲待ちに待つた九月の増刊、嬉しく拜見致しました、「街はづれの記」私も胸がすつきり致しましたわ、私かういふ方大好き、「素地の人」、面白う御座いました、記者樣、私いつも皆樣のを拜見させて頂くばかりでしたが、此頃何だか書いて見たくなりました、歌以外に短いものを寄稿しても宜しう御座いませうか、（福島、一女）——宜うございます。

▲誌友の皆樣、私は始めて投書致します、今迄少女世界の愛讀者で御座いましたが、これから皆樣の御中間入りを致したう存じますから、何卒御交際を……、まだ年若で御座いますから、御見捨なく御導き下さいませ、（目白高女の一少女）

▲姿見鏡、手にはいつたのは十七日夕べでした、夕餉のかたづくのを待つて頁をくりました、何んと思つても第一番に開くのは内藤樣です、それから三ッ四ッ息もつかずに讀んで仕舞ひました、家族系一等かしらと思ひ乍ら末頁を見たり批評を讀んだりして、わからぬ乍らも成程とうなづきました、然しあの紺縮みの寢物納戸の帶しめたお葉が「似てるわれ！」と若樣を見守つてたあたり、もう／＼目の前にチラついて堪りませんの、何度も讀みかへしましたわ、そして皆さんが内藤さんを誌上で何にや彼と言ふのを見る時、フ・ッと一人で小さく笑つて入らしやるのぢやないかなどゝ、餘計な想像まで致しましたの……（松本櫻子）

▲樺太の田舍女樣、御親切に有難たう御座います私は名もなき野邊の花で御座いますが、夫の名を思ひますと、どうしても誌上では住處を申上られませんの、何卒御赦し下さいませ、夫の趣味とあらば土堀りも辭せぬのですけど、それさへありませず、音樂は疾の昔に捨てました、文藝は今なほ捨兼て居りますので、悶も起るのです、近來或る一部の方が、奥樣が旦那樣の趣味は理解なされ乍ら、如何にしても感化し難いとやらで、悶て御居での方も御座りますの、誠に勿體ない話だと思ひますれ、然し私の夫とても、私が參た故に斯る人物に成たのでなくして、生來なのですから、夫の罪でも御座いません、又私の罪でもないと思ひます、要するに、第三者が惡いのですれ、けども斯くしても、世を終るのかと思ふと悲觀せずに居られません、先頃誌上を拜借して返らぬグチを申したら皆樣から御情を給はり、二三の御方と、文通も致しました御陰樣で精神上非常に幸福な者に成りました、眞に本誌の賜と感謝して居ります、強て御文給あらば、泉原瞳子樣に御問合せ下さいませ、御自愛遊ばせな（麻布仲間の百合子）

▲個人主義の山百合樣、あの月の演説の夜、隨分御自尊が傷きましたでせう、個人主義などとは、あなた方には相應ひませぬ、私等の樣な世も消も捨てた體でなくてはれ（熊本、章）

▲記者樣、博文館より本などとらないと、其人はいくら投書しても出ないとか、又何か記者樣の關係者でなくては出ないとか、眞實らしく聞きましたが、ほんとですか、そうなら全國の本屋に女學世界おく必要も御座いませんし、又募集遊ばす必要も御座いませんソネー、出ない人のいふかげんのつくり言かもしれません、(片田舍にて山ゆり)――どなたの投書でもかゝげます

但、なるべく有益な趣味のある事を書いてお送り下さい

▲十月號に於てミルスカレーヂにお友達があるとおつしやいました末子樣、私もミルスカレーヂに二人もお友達がございますのよ、以後御まじはり下さいな(神戸、杏花)

▲夢の浮橋樣の師子樣、御言葉まことに有難うございました、貴女樣のこそ例の無邪氣なのをどつさり拜見したうムいますわ、御宅は札幌でございますか、以後御差支へなくば御交り下さいませ、御目にかゝるにいゝときがあるかも知れません、私の雅號はほんの間に合せのでございますから、どなた樣か私に命名して下さいませんか、礎子と申します、私は近頃の本紙に綾千樣のが見えなくて殘念でなりません、萩原樣、どうせ嫁すべき女なら新聞の三面位なんでもないてことをいはれるといやになりました(萩の花)

▲おそれ入りますが、記者樣へ御尋ね申ます、「樋口一葉全集」を求めたく存じて居ますけれども、とても滿州邊りでは得られませぬから、東京へ注文致したいので御座います、價如何程で何れの書店に御座いますでしようか、(在滿州照子)本館で發行して居ります、定價四拾錢、郵税八錢でございます、

▲誌友の皆樣よ、過る九月二十五日に當地(函館)に鑵詰の女の死骸がありましたのよ、女は藝妓ですが、其犯人が陸軍中尉なんですの、驚くぢやございませんか、世の中も進歩して參りましたわネ、さきには行李詰や、鑵詰等あつたでしせう、でも鑵詰が一番振つていますわ、前途有望な青年士官が、一婦人のために大罪を犯したのは、誠に惜しう御座いますのね(巴港にて百合子)

▲誌友の皆樣、秋はまゐりました、ます〳〵詩に歌におつとめ遊ばせ、先月御尋ね下さいました柳子樣、ありがたうございました、渚は渚ですけども、平凡殺風景きわまる汀なのですけど私うれしうございますわ、星のみの宵は美しうございますのよ、漁船がこの頃どろ〳〵した樣な松火の光りを暗い海にいくつとなく並べて、數十かの舟は一時に靜かに岸へ〳〵と魚を追ひ寄せてまゐります、美しいとも云へぬ凄とも云へぬ其でございます、湘南の砂なき畔とはまるで御話になりませんけど……、皆樣この頃の本誌は大變しつかりしてまゐりましたのね、元祿の文化は文化文政と云ふ洗錬精巧の期を作りましたし、明治の日露の役後の奢侈は、やがて昨今の洗斎優美の源をなしはじめました、この後の本誌が待たれます、

萩香樣のスヰートホームが出ましたのね、何か創作を出して頂だいな、

未央柳樣、百合香樣、ます〳〵御ふるひあそばせ、はるかにお慕ひ申して居ります、おしやべりしまして失禮(澤の花)

▲「小田卷にてまがき女」として前號に御書きなされた方に御伺ひ致しますが、野菊樣は岩槻ですとか、何と御本名を御呼びなさる方で御座いませう? 私も埼玉の女で御座います、どうぞ御差支なくば御教へ下さいませ(埼玉、撫子)

▲九月増刊「姿見かゞみ」に、一等は鏡さんにきまつてゐるが、私「華族系」がいゝと思ふ、「街はづれの記」はあき目盲には一寸むづかしいが、内藤さんのは筋目よく通つてゝ非凡なとこがあつて、第一お菜さんの貧しい生活が氣に入つて了つて、何度よんだか知れない、けれどいくら峰の櫻と憧れられるお菜も、散つては見

かへるものさへもない、あはれな…！ お互にオールドミッスにはなりたくないものねえ。(峰の紅葉)

▲九月號にて拜見致しました「薄命の佳人」、世には運命のつたなき御方も多く在しますとつく〳〵考へました、私は此世によるべ少なき身で御座ます、最愛の父には五年前に亡くなられ、其後力と頼む夫には胸のいたみに堪へかねて、去年の夏、夕顔白う咲く頃、二歳の幼兒をのこして逝きました。其後意地悪き繼母の許に起伏致して居ますが、頑是なき小供の顔を見ますと、可愛相で總ての苦痛を忍ばうと思ひます、悲慘な春秋二十年はまるで小說の材料で御座います、筆に書き盡されぬやうな我家庭、(麹町にて園世)

▲昨年より繪葉書交換下さいました諸姉樣、其後は誠に〳〵御無沙汰致しましたがどうか御許し下さいませ、少々都合がありましたので、以後も相變らず御交りを御願ひ申します、これからは必ず御返事も差上げまして、いよ〳〵密なおん交りを、其後音信不通となりまして、住所のわからなくなつた御方も御座いますが、どうぞ御知らせ下さいませ、御手紙差上げますから、先は舊友のなつかしさ思ひ出さるゝまゝに御氣嫌御伺ひまで、どうぞ皆樣御手紙を(大和金剛山東麓にて淋しく暮す靜子)

▲富山富子樣、嘸御つらい事で御座いませうねお察申ます、貴女から見ませば、私などはまだ幸福の方で御座いませうか、兎に角一人でばかり考へて居りますのはいけませんですね、世間の事は餘りに存じませんですから、それに現に交際して居る方は皆樣御幸福な方ばかりなものですから、自分程不幸な者は無いやうに思はれてなりませんの、失禮ですけど、御差支なくば御住所御報らせ下さいましな、委細は御手紙で御話致しませう(麻布谷町の百合子)

▲大沼においでのはる子樣、私もあなたと同感ですの、ほんとうに才あり學ある北澤の諸姉樣文章を御振ひ遊す樣御願ひ致します(膽振の女)

▲度々倶樂部へお出しになる岡田春子樣よ、誠に失禮でございますが、貴女は函館元町女學校の御出身でございませんか、ちがつたら御免遊せ、もし左樣でしたら私を御存じの筈よ、當時私は聖保祿女學校に居つた者です、次號でおあて遊ばせな、どうぞ末長くお交りをお願ひいたします、(巴港にて百合子)

▲十月號に御投寄遊ばした本郷の安藤君子樣の和歌拜見致しまして、御伺ひ致します、貴女樣はもしや「カトリック」教を奉じて居らつしやる方では御座いませんか、夕方聖堂の鐘の音を聞きます度に、貴女樣は今又是れと等しき音を耳にし給ふらんなど人しれずお懐しく存じます、新徒然草の主礒千鳥の君よ、一目も會せぬ私乍ら君の面影思ひやられて床しうて…永久に幸あれかし(仙臺市、春子)

▲あゝ内藤千代子樣、敬慕しておかざる千代子樣、いかなれば君はかくすぐれし才を持ち給ふぞ月毎に進み行く君が玉藻、敬慕の念はいよいよまさりてたへがたい程でございます、此頃の青葉の陰、現代の人よりなど、どれも〳〵ようございましたが、今度の華族樣、寂寞もなんてよいのでせう、よみ行く中に御なつかしさに泣きたい樣でございました、優しき中に犯すべからざる氣品の程も忍ばれまして、千代樣の高き御人柄、私はその美はしき御作と共に其御方がなつかしく仰がれてたまりません、實に君は一本すぐれし高木です、だから人はいろ〳〵とつまらぬことを種として君をとやかく云ふのですけれど…、けれどあゝ千代子樣、そのやうなところにもたらぬある一部の人々の言葉は少しも御氣に御かけ遊ばさずにどうぞ〳〵私共幾多の敬慕者の爲に、永久に此の紙上に榮あらしめて下さいまし、でも此頃千代子樣は悲しいことばつかりおつしやいますので、私共泣ゝ悲しくはかないやうな氣がします、そんな時は御いたはしくつて自分の身にかへても君の御心の樂しむやうに

して上たいと思ふのでございます、私はなつかしき君が永く／＼榮えある生を御送りになることを常に祈つてやまないのでございます、あゝさらば君よ、まさきく在せ（信濃、小百合）

▲磯千鳥樣の「新徒然草」いつも面白く拜見致します、それから松平鏡子樣のも大へん面白うございます（夢子）

▲磯千鳥樣の御作「窟地の人」は何んだか御自身の性格なお描寫し遊ばしたやうに感ぜられました、的がはづれて居りましたら御免遊ばせ、しかし『薑井操子樣』の御頭腦は正しく千鳥の君が御頭と信じて居ります（中河の一女）

▲琴掌樣、十月號の詩友俱樂部で拜見いたしますと、あなたも上海へいらつしやるんでございますつてね、私も前には東京の牛込におりましたから、又何かお話しが合ふかも分りませんから、若し當地へお出になりましたら、是非／＼私宅へお寄り下さいまし、私もお友達が出來て嬉うございます（上海北四川路横濱橋北海林里三十號、葉山靜子）

▲千代子樣はよくいくつもお名を持つていらつしやいますのね、金子百合樣、松濱晴子樣、玉玲瓏樣、初瓶樣、山百合樣、ホヽヽ、常々の御態度にも似合はしからぬと存じますの、人はたとひ何んと申さうとも、御自分の御作物としての御自信がおありなされば、公然いつも千代子樣をお名のり遊ばしてもよろしうございませうに……まあどうもつい失禮を……、御免あそばせ（北海道渡島にてはる子）

▲私は無學なも省みず隨分下手な筆引き離した事も度々ではござんすが、どうしても諸姉さまのお天才には及びもつかず、屢々降參し候ひますの、けれど拜見して皆さまのを隨分模範と致したく希望してゐる者でございます、これでも女學世界の幼年時代からの隱れたる愛讀者でござんすのよ、此上ます／＼御發展を（末野にて女郎花より）

▲皆樣、十月號ほんとに面白うございましたね、內藤樣、松平樣の御快腕、それから磯千鳥樣の、新徒然草、相變らず感心いたしました、口繪の紅葉ほんとにもう見とれてしまひましたわ、此の上花散里樣、が居て下さつたなら、どんなにうれしいでせうね、

野の露樣、あなたも知火海の御邊に過されるとの事、おなつかしく存じます、私も去年は知火の海邊で、淋しさにないた一人でございます、只今は伊豫にかへつて相變らず淋しさに泣いて居ります、どうぞ誌上で御まじはりを……（野邊のすみれ）

▲十月號に、「寂寞」を御書きになつた山百合樣は、若しや內藤樣ぢやないの、御好きの一高ゐ多いのと、お筆の運び樣がどうも千代子式の樣ですわ、モシ違つたら御免遊ばせよ、その他松平鏡子樣の「渦卷」やはり面白く拜しましたわ、絲この後ます／＼御ふるひ遊ばして頂戴な、給つて居ますわ（福岡縣築上郡廣津、後藤文子）

▲只今米國にいらつしやる廣島縣の熊谷常子樣よ、私もね以前から渡米いたしたく存じてゐますのよ、ですけれど、どして手續きをしたらよいかわかりませんの、私は常子樣のおとなりの縣の山口縣の者です、そして單身の渡米を許して吳れますの、あなた樣御つれがおありなすつて、そしていつ頃に渡米なさいましたの、おさしつかへなくばくわしくお知らせ下さいまし、（東京市芝、萩初枝）

▲三溪女樣、私も京都の者で御座いますのよ、三十九年に當地へ參りまして淋しき月日を送つて居ます、私出雲町に居ましたのよ、東京の方はこゝらにあまり御座いませんので、誠に御なつかしう存じます、貴女の御住所御知らせ下さいませ、末永く御交り下さいませ（藤順ダリアー）

▲皆樣の內で、本誌增刊の書く手紙と、嫁ぐ人、心の日記、お持の方は御めぐみ下さいませんか、御禮は心ばかりですが、必ずいたします（上毛太田、木村清子）

新刊紹介

△現代文章資典

文學博士　井上頼圀編

世に文法多しといへども、或は繁に過ぎ、又は簡に失する等にて、眞の適切なるもの尠し、ことに之を口授して會得せしむるは容易なるも、之を記述して會得せしむるは容易ならず、たゞ讀者をして繁雜を感ぜしむるに過ぎざるの類のみ多し、本書は先づこれらの點につきて特に注意を拂ひ新しき法則により、短簡にして遺漏なく文の法則を說き、次に文範として多くの古今名家の文例を示し、次に美辭類纂の部に於て、四季、天文、地理、人事、其の他心情、雜等に分類して、文章の資料となるべき古今のあらゆる名辭句を收めたり、文を作る人の爲めには、初學者と否とを問はず、座右に置いて頗る重寶の書なり。定價金一圓八十錢　京橋區中橋廣小路文榮閣發行。

△少女小說花籠

松美佐雄著

此の花籠は二三の少女雜誌に揭げたる舊作に新作數篇を加へて成れるものなりといふ、赤ン坊順禮の少女、以下二十數篇ありて、何れも道德の修養に資すべきと共に、趣味も亦饒かなり。定價金五十錢、神田區錦町好文堂發行。

△兒童教育色かるた

大原鉦一郎創案

これは兒童が之を弄ぶ間に知らず識らず色彩の智識を得る樣に仕組みたる玩具にして、黄、赤、青の三原色と橙、紫、綠等の間色其他を、花鳥草花等に用ゐて巧みにかるた面に現はし、種々の取り方をして樂しむやうに作りあり、近頃の教育玩具の中にて高尙優美なるものゝ一ならん。定價桐函入二十五錢、紙函入十五錢、日本橋區駿河町三越吳服店發賣。

△隅田川

小松玉巖作狀
梁田貞作曲

吉母親が、旅商人にさらはれたる獨子梅若丸を尋ねて、都よりはるぐ吾妻に下り、隅田の渡にて其の亡くなりしを聞きて狂亂せしと傳へ、謠曲などにうたふ彼の「隅田川」を材としてつくりたる歌謠なり、作風は抒情形式にして作品としては珍らしきものなり。定價金二十五錢、京橋區銀座松本樂器會社發行。

△少女界（第十卷第十壹號）

大洋社發行

本誌は創刊以來既に十年の長き歷史を有し、此の種の雜誌中にては最も多數の讀者を有するものゝ一なるが、從來金港堂にて發行し來りたるところ、今度神田區淡路町二丁目二番地の大洋社に於て之を讓り受け、これまでの如く神谷鶴伴氏主任として發行することゝなりたりといふ本號には鶴伴氏の人の身我が身の記事を初めとし、米光關月氏の少女小說木の下蔭　松本宏氏の四季の紅葉の研究、卜部觀象氏のリバーモア夫人の傳、其他花ごよみ、日本と朝鮮の上古、少女の手料理等趣味ある記事多し、

△少年界（第十卷第十一號）

同社發行

これも右と同じく從來金港堂にて發行し來りし者を讓り受け、神谷氏主任として發行することゝなりたる者に、其記事には、高橋男爵の少年訓話、松村理學士の地球と人間の始まり　靑木秀峰氏の少年小說大決心、米光關月氏の同じく怪少年、岡木麓泉氏の奇行武士、西村眞琴氏の動物の武器、龍城生の秋の衞生等面白きもの多し、

△ポケットナショナル（英語普及會編）

△ナショナルリーダーをポケット形に製し、毎頁に脚註を施したるものなり、體裁は原本を縮刷したるものなれば、一見愛すべく、脚註は頗る簡明適切なり、學生が車中などに携帶して復習するに便利此上なし、ナショナル一二を合本とし、一册とし、三を一册とし、四を上下二册に分つ、尙ユニオン第四も印刷中なりと、定價一册三十錢發行所東京小石川大和町婦女新聞社



女學世界定期増刊

順境と逆境

十一月十五日發行

よい月日の下に生れた人、荒い波風にあたつた人、乳母日傘で育つた人、針のむしろに息つく人、笑ふてくらす人、涙の乾くひまなき人 運命を支配する人、支配される人、親の光に身の光る人、良人の蔭に意を縦まゝにする人、人さま〴〵の境遇、暖かき血の流れ、あつき呼吸の通ひ、高き脉のうつ筆もて描き出された一幅の活畫圖はこれ。

目次概要

△半生の幸不幸
△ふたりの女
△運命に服從せる女
△姉と妹
△短かりし生涯
△富士の麓
△闇を行く人
△樂しき家庭

△愛なき良人の妻
△雁來紅
△人生の表裏
△世に耀く人
△新婚の友より
△狂亂の乙女
△薫子の運命
△お師匠さん

△秋涙譜
△同じ水際より
△多涙の半世紀
△町家しらべ
△奮闘の賜もの
△あきらめ得ぬ女
△學び舍の日々
△人生の快事

募集（十一月八日〆切）

●特別寄書

（主として人事、人情の委曲を寫し、又時の社會百般の事柄を捉へ、時勢の變化を知るに足るべきもの△紙數は原稿紙十枚以内の事）

〔報酬＝五圓以上拾圓迄、現金贈呈〕

▲端書文（一人一種）

▲和歌（一人一首）

▲俳句（一人一句）

▲誌友倶樂部

△端書文以下三種共用紙は端書の事　△字體は楷書にて正しく書く事、不分明の字又は亂れたる書體は沒書とす　△名宛は博文館内女學世界行とし　△特別寄書の原稿には住所氏名を明記する事

賞品

△端書文
天賞壹圓、地賞七拾錢、人賞五拾錢

△和歌△俳句
天賞壹圓、地賞五拾錢、人賞參拾錢

不許複製

每月一回一日發行

定價表

一册（紙數二百八頁）金二十錢
四册（三ヶ月分）……前金七十五錢
八册（半ヶ年分）……前金一圓四十五錢
十六册（一ヶ年分）……前金二圓八十錢
内（定刊數……十二册）
（增刊四回……一、五、九、十一月假格同一）

郵稅　一册　二錢

廣告料

	特等	一等	二等	三等
廿四字詰一行	……	……	……	五十錢
四半頁	……	……	十圓	七圓五十錢
半頁（卅二行）	……	廿三圓	十九圓	十四圓
一頁（六十四行）	五十五圓	四十五圓	三十八圓	二十八圓

▲等級の位置〆切日等御照會次第御報可致候

註文略規

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず
●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す
●郵券代用は一割增にて五厘一錢の切手に限る
●總目錄御入用の方は二錢券相添申込あれ

明治四十四年十月二十五日印刷納本　第拾壹卷第拾四號

編輯兼發行人　松原岩五郎
印刷人　山田英二
印刷所　東京市小石川區久堅町百八番地　博文館印刷所
發行所　東京日本橋區本町三丁目　博文館

電話番　三百三番　千十八番
本局　二千六百二十番　三千二百二十九番

博通社 博 特賣品

●安心の出來る買物は博通社に限る!!!

◀教育珈琲濾器▶



少年、少女諸君が御茶事の御遊びをなさるには是非共必要の器具であります、此道具を御使用なれば實際に珈琲を入れ熱湯を差し召し上る事が出來る至極興味のある器で知らず／＼の間に禮式の作法を知る教育參考品であります

珈琲濾器一個、藥鑵一個
珈琲煎器一個、金屬茶碗二個

壹組 特價 六拾五錢

▲送料内地十二錢海外卅五錢

◀洋食製造器▶



本器は優等金屬製にして體裁頗る優美且つ堅牢なり然かもアルコールランプにて凡ての洋食ビフテキでもフライでもシチウでも御菓子でも何んでも自由に作る事が出來る御割烹稽古用として尤も適當なる逸品であります

▲一號圖面の外アルコールランプ菓子燒一式付

銅製壹組特價三圓五拾錢

▲二號附屬壹號の通り

鐵製壹組特價二圓五拾錢

▲荷造送料内地廿五錢臺、樺、清朝、六拾錢

●御手紙一本で何んでも御求めに應じます!!!

●九重もゝ引



舶來ネル製にて腰卷に股引になり、巧に取付け取外しも自在で少しも窮屈でなく且つ溫く御召の工合のよいのが本品の新案たる所以であります

●色合 純白、クリーム色、とき色

⊙大形大人用箱入 特價九拾五錢
⊙中形十五、六歳用箱入 特價七拾五錢
⊙小形十二、三歳用箱入 特價六拾五錢

▲荷造送料内地拾錢臺、樺、清、朝廿五錢

●婦人メリヤスシャツ

メリヤス類は本年特製の最優等品にして肌ざはりの軟き瀬時色總裏毛眞に寒さ知らずの逸品で體裁頗る優秀にして且つ價格の低廉なる弊社の特色であります

注意 襦袢仕立、シャツ仕立、シャツ、もゝ引 値段は同じです

⊙一號 總裏毛優等品 特價八拾五錢
⊙二號 總裏毛上等品 特價七拾五錢
⊙三號 總裏毛上等品 特價六拾五錢

▲荷造送料内地拾錢臺、樺、清、朝卅二錢

大橋メール・オーダー・ビジネス

博通社

東京日本橋區本町一丁目

電話本局六百十四番
振替口座東京五十番

太陽　第十七卷　第十五號

秋季增刊

戰爭歟平和歟

▲現時の平和は强大なる武裝に依て、辛うじて維持せらると云ふ、是れ果して眞歟。

▲戰鬪は人類の天性にして、平和は其休息の狀態に過ぎず。而して此義古今を通じて誤らずといふ、此れ果して眞歟。

▲歐洲の平和、現に四十年に及ぶ。而かも此平和は所謂休戰狀態たる以上、復た何等の意義を有せざる歟。

▲列國何ぞ軍備を張るに汲々たる。如何なる方法を以てするも、之れが制限は遂に望むべからざる歟。

■洋裝四六倍判　紙數二百六十頁　正價三十錢　郵稅四錢

十一月十五日發行

▲現時列國が一切の故障を排して、精力を傾到する軍備競爭は、いつまで持續せらるべき歟、又いつまで持續せざるべからざる歟。

▲列國民、少くとも二三最大强國の國民にして、到底底止する所なき軍費負擔に堪へずとする曉には、列國は再び中世の大混亂に陷沒すべき運命なる歟。

▲現時の平和運動は、所謂武裝平和の今日に在て、如何の意義、如何の價値を有する歟。

▲是等の疑問に對して何等かの解答を得んが爲に有ゆる方面より戰爭と平和に關する論談及研究を編輯せんとする、之を本號の目的とし又內容とす

■東京本町　博文館發行

農業世界 第六巻第十五號 増刊

最近副産業案内

菊判二百四十頁

石版寫眞版豊富

正價金二十錢

郵税金二錢

世運の進歩に伴れ、生活難の聲日に益激しきを加へ、農家の如きは主業を以てのみ、其の生計を維持する事甚た困難なるの實況を來せり、此の際有利なる副産物を發見するに勗め、主業の傍ら之を營み、以て收益を擧ぐるは策の最も得たるものなり、本誌は則ち爰に題名の如き增刊を發刊して農家の副産物に適する概ゆる方面の事項を網羅し、以て農家生計の資に益せんことを計れり、記事精確豊富にして廉價無比また。世既に定評あり。

十一月十五日發行

博文館

東京日本橋區本町三丁目

振替口座東京二百四十番

女(後付の三)

岡本鷴園君著

現代名士の養生振

▼發兌元 東京本町 博文館▲

全一册
洋裝四六判美本
紙數三百卅頁
寫眞版挿入
正價金四十八錢
郵税六錢

破天荒なる本書の内容

古來偉人は皆一種の養生法を有す

◉少くとも‖何時も人の後に蹴落さるゝ者‖生存の意義を没却し他人より意氣地なしと嘲けらるゝも平氣な者‖永久に地平線下に沈みし儘にて滿足する者‖は多くは平素何等の養生法を講ずるなきに似たり

◉少くとも‖世に一廉の事業を爲し遂ぐる者‖異常の活動家を以て目せらるゝ人物‖何時か地平線上に浮び出づるの士は‖必ず自家の境遇體質乃至嗜好より割出したる一種獨特の養生法を心掛けざるはなし

■天下の諸君!! 若し前者に與せんことを希はゞ敢て本書を手にする勿れ蓋し恐らくは何物の獲るところも之れなからん

▣天下の諸君!! 倘し夫れ後者に倣はんことを欲せば請ふ先づ試みに此の奇書を讀め!!! 恐らくは或る暗示を諸君に與へん

現代の名士亦一種の養生法を有す

代表的數十名士の養生法

少女世界增刊 第六卷第十四號

秋さくら

既成發行

籬に咲く秋さくら、またの名をコスモスといふ、その淡き色、楚々たる風情、清き少女の姿にも似てゐるではありませんか、色も姿も美しい花の名に因んだ「秋ざくら」が少女諸子に歡迎されるのは、今さら言ふまでもありますまい。先づ目次の大要を御覽下さい。

◉花畑の少女（口繪三色版）……山村耕花
◉少女對話 鬼の留守……巖谷小波
◉少女雜感十題……沼田笠峰
◉目白の學風……みどり女
右の外に、富んだお話や、學業の參考になる記事が澤山あります。

◉少女小說 敎室の窓
◉少女小說 お月見
◉コスモス 咲く庭
◉鄙の少女の手紙
◉咲きわけ草
◉秋の窓より

また讀者諸孃の小品文、和歌、通信なども、誌上にかざつて居ります。秋の夜の讀みものとして、御高評を願ひます

菊判百廿八頁
口繪石版寫眞版
例號通り澤山
正價十錢 郵稅壹錢

文藝倶樂部增刊 （第十七卷第十四號）

講談 落語 古今妖婦傳

世に恐るべきものは何！ 地震？ あらず！ 雷あらず？ 火事 あらず？ 親父！ 以ての外なり！ 洋の東西、時の古今を通じて最も恐るべきものは只一のみ、曰く妖婦！ 川柳子曾て言へるあり『飯盛も陣屋位は傾ける』あゝ艶容の妖姫が一瞥の秋波は、以て國家を覆へすに足るなり 本誌は爰に第四期の增刊を發行するに方り、古今妖婦傳を編んとす、之に依つて女色のいかに禍多きかを知り行ひを矯め身を愼まば、啻に一家の幸福のみならず、やがては天下泰平の基を開くに至らんかし、敢て淸讀を待つ所以なり。

演者氏名

△藁人形 三遊亭圓右
△身代り石 三遊亭金馬
△おとき三次 錦城齋典山
△金朱閣 桃川若燕
△衣屋お熊 猫遊軒伯知
○菊娘 柳家小さん
△お孃おふら 早川貞水
粽 鉄
△髑骨お松 小金井蘆洲
△熊坂お兼 桑々齋桃葉
△散切お瀧 朝寢坊むらく
△またかのお關 三遊亭圓窓
△海老屋梅吉 一龍齋貞山
△霞のお千代 神田伯山
△鬼あざみ 春風亭柳枝
○踊り大名……石橋思案
○落語の落……海賀變哲
其他興味湧くが如し

十一月十五日發行
菊判紙數三百二十頁
口繪 極彩色錦繪及び艶麗なる美人の寫眞版十數葉挿入
正價廿五錢 郵稅二錢半

女（後付の五）

家庭整理の指導

家庭百科全書

全部五十册——每月一回發行

和裝美本◉紙數各三百頁
石版彩色口繪一葉
插畫十數個
正價一册金四拾五錢
郵稅一册金八錢

近時婦人教育の普及するや、女流の才學は一般に著しく進みたりと雖も、尚ほ之を日常家庭の上に施こすに臨み、動もすれば實際に適せざるを憾むこと多し。是れ學校に在るの日には概れ理想の學修に止まるが故に、實際の應用に臨み、或ひは學ぶ所高尚に過ぐるか、然らざれば未だ十分ならざるの憾ある所以なり。若しも家庭に教師ありて一々實際の問題に就て指導せんには、世の良妻賢母は言ふも更なり、未だ在學中の女流學生達の爲にも如何に裨益の多かるべきかは、敢て多言を須いざることながら、人ごとに家庭に教師を聘するが如きは、得て望むべからず。是に於て本書は最良なる家庭教師たる目的を以て、編述發行し、敢て婦人教育の缺點を補はんと欲するなり。

第一編 新家庭訓 三輪田眞佐子女史著
第二編 四季料理 石井泰次郎君著
第三編 裁縫指南 喜多見佐喜子女史著
第四編 和洋菓子製法 龜井まき子女史著
第五編 茶道と香道 木原澤杏女史著
第六編 諸流生花指南 琴松宙文雅君・松幸齋理然君 共著

第八編 簡易治療法 藤井婷子女史著
第九編 禮式と作法 佐方鎭子女史著
第十編 惣菜料理 赤堀吉松君・赤堀峯吉君・赤堀菊子女史 共著
第十一編 編物指南 三木とみ子女史著
第十二編 婦人の生理と衛生 牧野清子女史著
第十三編 教育お伽噺 木村小舟君著

第十五編 家屋と庭園 内山正如君著
第十六編 魚鳥家畜の飼養 鹿野之骨君著
第十七編 女子作文法 遠藤ふみ子女史・松崎ふく子女史 共著
第十八編 子女の教養 棚橋絢子女史著
第十九編 家庭の趣味 文學士大森兜山君著
第廿編 家庭遊戲法 高橋忠次郎君・松浦政泰君著

第廿二編 歌の手引 大和田建樹君著
第廿三編 刺繍術指南 磯村大次郎君著
第廿四編 摘み細工指南 山田興松君著
第廿五編 新式化粧法 藤波芙蓉君著
第廿六編 室內裝飾法 近藤正一君著
第廿七編 衣服の調整 石崎篁園君著

東京日本橋 發行所　販賣用電話 本局二六二〇

女 後付の六〇

婦女必讀の大全書

第十七編　**育兒の務**　田村直臣君朝永觀舟君共著

第廿編　**女德の養成**　前田長太君著

第廿二編　**書道手引**　井田秀生君著

第廿八編　**洋樂手引**　前田久八君著

第廿九編　兒童訓話　**母の智識**　少年世界記者　木村小舟君著

第卅編　**洋食の調理**　東京治庖會講師　龜井まき子女史著

第卅一編　**衞生と衣食住**　福田琴月君著

第卅二編　**東西名婦の面影**　高須梅溪君著

本書は著者が新時代の女性に向つて健全なる思想と優雅なる感情とを吹き込まんために東西を通じて最も傑出せる貞の孝女賢婦女傑等數十人を捉へて新しく平易に描寫したるものです書中に收められた婦人は何れも波瀾多く變化に富んだ生涯を送つたもの丶みですから。事實そのものが活きた小說で之を寫した筆も亦繪のやうに美しくあります一度本書を繙くと一氣に讀ませられて而かも忘れ難い頁感化を與へられます挿入した多くの畫と金言とは又た有益多趣最も深い印象を與へるでありませう

第卅三編　**婚姻のかゞみ**　河崎醉雨君著

【上編】婚姻法＝●緒論●婚姻の沿革●日本の婚姻の沿革●婚姻の定義●婚姻の豫約●婚姻の種類●夫の選擇●妻の選擇●婚姻の成立●國際婚姻●婚姻の無効及取消●婚姻の效力●婚姻の消滅●婚姻の屆出書式
【下編】婚姻禮式＝●日本の婚姻禮式●朝鮮の婚姻●歐米の婚姻禮式……【附錄】日本各地の婚姻風俗

第卅四編　**交際と談話**　福田琴月君著

◎一編　社交：三項◎第二編　社交の得失：四項◎第三編　談話其の一：二項◎第四編　談話其の二：三項◎第五編　談話其の三：六項◎第六編　談話其の四：四項◎第七編　談話其の五：六項◎第八編　談話其の六：三項◎第九編　社交と舌：五項◎第十編　奥様の話しぶり：二項◎附錄　西洋婦人の日常禮式：十二項

女（後付の七）

内藤千代子著

杉浦非水装訂
竹久夢二挿繪

四版

スヰートホーム

洋装四六版三百十四頁
ハイカラ式頗る美本

定價 金六十五錢
郵税 金八錢

明治四十四年の日本が生みたる不可思議の産物。新時代婦人の大膽なる告白。小説以上の小説。破天荒の快著述。

初版四千部十三日間に盡き再版三版出來と同時に賣り切れ……今や『第四版』出づ!!

東京各女學校の學生間には『**スヰートホーム式**』なる新語流行しつゝあり これ氣の利いた事才走りたる事、ハイカラな事を意味すと云ふ。一文科大學生は本書を通讀して、吾が筆遠く妙齡の一婦人に及ばずと嘆せしとかや。要するに。スヰートホームは今や青年階級の話題となりつゝあり。

目次

▲スヰートホーム
▲天女降臨
▲おてんば娘
▲湖畔吟
▲松風
▲少女の戀
▲もゆるおもい
▲ハーモニカ
▲嫁が婦人
▲夢より醒めた女

（女、後付の八）


柳清香油
瓊姿香油
フロラー香水
二十銭　一圓廿銭　一圓八十銭
東京日本橋通二
美術小間物
化粧品
柳屋本店


佛國メルマン會社釀造
アルコール分少く滋養豐富なる葡萄酒
マルタン赤白葡萄酒
食卓用として又薬用として到る處の家庭に愛用せられつゝあり
横濱東京
山田屋
MEDOC SUPERIEUR
Merman & Co
BORDEAUX
R YAMADA-YA

JO-GAKU SEKAI.
PUBLISHED MONTHLY, BY THE HAKUBUNKWAN, TOKYO, JAPAN.
ENTERED AT LOS ANGELES, U. S. AS SECOND CLASS MAIL MATTER.
女學世界　第拾壹卷第拾四號
明治四十四年十月廿三日印刷納本



定價金貳拾錢●郵稅金貳錢
VOL.XI.　(東京市日本橋區本町三丁目博文館發行)　No.14.

監修
小山静子　KOYAMA Shizuko
京都大学大学院教授

女学世界（じょがくせかい） 明治期復刻版⑧⑦
明治44年10月（第11巻第13号）、11月（第11巻第14号）

2010年12月10日　第1刷発行　　定価（本体20,000円+税）

監　修　小山静子
発行者　富澤凡子
発行所　柏書房株式会社
東京都文京区本駒込1-13-14（〒113-0021）
電話　03-3947-8251［営業］03-3947-8254［編集］
協　力　株式会社博文館新社
印　刷　株式会社マイトベーシックサービス
製　本　有限会社青木製本

ISBN978-4-7601-3910-1